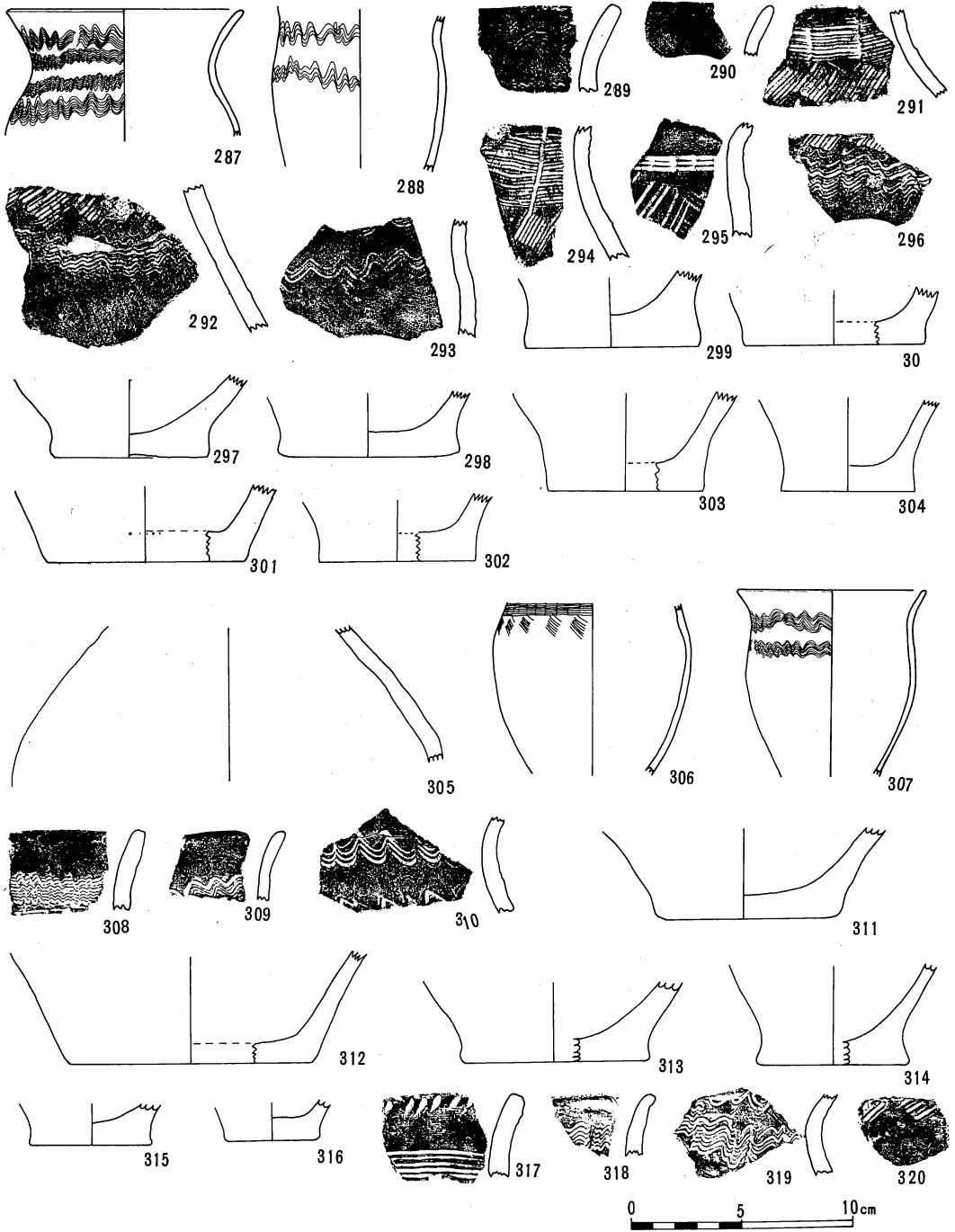
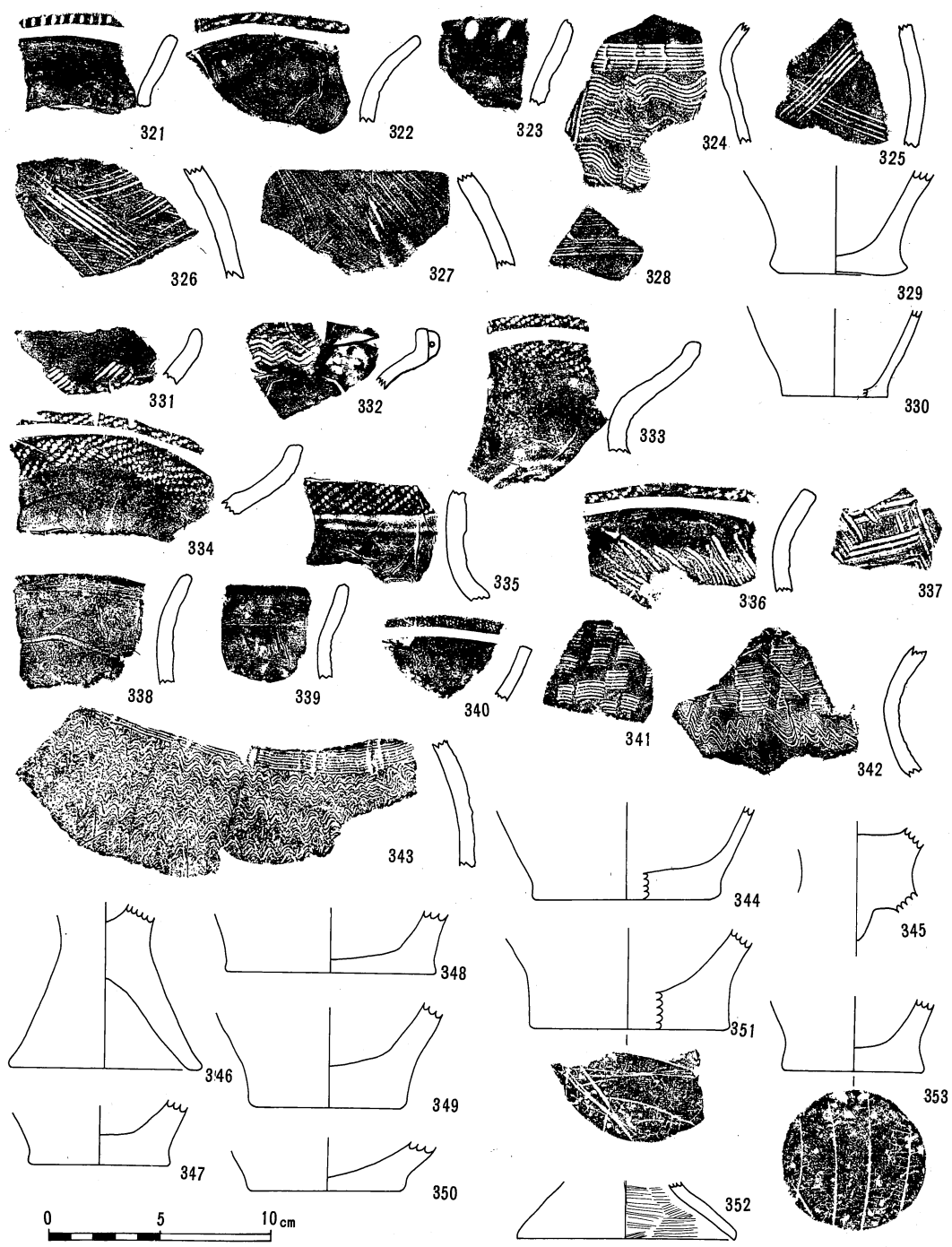


第 168 图 樋口内城館址遺跡 33・44・46 号住居址出土土器 (273・275・276 : 6 ,
 他 1 : 3) (252~273 33 号住居址, 275~282 44 号住居址, 283~286 46 号住居址)



第 169 図 樋口内城館址遺跡 35・39・42 号住居址出土土器 (287・288・305~307 1:6,
 他 1:3) (287~304 39 号住, 305~316 42 号住, 317~320 35 号住)



第 170 图 樋口内城館址遺跡43・49・50号住居址出土土器 (1 : 3) (321~ 330 43号住, 331
49号住, 332~ 353 50号住)

c) 49号住居址 (図51・170の331・156の83)

遺構 最西端に確認されたが、東部のみで、西半は急崖となって削られている。以前は更に西部に丘陵が続いていたが、築城の折に削ったものと思える。検出された本址南には溝状遺構1が存し、プラン・規模等不明である。支柱穴と思われる穴が2箇所認められ、一部焼土も認められたが範囲は狭い。

遺物 床面焼土附近から出土した甕形土器の破片が少量あるだけである。331には斜走短線文がみられる。覆土から磨製石斧(83)が一点出土した。時期決定の決め手を欠くが弥生後期に位置できよう。(辰野)

タ) 50・57・71号住居址 (図171・170の332～353・172・173の379～387・156の84～90、図版15の59・50の257～258)

遺構 丘陵中央西寄りに営まれた、50・57・71の3住居址は、一軒の改築と考えた方が妥当かもしれないが、床面が明瞭に三段に確認されたことから、3住居址として報告する。規模プランをほぼ同一にするものである。

50号住居址は、北に位置する51号住居址の南壁と東側にある土壌10を切って構築された5.50×6.64mの規模をもつ長方形プランである。壁高はローム面を掘り込んだ30～40cmで床面に続いている。71号住居址は、この床面を掘り込んで構築されたため、四壁にテラス状の段を残す結果になっている。従って50号住居址床面は壁沿いに一部残るだけである。

71号住居址は、50号住居址を更に掘り下げて床面を作っている。50号床面より25cm下、ローム上面からは50～55cmの深い壁となる。主軸方向は、57号住居址と同じN-25°-Eを示す。柱穴は、四隅に規則的に掘られ、35～45cmと深い。炉は、北側支柱穴間線上の中心に構えられた埋甕炉である。炉の周囲には少量の灰が残り、床面はよく焼けている。

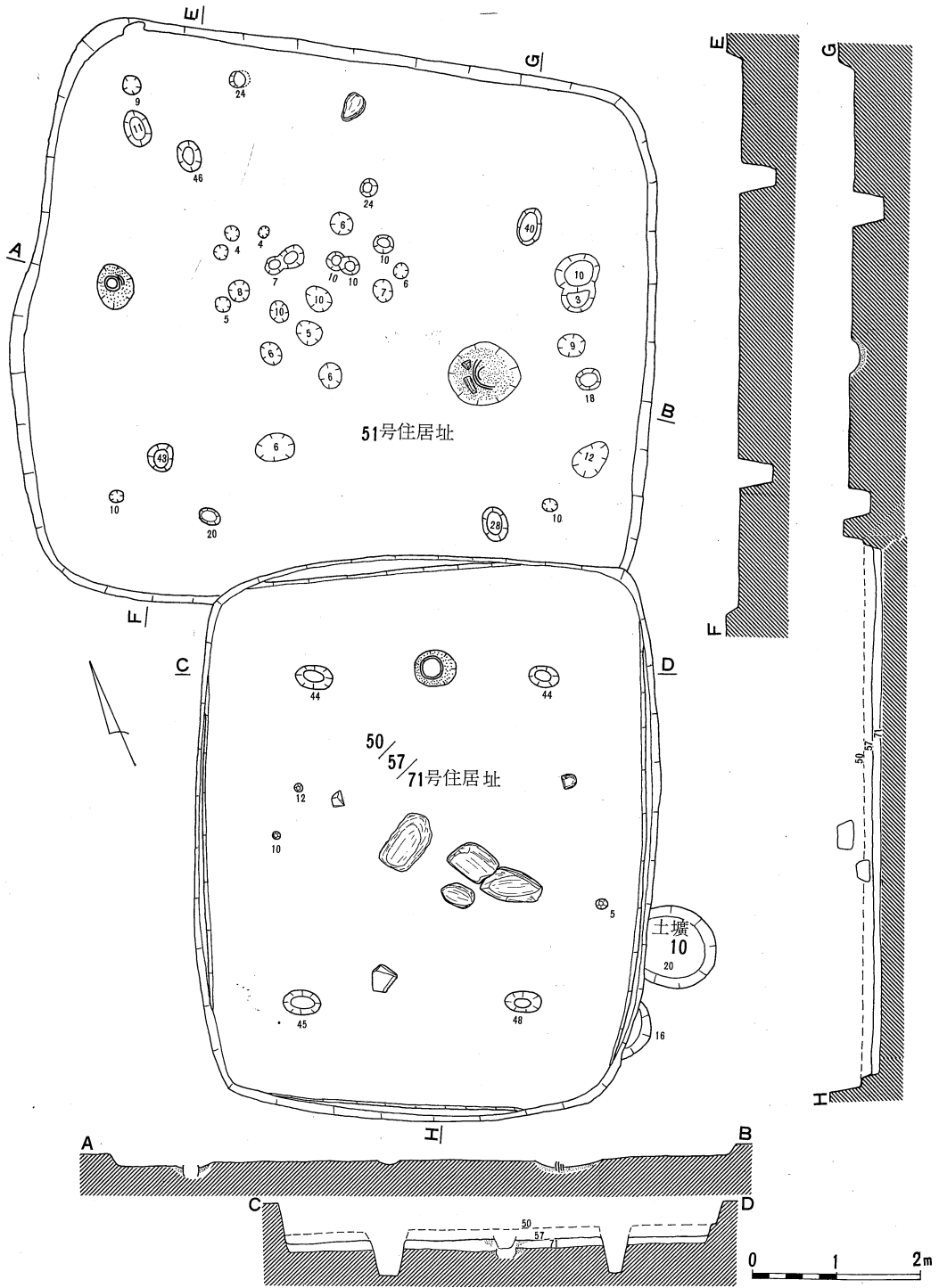
57号住居址は、71号住居址と規模プラン、支柱穴を同じにする。床面は71号住居址上10～15cm上に貼床を施してあり平坦で堅緻である。炉は北側支柱穴間、71号住居址埋甕炉真上に位置しており、壺の胴部以下を使った埋甕炉である。炉址の断面をみるべくして71号炉址を確認したのであった。中央辺に自然石4個が存するが、57号住居址床面より浮いており、本址以後に置かれたものである。

遺物 50号住居址は覆土中の上部のものを本址に所属させた。床面が殆んどないことから、時期決定するには弱いが、170図332～343の口唇部施文の縄文・口縁部の縄文・斜走短線文・綾杉状文等からして、弥生中期末から後期初めに比定されよう。

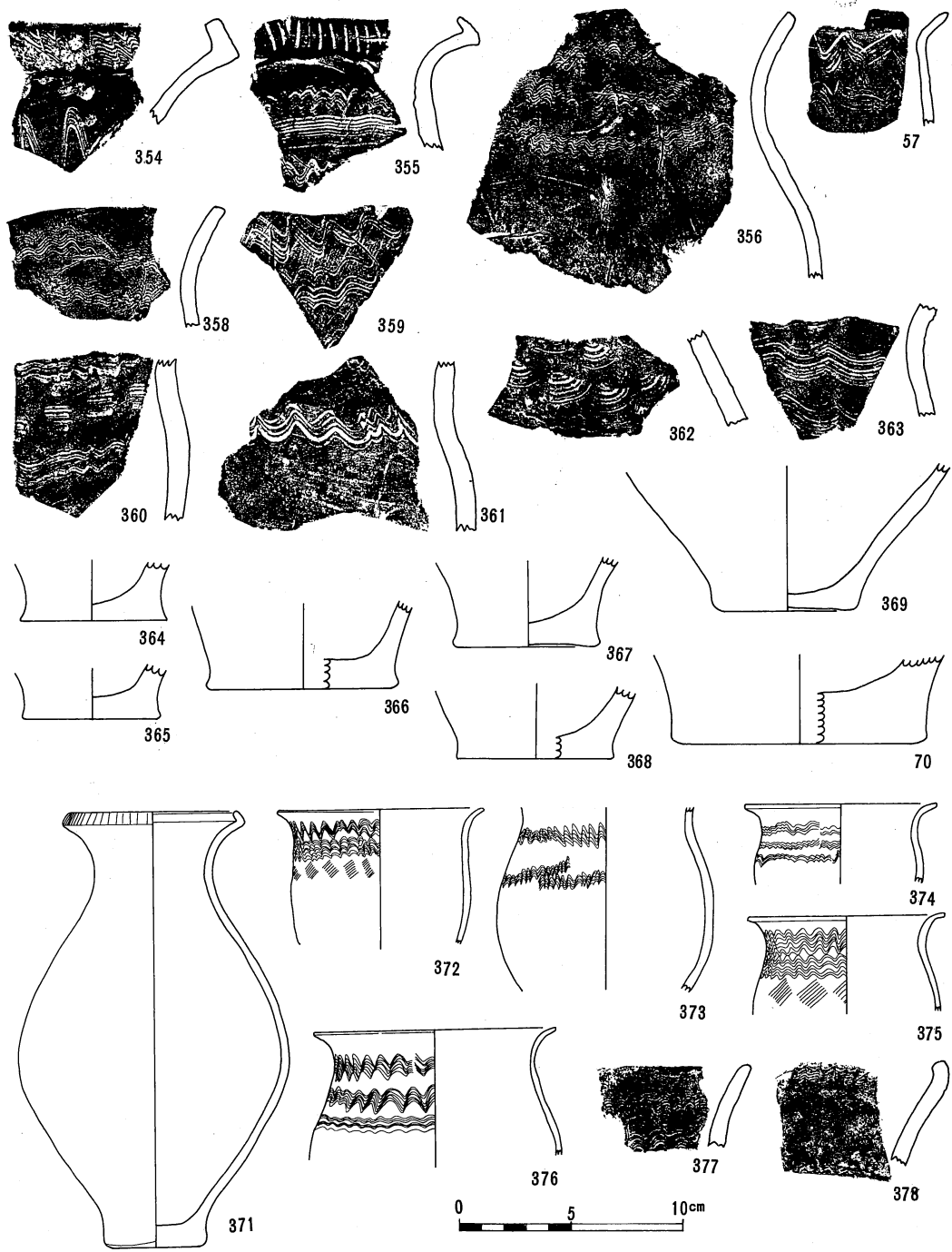
71号住居址出土土器は、371～378で波状文を主体としたもので弥生後期に位置できる。373は炉甕として使われたものである。他はすべて床面出土である。

57号住居址出土土器は、354～370で弥生後期に比定したい。たまたま、発掘時笑ったり驚いたりしたことだが、本址の時期決定の有力な手がかりとなったことがある。それは、炉甕に使われた、371の壺形土器であり、胴部以下を本址炉甕としている。接合した口縁部は、離れた地点の71号住居址床面の出土であることから、57号と71号間には時期的差は余りないものと考えられる。

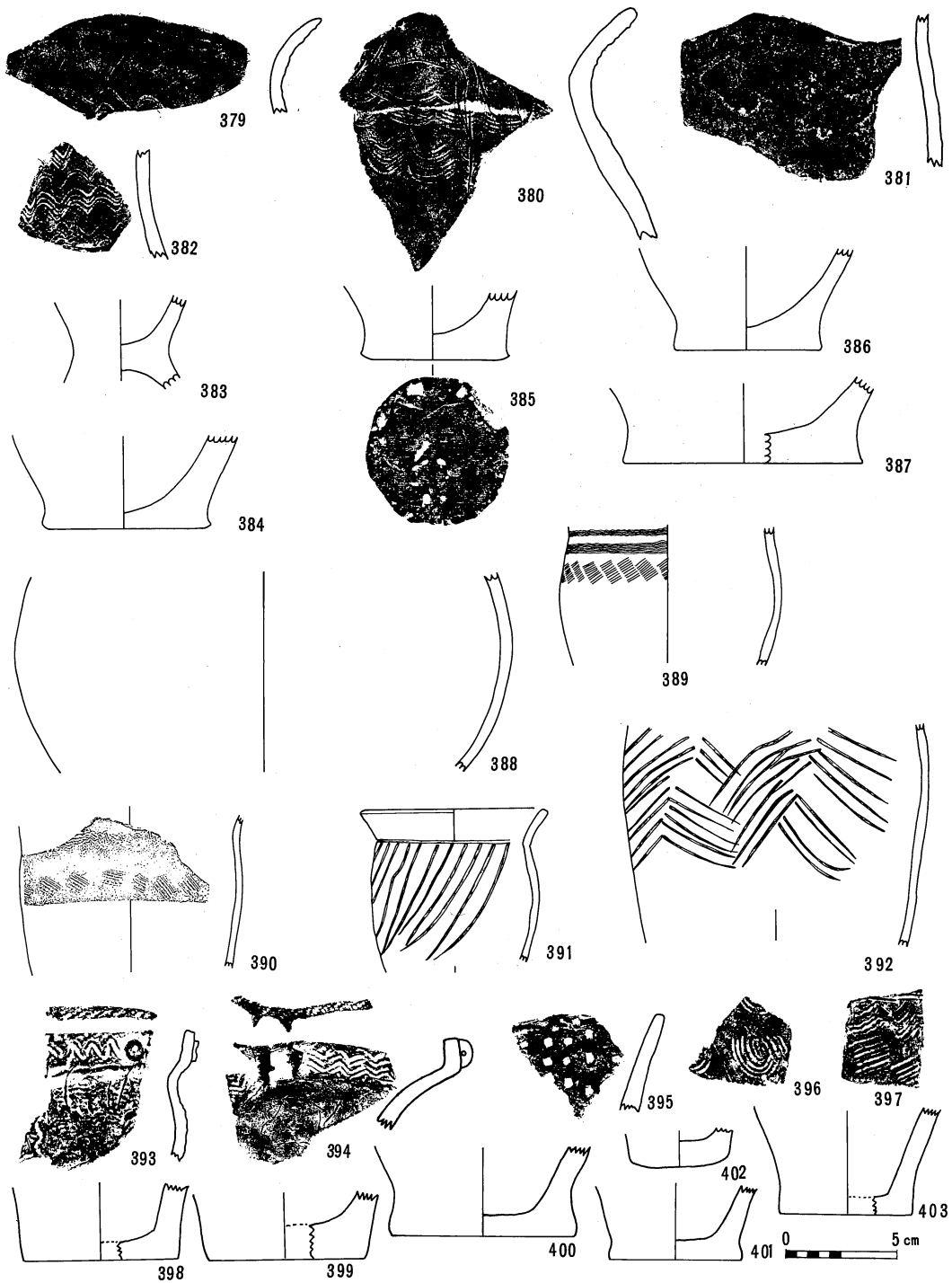
石器は、50号住居址覆土中から、打製石鏃2と磨製石鏃3、71号住居址から打製石鏃1と欠損した石包丁1が出土した。有孔の石包丁である。(福沢)



第 171 图 樋口内城館垣遺跡51・56・57・71号住居址実測図 (1 : 80)



第 172 図 樋口内城館址遺跡 57・71 号住居址 出土土器 (371~ 376 1 : 6 , 他 1 : 3)
 (354~ 370 57 号住 , 371~ 378 71 号住)



第 173 图 樋口内城館址遺跡 71・51 号住居址出土土器 (388~ 392 1 : 6 , 他 1 : 3)
 (379~ 387 71 号住 , 388~ 403 51 号住)

チ) 51号住居址 (図171・173の388～403・156の91～94、図版15の60～62・48の240～242・246)

遺構 丘陵中央西寄りに位置する本址は、南壁の一部を50号住居址に切られて検出された。7.63×6.72mの規模をもつ長方形プランで、支柱穴を4個所にもつ。壁は傾斜をもって掘られ10～15cmを残す。床面はほぼ平坦で堅い。床面中央部には浅い凹みが数多く検出された。炉は東西支柱穴間に2個所の埋甕炉が作られている。東は支柱穴間線上の中央やや内側に、西は同線上中央やや北寄りの外側にそれぞれ位置している。

遺物 388・390は東側の炉甕で、388は壺の胴部と思われ無文である。390は口縁部と底部を欠く甕で波状文下に斜走短線文が施されている。389は西側炉の炉甕で、起伏のない波状文下に斜走短線文をもつ。391・392は覆土中からの出土で篋状工具による沈線文が斜方、綾杉状に施されていて古い様相をもつ。393・394は壺形土器の口縁部で縄文の地に波状文を付し、ボタン状突起・耳状突起をつけている。395には刺突文、396には半円狐文がみられ、本址出土土器は、中期的様相を多分にもった文様構成である。391・392は胎土も異なり、色調も黒味をもっている。

石器は、有孔磨製石鏃の半欠基部が床面上から出土した他、覆土中より、打製の石鏃2点と、磨製石鏃1点が出土した。(小松原)

ツ) 52号・53号住居址

a) 52号住居址 (図174・175の404～413、図版15の64・48の243)

遺構 丘陵中程に検出された小規模の住居址で、東半分は、53号住居址に切られて不明である。西壁高12～15cmであり、床面も平坦で堅い。炉は西壁内40cmに作られた埋甕炉である。

遺物 出土量は少ない。404は炉甕であり、波状文が施された口縁部と底部を欠損するものである。弥生後期に位置される。(根津)

b) 53号住居址 (図174・175の414～432、図版15の64・48の244)

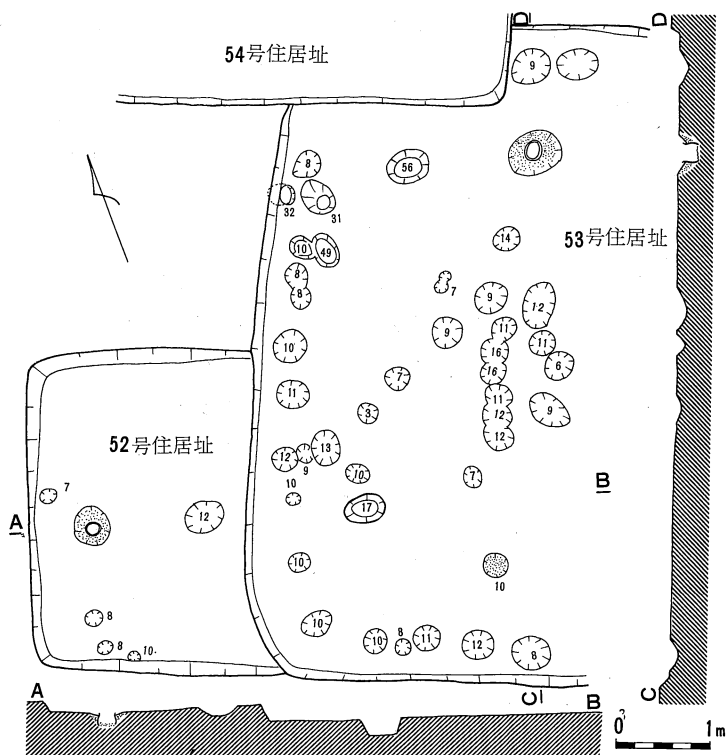
遺構 52号住居址の東を切って構築された本址は、東部が用地外にまで広がり、未確認である。また北西部は、54号住居址に切り込まれている。南北7mを計り、主軸方向はN-21°-Eを示す。床面は平坦であり堅いが、壁沿いと床面中央部に浅い凹みのピットが多数確認されて全体としては凹凸の感じがする。支柱穴、間仕切りに関するものであろう。支柱穴は楕円形を呈し西側に2個所検出されている。東側にも対称的であったと思われる。炉址は、北側支柱穴間にあり、埋甕炉である。また南側にも焼土が認められ僅かに灰と炭化物が残存していた。

遺物 414は埋甕炉の炉甕である。口縁部と底部を欠損し、波状文がみられる。弥生後期に比定されるものである。(根津)

テ) 55号・56号住居址

a) 55号住居址 (図176・177の433～443・156の95、図版48の247～248)

遺構 丘陵中央部に位置する本址は南部を54号住居址に切られ、北は56号住居址の南部を切って検出された。4.26×6.00mの規模をもつ長方形プランであり、主軸方向をN-22°-Eに示す。壁高は30～40cmを



第 174図 樋口内城館址遺跡52・53号住居址実測図（1：80）

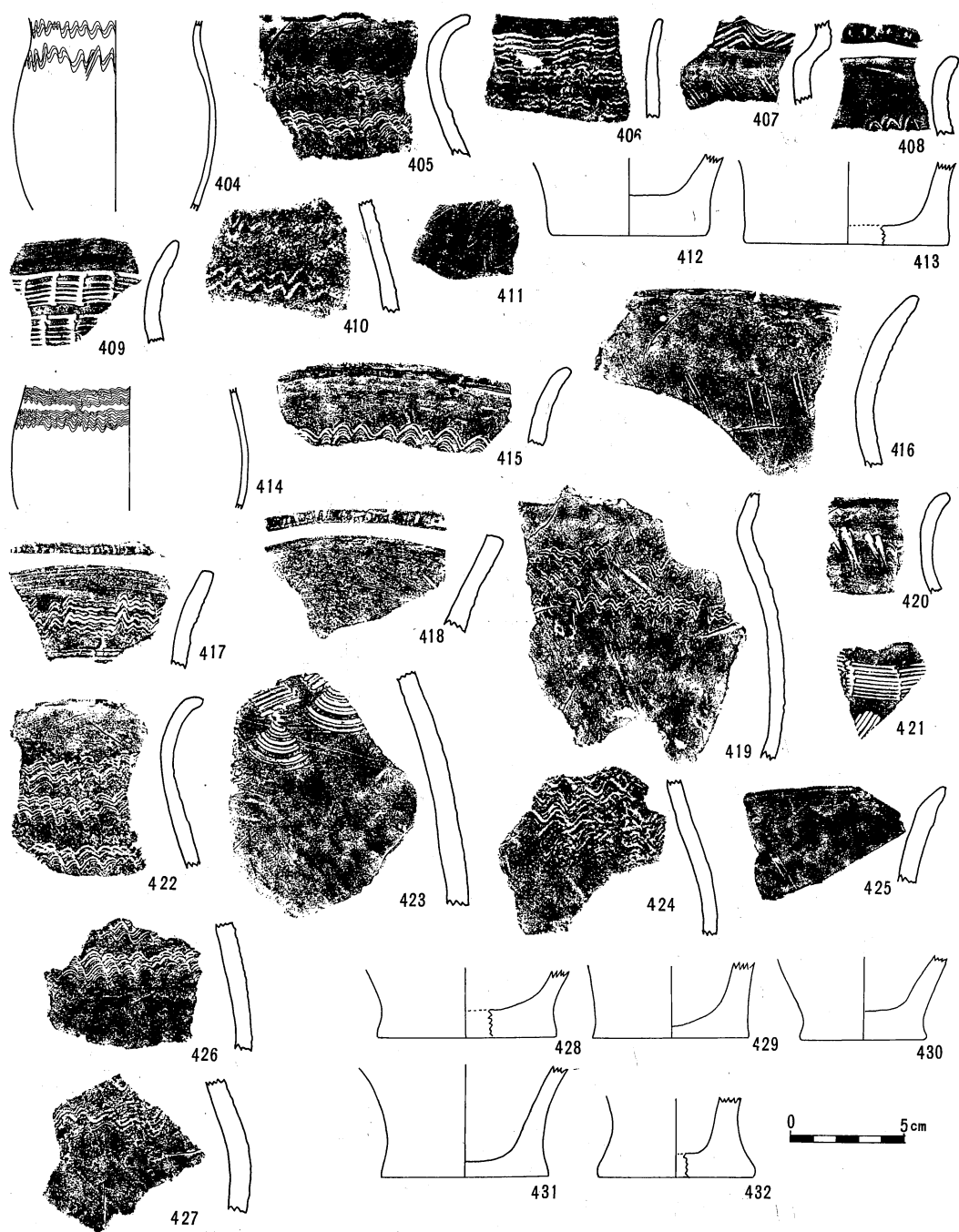
計り、良好である。床面はローム土をたたいた堅緻な面である。楕円形を呈する支柱穴が4個所確認され、炉は北側支柱穴間中央に位置した埋甕炉である。

遺物 土器は櫛状工具による波状文・簾状文が施されている弥生後期のものである。433は底部を欠損し、炉甕として使われたもので、無文である。篋調整痕と擦痕をもつ。434は壺形土器で、口唇部・頸部に波状文をもつ。石器は覆土中から打製石鏃が1点出土している。 (市 沢)

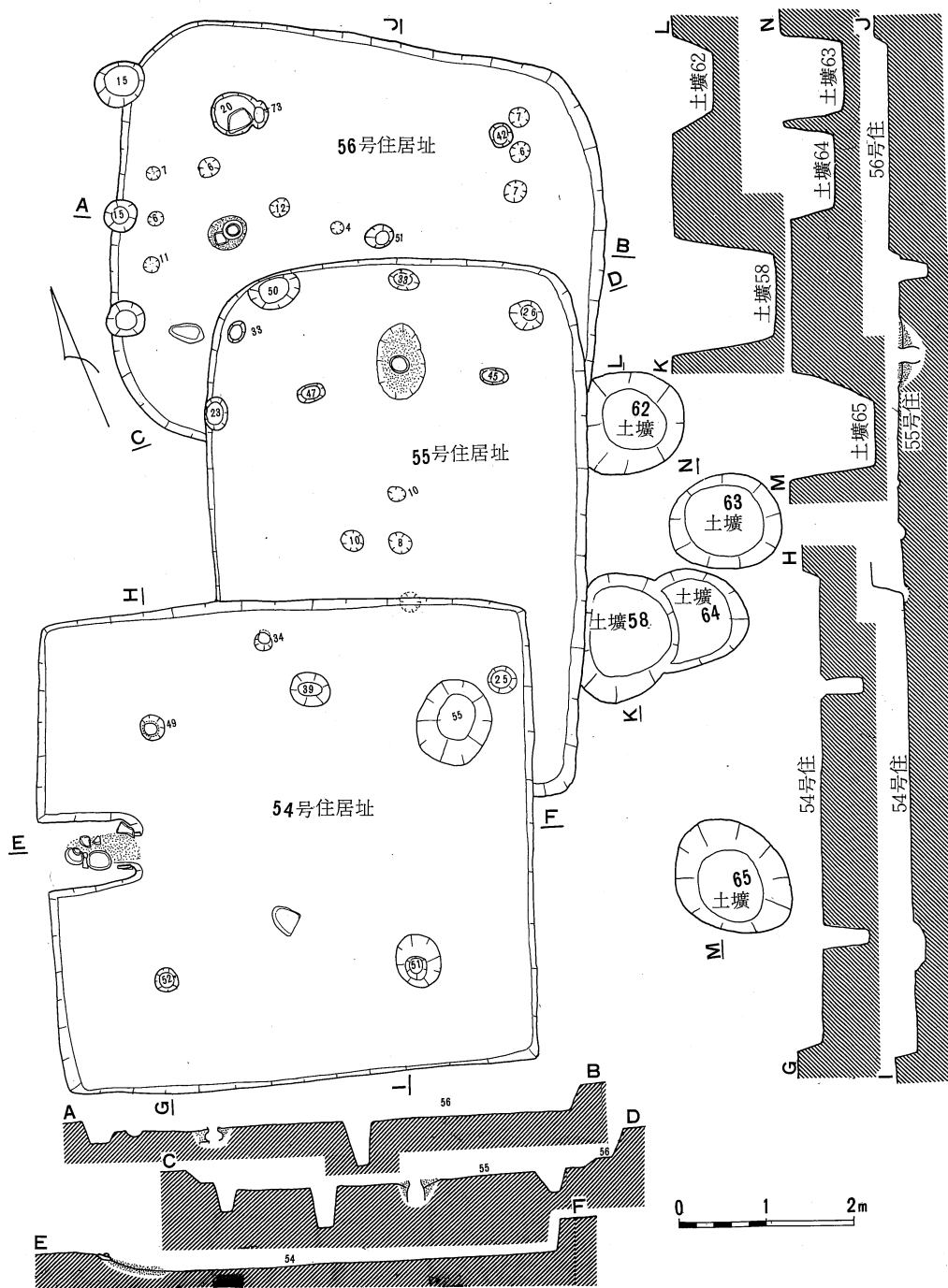
b) 56号住居址 (図176・177の444～453、図版49の252)

遺構 55号住居址に南部を切られて検出された本址は、5.6×4.8mの規模を有する隅丸長方形プランで、主軸方向をN-63°-Wに示す。壁高20～30cmで床面に続き、壁・床面とも堅緻である。支柱穴は4個所確認され、西側壁には3ピットがうがたれている。西壁・東壁沿いと中央にも浅いピットがあり、支柱穴・間仕切り用と思われる。炉は西側支柱穴間中央に位置した自然石1個をもつ埋甕炉である。凹み内はよく焼け、堆積した焼土と僅かの灰が検出された。

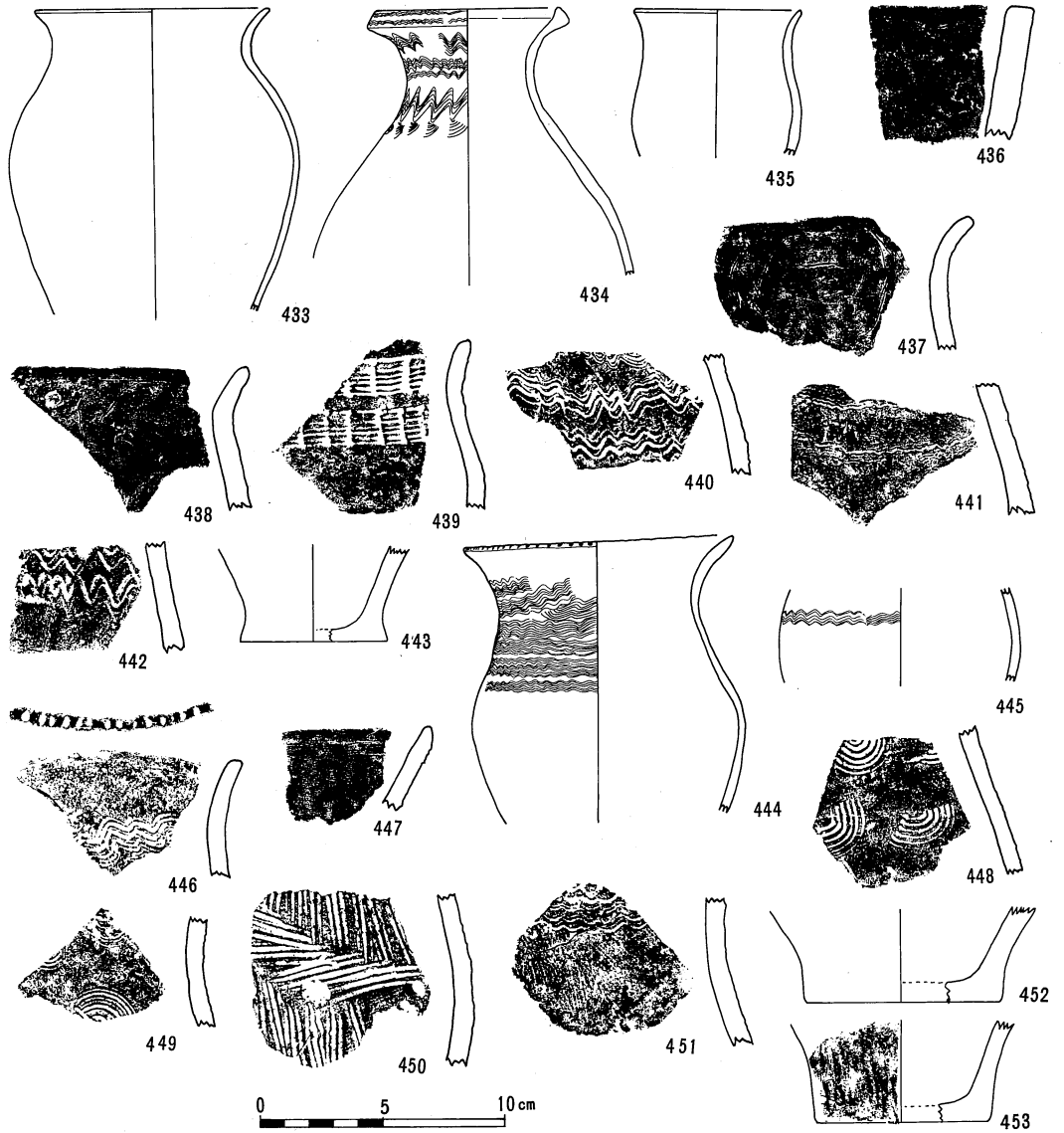
遺物 器形の判るのは2個体で、445は炉甕として使われ、口縁部と底部を欠く。444は口唇部に刻目を持ち、頸部に6条の波状文を施してある。448には半円弧文、450には綾杉状に沈線が施文されており、中期の様相を残すが、炉甕からして弥生後期前半に本址を位置づけたい。 (市 沢)



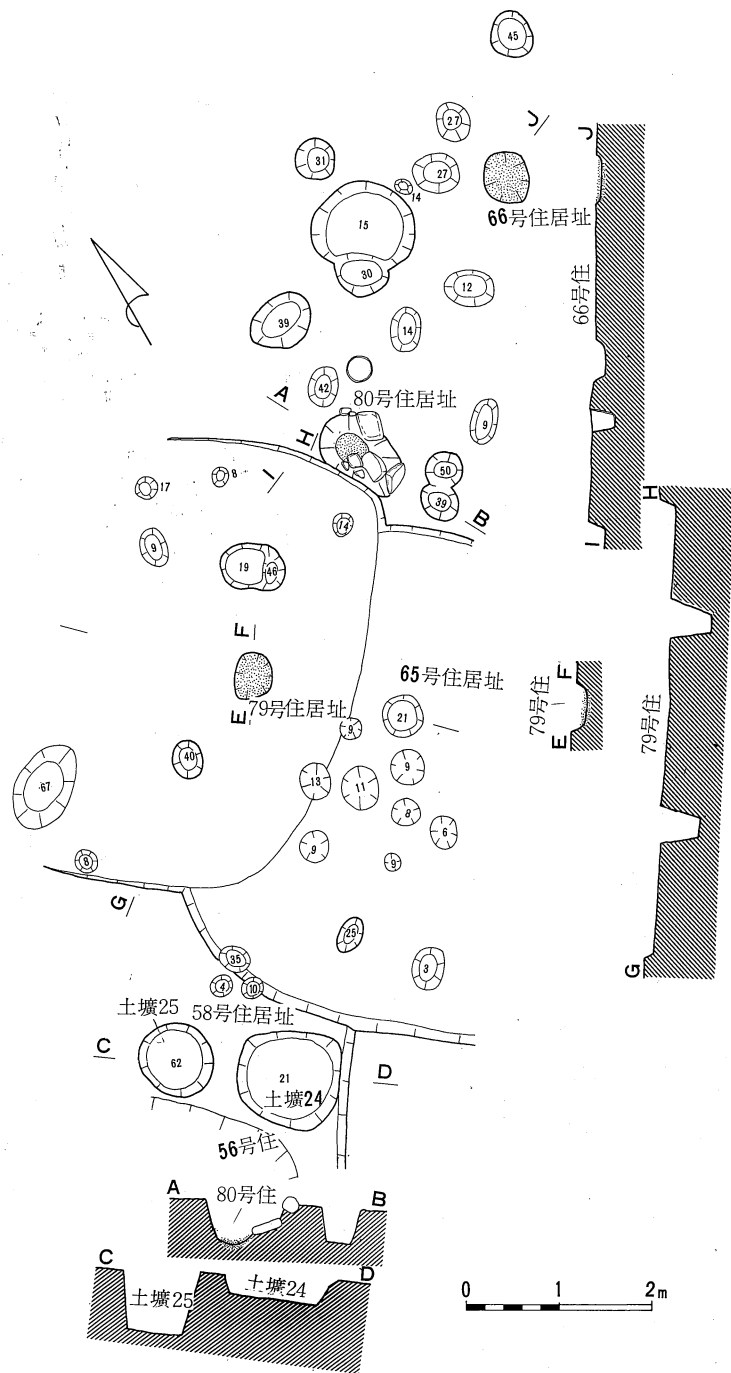
第 175 图 樋口内城館址遺跡 52・53 号住居址出土土器 (404・414 1:6, 他 1:3)
 (404~413 52号住, 414~432 53号住)



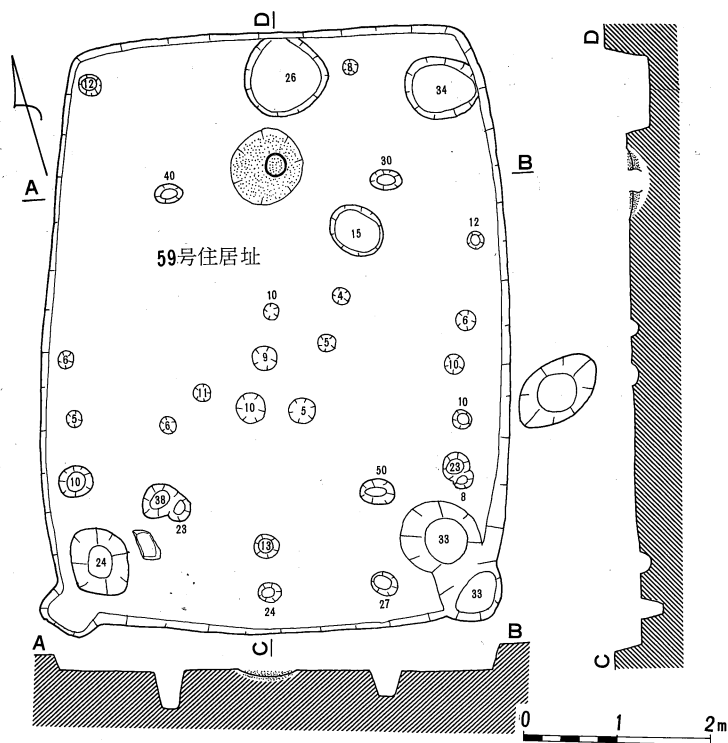
第 176 図 樋口内城館址遺跡54・55・56号住居址，土壇58，62～65実測図(1 : 80)



第 177 図 樋口内城館址遺跡 55・56 号住居址出土土器 (433 ~ 435・444
445 1 : 6 , 他 1 : 3) (433 ~ 443 55 号住 , 444 ~ 453 56 号住)



第 178 图 樋口内城館址遺跡58・65・79・80・66号住居址，土壙24・25実測図（1：80）



第 179 図 樋口内城館址遺跡59号住居 址実測図 (1 : 80)

ト) 58号・65号・79号住居址

a) 58号住居址 (図178)

遺構 丘陵中央北寄りに位置した本址は、56・65・79号住居址に切られ、更に土壇24・25上に構築してあるため、東壁の一部とわずかな床面を認めただけで、規模・プラン等全く不明である。

遺物 本址に関すると思われる出土遺物なし。

(山 田)

b) 65号住居址 (図178・180の454~463、図版16の69)

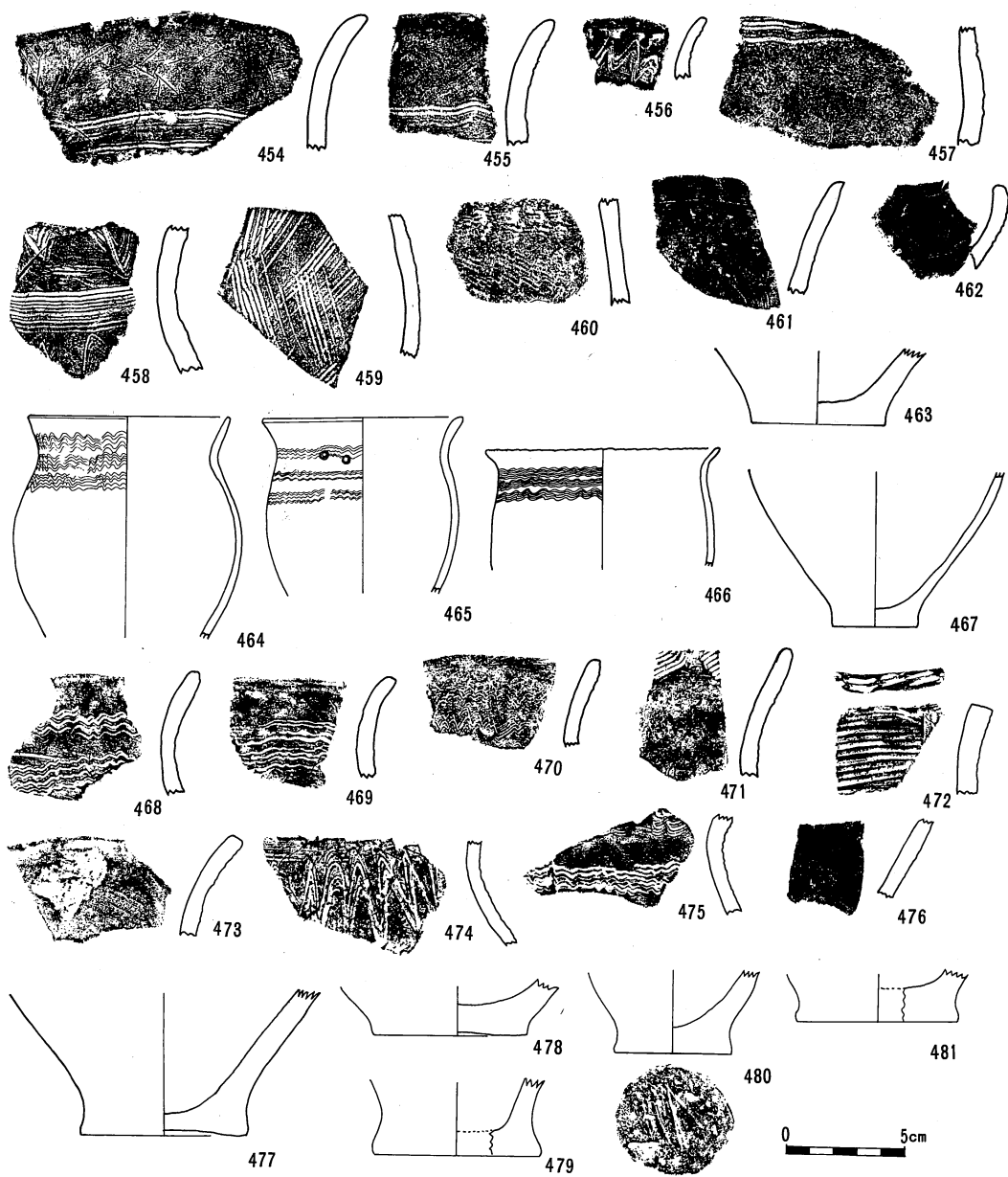
遺構 用地内東端に位置したため、東部は確認できなかった住居址である。西壁は79号住居址に切られているため、北壁と南壁の一部を含めた西半分が検出されただけである。南北5.38mを測値する。支柱穴は2箇所認められ、中央床面上に浅い凹みをもつ。

遺物 土器は、平行線文・波状文を施したもので弥生後期前半に位置される。出土量も僅かであり器形の判るものはないが、458は壺形土器片である。

(山 田)

c) 79号住居址 (図178、図版16の69)

遺構 65号住居址の西部を切って構築されている。西半は既に削り取られていて、東部の確認のみで全



第 180 図 樋口内城館址遺跡 65・59 号住居址出土土器 (464 ~ 467 1 : 6 , 他 1 : 3)
 (454 ~ 463 65 号住 , 464 ~ 481 59 号住)

貌は不明である。壁は浅いが東部床面は平坦で堅い。東側2柱穴が認められ、北壁沿いに小ピットが掘られている。炉は、東側主柱穴間線上からやや壁寄りに作られた地床炉である。炉甕があったが確認できなかった。

遺物 数片の弥生後期土器片だけである。

(山 田)

ナ) 59号住居址 (図179・180の464~481・156の96~97・158の139、図版16の68・49の250~251)

遺構 丘陵北端部近くに営なまれた本址は、北西に向かって僅かに傾斜したローンを基盤として掘られ覆土は褐色土である。主軸方向をN-19°-Eに示すやや胴張りの長方形プランで、その規模は5.00×6.40mを計るが北側はやや狭くなっている。南側両コーナーはふくらんでおり、東側では深さ33cmのピットになっている。壁はほぼ垂直に掘られて堅く、その高さは18~32cmである。床は堅いたたき状となっているが壁の近くでは比較的柔かく、いく分の凹凸がみられた。楕円形の主柱穴は等間隔に4個掘られている。また北西を除く他の三つの隅と北壁中央に接する位置に、ほぼ同規模の大きな穴が掘り込まれている。壁沿いと中央部には小ピットが配列された如くがあり、支柱穴的に解してよさそうだ。炉は、北側主柱穴間中央に位置した埋甕炉である。炉甕の中には焼土と炭化物が混入しており、周辺の床も広範囲に焼けて、多量の炭化物が散在していた。

遺物 464は炉甕、465・466は床面出土である。波状文をもつ弥生後期に比定されるもので、465には孔があげられている。石器は、石錐が床面から、石包丁(97)と凹石が覆土から出土している。(深 沢)

ニ) 60号・61号・68号住居址

a) 60号住居址 (図181・182の482~490、図版14の53)

遺構 丘陵北西部に位置し、住居址の密集地点で、重複関係が複雑なところである。本址は、北に位置した縄文期87号住居址の南半分を切り、南の68号住居址を切って構築されている。更に西半は61号・34号住居址に切られて検出された。不整形プランで、4.72×4.47mの規模をもち、主軸方向をN-67°-Wに示す。南側床面は68号住居址床面と一致するが、固く良好である。主柱穴は南北方向を長軸とする楕円形のもので4個所確認された。炉は西側にあつて61号住居址に破壊されたと思われる。

遺物 弥生後期に位置づけられる波状文・斜走短線文をもつ土器片の出土をみた。

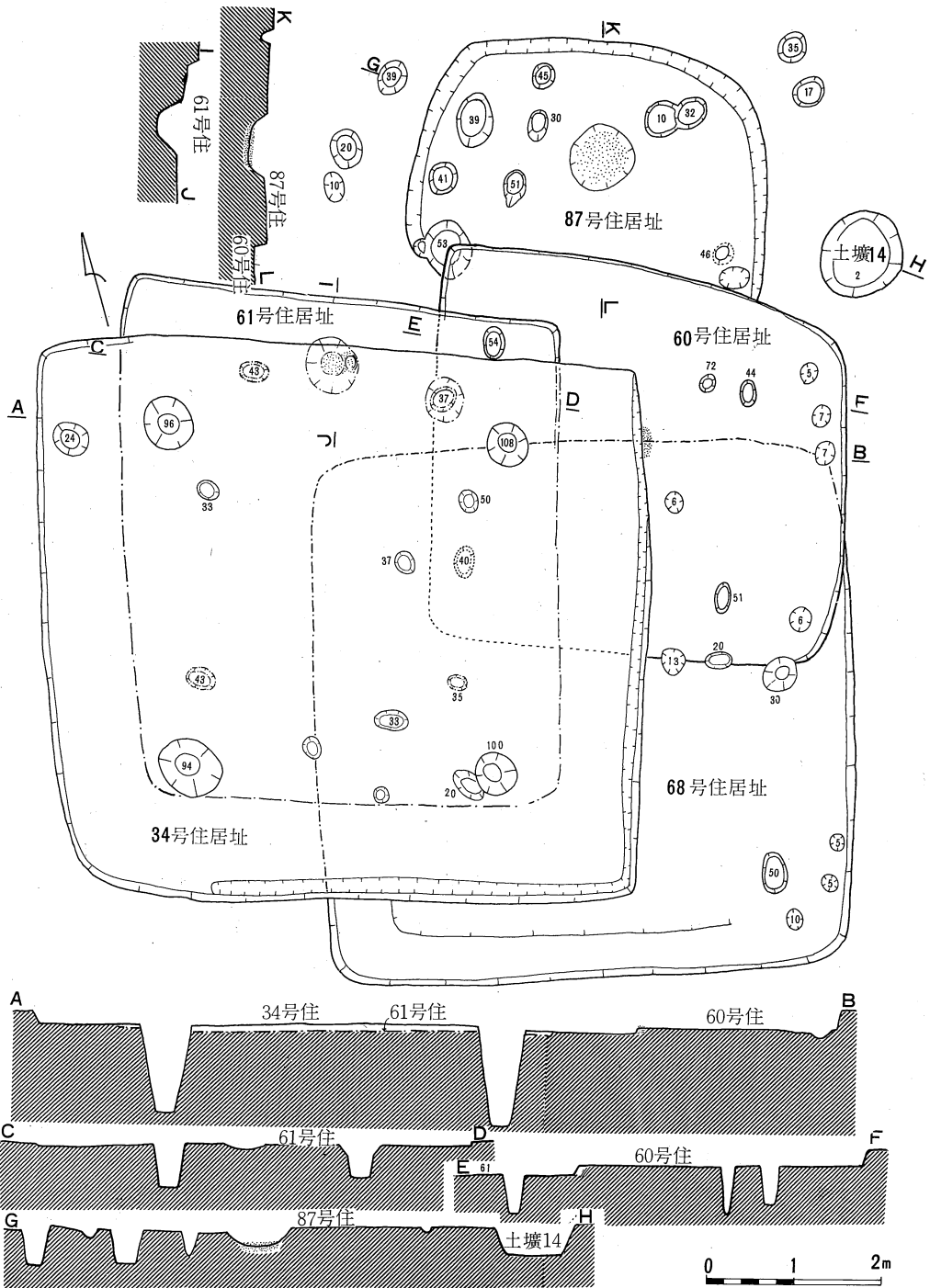
(八 木)

b) 61号住居址 (図181・182の491~514・156の98~104、図版14の53)

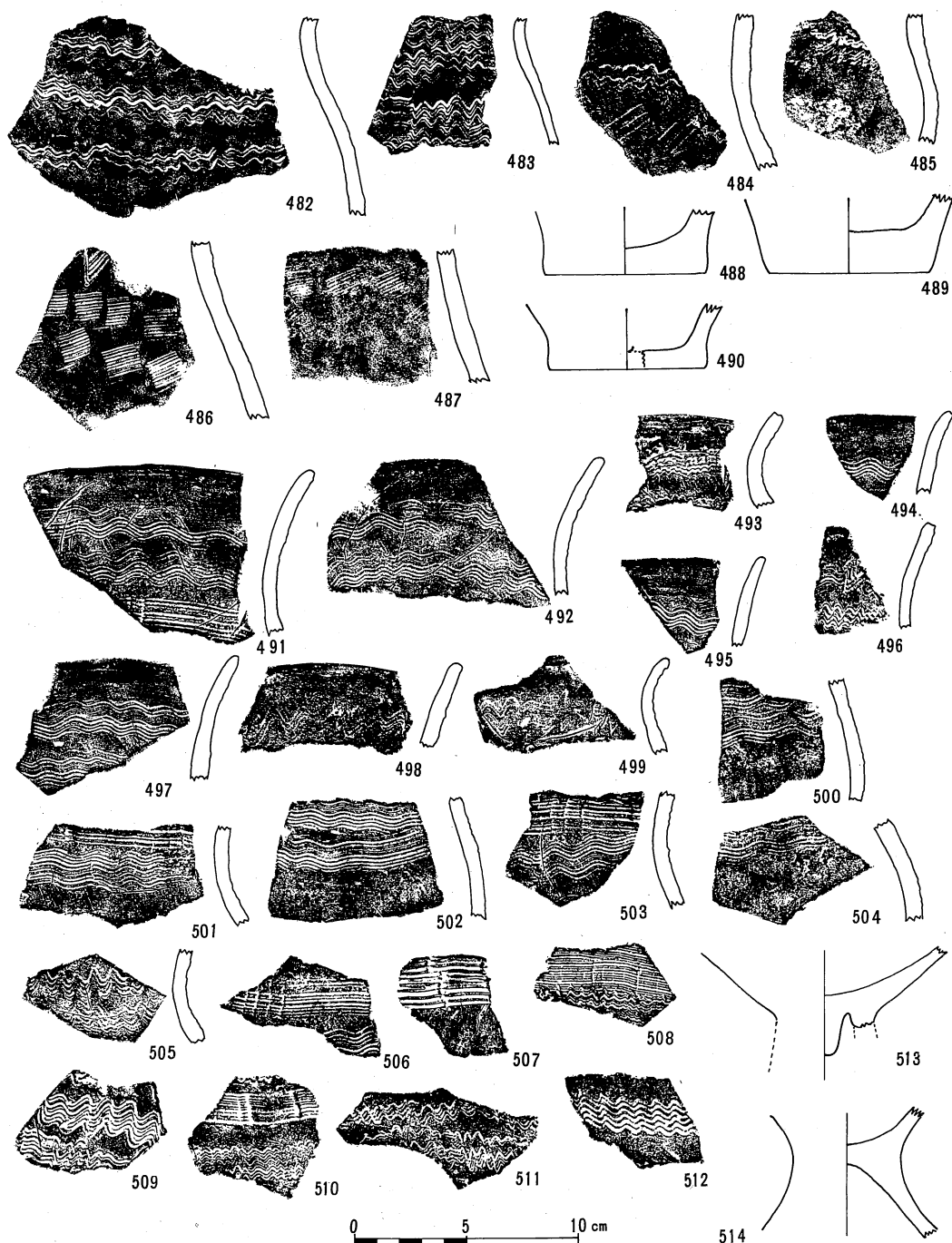
遺構 60・68号住居址を切って構築された本址は、南北にやや長い方形プランを呈し、主軸方向をN-17°-Eにとる。推定5×5.75mの規模をもつものである。床面は軟弱であるが、北壁・南壁近くに固い部分を残す。主柱穴は、東西方向を長軸とする楕円形で4個所検出された。炉は北側主柱穴間ほぼ中央に位置する埋甕炉であつたらう。甕形土器片が残されていた。

遺物 土器は波状文を主とする弥生後期のものである。器形では甕形のほかに環形土器(513・514)がある。石器は覆土中から磨製石鏃4・打製石鏃2・小形磨製石斧1が出土した。

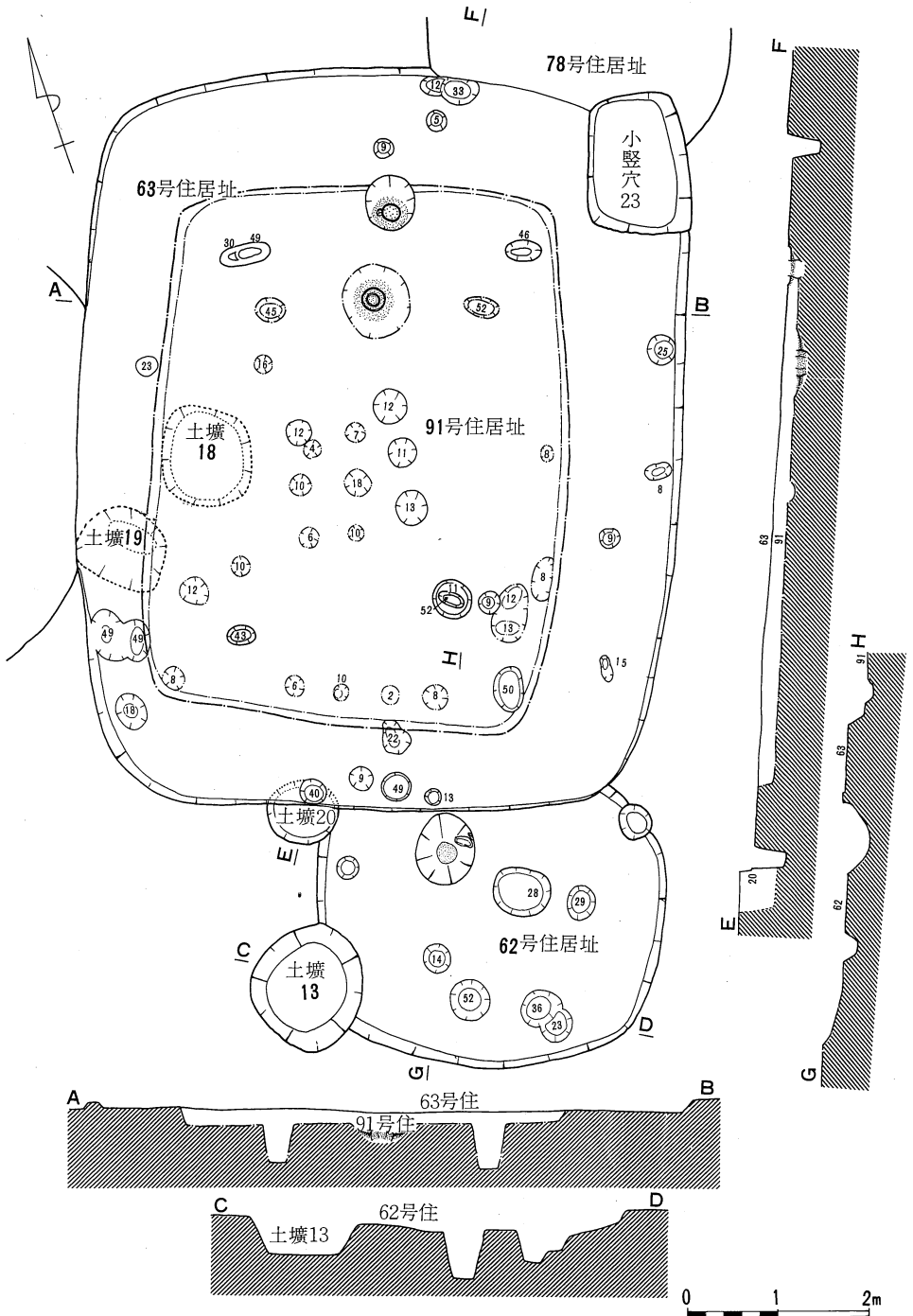
(八 木)



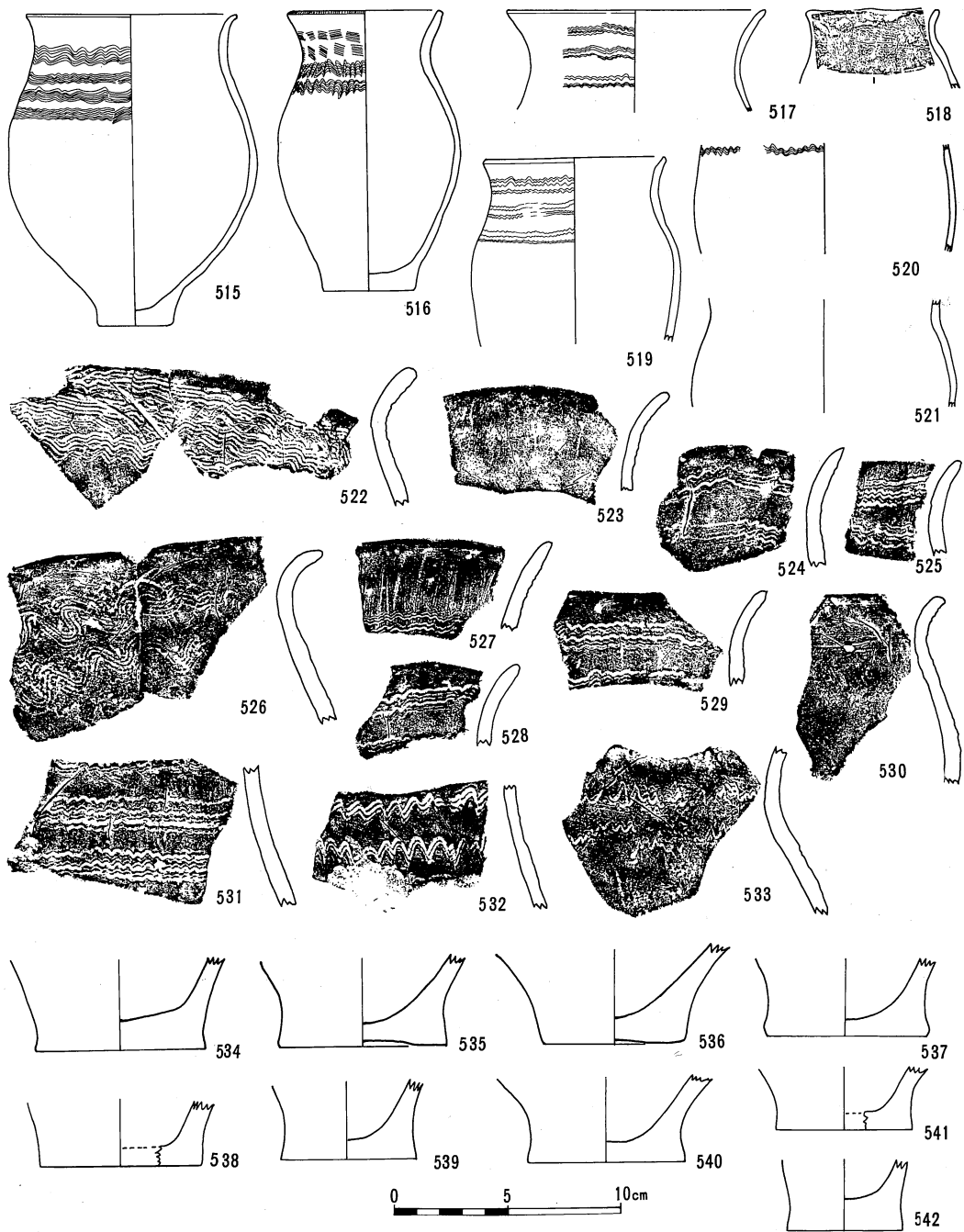
第 181 図 樋口内城館址遺跡 34・60・61・68・87 号住居址，土坑 14 実測図 (1 : 80)



第 182 图 樋口内城館址遺跡60・61号住居址出土土器 (1 : 3) (482~ 490 60号住, 491~ 514 61号住)



第 183 图 樋口内城館址遺跡62・63・91号住居址，小竪穴23・土壙13・18・19・20実測図（1：80）



第 184 図 樋口内城館址遺跡63号住居址出土土器 (515~ 521 1 : 6 , 他 1 : 3)

c) 68号住居址 (図181、図版14の53)

遺構 本址は、60・61・34号住居址に切られ、南 $\frac{1}{4}$ 程が残っただけである。南壁に平行に床面の違いがあり、拡張が行なわれたものと思える。この床面差は8cmを計るが東へいくにつれ差はなくなる。残存床面は良好で堅緻である。柱穴は南東隅に1箇所確認したのみで、床面調査をていねいにしたが、炉址と共に検出できなかった。

遺物は土器の小破片が少量出土しただけである。この結果、住居の順序は、68号住居址が古く、次いで60号・61号となり、34号住居址が最後となる。 (八木)

ヌ) 63号・91号・85号住居址

a) 63号住居址 (図183・184、図版17の72、49の249・253～254)

遺構 丘陵北端部に位置し、縄文期の64・62・78、弥生期85号住居址を切って構築されている。また本址貼床下には、91号住居址が検出され、同軸上の拡張ではないかと思われる。

丸味のある長方形プランで、6.65×8.10mの規模を有し、主軸方向をN-24°-Eに示す。床面は貼床面も含め堅くて良好である。支柱穴は、4本で南側2本は、91号住居址と共用する。壁沿いと中央辺に支柱穴、間仕切りと思われるピットが浅い凹みをもって検出された。炉は北側支柱穴間中央やや壁よりに位置する埋甕炉である。北東隅は、中世小堅穴23に切られている。

遺物 土器は甕形土器の完形2、半欠5が出土した。波状文を主体とした弥生後期のものである。520は、炉甕で、口縁部・底部を欠損する。 (八木)

b) 91号住居址 (図183・186の546～553、図版17の72・51の265～266)

遺構 63号住居址床面下に検出された本址は、4.55×5.93mの規模をもつ長方形プランで、主軸方向はN-22°-Eにとる。周壁はすべて残り、63号との床面差は10～20cmである。床面は非常に堅く良好である。支柱穴は4本で、南側2本は、63号と共用である。南壁沿いと中央部に浅いピットが検出されている。炉は北側支柱穴間中央に位置する埋甕炉で、土器を二重にもつ。土壙18・19が床面下から検出された。

63号住居址は本址の同軸上拡張とすれば、住居内面積は約2倍となっている。

遺物 波状文をもつ弥生後期土器で、546・547は炉甕として使われたものである。63号住居址出土土器との間に型式的な差は余りなく、一型式内の拡張と考えられよう。 (八木)

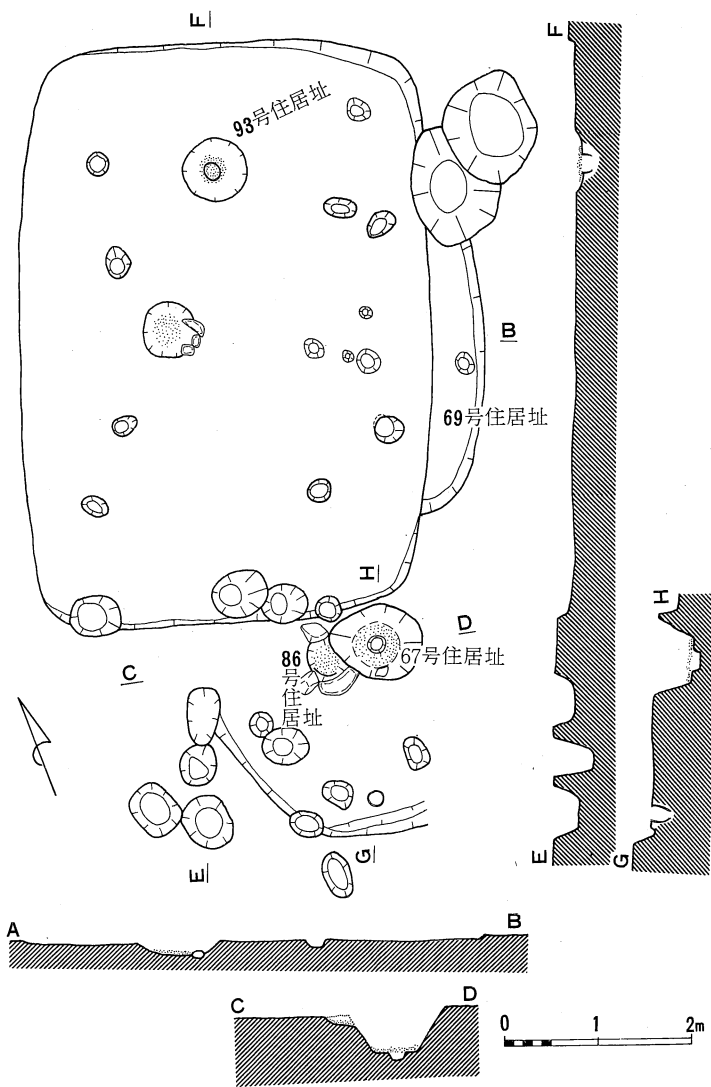
c) 85号住居址 (図57・186の543～545、図版17の76・51の267)

遺構 63号住居址と中世小堅穴21に切られて検出された。64号住居址上の貼床は検出し得なかった。残存床面は軟弱部分が多いが一部に堅い部分をもつ。炉は三方を三石で囲んだ中に甕を入れたものである。

遺物 出土量は少ない。543は炉甕として使用されたもので、底部を欠く。波状文をもつ弥生後期のものである。 (八木)

ネ) 69号・93号住居址

a) 69号住居址 (図185・186の554～564)



第 185 図 樋口内城館址遺跡67・86・69・93号住居址実測図（1：80）

間には、時期差を明確にもたない。いずれも弥生後期に位置づく住居址である。

（一条）

ノ) 72号・75号住居址

a) 72号住居址（図187・188の574～585、図版17の74・50の259）

遺構 丘陵北西端の住居址密集地点に営なまれた本址は、82・70・76・73号の縄文期の住居を切って構築されている。また本址は南半分を75号住居址に切られて検出された。5.35×7mの規模をもつ楕円形状

遺構 丘陵北縁部に位置し、67・86・92号住居址を切って構築されたが、93号住居址に大半を切られ、東壁の一部が残存するのみである。主柱穴は4箇所認められ、西側主柱穴間内側に地床炉が検出されている。

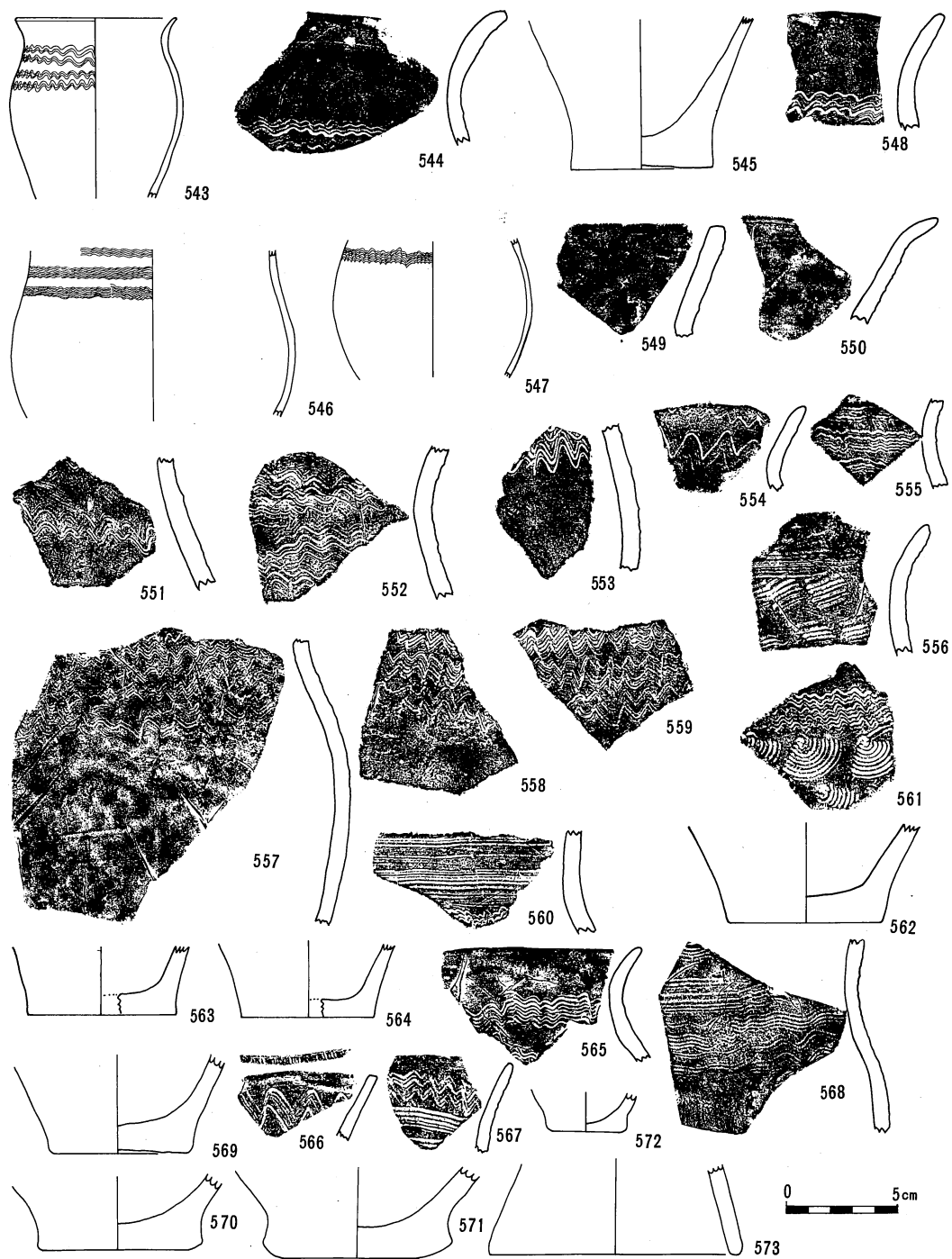
遺物 出土量少なく、波状文を施した弥生後期土器片だけである。（一条）

b) 93号住居址（図185・186の565～573）

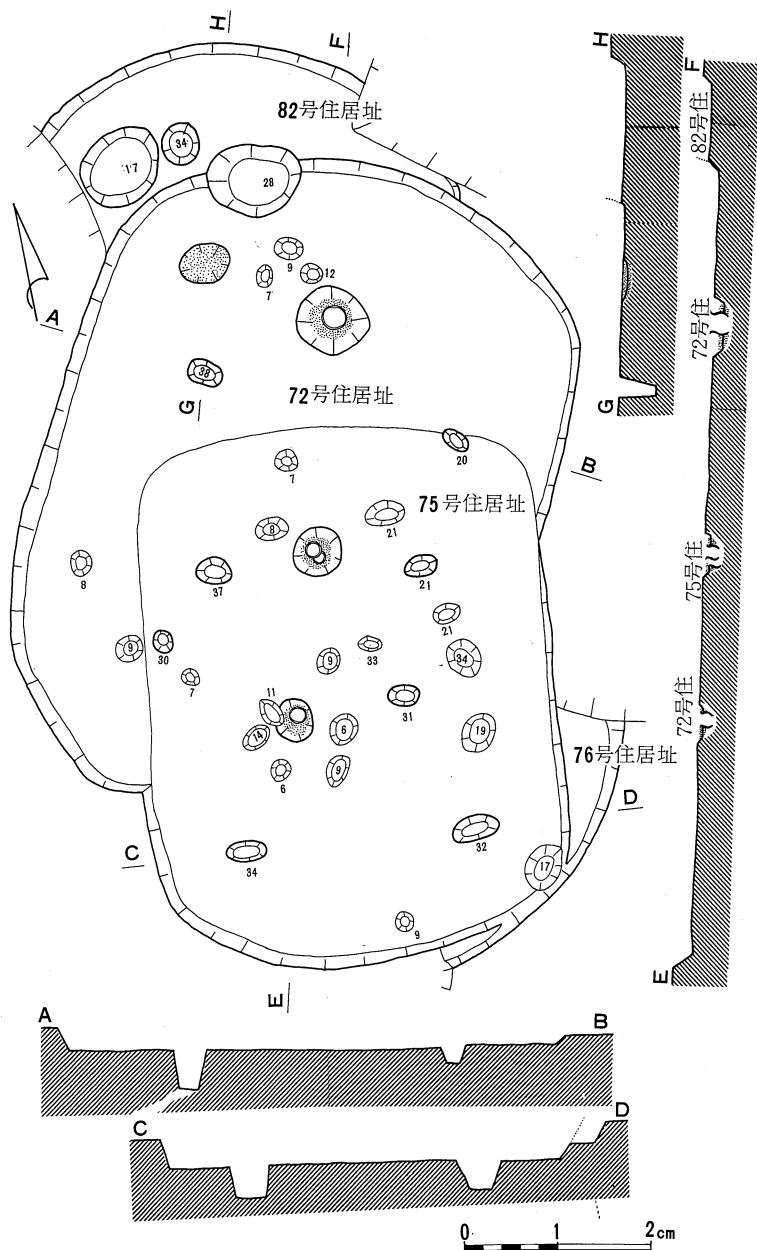
遺構 69号住居址上に貼床して構築された本址は、長方形プランで、4.40×6.20mの規模を有する。主軸方向はN-19°-Eにとる。周壁は南と北は明瞭に残るが東と西は明確さを欠く。床面は貼床だが堅緻である。主柱穴は4本で、北側主柱穴間中央に埋甕炉をもつ。

遺物 波状文を主とした弥生後期土器片が出土したが出土量は少ない。568は炉甕に使われたものである。573は高杯の脚部片である。

69・93号住居址出土土器の



第 186 图 樋口内城館址遺跡 85・91・69・93 号住居址出土土器 (543・546・547
 1 : 6 , 他 1 : 3) (543 ~ 545 85 号住 , 546 ~ 553 91 号住 , 554 ~ 564 69 号住 , 565
 ~ 573 93 号住)



第 187図 樋口内城館址遺跡76・82・72・75号住居址実測図(1:80)

し、無文であり、筒調整痕が縦方向に残っている。597・598は壺形土器片であり、599は高坏脚部片である。弥生後期に位置され、72号住居址との間に型式差が明確に認められない。

(小松原)

のプランで主軸方向をN-23°-Eに示す。壁高は10-25cmであり、床面は平坦で堅い。主柱穴は4個所あり南と北側主柱穴間、壁寄りに埋甕炉が2個所ある。

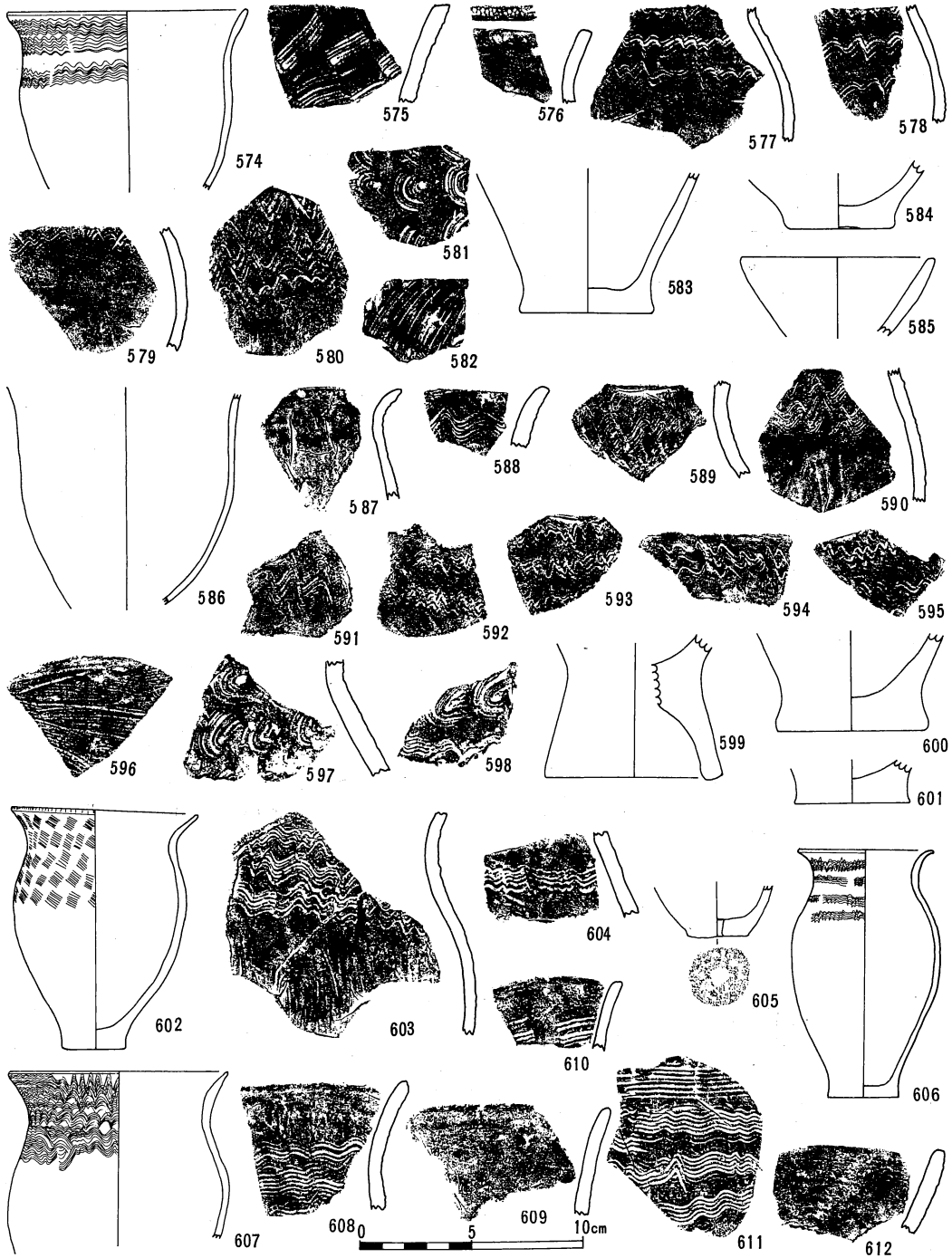
遺物 574は炉甕であり口縁部から胴部上半に波状文がみられる。土器の中には斜走短線文・半円弧文もみられるが、弥生後期前半に位置されよう。585は高坏部片で内外丹塗りが施されている。(小松原)

b) 75号住居址(図187・188の586-601、図版14の74・50の260)

遺構 縄文期70・76・73号住居址と弥生期72号住居址の南半分を切って検出された。4.50×5.75mの規模をもつ丸味をもった長方形プランで、主軸方向をN-3°-Eに示す。床面は平坦で堅い。北半は72号床面と同一レベルになる。4柱穴は楕円形を呈し、北側主柱穴間中央に埋甕炉をもつ。2個体の甕を使って構築してある。

遺物 586・590は炉甕として使われたものである。

586は口縁部と底部を欠損



第 188 图 樋口内城館址遺跡72・75・77・89号住居址出土土器 (574・586・605~607 1 : 6 , 他 1 : 3) (574~585 72号住 , 586~601 75号住 , 602~604 77号住 , 605~612 89号住)

ハ) 77号住居址 (図75・188の602~604・157の105~106、図版14の54・50の261)

遺構 丘陵西縁に位置しており、西は急崖を呈する斜面になる。築城の際、削られたものと思われる。従って北東隅の検出にとどまり、プラン・規模等不明である。

遺物 土器片の出土をみただけである。602は口唇に刻目をもち、胴部上半に斜走短線文を施したものである。157図105は小形高坏である。弥生後期に位置されよう。(根津)

ヒ) 83号住居址 (図189・190、図版18の80・50の262~264)

遺構 丘陵最北西端に検出された本址は、南に位置した縄文期70・82号住居址を切って構築されている。褐色土層からローム層に深く掘込んだ、5.07×5.74mの規模をもつ長方形プランの住居址で、主軸方向をN-42°-Eに示す。壁は垂直に近く掘られ、55~60cmの深さである。床面は平坦で極めて堅緻である。主柱穴は4個所に楕円形を呈して検出された。また壁沿いと中央辺に浅い凹みのピットが掘られている。炉址は、北側主柱穴間中央に位置する埋甕炉で、下半分が二重になっている。

遺物 甕・壺・高環形土器の出土をみた。614・615は炉甕として使われたものである。波状文を主とした弥生後期に比定される土器である。622には口唇内に刻目が施されている。613は壺形土器、616は高環形土器坏部である。(辰野)

フ) 89号住居址 (図189・188の605~612、図版18の83・51の268)

遺構 丘陵北西隅に検出された本址は、褐色土層からローム層に掘込んだもので、縄文期90・84・88号住居址を切って構築している。また中世特殊円形竪穴4・5が西壁を切って掘り込まれている。

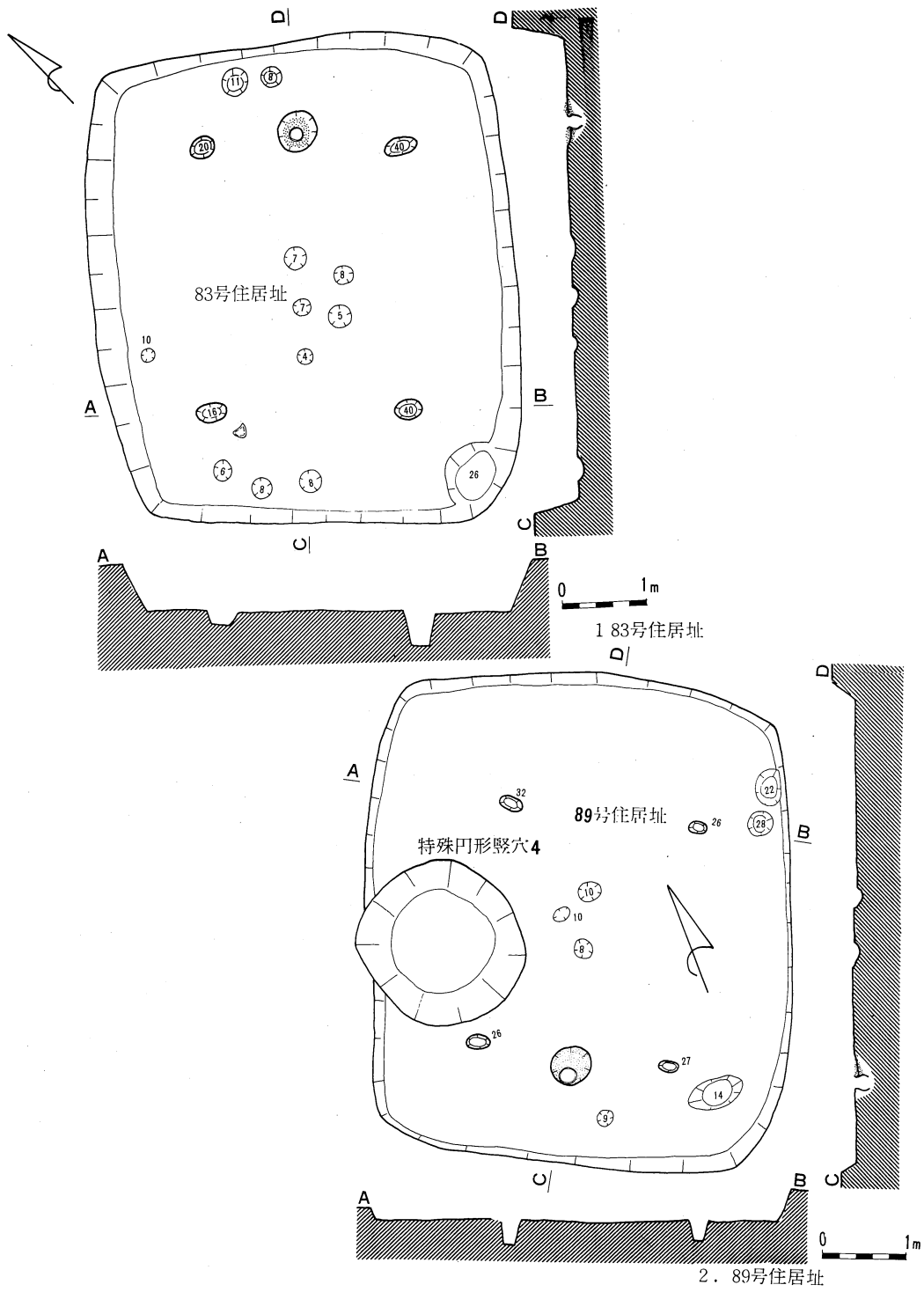
本址は、5.12×5.88mの規模をもつ長方形プランで、主軸方向をN-153°-Wに示す。壁は垂直に近い角度で掘られ、東壁で40cmを残す。床面は小凹凸があるが概して堅く良好である。主柱穴は楕円形を呈するものが4穴、等間隔で確認されている。南側主柱穴間中央には、埋甕炉がある。なお、本址は火災に遭遇したと思われる多量な炭化物と灰が覆土下層から床面にかけて堆積していた。

遺物 覆土から多量な炭化物と土器片の出土をみた。土器は波状文を施した弥生後期のものであり、甕形土器のほかに甑(605)の底部も出土している。底部には1.5mの穴があげられている。607は炉甕であり、底部を欠損している。(根津)

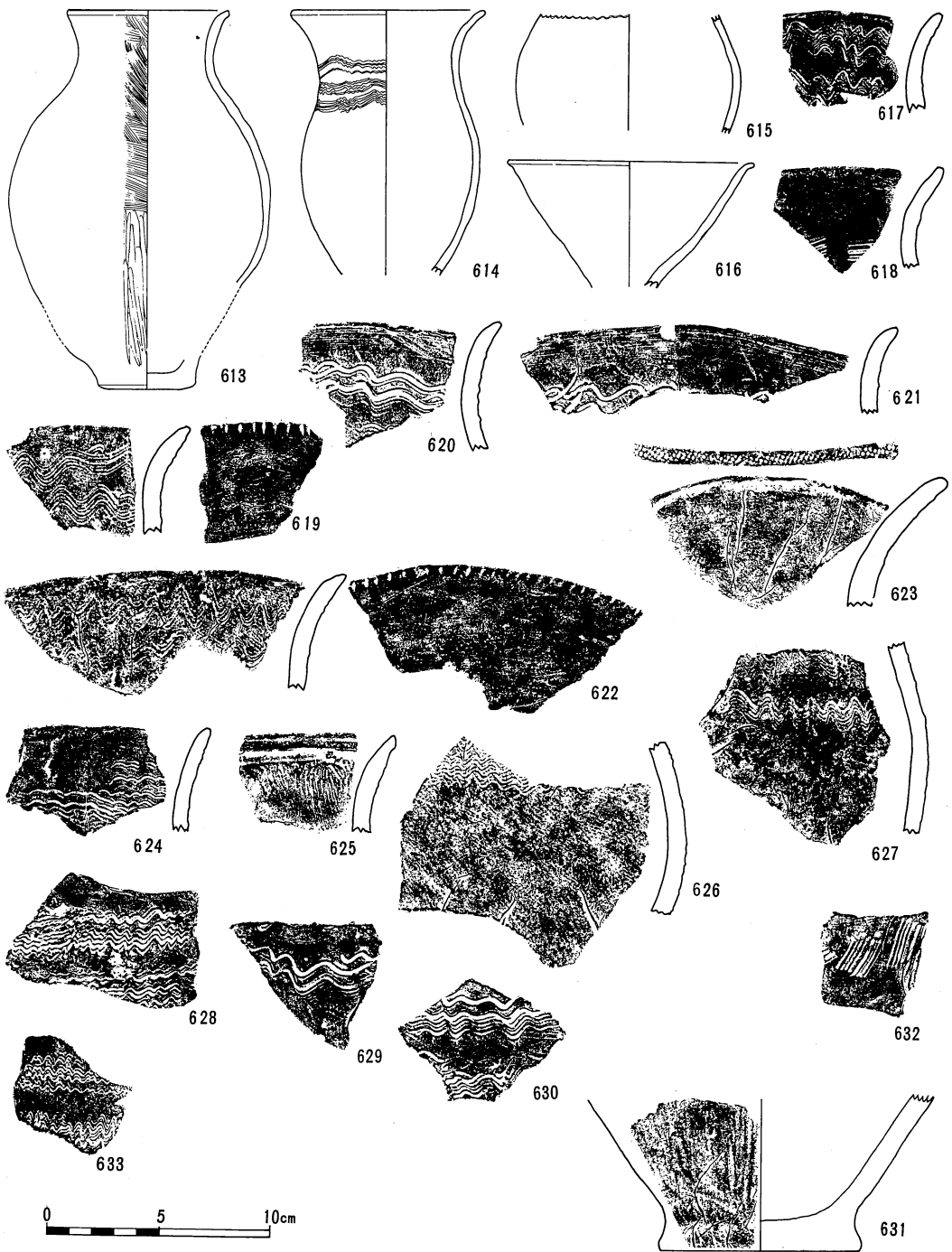
ヘ) 101号住居址 (図191・193の634~643・157の107、図版19の87・89・51の269)

遺構 丘陵南縁に構築された本址は、長方形を呈する5.28×6.27mの規模で、石垣埋甕炉をもつ住居址である。床面は平坦・堅緻であり、中央辺から北西部にかけて径20~30cmの浅く凹んだ、間仕切りないし補助支柱と推察できる穴が、10個所検出されている。床面を切って土壌75が掘られている。主柱穴は4本でほぼ等間隔に掘られている。南側主柱穴間中央には、3個の石で囲まれた埋甕炉があり、炉址南には、60×40cmの長方形を呈する深さ16cmの穴が存した。炉址からこの穴にかけての床面はよく焼けて赤色を呈している。主軸方向はN-163°-Wである。

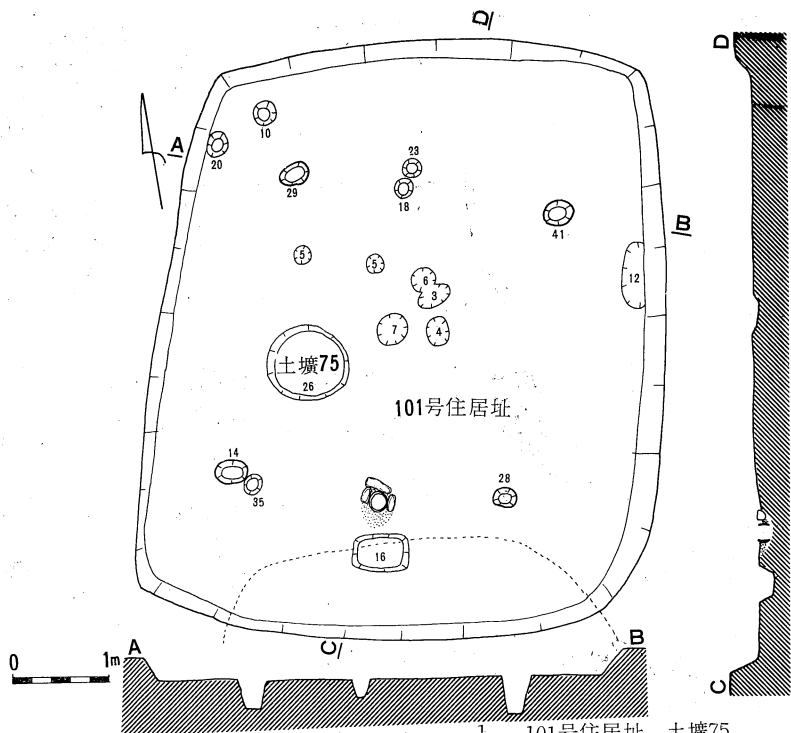
遺物 634は炉甕に使われたもので口縁部と底部を欠損する。この他、櫛状工具による波状文をもつ弥生後期土器片が出土した。641は高環形土器の脚部片である。石器としては、半折した扁平片刃石斧(107)



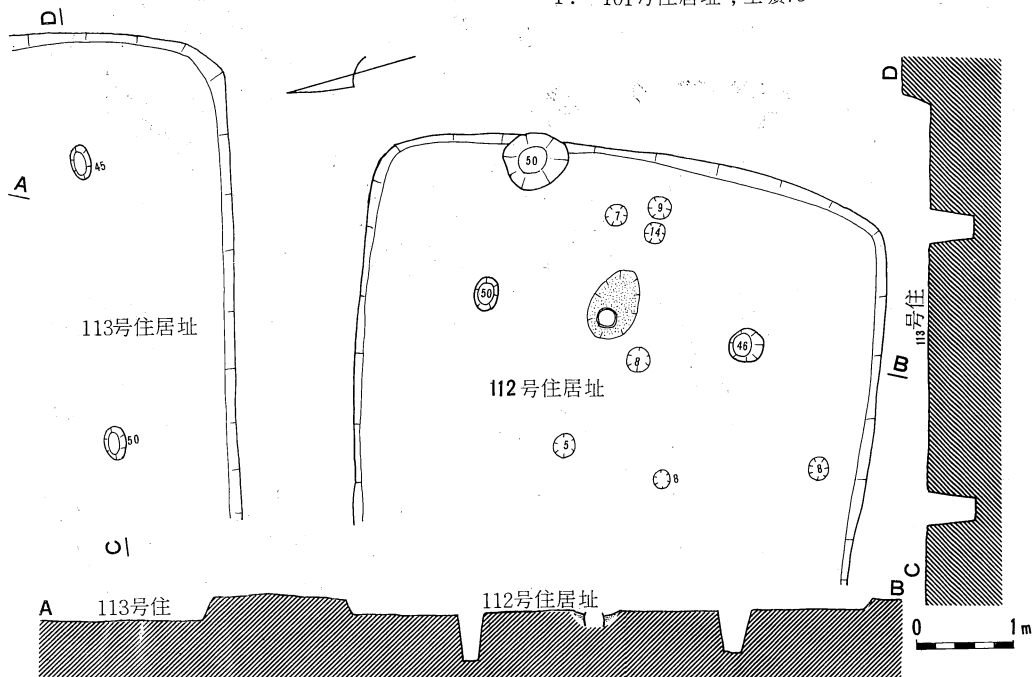
第 189 图 樋口内城館址遺跡83・89号住居址，特殊円形竖穴 5 实测图(1 : 80)



第 190 図 樋口内城館址遺跡 83 号住居址出土土器 (613 ~ 616 1 : 6 , 他 1 : 3)

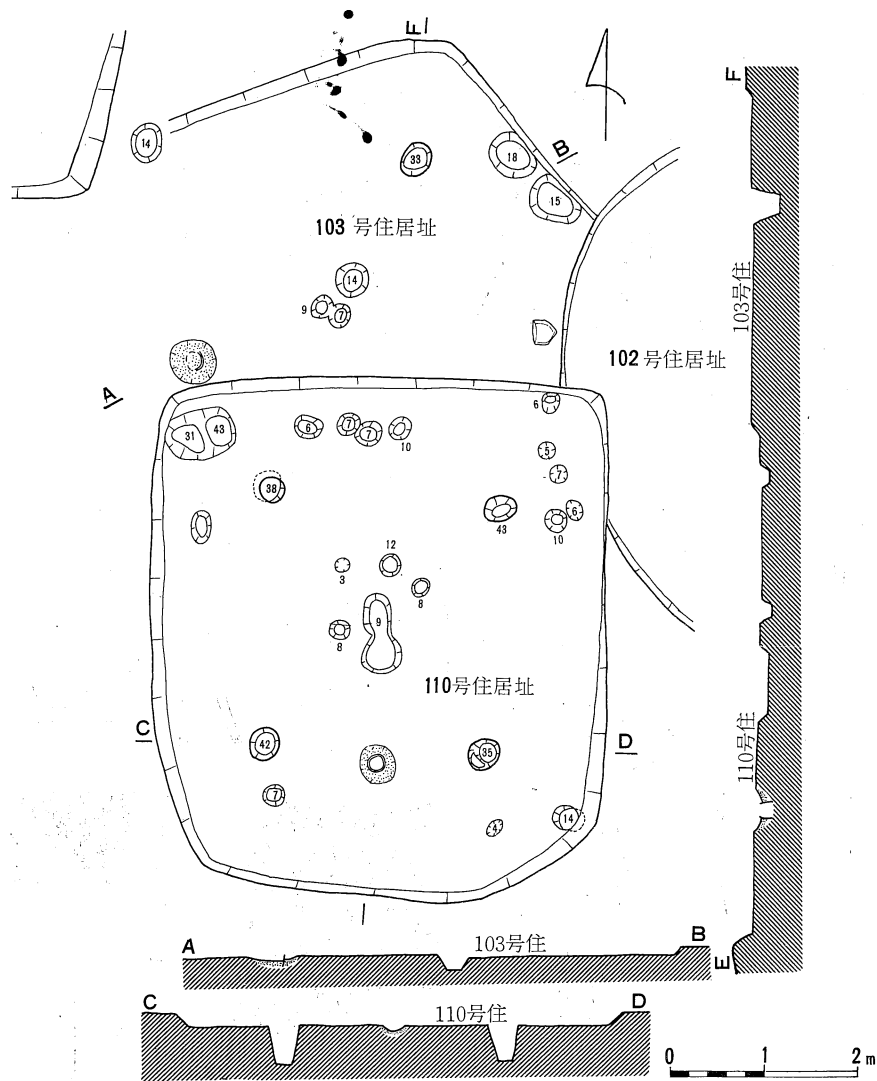


1. 101号住居址，土壙75



2. 112・113号住居址

第 191 图 樋口内城館址遺跡 101・112・113号住居址，土壙75実測図（1：80）



第 192図 樋口内城館址遺跡 103・110号住居址実測図 (1 : 80)

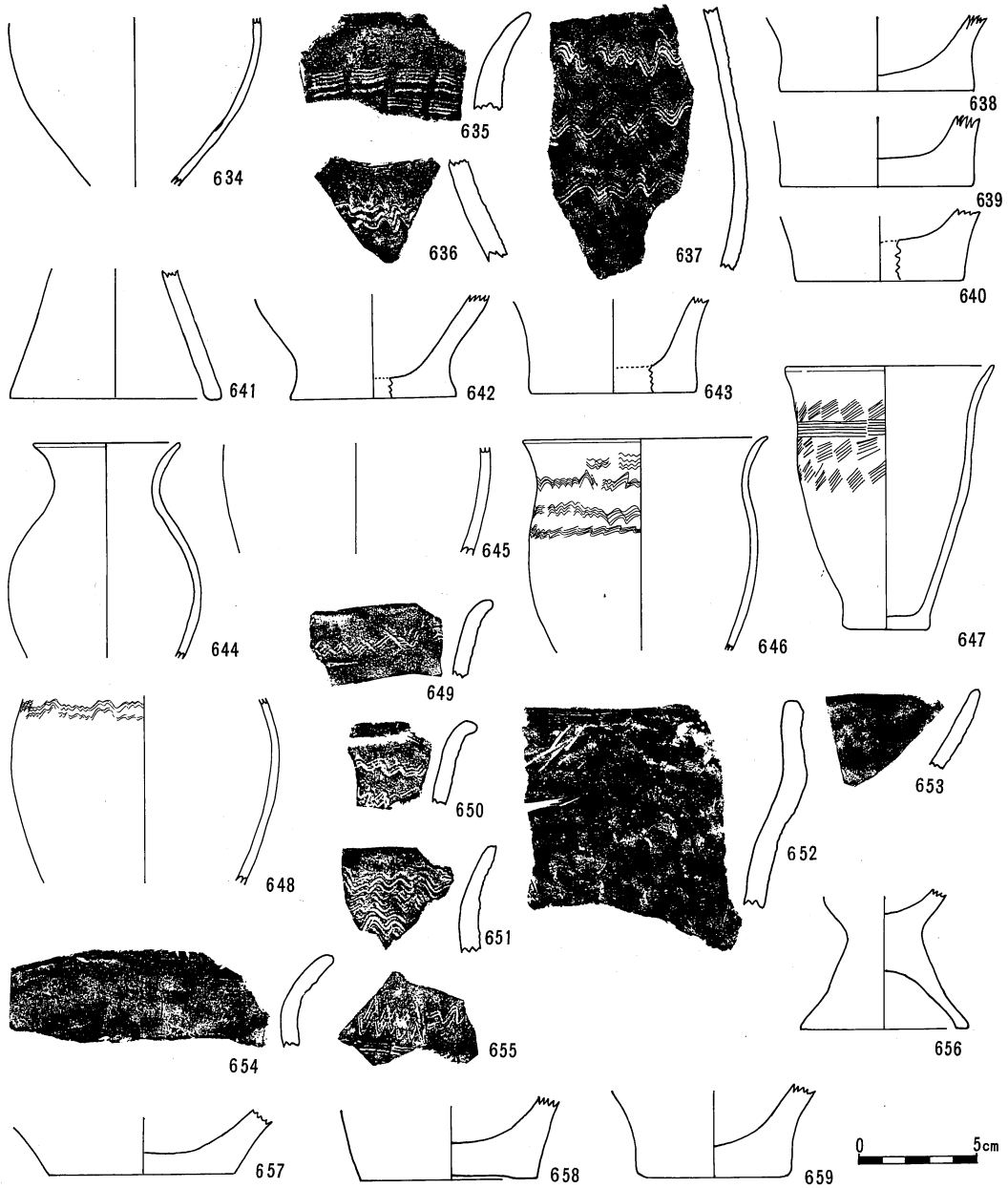
の出土をみた。

(山 田)

ホ) 103号・110号住居址

a) 103号住居址 (図192・193の644~645)

遺構 本址は丘陵南端部に位置し、102号住居址に貼床して構築されたが、後続する110号住居址に大半を切られたため北東部と埋甕炉を確認したのみで、プラン・規模等不明である。残存壁から推定して不整



第 193 图 樋口内城館址遺跡 101・103・110 号住居址出土土器 (634・644~648
 1:6, 他 1:3) (634~643 101号住, 644・645 103号住, 646~659 110号住)

長方形プランをとるものと思われる。床面は平坦で堅い。炉は住居址西側に作られた埋甕炉である。

遺物 土器は弥生後期の炉甕と覆土中から壺の出土をみただけである。 (山 田)

b) 110号住居址 (図192・193の646～659・157の110、図版21の92・94・51の271・52の277・57の307)

遺構 本址は102・103号住居址を切って構築されている。南壁に丸味をもつ不整長方形を呈し、4.88×5.55mの規模をもつ。主軸方向はN-177°-Wに示す。床面は平坦で堅緻であるが、壁沿いや中央辺には径15～30cmの浅い凹みが20箇所あり、やや凸凹の感じを受ける。補助的な支柱ないし間仕切りと考えられよう。支柱穴は円形を呈するものがほぼ等間隔に4箇所検出された。北西隅のそれは内側に傾斜している。炉は南側支柱穴間線上やや南壁寄りに作られた埋甕炉で、口縁を上にした甕が埋設され、附近はよく焼けて赤色を呈している。

遺物 土器は櫛状工具による波状文・斜走短線文を施した弥生後期のもので、646は炉甕であり、647・648は覆土中からの出土である。652は壺の口縁部と思われ、656は高坏脚部片である。157図110の石製紡錘車は覆土中からの出土であり、研磨痕が残る。 (山 田)

マ) 106号住居址 (図85・194・157の108～109、図版21の93・52の272～275・57の307)

遺構 丘陵南端部に位置し、107号住居址を切って構築されている。本址東には104・105号住居址や小竪穴が接して以後営なまれている。本址は同軸上の拡張が行なわれた住居址で、2住居址にすべきであるが、遺物処理も1住居址として扱ってしまったのでとされたい。

古い住居はおそらく東壁内床面に周溝があるが、この辺が東壁となっていたものと思われる。床面は同一レベルで、凹凸はあるが堅緻である。床面上に浅い凹みが多数あるが、区別が困難であった。支柱穴は4本で、北側支柱穴間中央に埋甕炉(662)がある。

新住居址は、同軸上に拡張したもので、4.94×7.12mの規模をもつ長方形プランを呈し、主軸方向を、N-10°-Eに示す。床面は新旧同レベルであり、支柱穴・埋甕炉は対称的に拡張された位置に存する。壁沿いに補助的支柱穴がみられる。

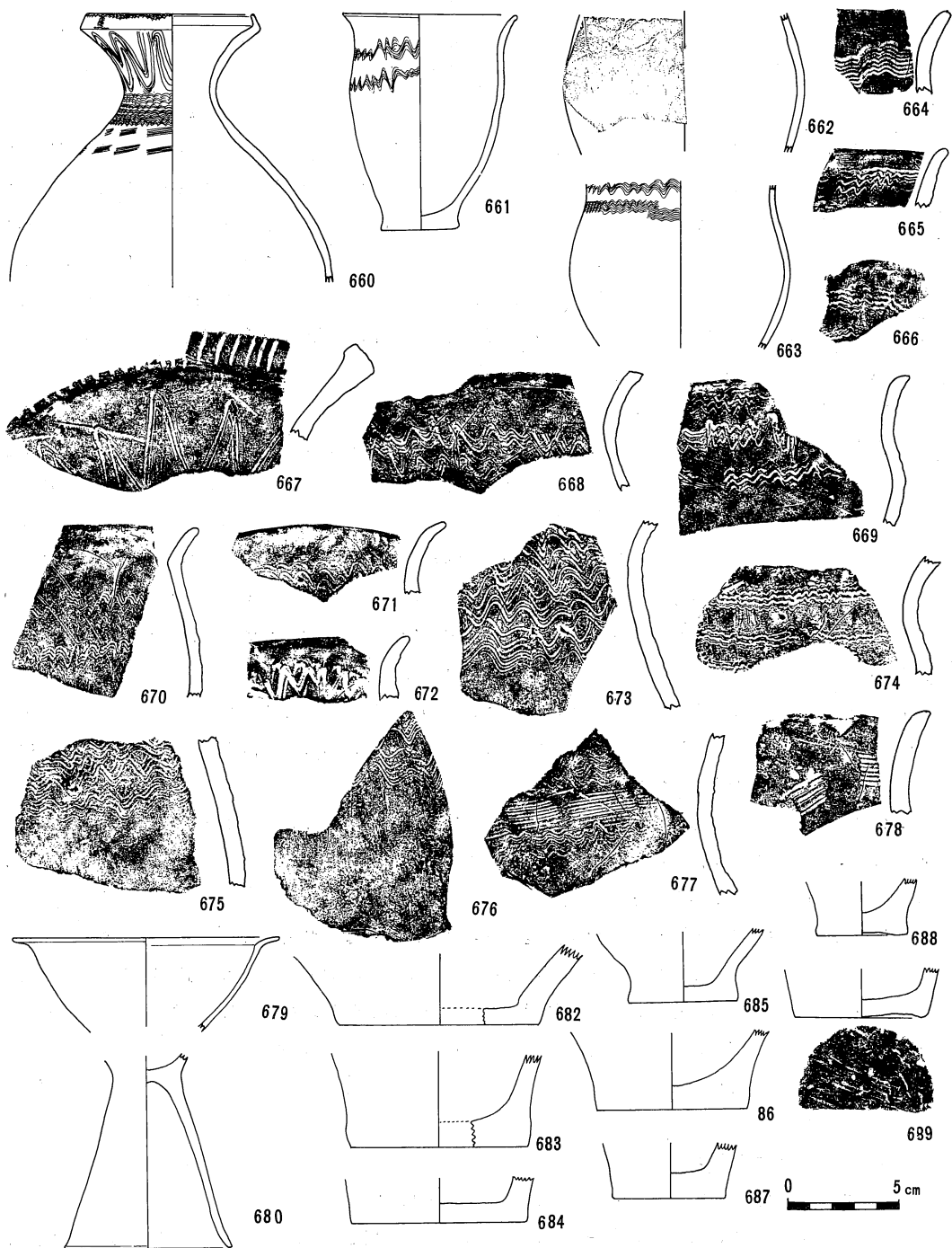
遺物 新旧2住居址出土の土器には型式差はみられず、拡張は一型式内に行なわれたものと思える。弥生後期に位置できるもので、壺・甕・高环形土器の出土をみた。660は口唇部から頸部にかけて波状文が施され、その下に斜走短線文を加えている壺形土器上半である。662は古い住居の炉甕、663は新住居のそれである。679・680は高坏の坏部と脚部で、680には丹塗りが施されている。

この他に覆土中から打製石鏃と土製紡錘車が一点づつ出土している。 (福 沢)

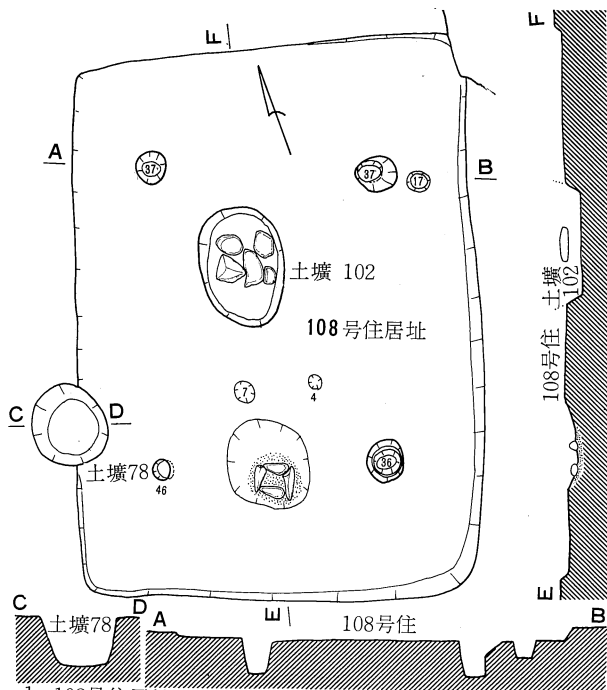
ミ) 108号・118号住居址

a) 108号住居址 (図195・197の690・157の111、図版22の97)

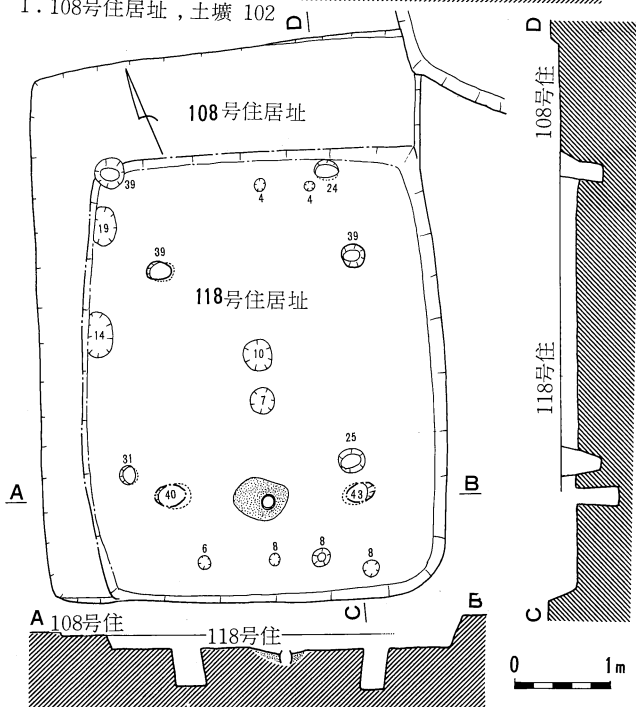
遺構 丘陵の中央部に検出された本址は、長方形プランを呈し、4.23×5.74mの南北に長い規模もち主軸方向をN-158°-Wにとる。掘り込みは浅く壁高は10～15cmであり、床面は一部北側に軟弱な部分をもつが、概して堅く良好である。支柱穴は4箇所確認され、南側支柱穴間中央に、石囲炉が検出された。4個の河原石を方形に組んだもので、炉底に甕形土器の胴部片が敷かれ、わずかに焼土が認められた。



第 194 图 樋口内城館址遺跡 106号住居址出土土器 (660~ 663 · 679~ 680 1 : 6 , 他 1 : 3)



1. 108号住居址, 土壙 102



2. 108・118号住居址

本址は、118号住居址上に貼床して構築されたものであり、118号住居址の拡張と考えられる。また本址床面を土壙102・78が切って存する。

遺物 遺物の出土量は少なく、甕形土器片で、弥生後期に比定される。覆土中から、磨製石鏃が1点出土している。(山岡)

b) 118号住居址 (図195・197の691、図版22の98・52の276)

遺構 108号住居址の壁と床面を精査中、確認された住居址で、3.71×4.68mの規模をもち、主軸方向をN-15°-Wにとる。壁高は東壁で35cmを計り、108号床面からは18cmである。床面は4本の主柱穴内は堅緻である。炉址は108号の石囲炉と同じ位置にあり、その下から検出された埋甕炉である。補助的支柱穴と思われる浅い凹みが、壁沿いと中央部に確認されている。

遺物 691は炉甕に使ったもので、口縁部と底部を欠く。頸部に櫛状工具による波状文が施された弥生後期のものである。

108号住居址出土土器との間には型式差は認められず、一型式内の拡張と考えられる。(山岡)

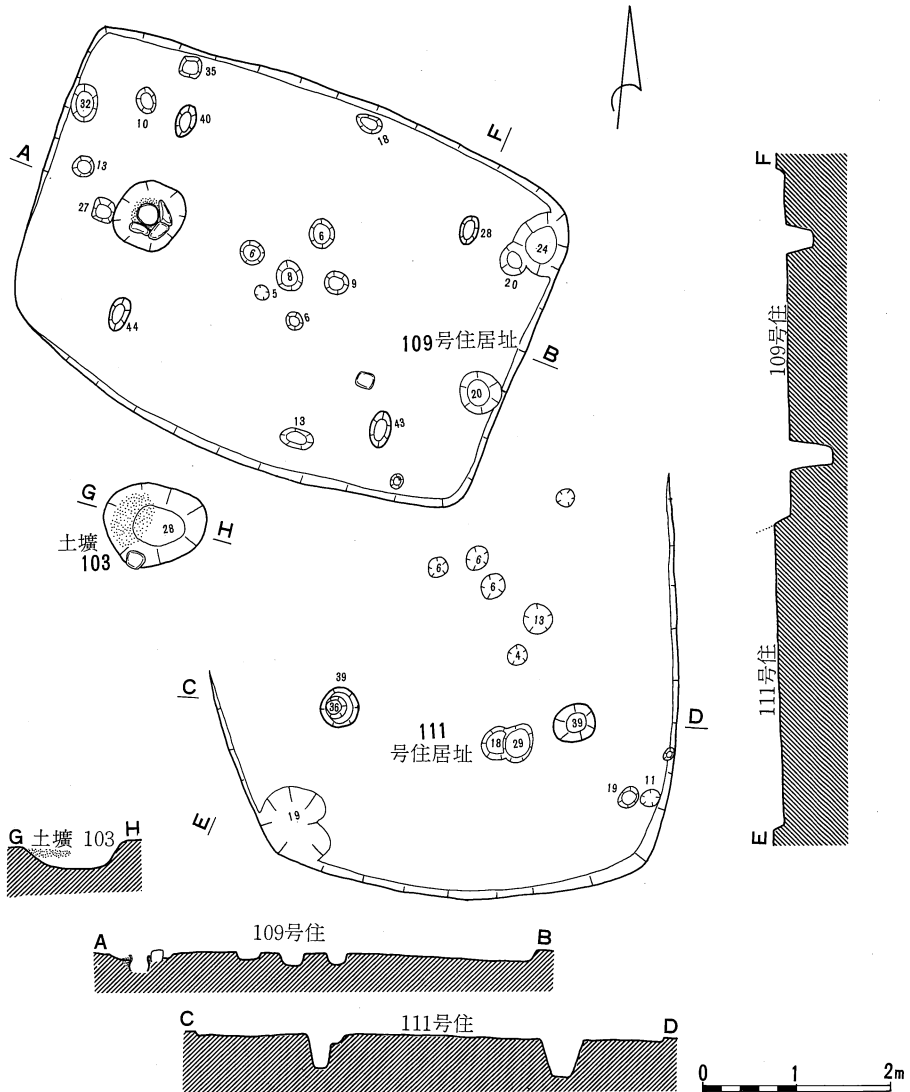
μ) 109号住居址 (図196・197の692~699・157の112、図版21の95・51の270)

遺構 丘陵ほゞ中央辺に、111号住居址を切って検出された。東西に長い不整長方形プランで、5.54×4.08m

第 195 図 樋口内城館址遺跡 108・118号住居址, 土壙78・102実測図(1:80)

の規模をもち、主軸方向をN-74°-Wにとる。床面および壁は良好で、壁高は約10cmを計る。主柱穴は楕円形を呈し4箇所確認され、西側主柱穴間中央には、三石を用いた石囲埋甕炉が検出された。

遺物 出土量は少なく、土器は甕形・壺形土器の出土をみた。692は石囲埋甕炉の炉甕で無文である。695・696は壺形土器片で、円弧文・縄文を有し、中期的様相をもっている。弥生中期末から後期初めに比定される住居址であろう。石器は黒燧石の剥片石器が1点覆土から出土している。 (山岡)

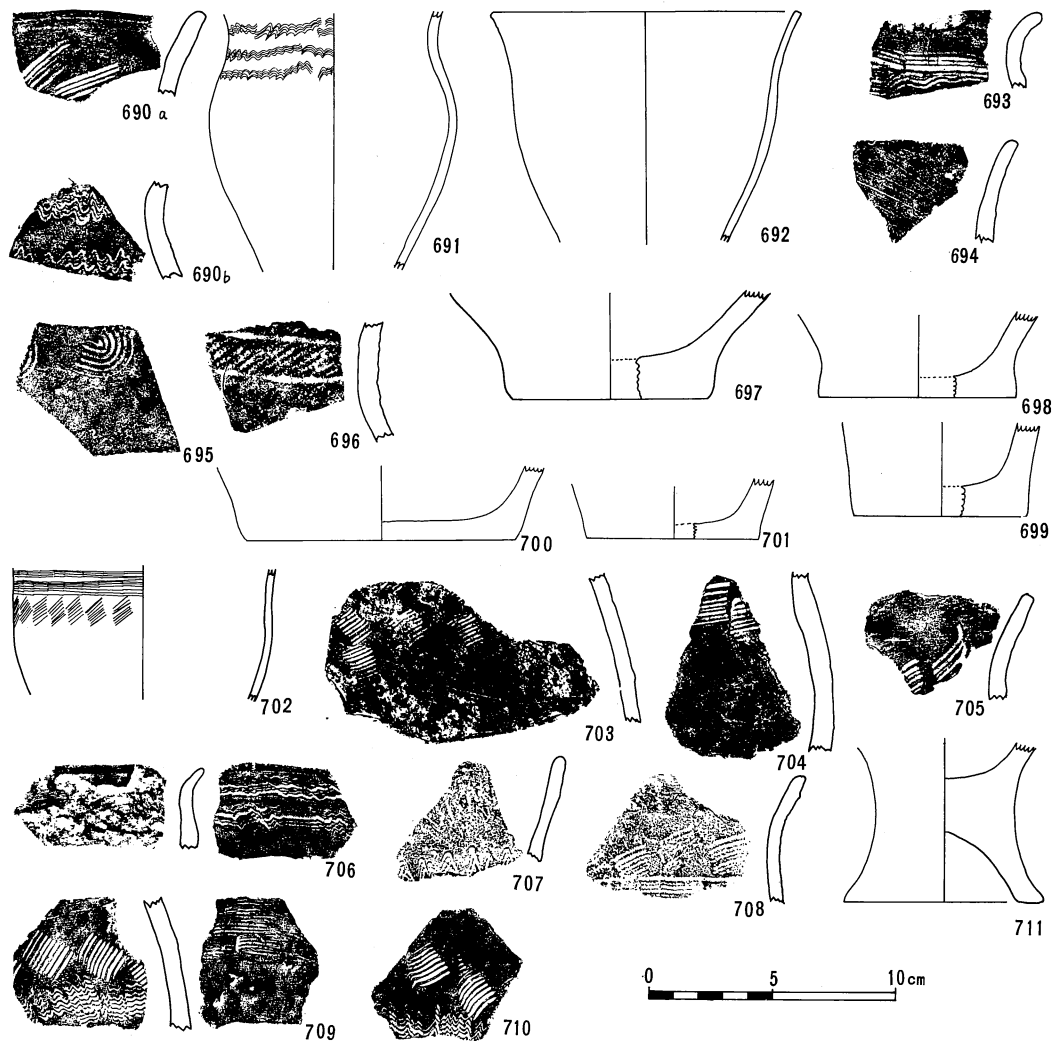


第 196図 樋口内城館址遺跡 109・111号住居址，土壙 103実測図（1：80）

メ) 111号住居住居址 (図196・197の700~701・157の113、図版21の96)

遺構 丘陵中央部に109号住居址に切られて検出された本址は、北半分はすでに削り取られたり、109号住居址に切られたりで確認できなかった。南北に長い長方形プランを呈すると思われ、東西は、5.05mを計ることができる。支柱穴は4本のうち2本は、109号住居址床面上に確認している。壁は南壁で10cmを計るが、北へいくにつれて低くなり、認められなくなる。炉址は北側支柱穴間にあったものと思われ、109号住居址構築で消失している。

遺物 出土量は極めて少なく、底部片のみである。石器は覆土中から磨製石鏃が一点出土している。弥生後期の住居址であろう。 (山 岡)



第 197図 樋口内城館址遺跡 108・118・109・111・112号住居址出土土器 (691・692・702 1:6, 他 1:3) (690 108号住, 691 118号住, 692~699 109号住, 700~701 111号住, 702~711 112号住)

モ) 112号住居址 (図191・197の702~711・157の114)

遺構 丘陵中央部に検出されたが、西半は用地内との境になるため調査不能であり、東半分の確認に終わった。長方形プランを呈するものと思われ、南北で5.52mを計る。壁高は東30cm、南12cmであり、床面は堅くて良好である。炉は東側支柱穴間中央に位置する埋甕炉である。支柱穴は4本であろう。

遺物 土器は甕形土器が多い。702は炉甕として使用されたものであり、櫛状工具による簾状文とその下に斜走短線文が施されている。口縁部と底部を欠損している。706・709は器内面に波状文あるいは横走の平行条線が施してある。弥生中期末から後期初頭に位置づけられよう。石器は覆土中から打製石鏃が1点出土した。 (山 岡)

ヤ) 113号住居址 (図191・199の712~725・157の115、図版41の202)

遺構 112号住居址の北に検出された住居址であるが、用地境であるため完掘はできず、南東部の確認で終わってしまった。支柱穴は楕円形を呈するもので2個所認められている。長方形プランの住居址であろう。覆土には、焼土や炭の混入が認められた。

遺物 土器は覆土から甕形土器片が出土し、712は、口縁部と底部を欠くもので波状文をもつ。725は床面出土の高坏脚部片である。弥生後期に比定できる土器である。

石器は、157図115の珓入片刃石斧が出土している。下伊那郡にわずかに出土しているが、上伊那地方では出土例を知見しない。 (山 岡)

ユ) 116号住居址 (図198・199の726~737、図版22の100)

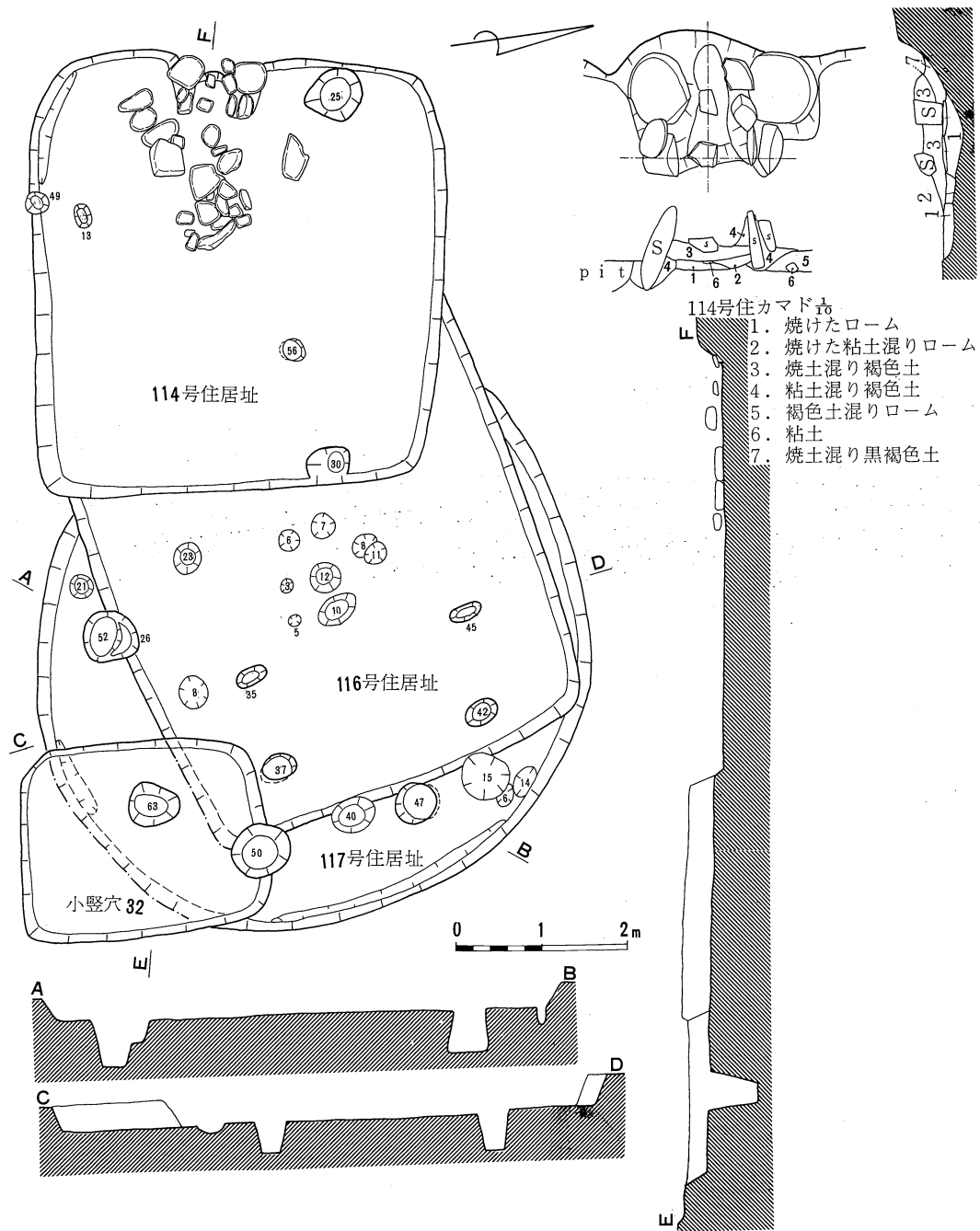
遺構 丘陵のほぼ中央に位置して営まれた本址は、117号住居址を切って構築されている。西部は、114号住居址に切られ、南東隅には小竪穴32が掘り込まれて検出された。南北で4.5mを計る長方形プランと思われ、支柱穴は東側2本を知り得た。しかしこれと並ぶ2本が壁近くにあることから、拡張も予想されるが、確認はできなかった。床は軟弱であり、117号住居址とほぼ同一レベルである。

遺物 726は壺の頸部片であり、斜走短線文が施されている。727~728の口縁部に波状文、731には斜走短線文が付されている。732には条痕文がみられ、古い様相を示すが、波状文を主体とする弥生後期に本址は位置づけられよう。 (福 沢)

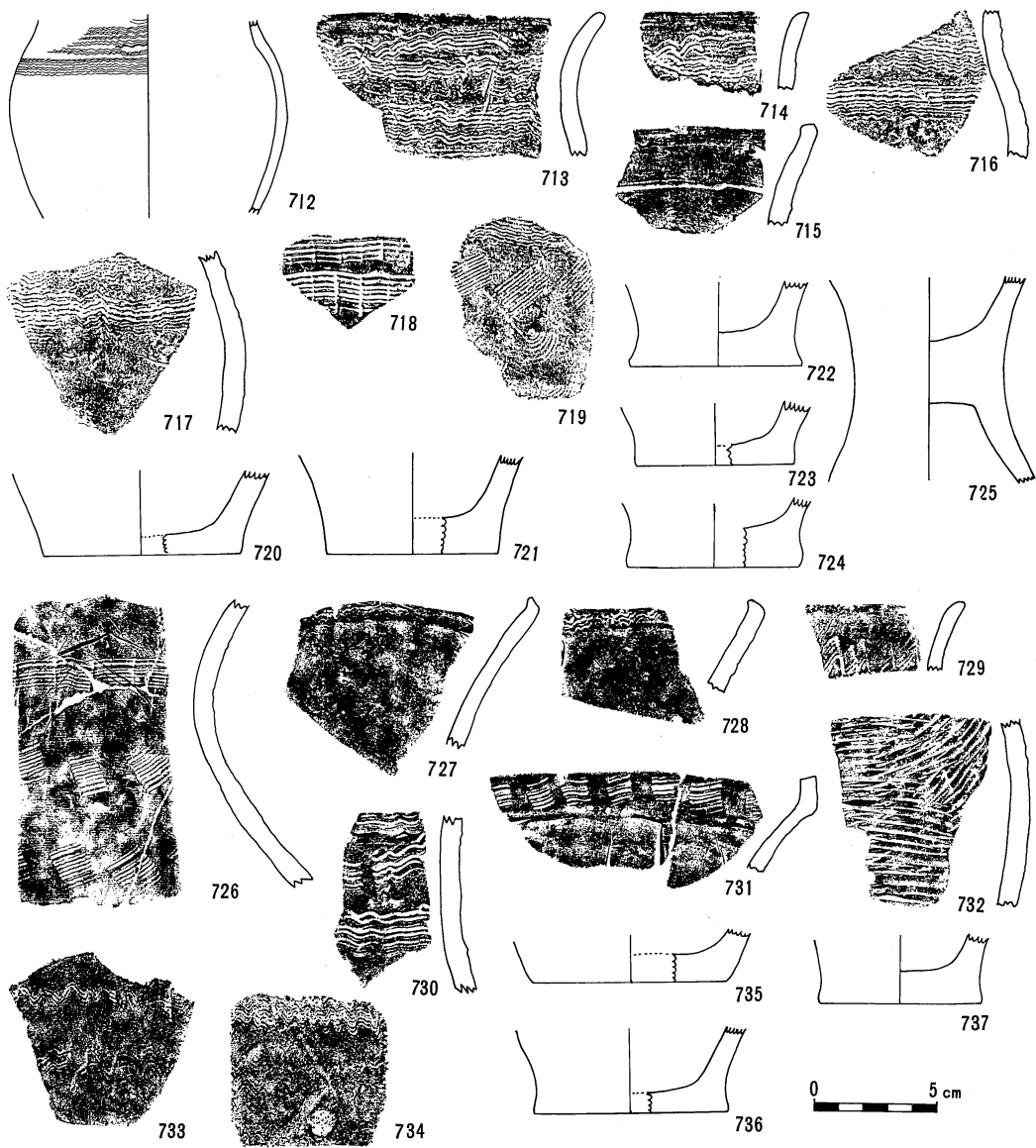
ヨ) 124号住居址 (図98・201の738~752・157の116~117、図版23の103)

遺構 丘陵南端部に位置し、123・122号住居址を切って構築されている。また、中世小竪穴33・37に切られ、床面と南壁の一部を失っている。7.20×5.65mの規模をもつ、胴の張った長方形プランで、床面は固くたたいであるが、小ピットがあって凹凸感を受ける。支柱穴は、楕円形状のもの3個所を認めたと、西北隅の並び方が、他の住居址の例と異なった配置になっている。炉址と支柱穴1は小竪穴33に破壊されてしまったものと思われる。

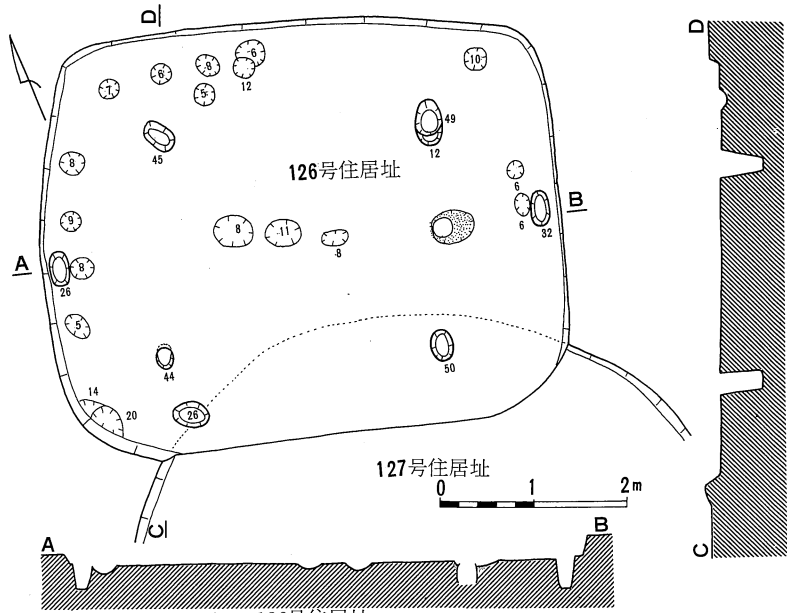
遺物 弥生後期に比定される土器片で、738は壺形土器の底部と思われる。東壁内に接したピットから出土している。746は壺形土器片で、波状文下に斜走短線文をもつ。石器は床面から小形磨製石斧と石匙形を呈する有肩石斧が出土した。 (辰 野)



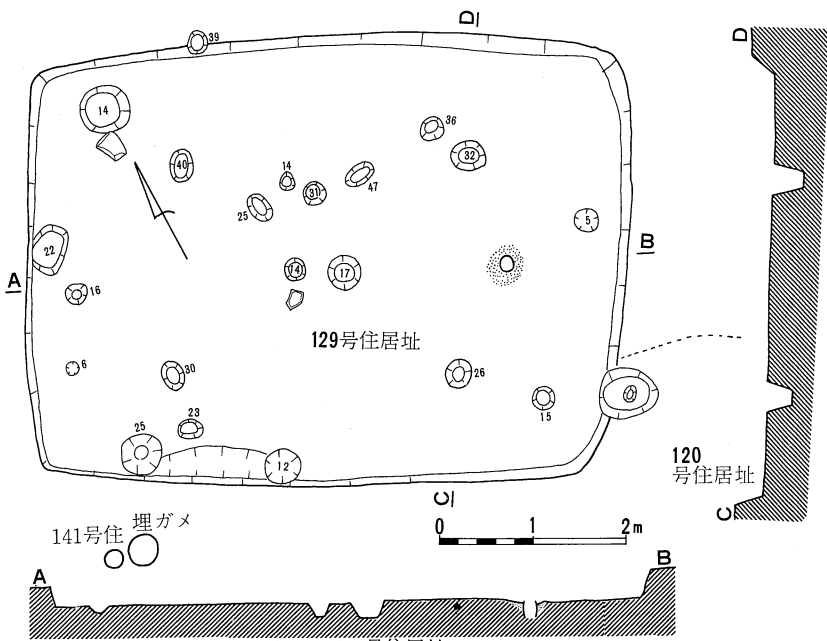
第 198 図 樋口内城館址 117・116・114号住居址, 小竪穴32 (1 : 80)
 および114号住居址カマド実測図 (1 : 40)



第 199 図 樋口内城館址遺跡 113・116号住居址出土土器 (712 1:6, 他 1:3)
 (712~725 113号住, 726~737 116号住)

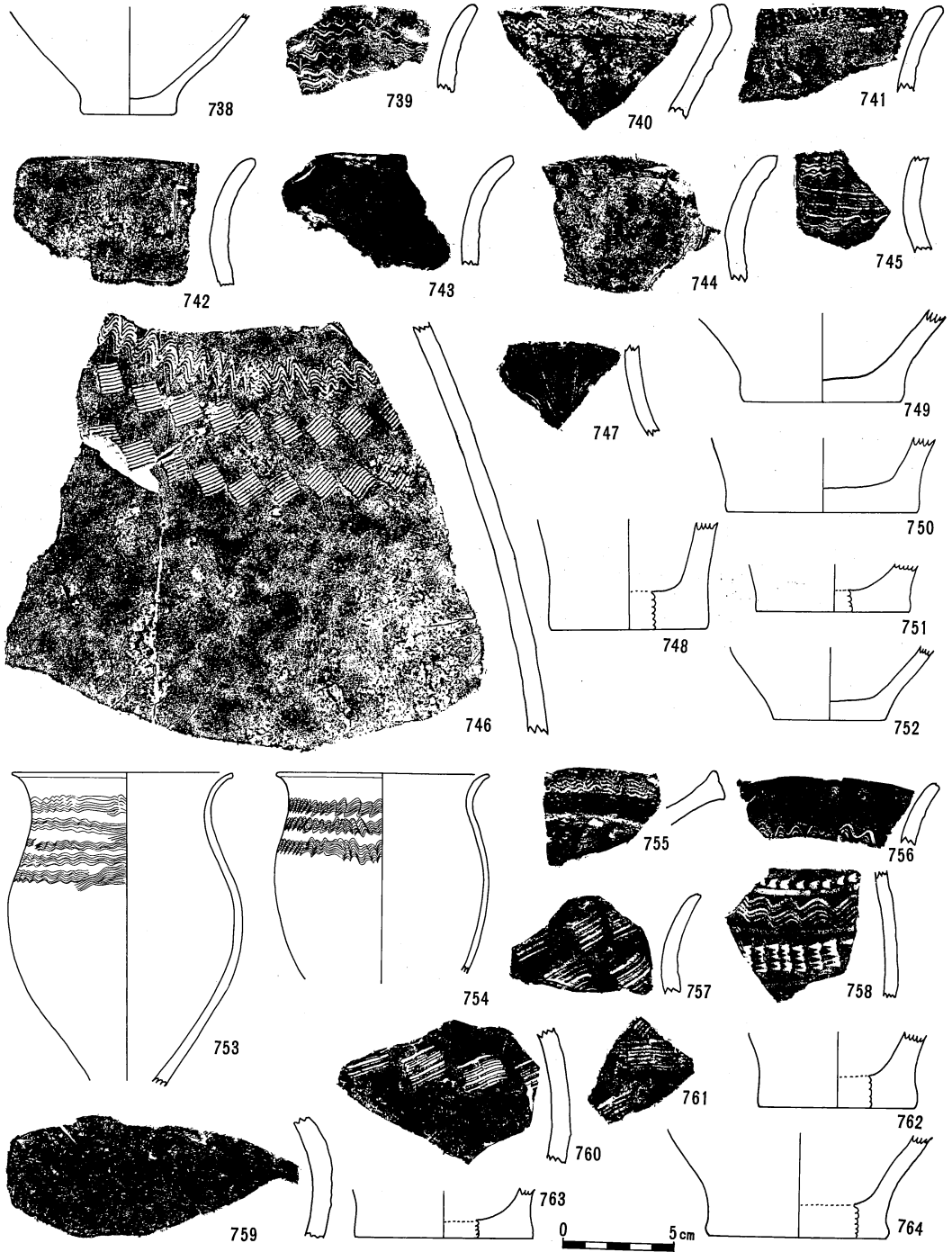


1. 126号住居址



2. 129・144号住居址

第 200 図 樋口内城館址 126・129・141号住居址実測図 (1:80)

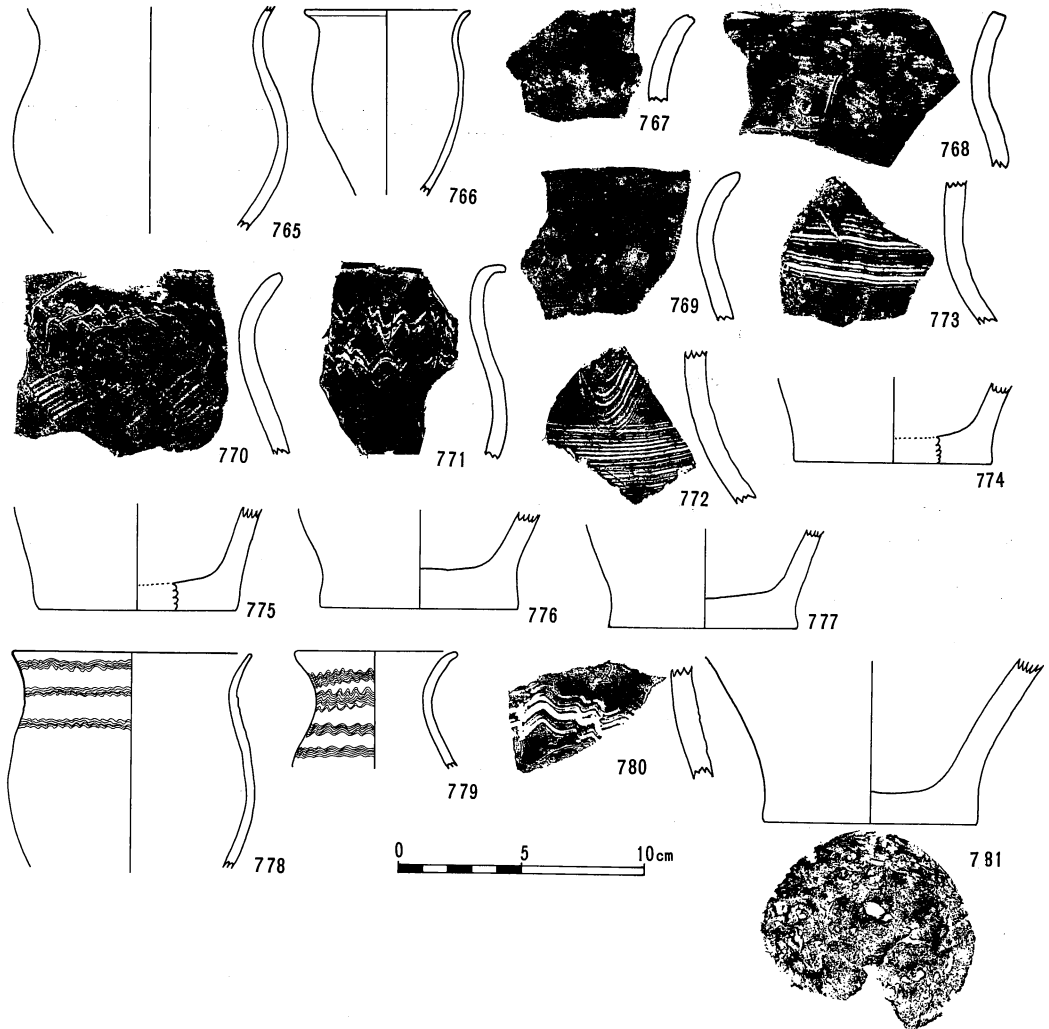


第 201 図 樋口内城館址遺跡 124・126号住居址 出土土器 (738・753・754 1 : 6 ,
 他 1 : 3) (738~ 752 124号住 , 753~ 764 126号住)

ラ) 126号住居址 (図200・201の753~764、図版22の102・53の280~281)

遺構 丘陵の中央東寄りに検出された遺構で、褐色土層よりローム層に掘り込んだ住居址である。127号住居址の北壁を削りとりて構築された本址は、5.58×4.47mの規模をもつ、長方形プランで、主軸方向をN-105°-Eに示す。壁は垂直に近く掘り込まれて東壁が高い。床面は平坦であり固くたたいて良好である。柱穴は楕円形状を呈するものが4個所のほかに、東・西壁中央に2穴あり、棟持柱と考えられる。壁沿いには、補助支柱穴と思われる浅いピットが確認されている。炉は東側主柱穴間中央に位置する埋甕炉である。内部より少量の炭化物と灰の検出があった。

遺物 波状文を有する弥生後期土器で、754は炉甕として使われたもの、753は床面出土のものである。



第 202図 樋口内城館址遺跡 129・130号住居址出土土器 (765・766・778・779
1:6, 他 1:3) (765~777 129号住, 778~781 130号住)

755は壺の口縁部片で、口唇に波状文をもつ。757などには斜走短線文が施され、758には古い様相の刺突文もみられる。(根津)

リ) 129号住居址(図200・202の765~777、図版23の107・53の282~283)

遺構 丘陵東部に検出された本址は、縄文期120号住居址を切って構築されている。6.43×4.79mの長方形プランで、主軸方向をN-115°-Eにとる。壁は垂直に近い状態に掘られ、25~33cmの高さを残す。床面は堅くしまっており、支柱穴4個所のほか、ピットが十数個掘られている。炉は東側支柱穴間中央に埋甕炉が作られている。

遺物 土器は、波状文・斜走短線文をもつ弥生後期土器で、772・773は壺形土器片である。765・766は無文の甕形土器で、縦方向に筥調整痕がみられる。765は炉甕である。(小松原)

ル) 130号住居址(図108・202の778~781、図版53の278~279)

遺構 丘陵北東部に位置し、131号住居址の南西部を切って構築されている。南半は、128号住居址と接しており、確認でき得なかった。東壁は土壌101に切られている。本址は、東西4.87mを計る、隅丸長方形プランを呈するもので、床面は平坦・堅緻である。支柱穴は北側2個所が検出されたが、4本柱であったものと推定できる。炉は101号住居址のそれと同様、三方を石で囲んだものであったらしく、東に石を抜いた痕跡が残っている。石囲埋甕炉で、底部を欠いた甕が口縁を上にして埋設され、焼土が充満していた。

遺物 土器は弥生後期の波状文をもつものである。778は3条の波状文が施されているもので炉甕である。779は覆土中からの出土である。(山田)

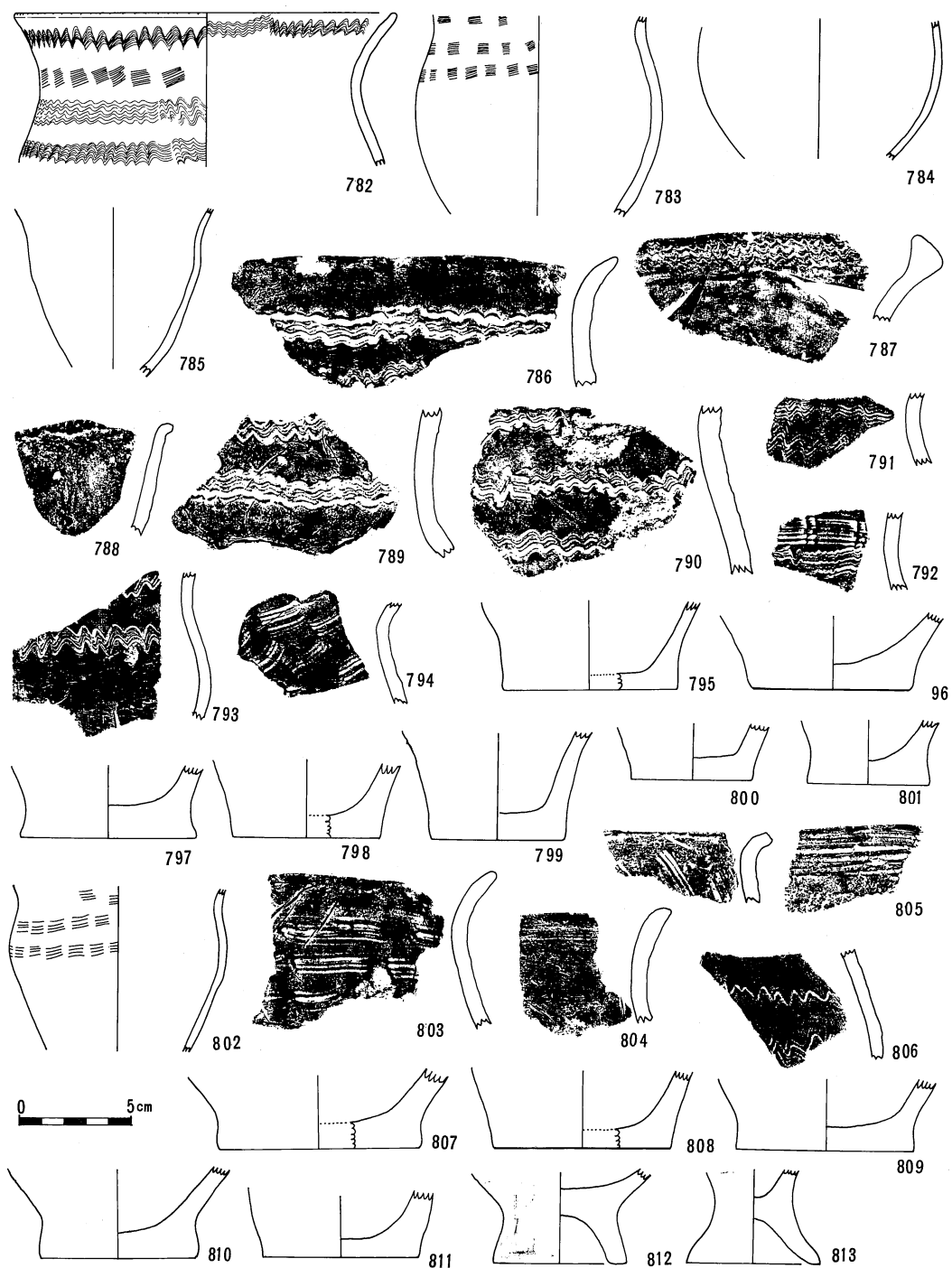
レ) 132号住居址(図110・203の782~801、図版24の113~114・54の284~286)

遺構 丘陵北東端に縄文期133号住居址を切って検出された。5.83×5.17mを計る東西に長い長方形プランを呈し、炉址は3個所に確認された。主軸は最も新しい時期に使用されたと思われる西の炉に合わせるとN-76°-Wとなる。1度建替え、1度拡張しているもようで、東と中央の炉は建替え時に使用され、西炉が拡張後使用されたと考えられる。3つとも支柱穴間中央に位置する埋甕炉で、東のには枕石、西のには二重の炉甕が使われている。支柱穴は7本確認され、拡張後も、南東の柱穴は再使用されたと思われる。床面は良好であった。

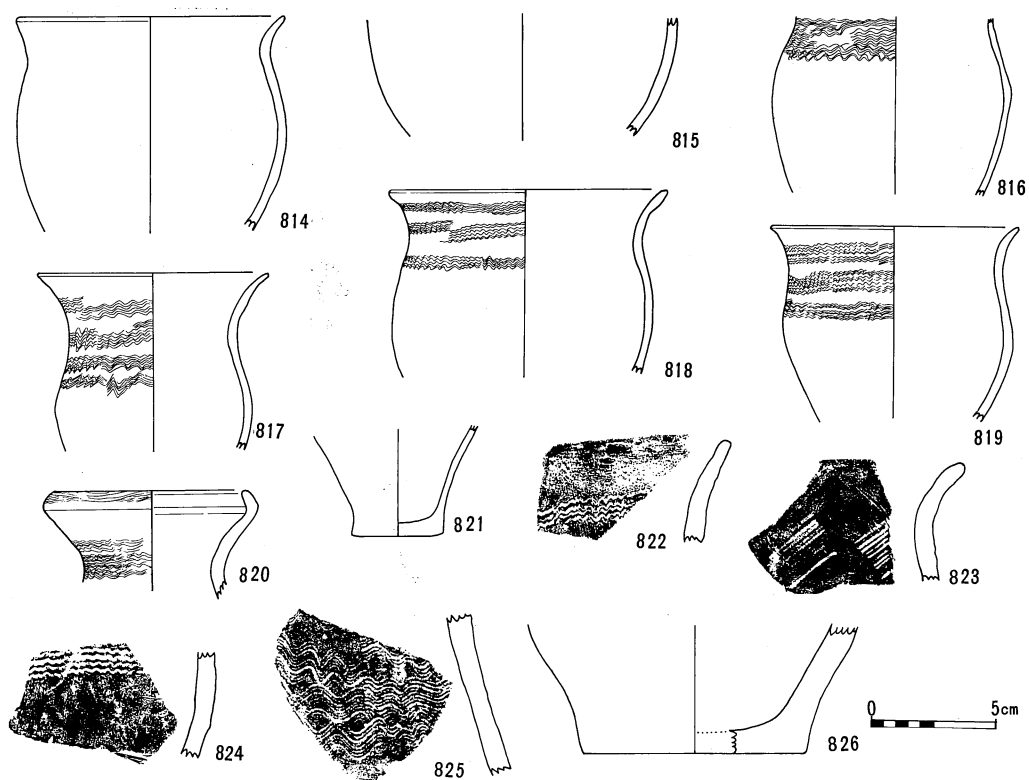
遺物 甕形土器の半完形品が4個体あり、いずれも炉甕として用いられたものである。782は、西側の炉の外側に使われたもので、口唇に刻目をもち、外面頸部に櫛状工具による波状文と斜走短線文、内面に一条の波状文が施されている。783は西側炉の内側にあったもので、口縁部と底部を欠き、三重の斜走短線文が描かれている。784は、中央の炉に用いられた胴部、785は、東の炉に使用されたもので口縁部と底部を欠損する無文の甕である。弥生後期に比定され、一型式内の建て替え、拡張と思われる。(山岡)

ロ) 137号住居址(図115・203の802~813、図版54の287)

遺構 丘陵北端部に営まれた住居址であるが、大部分が削り取られて、炉址と一部貼床を確認したのみで、プラン・規模等全く不明である。炉は方形石囲埋甕炉で、101号住居址のそれと同じく3個の石で、



第 203图 樋口内城館址遺跡 132・137号住居址出土土器 (782~785・802 1:6, 他 1:3) (782~801 132号住, 802~813 137号住)



第 204 図 樋口内城館址遺跡 139号住居址出土土器（814～821 1：6，他 1：3）

甕をとりまいて構築されている。

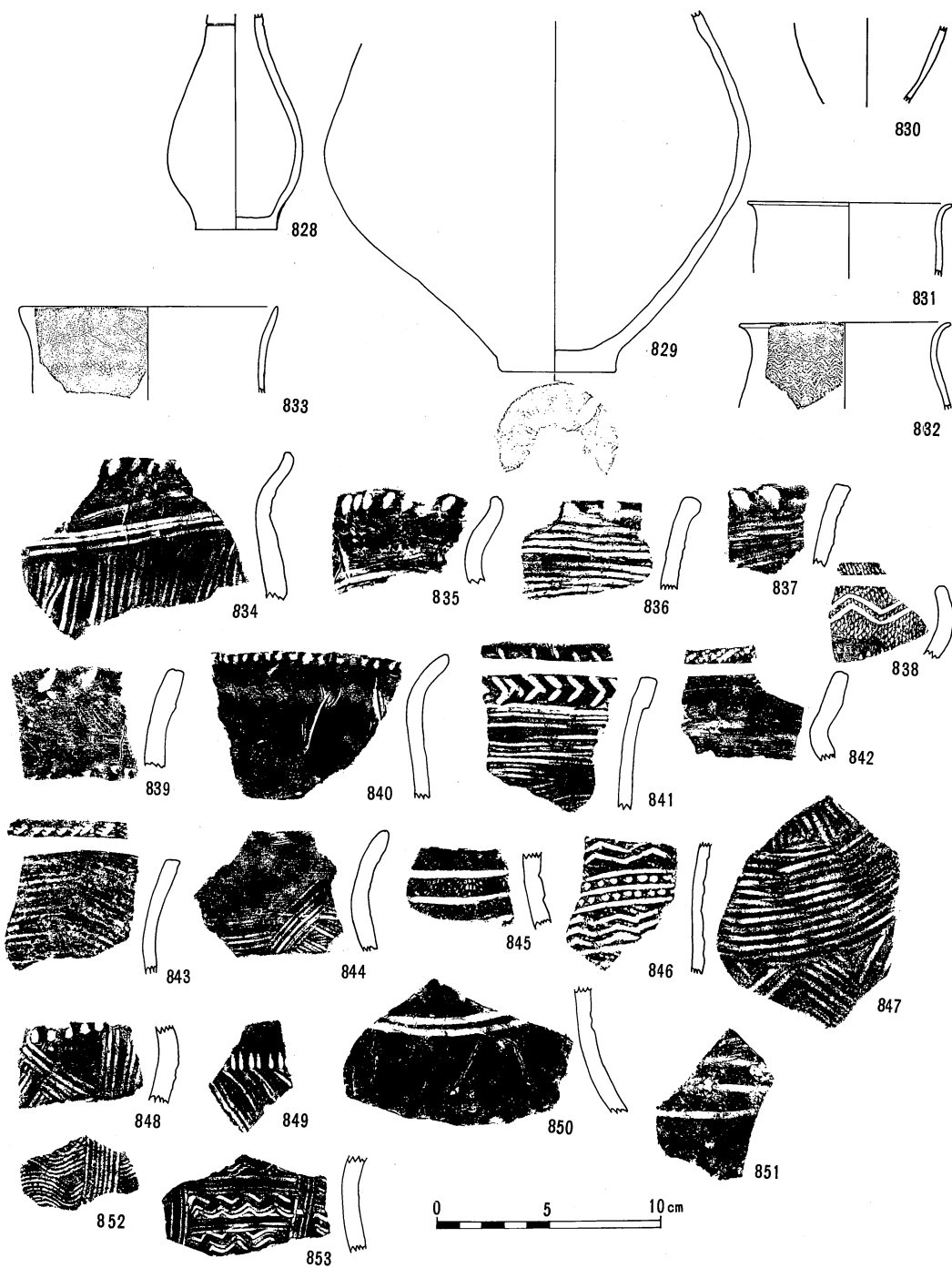
遺物 弥生後期の土器で、802は炉甕である。口縁部と底部を欠損するが最大径は口縁部に求められる。頸部から胴上半に斜走短線文が荒く施されている。（八木）

ワ) 139号住居址（図115・204、図版25の119・54の288～290・55の293）

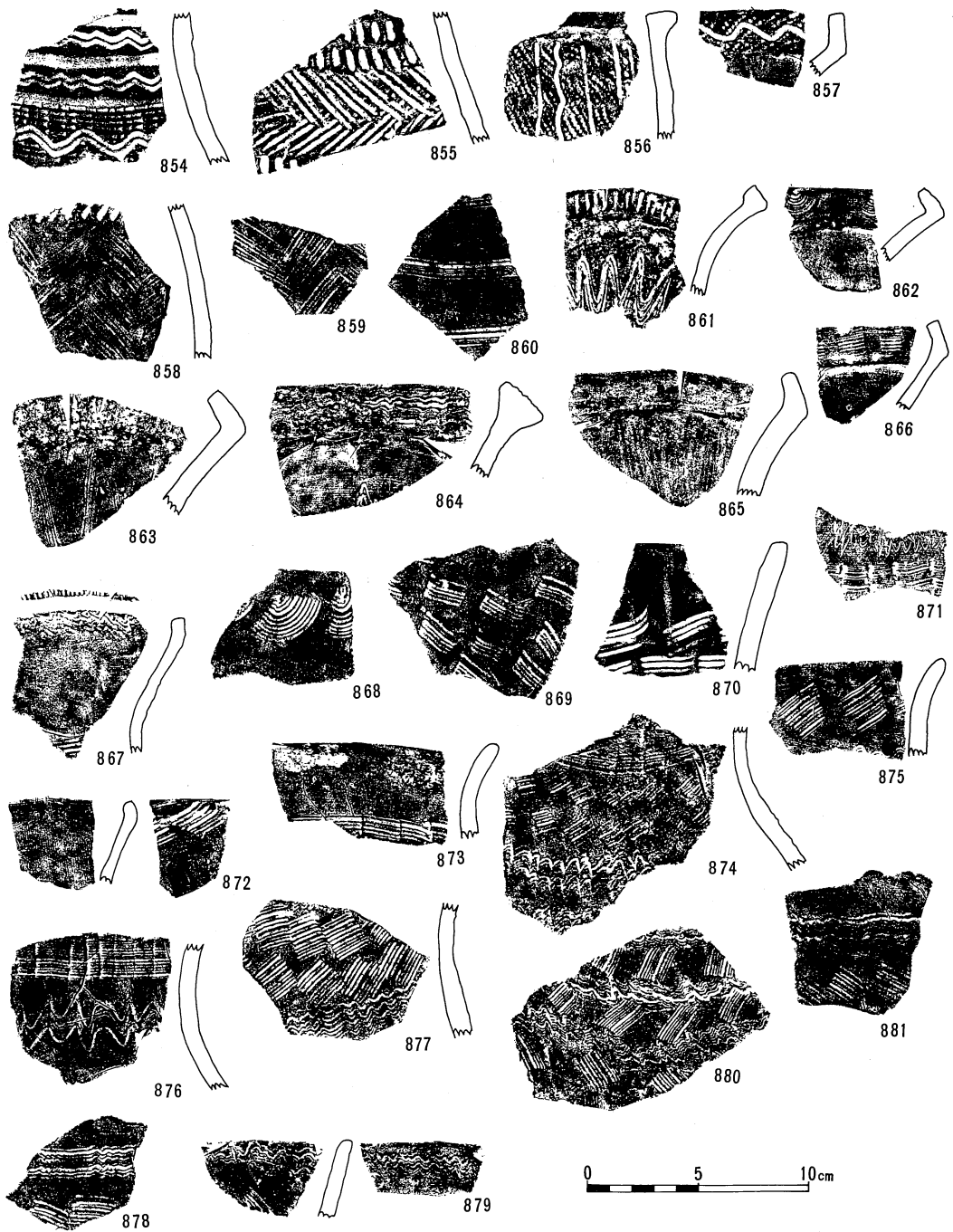
遺構 丘陵最北端中央に位置し、138号住居址の東部を切って構築されている。5.34×7.18mの規模をもつ胴張りの長方形プランで、ローム土を20cm掘り込んだ垂直な壁をもつ。床面は平坦でよく固められており良好である。また壁沿いと中央辺には、深さ10cm前後の小ピットが30個ほどある。補助柱穴ないし間仕切りに使われたものであろう。138号住居址の炉址部分には貼床を施して、本址レベルと同じであり、南西柱穴には平板石がかぶさっていた。

炉址は、東と西の主柱穴間に2箇所あり、いずれも埋甕炉である。主軸方向はN-66°-WもしくはN-114°-Eである。

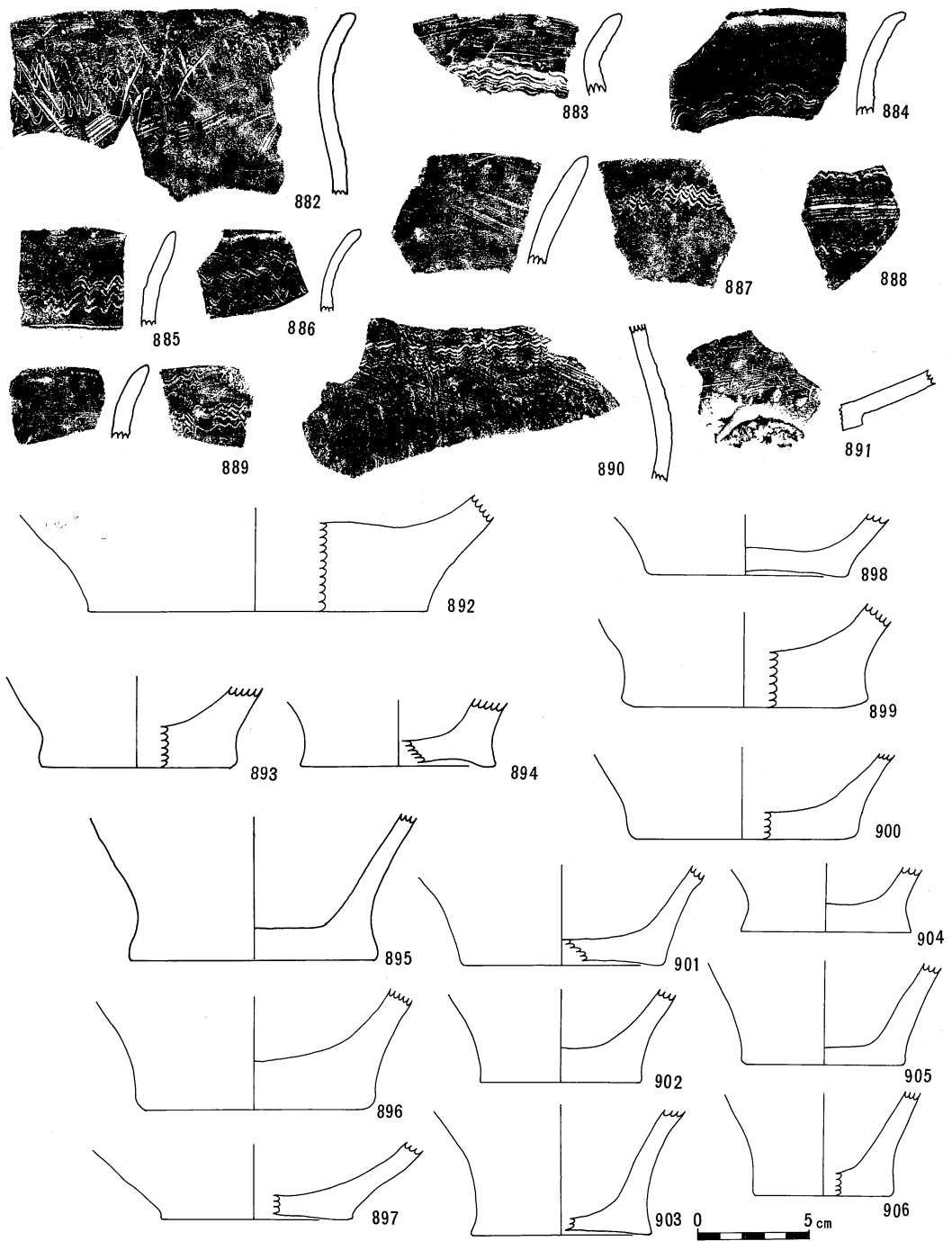
遺物 出土土器は波状文をもつ弥生後期のものである。814・815は、東側炉に二重に使われていたもの



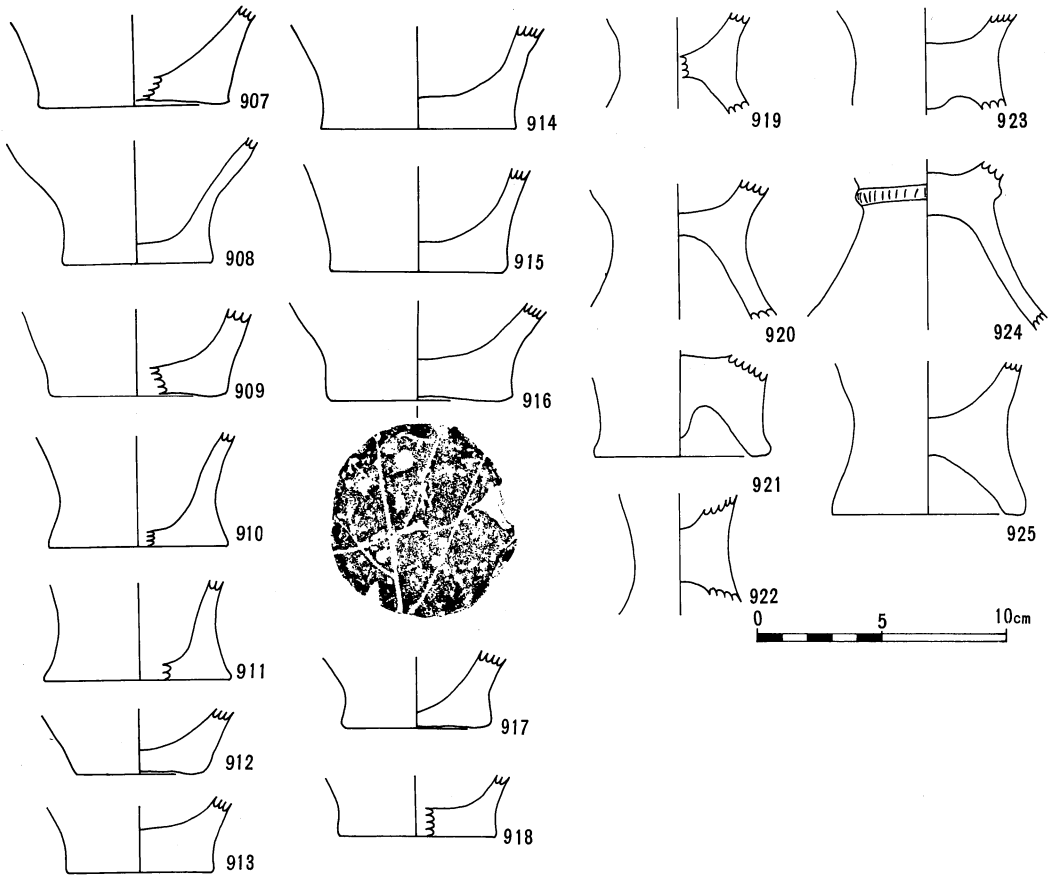
第 205図 樋口内城館址遺跡その他出土弥生式土器（その1）（828～833 1：6
，他 1：3）



第 206図 樋口内城館址遺跡その他出土の弥生式土器（その2）（1：3）



第 207 図 樋口内城館址遺跡その他出土の弥生式 土器 (その 3) (1 : 3)



第 208図 樋口内城館址遺跡その他出土の弥生式土器（その4）（1：3）

で無文、816は西側炉に使われたもので波状文をもつ。石器の出土はない。

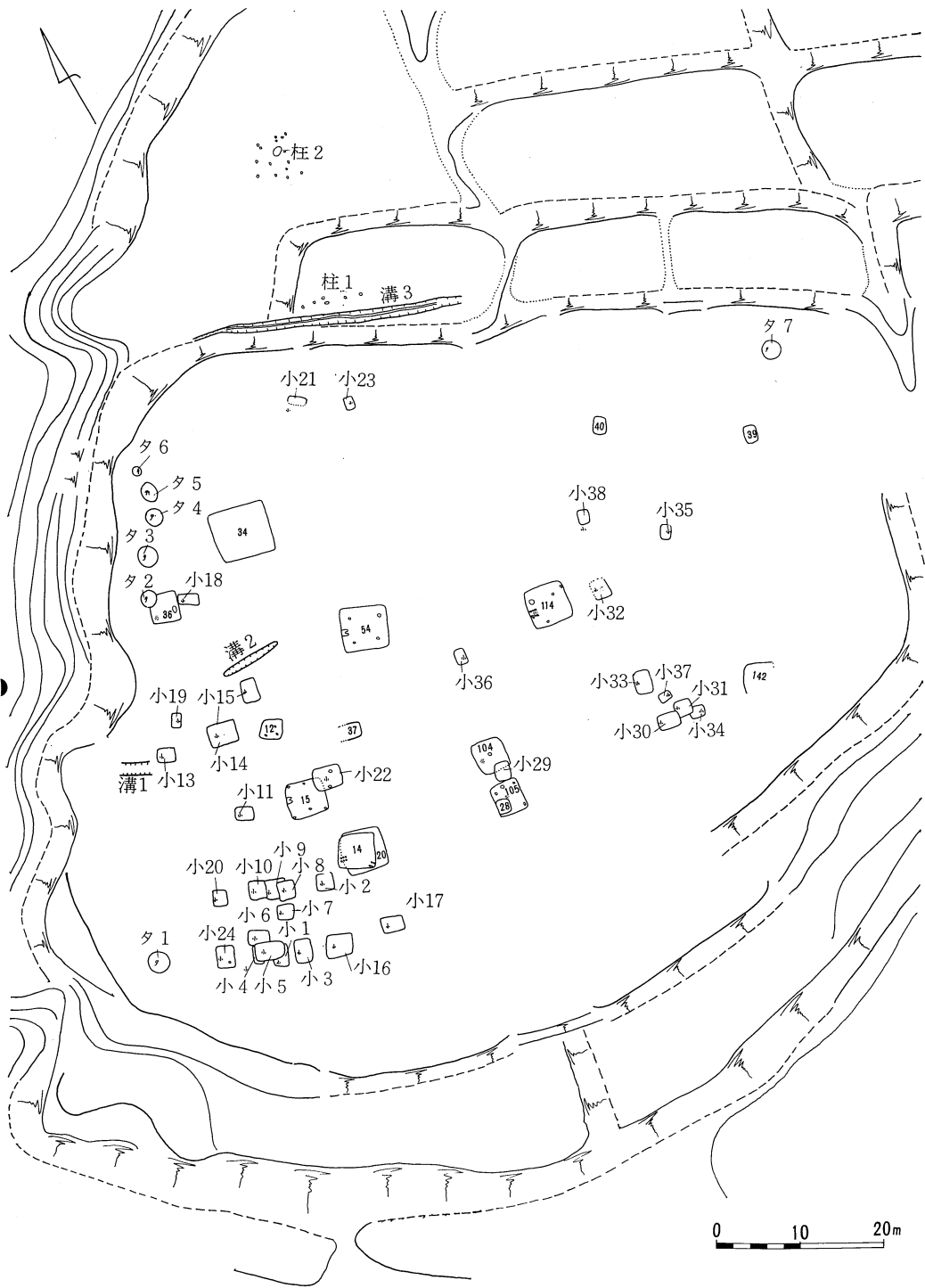
（一 条）

ヲ）その他の出土遺物（図205～208・157の118～124、図版55の291・292・294・295）

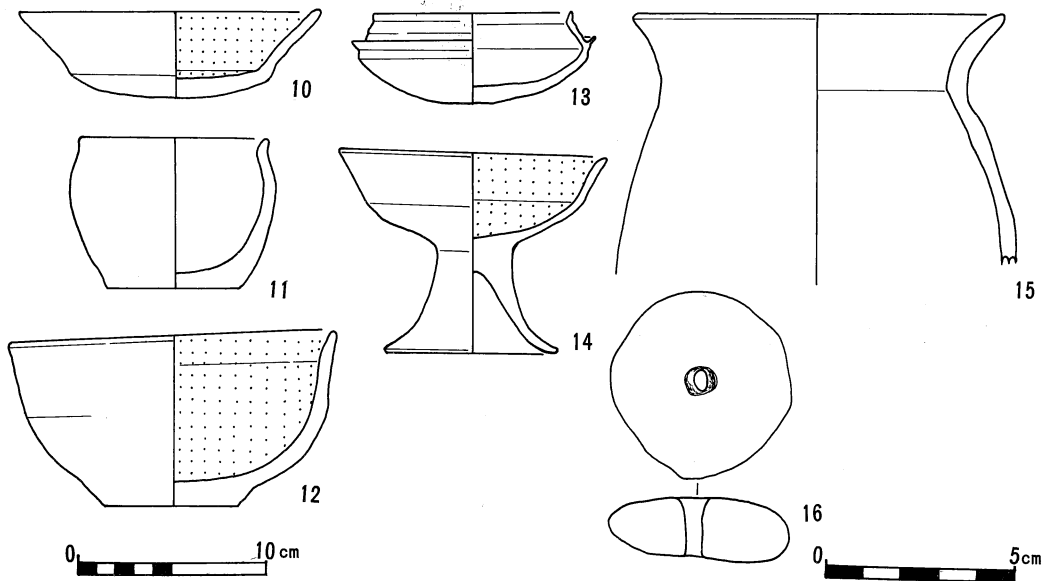
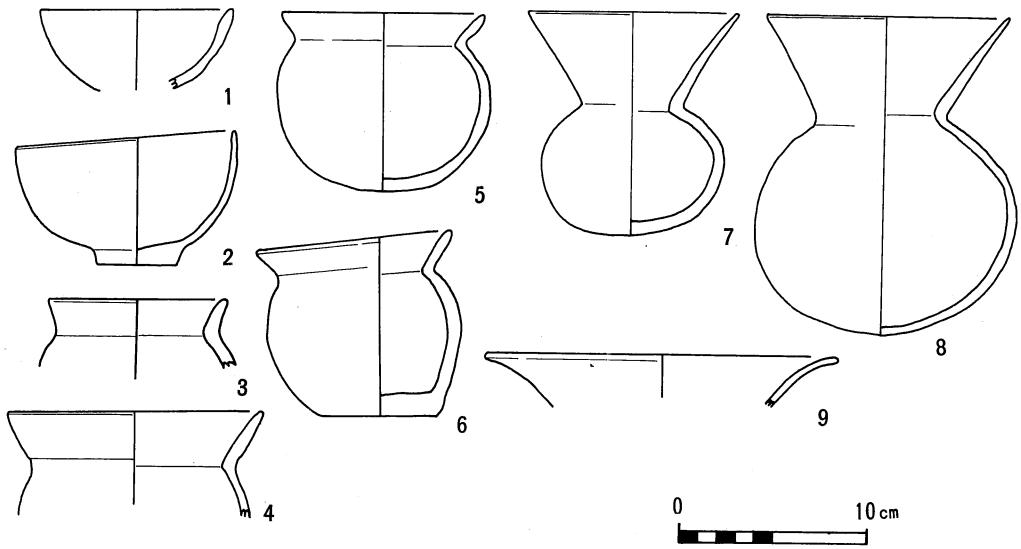
その他遺構外から土器と石器の出土をみた。土器は大部分が破片であり、時期的には、弥生中期～後期で、住居址出土の土器と同時期である。828は単独出土の壺形土器で、口縁部を欠くが、岡谷市海戸遺跡出土のものと同様である。器内には丹がつかっており注目される。834～860は、弥生中期の様相を多分にもつ文様構成で、口唇に太いヘラ先による刺圧文や刻目が施されるもの、縄文をもつもの、口縁部から胴部に平行沈線文や綾杉状文・波状文をもつものなどである。861～891は、櫛状工具による波状文・斜走短線文が施された弥生後期前半に位置されるものである。土器底部片は大部分が甕形土器であり、中に壺形土器のそれも混じっている。高環形土器脚部の920・924には丹塗りが施されている。

石器は、磨製石鏃と扁平片刃石斧および単孔の垂れ飾玉が出土している。石鏃は118・119・121でみるように基部に穿孔があり、型態的にも、三角形のもの、五角形に近いもの、細長いものと三別できよう。

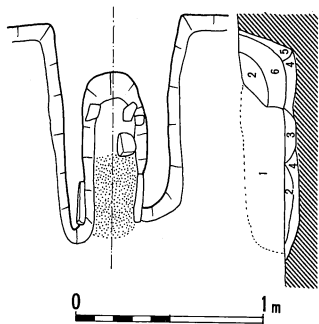
（市 沢）



第 209 図 樋口内城館址遺跡，古墳時代～中世遺構全体図（1：800）



第 210 図 樋口内城館址遺跡34~54号住居址出土土器 (16 1 : 2, 他 1 : 4)
 (1~9 34住, 10~16 54住)



第 211 図 樋口内城館址遺跡54号住居
址カマド実測図 (1:40)

- | | |
|--------------|-------------|
| 1. 焼土まじり茶褐色土 | 4. 黒色土混りローム |
| 2. 焼土 | 5. 粘土 |
| 3. 黒色土 | 6. 焼土混り黒色土 |

みられない。炉・カマドはいずれも検出できず、焼土もない。床面上には黒色土の間層をおいて、墨色土がレンズ状に堆積していた。

遺物 遺物は柱穴附近床面上に、甕形・埴形土器が出土している。土師器のみで、本遺跡中の土師器を出土する住居址では、最も古い様相をもっている。1・2は椀形土器、4・6は甕形土器、5～8は埴形土器、9は壺形土器口縁部である。

(八木)

イ) 54号住居址 (図176・211・210の10～16、図版16の65～67・57の302～305)

遺構 丘陵中央部に検出された住居址で、弥生期の53・55号住居址を切って構築されている。方形プランで5.6×5.5mの規模をもち、主軸方向をN-70°-Wにとる。壁は垂直に近い掘り込みであるがやや軟弱であり、40cmの高さを残す。床面は、カマド周辺は良好で堅いが、他は軟弱であった。主柱穴は4隅に4個所あるが、北西隅の1穴は、他に比して大きい点が注目される。カマドは、西壁中央に構築されており両側壁の焚口部に石を使った粘土カマドである。規模は長さ120cm、巾70cmのものであり、カマド内には土器がつぶれ込んでいた。よく焼け赤褐色焼土が5cm堆積していた。

遺物 出土遺物の大半は、カマドからの出土である。10は内黒の土師器杯でよく研磨されている。11は小形甕、12はよく研磨された内黒の鉢、14は高杯で同様よく研磨されている。13は須恵器杯である。15は土師器の甕で、胴下半を欠く。16は床面出土の土製紡錘車である。

(市沢)

ウ. 古墳時代の遺構と遺物

ア) 34号住居址 (図181・210の1～9、図版14の53・56の296～301)

遺構 丘陵の北西隅に近い位置に営なまれた本址は、住居址の密集地点で、弥生期の46・60・68号住居址を切り、61号住居址上に貼床をして構築されている。

6.95×6.30mの規模をもつ方形プランであるが、北壁のあたりは、明確に検出できなかった。東・南壁下に周溝をめぐらしてある。床面は西壁沿いはローム面であるが、61号住居址上は貼床で、ローム粒混り黒色土で、軟弱である。主柱穴は4本で、径も大きく深い。柱穴底面は非常に堅くなっていた。他にピットが検出されたが、配列に規則性は

なっていない。

他にピットが検出されたが、配列に規則性は

なっていない。

(八木)

イ) 54号住居址 (図176・211・210の10～16、図版16の65～67・57の302～305)

遺構 丘陵中央部に検出された住居址で、弥生期の53・55号住居址を切って構築されている。方形プランで5.6×5.5mの規模をもち、主軸方向をN-70°-Wにとる。壁は垂直に近い掘り込みであるがやや軟弱であり、40cmの高さを残す。床面は、カマド周辺は良好で堅いが、他は軟弱であった。主柱穴は4隅に4個所あるが、北西隅の1穴は、他に比して大きい点が注目される。カマドは、西壁中央に構築されており両側壁の焚口部に石を使った粘土カマドである。規模は長さ120cm、巾70cmのものであり、カマド内には土器がつぶれ込んでいた。よく焼け赤褐色焼土が5cm堆積していた。

遺物 出土遺物の大半は、カマドからの出土である。10は内黒の土師器杯でよく研磨されている。11は小形甕、12はよく研磨された内黒の鉢、14は高杯で同様よく研磨されている。13は須恵器杯である。15は土師器の甕で、胴下半を欠く。16は床面出土の土製紡錘車である。

(市沢)

エ. 平安時代の遺構と遺物

ア) 14号住居址 (図161・212の1～16、図版12の44～45)

遺構 丘陵南端寄りに位置する本址は、20号住居址の中にすっぽり掘り込まれて構築されていたため、プラン確認に困難を極めた。西壁を除く三つの壁は認めることが出来なかったが、本址が火災にあっていため、木炭や焼土の分布範囲と周溝をもとにプランを判断した。主軸方向をN-121°-Eに示し、カマドを伴う、隅が突出する方形プランで、規模は主軸方向に4.80m、それに直交して、西側3.50m、東側で4.35mを計る。西側の壁はほぼ垂直に掘られて27cmの高さを有する。覆土の下層から床面にかけては、多量の炭化材と焼土が散在していた。炭化材は、ナラまたはクヌギの丸太と半割丸太が多く、その大きさは径4～10cm、長さ120cmほどのものまでである。炭化材附近の床と覆土は強く焼けている。床は貼床で固いが東側の一部には、貼りが面も認められた。カマドは南隅にあって、人頭大の石十数個を用いて構築し黒色土で固定してある。焚口付近には火床の上に多量の灰がたまっていた。カマドの両側には、壁に接して大きなピットが掘られており、中には焼土が混り込んでいる。また住居の東隅に深さ20cmの摺鉢状、北には、たらい状の落ち込みが、そして北西壁に接してもピットが掘られているが、柱穴がどれであるのか判断しがたい。部分的ではあるが浅い周溝が残されている。

遺物 床面には少なく、大半は覆土とカマドより出土した。1～5は土師器坏で、糸切底をもつ。2・4は内黒坏である。6～7は鈔付釜でカマドから出土した。12～14は須恵器坏で糸切底である。16は不明鉄器である。
(深 沢)

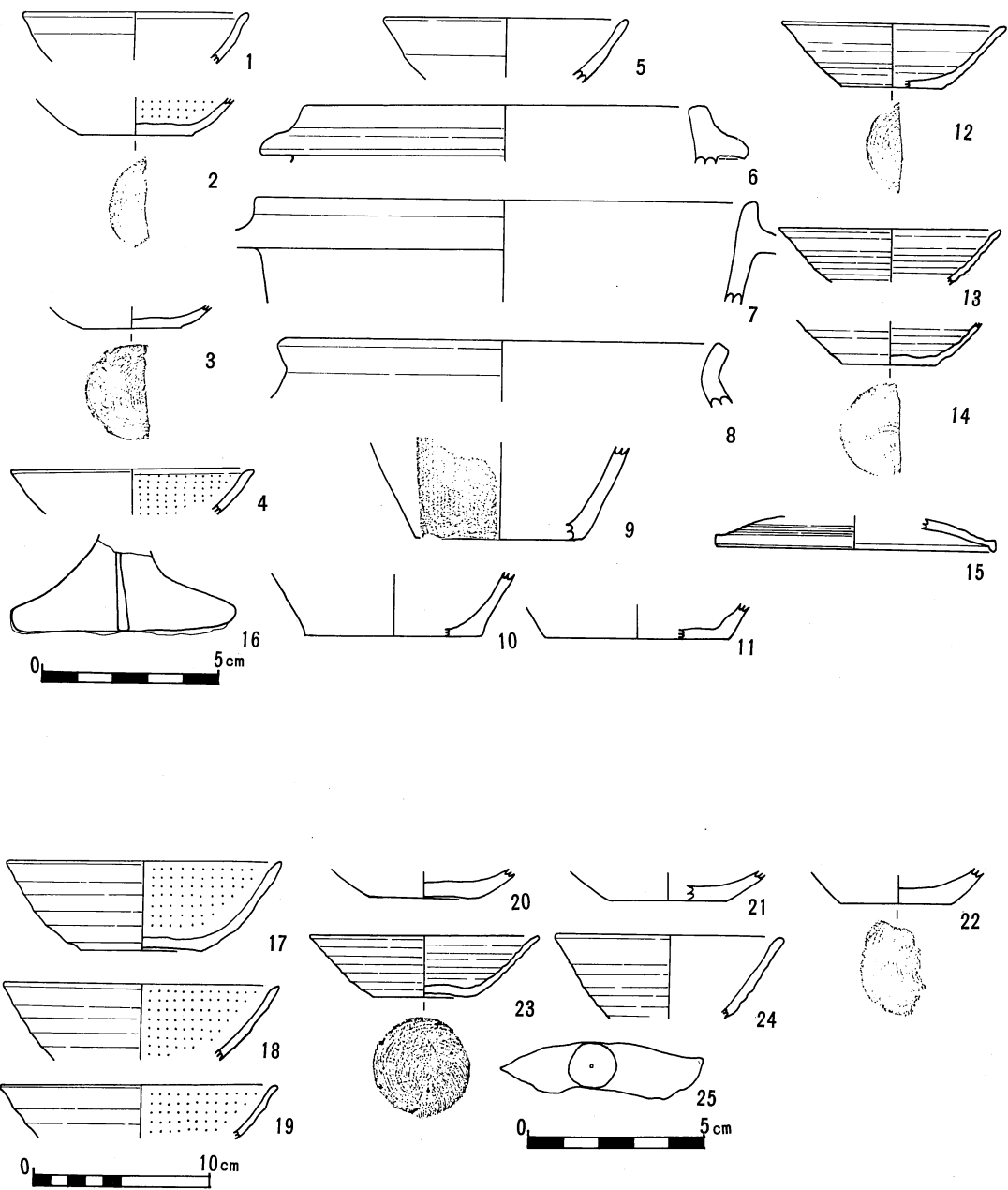
イ) 20号住居址 (図161・212の17～25、図版12の44)

遺構 26号住居址と5号住居址の一部を切って構築されている。また本址の中に14号住居址が掘り込まれているため、覆土はすでに殆んど除去されている。主軸方向をN-76°-Wに示す。5.25×5.26mの方形プランであるが、西壁の一部は失われている。壁は32～35cmの高さを計り、ほぼ垂直に掘られているが、表面は柔かい。床は14号住居址貼床の下にあり、平坦で堅いたたき状であるが、壁の近くには柔かく凹凸した部分もある。カマドは西壁中央にあったらしく、厚さ5～6cmで、50cmの範囲に広がる火床を確認した。火床の周辺には青灰色を帯びた粘土が残存し、両側にピットが掘られている。主柱穴と断定できる穴は西側に2箇所しか検出できなかった。南西側隅には摺鉢状の大きい穴があってローム混りの黒色土がたまっていた。また東壁に沿って内側に3個の小ピットが掘られている。周溝は北壁に沿う一部だけが残っている。

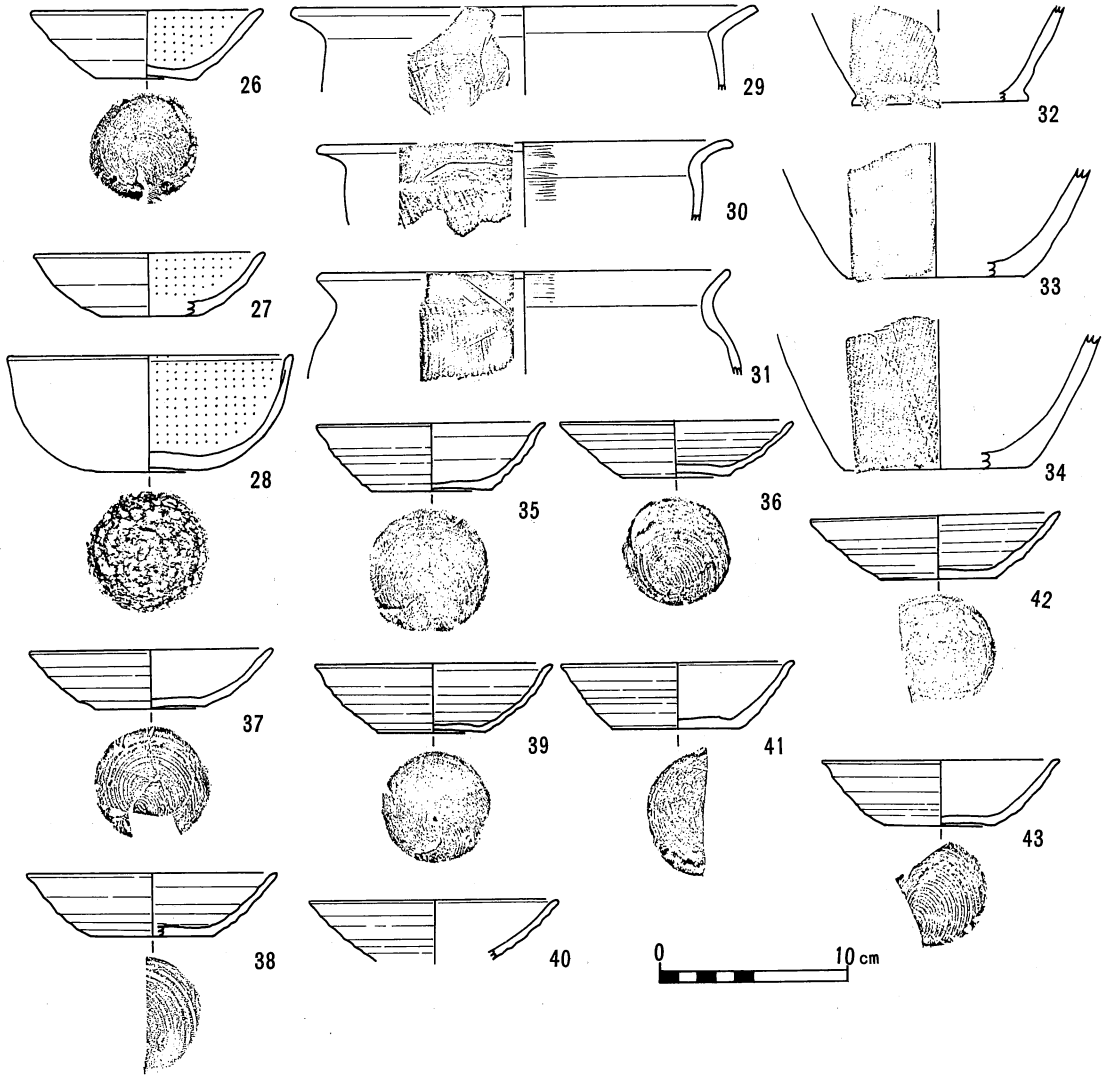
遺物 出土量は少ない。17～22は土師器坏であり、23～24は須恵器坏である。25は不明土製品である。
(深 沢)

ウ) 15号住居址 (図146・213、図版11の43)

遺構 弥生期の1号・5号住居址を切って構築された本址は、南東隅が張り出した方形プランで、4.45×4.42mの規模を有する住居址である。主軸方向はN-73°-Wである。弥生期5号住居址上に貼床し、北



第 212 図 樋口内城館址遺跡 14・20 号住居址出土土器・土製品・鉄製品 (16・25 1 : 2, 他 1 : 4)
 (1~16 14 住, 17~25 20 住)

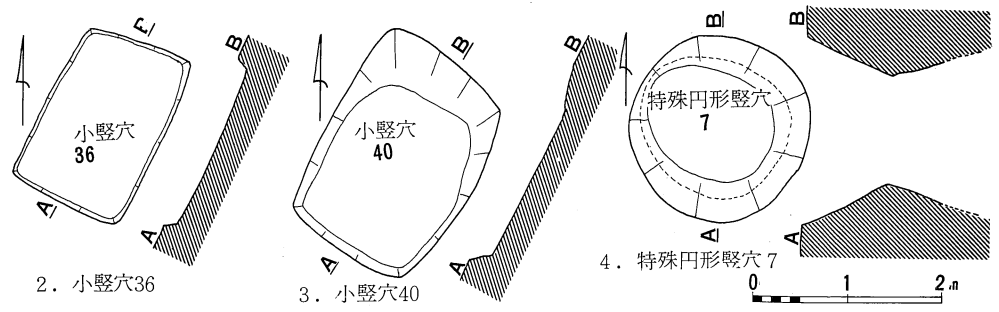
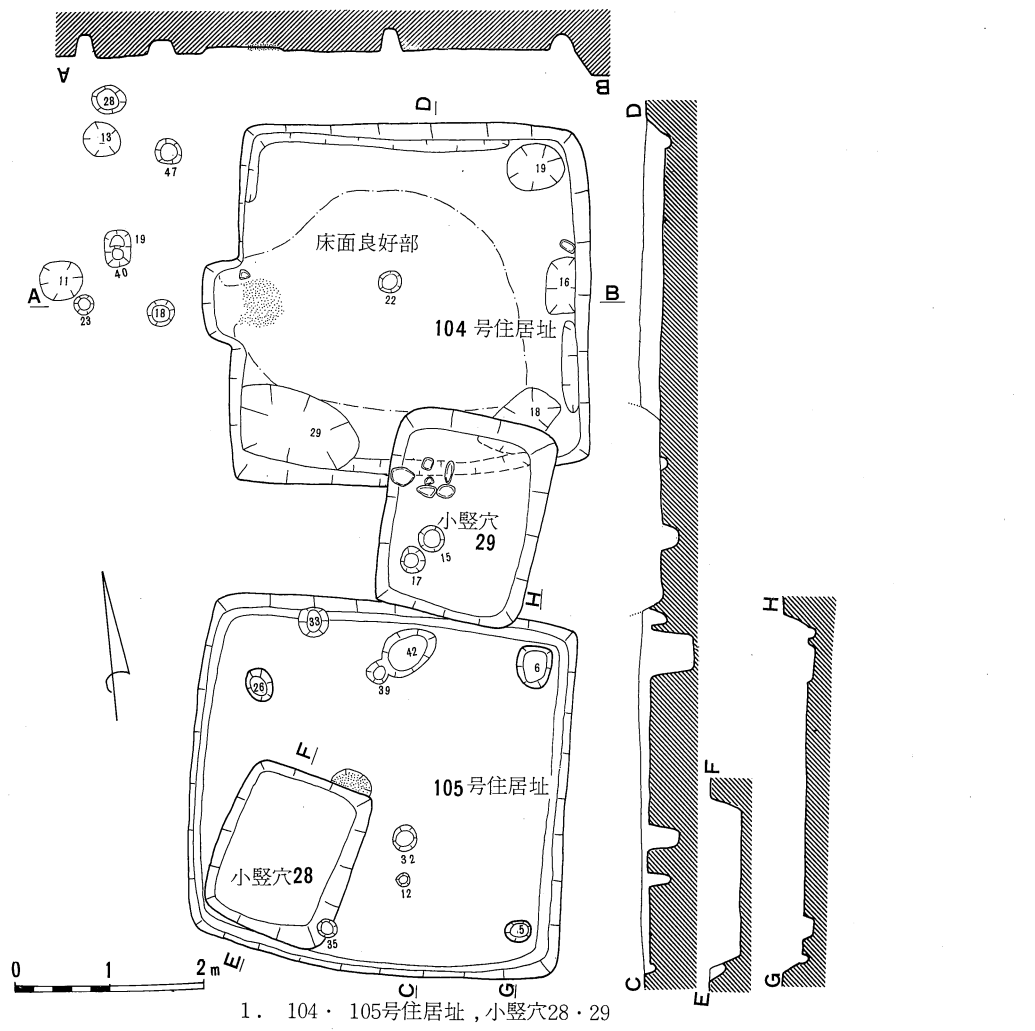


第 213号 樋口内城館址遺跡15号住居址出土土器 (1 : 4)

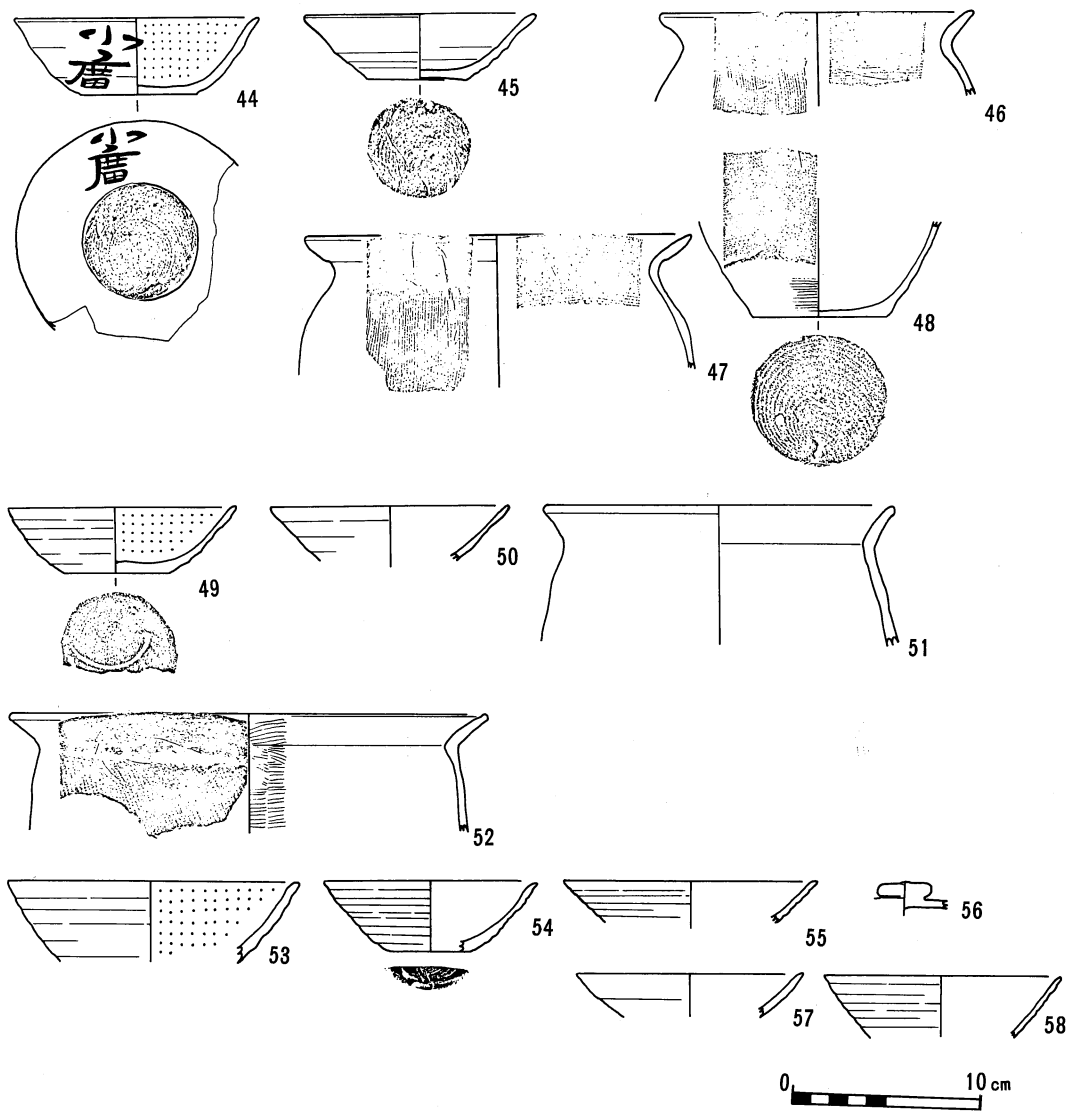
東隅の壁が小竪穴22に切られるが、床面までは破損されず、床面は堅く良好である。床面には青灰色粘質土が一面にみられた。柱穴は4隅と各壁中央部および床面中央に計9本検出された。カマドは西壁中央に位置した粘土カマドで、焚口部には厚い焼土の堆積がみられた。

本址への土層は、水田床土下に黒褐色土・暗褐色土が堆積し、黒色土が三角堆土となる。掘り込み面、床面は、ローム漸移層の茶褐色土層である。

遺物 出土は床面に近く、カマド周辺に須恵器環等が集中していた。26～28は内黒の土師器環、29～34は長胴形と思われる土師器甕形土器の口縁部と底部である。刷毛目状の調整痕を縦方向にもつ。35～43は轆轤痕を顕著に残す須恵器環で、糸切底をみる。 (八木)



第 214 図 樋口内城館址遺跡 104・105号住居址，小豎穴28・29・36・40，特殊円形豎穴7
実測図（1：80）



第 215 図 樋口内城館址遺跡36・104・105・114号住居址出土土器(1:4)
 (44~48 36住, 49~51 104住, 52 105住, 53~58 114住)

エ) 36号住居址 (図75・215の44~48、図版14の54・57の306)

遺構 丘陵西縁近くに検出された住居址で、縄文期74号住居址を切って構築されているが、北西隅には中世特殊円形竪穴2の大きな掘り込みがある。壁は北が高く垂直に近い掘り込みで良好である。床面は一部貼床の跡もみられるが、軟弱のところが多く良好とはいえない。柱穴は検出されなかった。炉またはカマドの検出もない。また本址覆土中には、多量の石が存在した。特殊円形竪穴を掘った際のものだろうか。

遺物 出土遺物は須恵器坏・土師器甕・坏がある。44は糸切底をもつ土師器の内黒坏で「小廣」と書かれた墨書があつて注目される。45は須恵器坏で糸切底をみる。土師器甕46~48には刷毛目状の整形痕が、縦方向と横方向にみられるものがある。 (根 津)

オ) 104号住居址 (図214・215の49~51、図版21の96)

遺構 丘陵南端近くに、弥生期106号住居址に接して検出された。南壁の一部は、中世小竪穴29に切られている。本址は、西壁に張り出し部をもつ方形プランで、3.90×3.85mの規模をもち主軸方向をN-83°-Wにとる。壁高は20~30cmで、床面は中央辺が堅く良好である。北西隅を除く三隅に浅い掘り込みがある。柱穴は検出されないが、中央に径25cm深さ22cmの柱穴状のピットがある。カマドは西壁中央にあったと思われる。焚口部と思える個所に焼土の堆積を残している。

遺物 土師器片をわずかに見たにすぎない。49は土師器内黒坏で、糸切底を有する。51は口縁が「く」の字に外反する甕で、長胴形をとるものと思われる。 (福 沢)

カ) 105号住居址 (図214・215の52、図版21の93)

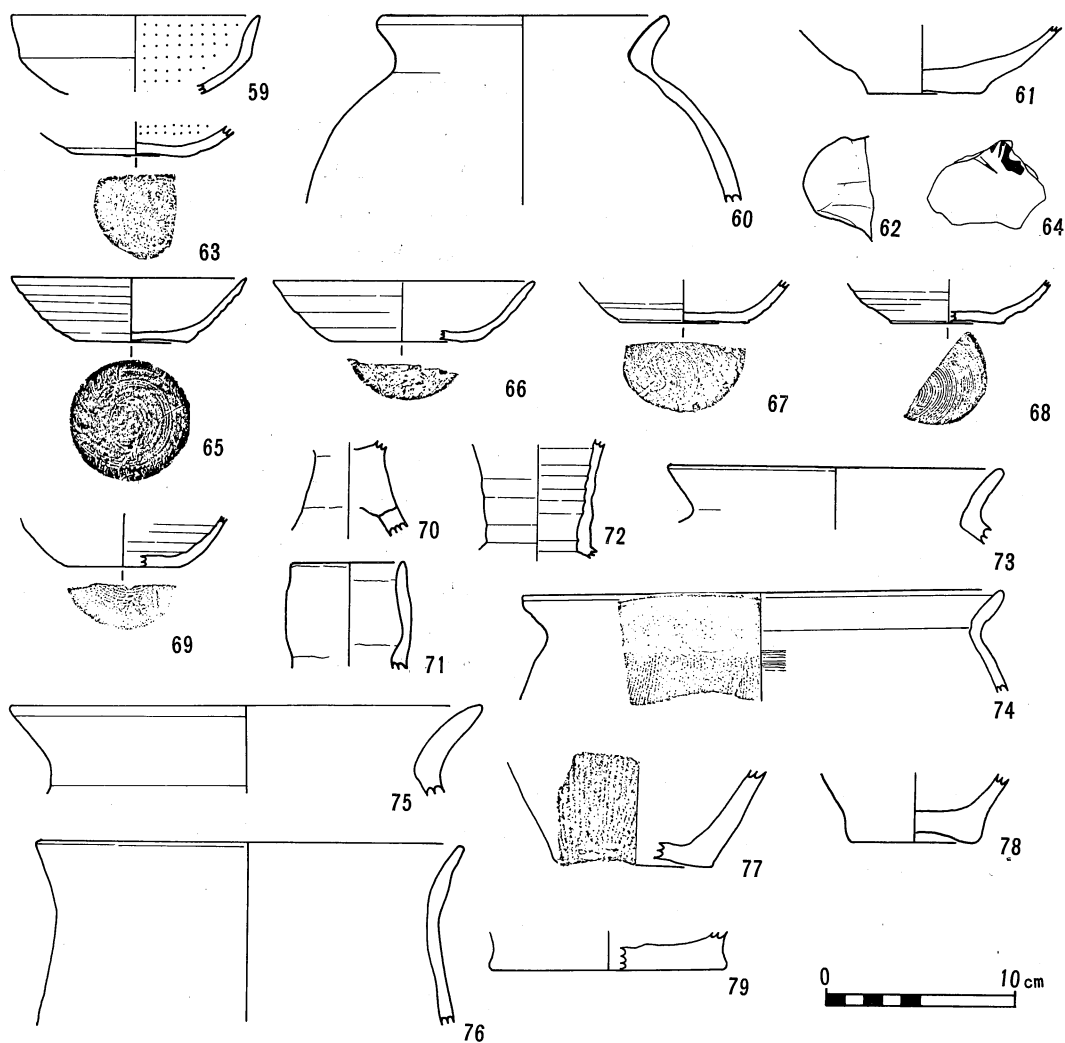
遺構 丘陵南端近く、弥生期106号住居址に接して検出され、北に同期104号住居址が並んで営なまれている。南西隅床面には、小竪穴28の掘り込みがある。4×3.95mの規模をもつ方形プランで、ローム土を掘り込んだ壁高は23~27cmある。壁に沿って周溝がめぐり、床面は一部貼床があるも、概して軟弱である。柱穴は南西隅を除く三隅に検出されている。中央やや南寄りに径25、深さ32cmのピットがあるが、隣接の104号住居址にもみられるもので、柱穴と考えた方がよさそうだ。中央やや西寄りには一部、小竪穴28に切られるが、焼土があり、浅い凹みを呈している。地床炉的なものであろう。

遺物 出土量は少ない。52は口縁部が「く」の字に外反する甕で、外面は縦方向、内面は横方向の刷毛目痕を残す。 (福 沢)

キ) 114号住居址 (図198・215の53~58、図版22の100)

遺構 本址は丘陵中央部に検出されたもので、弥生期116号住居址を切って構築されている。プランは方形で、その規模は4.94×4.75mであり、主軸方向をN-84°-Wに示す。壁高は40cmで状態は良好である。床面はカマド周辺が堅緻であるが、他はやや軟弱である。南壁に一部周溝がめぐっている。主柱穴と思われるものは検出されなかった。カマドは西壁中央に、大きな石を使って構築した石組み粘土カマドである。また、カマド前面に集石が検出されたが、カマドに使用したものではなく、以後投入されたものであろう。

遺物 出土量は少なく、土師器・須恵器の坏片と須恵器蓋のつまみがあるのみである。 (市 沢)



第 216図 樋口内城館址遺跡その他出土土器（1：4）
 （59～62 古墳時代，64～79 平安時代）

ク) 142号住居址（図90）

丘陵南東縁に検出されたが、築城の際削り取られたのか南は崖を呈し、北西隅を一部確認したのみで、
 時期・プラン・規模等不明である。出土遺物もない。（山 田）

ケ) 古墳・平安時代のその他出土遺物（図216）

遺構外から出土した遺物は、土師器・須恵器の坏と土師器の甕がその主体をしめる。72は須恵器長頸瓶
 片である。71は土師器であるがどのような器形になるか不明である。（市 沢）

オ. 中世の遺構と遺物

ア) 住居址

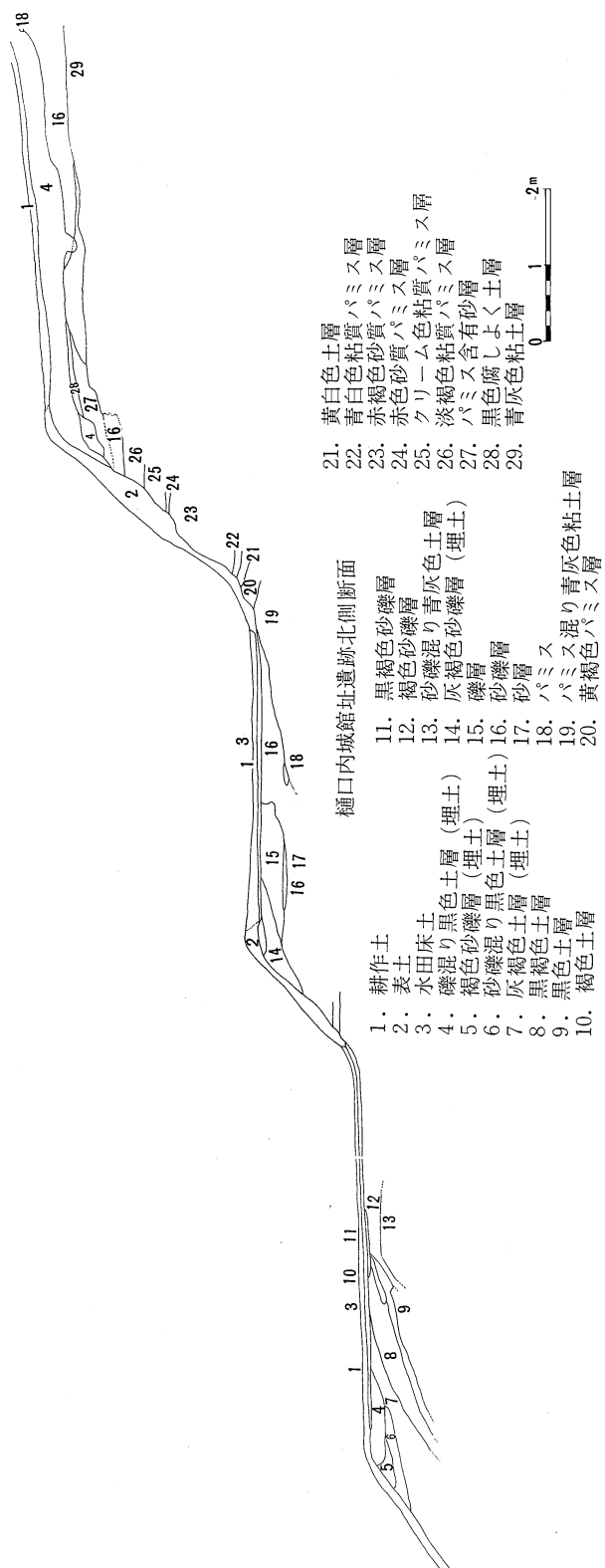
a) 37号住居址 (図218・220の1～3)

遺構 本址は、22号住居址の上面に床面が構築されている中世の竪穴である。プランは不整長方形を呈する推定規模5×2.4mの細長いものである。壁は緩傾斜をもち、その高さは15cmを計る。床面は貼床が施され、堅い面をもつ。床面上には、大小の自然石が20個ほどおかれてあった。柱穴とは思えないが、床面上と西壁上および東壁外にピットが存在する。焼土も検出されず、住居址とするには問題点があり、小竪穴の範疇に入れた方が妥当なものかも知れない。

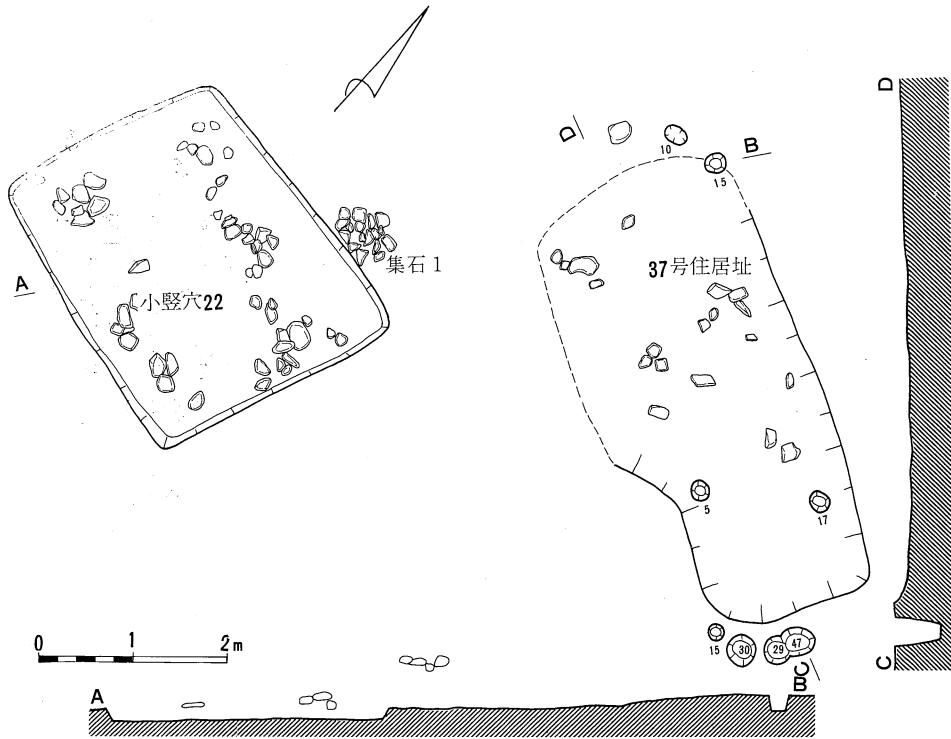
遺物 陶器底部片(1)と内耳鍋の底部片(2・3)の出土をみた。(市 沢)

b) 40号住居址 (図219)

遺構 丘陵西端部に位置し、縄文期47号住居址上に、41号住居址と並んで検出された。東壁は弥生期7号住居址上にあり、西壁は41号住居址を切って構築されている。北東隅は小竪穴14に切られている。プランは長方形を呈し、4.5×3.72mの規模である。壁は緩傾斜で壁面は軟弱であり、その高さは10～30cmを計る。床面も軟弱であり、床面より10～20cm浮いた状態で集石が存した。また東壁にも集石がみられる。本址にも炉・カマド・焼土のいずれもなく、また柱穴の存在もなく住居址としてとらえるには問題をもつが、規模および発掘調査進行上から、小竪穴と区別して扱った。小竪穴の範疇へ入れてもよいかもしれない。(市 沢)



第 217 図 種口内城館址遺跡丘陵北側土層断面図 (1:200)



第 218 図 樋口内城館址遺跡37号住居址，小堅穴22実測図（1：80）

c) 41号住居址 (図 219)

遺構、本址も40号住居址と同様に考えられ、小堅穴の範疇へ入れた方がふさわしいかも知れないものである。40号住居址の西に、40号住居址に切られて検出され、また、小堅穴13が床面を切って掘り込まれている。40号住居址とほぼ同一形態をとり、規模は4.7×3.5mの長方形プランであるが、炉、カマド、柱穴、出土遺物の検出はなかった。床面も軟弱である。
(市 沢)

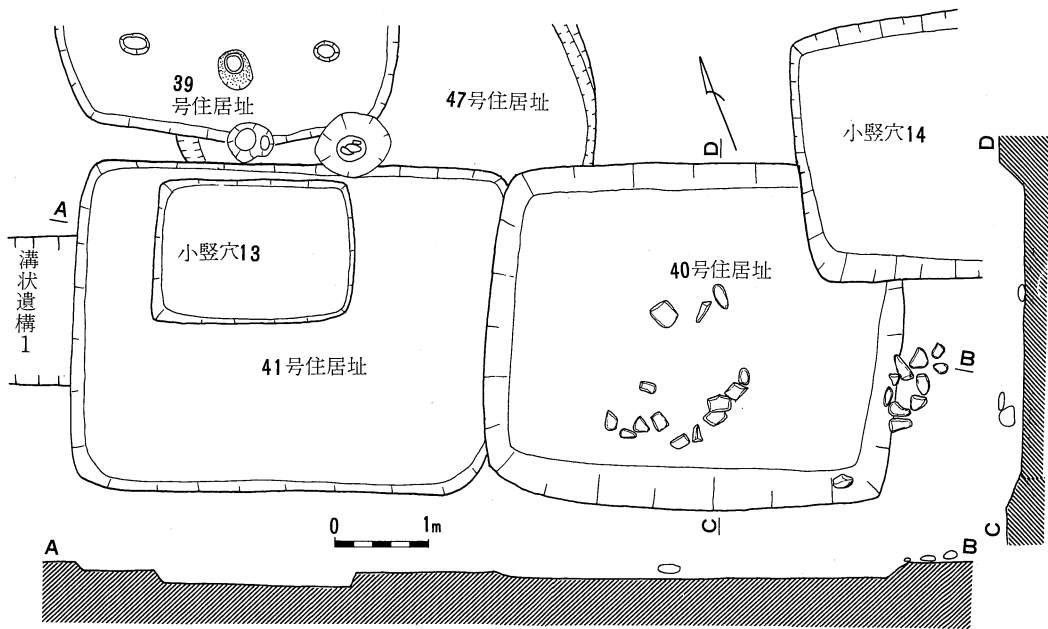
イ) 中世小堅穴 (図 218~222、他)

本遺跡からは、プランが方形ないし長方形で、規模2~3m前後、深さは10~100cmとまちまちであるが、小さな堅穴状の遺構が、丘陵全体で37箇所検出された。分布状態は丘陵南端部に多く存し、内城に関するものから、南方への防備のためとも考えられる。これら小堅穴は、上面に焼土、集石をもつものが多く、また底部にピットを有するものも多く存した。断面は、ほぼ垂直に近い掘り込みが多い。出土遺物には、内耳鍋片、常滑焼陶器片のほか特異例かも知れないが、ミニ硯、角釘、古銭等の出土をみた。また炭化米・粟・ソバの出土もあり、米は佐藤敏也氏分類でI B I a 型の米といわれるものである。(次表参照)

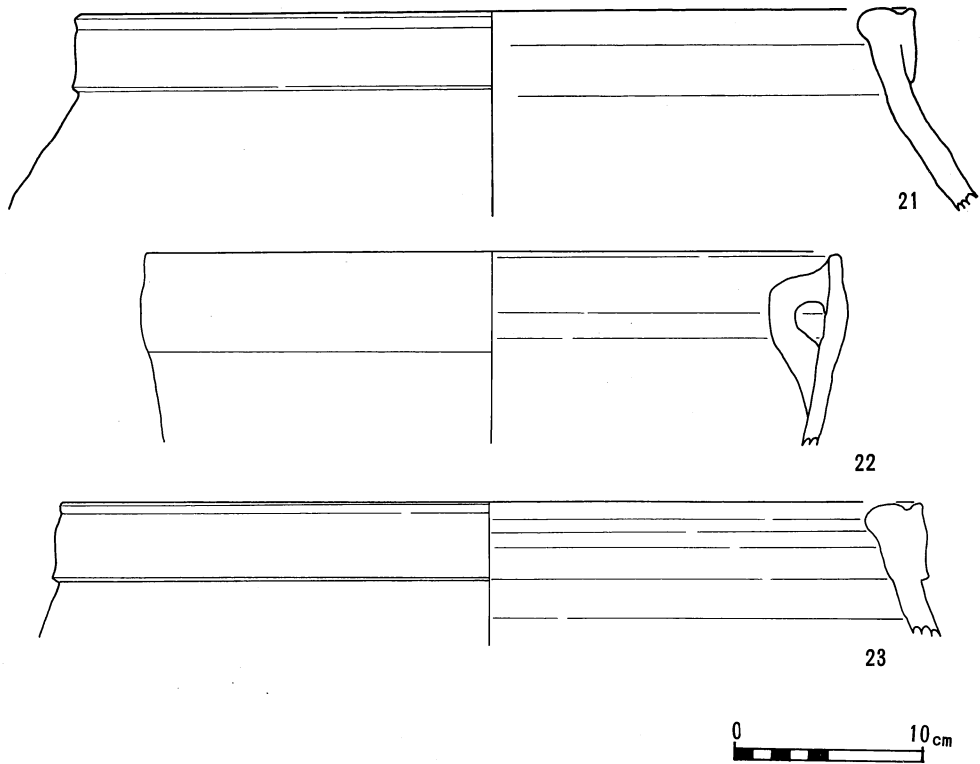
(市 沢)

樋口内城館址遺跡 小竪穴一覧表

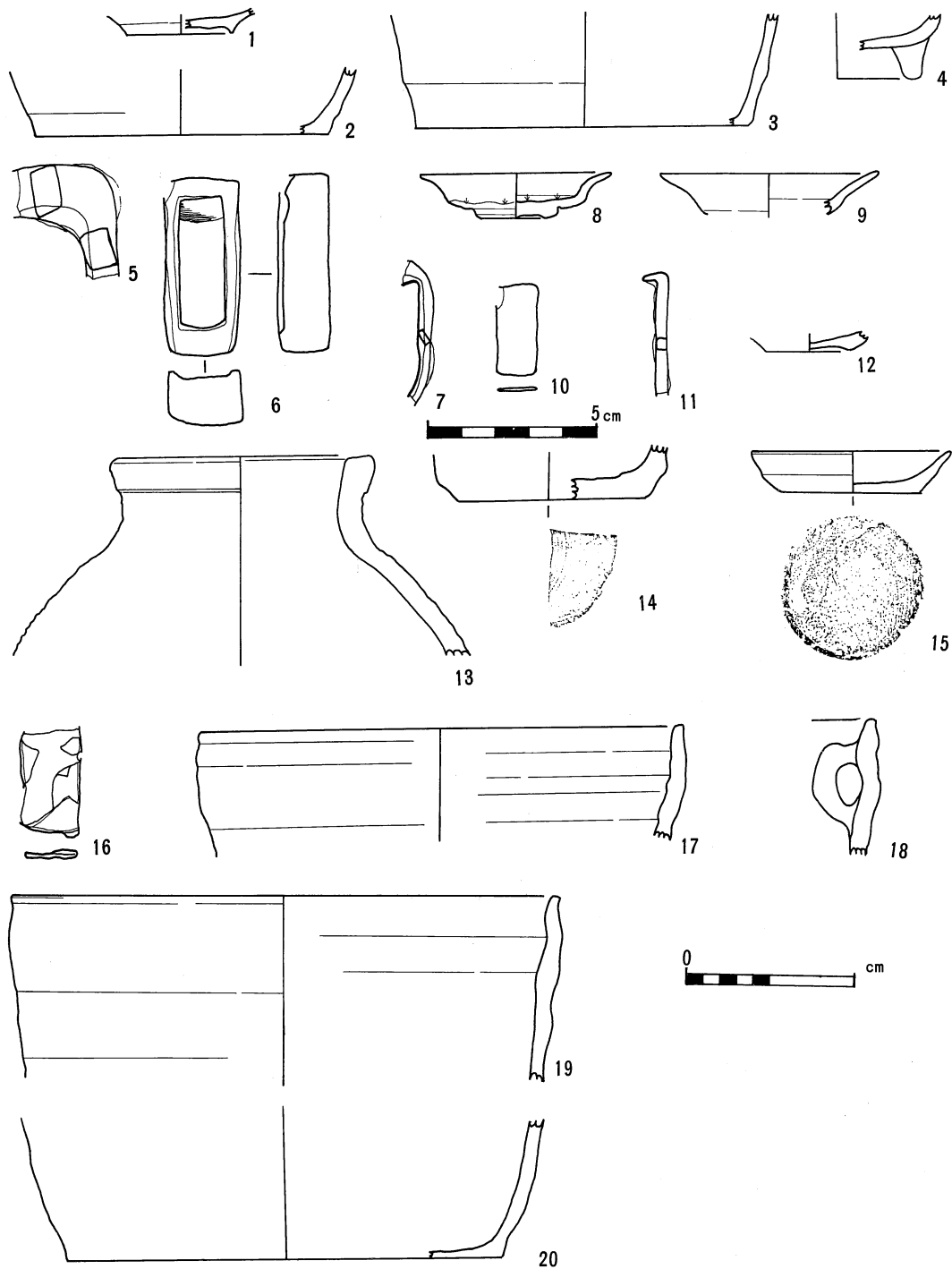
小竪穴 番号	挿図 番号	プラン		大きさ (cm)			状 態	出 土 遺 物	備 考
		平 面	断 面	東西	南北	深さ			
1	222	長方形		168	226	31	小竪穴5に切られる		
2	151	方 形		223	200	94	上面に石有り	陶器片、鉄製品	
3	147	長方形		198	258	31			
4	222	長方形		152	198	55	小竪穴5に切られる		
5	222	長方形		355	198	88		硯	
6	222	方 形		238	188	26	小竪穴5に切られる	角釘、古銭2枚(咸平元宝他1枚)	
7	45	方 形		212	200	30	底に石有り	陶器皿2	
8	45	長方形		215	282	40			
9	45	方 形			245	27		青銅片、角釘	
10	45	方 形		228	232	17		陶器皿、常滑甕	
11	159	長方形		200	135	48		カワラケ底部	
12	163	長方形		320	275	12	pit 有り	坏(土師)	
13	219	長方形		214	155	20			
14	163	長方形		356	286	28	pit 有り	常滑甕	
15	150	長方形		210	274	15		青銅片	
16	147	長方形		303	255	52			
17	38	長方形		215	312	10		内耳ナベ片	
18	167	長方形	摺り鉢	124	343	15	石有り33住を切る		
19	51	長方形		150	212				
20	147	長方形		188	150	5			
21	57	長方形		220		15	pit 有り		
22	152	長方形		262	335	10	pit 有り 上面に石有り	内耳ナベ片	
23	60	長方形		110	160	15			
24	222	長方形		248	278	28	pit 有り		
28	212	長方形		145	177	34		内耳ナベ 常滑甕	
29	212	長方形		166	217	23	pit 有り 集石もつ		
30	94	長方形		234	172	23			
31	94	方 形		182	175	7	pit 有り		
32	198	長方形		228	287	8			
33	98	長方形		195	265	100			
34	94	長方形		178	127	8	pit 有り 小竪穴31に切られる		
35	106	長方形		125	183	30	上面に石有り		
36	212	長方形		130	191	11			
37	98	長方形		158	111	10		炭化米、粟、ソバ	
38	87	方 形		174	189	20	pit 有り		
39	117	長方形		144	212	13			
40	212	長方形		168	231	22			



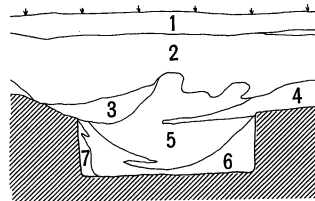
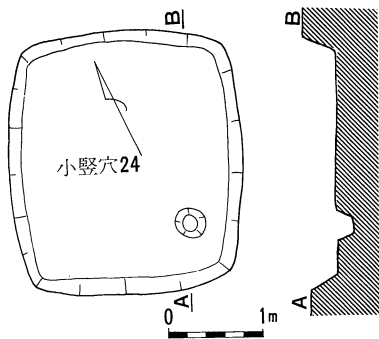
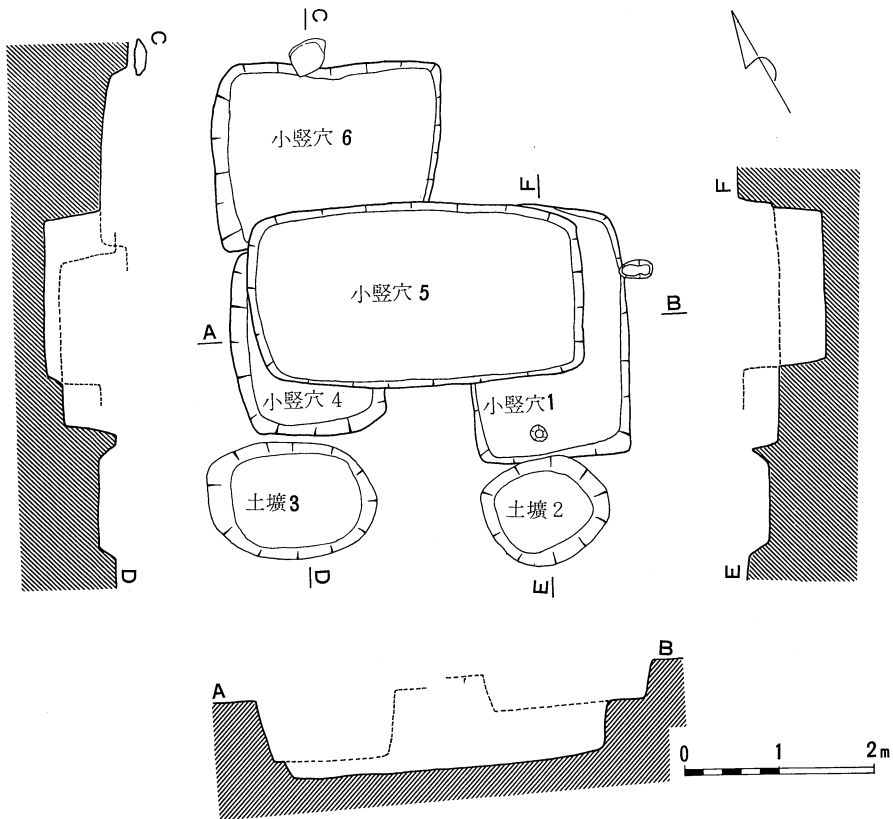
第 219 図 樋口内城館址遺跡40・41号住居址，小堅穴22実測図（1：80）



第 221 図 樋口内城館址遺跡・小堅穴14・28出土土器（1：4）
 (21 小堅穴14, 22~23 小堅穴28)



第 220 図 樋口内城館址遺跡37号住居址 小竪穴 2・5・7・9・10・11・12・15・17・22 出土土器他
 (5・6・7・10・11・16 1:2, 他 1:4)(1~3 37号住居址, 4~5 小竪穴 2, 6 小竪穴 5
 7 小竪穴 6, 8~9 小竪穴 7, 10~11 小竪穴 9, 12~13 小竪穴 10, 14 小竪穴 11, 15 小竪穴 12, 16
 小竪穴 15, 17~18 小竪穴 17, 19~20 小竪穴 22)



小竪穴 5 断面図

1. 耕土
2. 黒褐色土
3. 黒土
4. 黒褐色土とロームの混り
5. ロームブロック
6. 褐色土とロームの混り
7. 黄褐色土とロームの混り

第 222 図 樋口内城館址遺跡, 小竪穴 1・4・5・6・24 土壙 2・3 実測図
および小竪穴 5 断面図 (1:80)

ウ) 特殊円形竪穴

本遺跡からは、プラン円形の径2m前後、深さ3m以上という袋状の竪穴が、台地西端に沿って6箇所、台地北東隅部に1箇所の計7箇所が検出された。水田耕作時、水を田に入れた際、土砂もろとも、つる草も巻き込んで、西側崖下へ抜き出たという話も聞いて、中には横穴的になるのもあろうと思われる。穴の上面は空洞になっているものが2箇所あり、調査時、調査員が、落し穴的に落ち込んだものもあり、3m以上の深さに達し、発掘は危険性がみられたので、完掘はいずれもし得なかった。完掘したのは1だけで、底部はフラスコ状に最大径を示し、黒色土上に粘土を貼って摺り鉢をふせ状態になっていた。

遺物は余り出土がなく、1・7から常滑焼甕片、内耳鍋片、摺り鉢底部、砥石、石臼（第223図）がわずかに出土している。

樋口内城館址遺跡 特殊円形竪穴一覧表

円形竪穴 番号	挿 図 番 号	プ ラ ン		大 き さ cm			状 態	出 土 遺 物	備 考
		平面	断面	東西	南北	深さ			
1	30	円形	袋状	251	242	335	石が落ち込んだ状態で検出	常滑甕、内耳鍋、摺り鉢、砥石	
2	75	円形	袋状	165	150	3m以上			
3	77	円形	袋状	270	260	3m以上			
4	77	円形	袋状	198	202	3m以上			
5	77	楕円形	袋状	160	190	3m以上			
6	77	円形	袋状	112	98	3m以上			
7	212	円形	袋状	193	197	3m以上		石臼	
溝 3								内耳鍋、常滑、角釘	

(市 沢)

カ その他の遺構と遺物

ア) 墓 址

a) 土壙墓1 (図122)

丘陵南西寄り、弥生期29号住居址の東に検出されたもので、東西116×南北128cm 深さ26cmの、円形を呈する。覆土に、炭と火葬骨と思われる骨粉が混在していた。中世の遺構であろう。出土遺物はない。

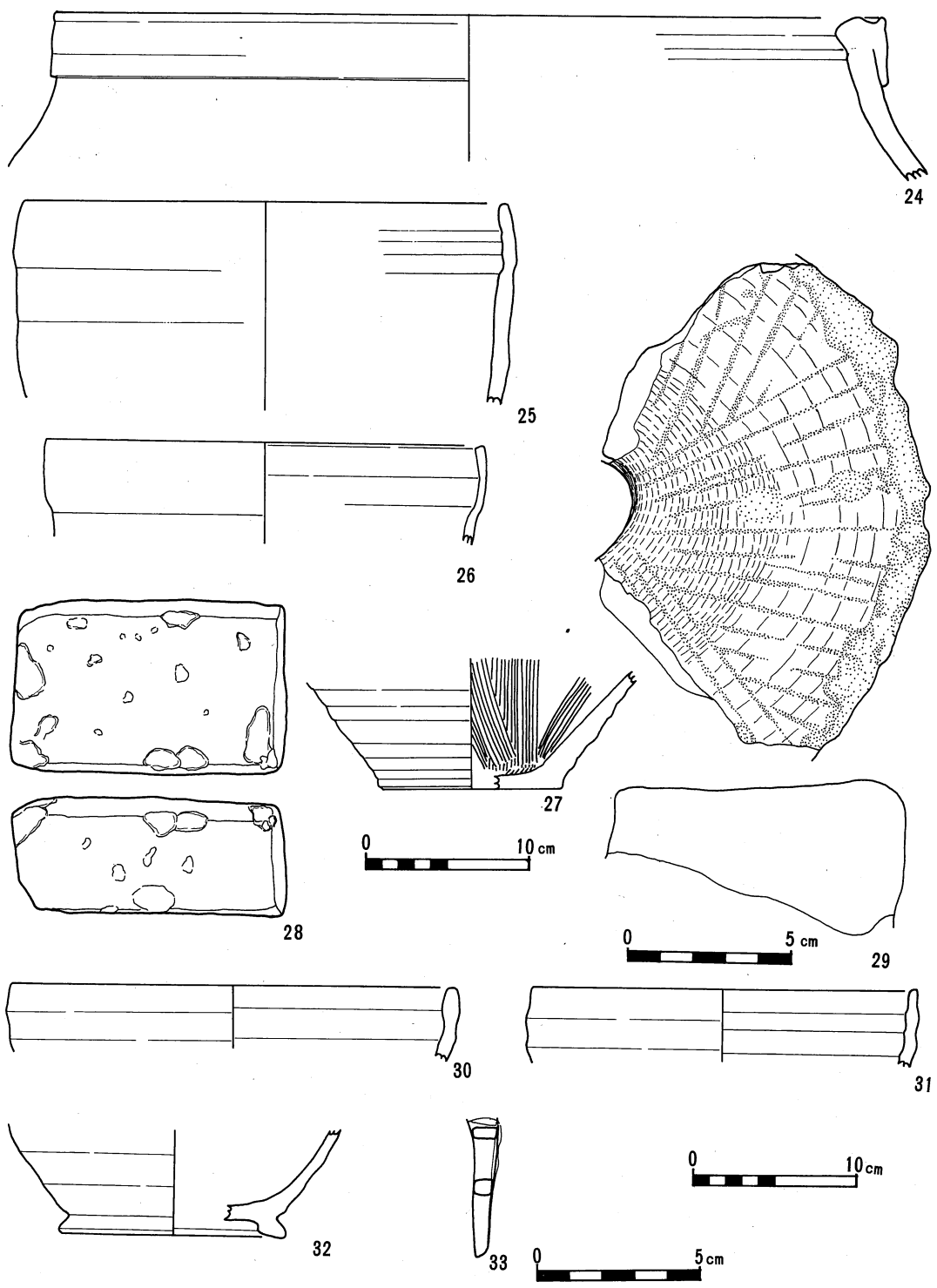
b) 火葬墓1 (図119、図版27の125~126)

丘陵の西端、16号住居址の東に検出された遺構で、耕作土除去の後、炭の混じった小石の集石をみた。それを取りはずしたところ、東西160×南北177cmの方形をなす、本遺構があらわれた。中央には、90×90cmの方形に川原石が敷かれており、この石はローム層内にはめ込まれたもので、幾つかは加熱のあとがみられた。床面は、特別堅くはない。北壁に小さな凹みが円形にある。出土遺物はない。(山 岡)

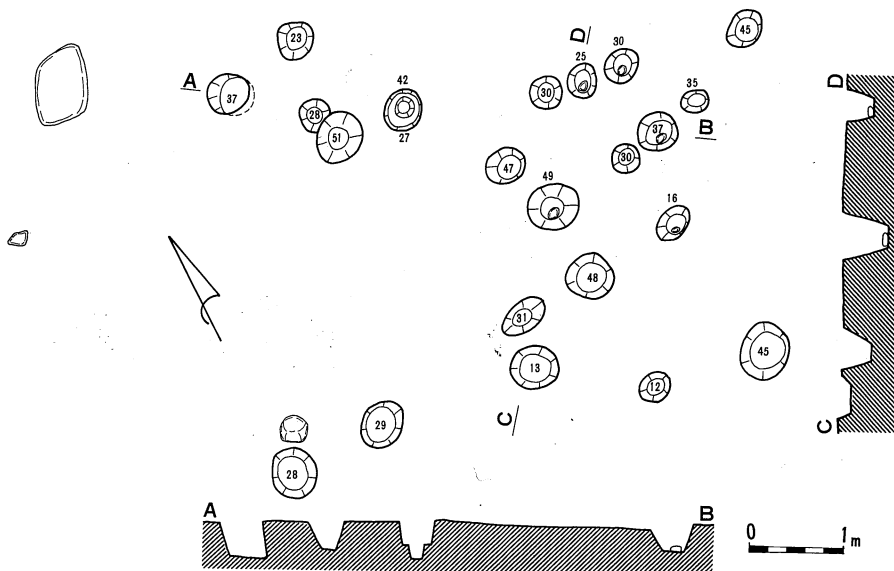
イ) 溝状遺構 (図225・223の30~33、図版28の133)

溝状遺構は、41号住居址の西に1、32号住居址の東に2、北側段丘下に3が検出された。しかし、1~2は全容が把握できず、小部分のため如何なるものか不明であるため地点のみにとどめた。

溝状遺構3は、北側段丘直下に東西に走る長い帯状の掘切りで、32mの長さにわたって段丘崖に沿って



第 223 図 樋口内城館址遺跡特殊円形竪穴 1・7 溝状遺構 3 出土遺物
 (28・29・33 1:2, 他 1:4)(24~28 特殊円形竪穴 1
 29 特殊円形竪穴 7, 30~33 溝状遺構 3)



第 224 図 樋口内城館址遺跡 1 号住居 址附近柱列 1 実測図 (1 : 80)

検出された。段丘崖を利用して掘られているもので、西部へ行くにつれ浅く狭くなっている。更に東へ続くものと思われる。中央部附近では、巾65cm、深さ50~60cmを計り、断面V字状を呈する。溝に沿って北側帯曲輪には柱列2があり、防御溝として効果的であったろうと推察される。もともとこの段丘は自然のものでなく、築城時、帯曲輪作成に当って削り取った痕跡が、第217図、丘陵北側土層断面図からうかがわれ人工の急崖であろう。内城館址にとっては有力な遺構であったと考えられる。

遺物は溝内より内耳鍋片・灰釉陶器片(32)・角釘(33)が出土している。

(山岡)

ウ) 柱列遺構

柱列とした遺構は3ヶ所に認められた。

a) 1号住居址周辺の柱列1 (図224)

検出されたピット群は、黒褐色土層に掘り込まれた、径30~60cmの円形ピットであるが整然とした配列状態を示さず、明確に把握することはできなかった。一部列をなしている感がするもので、中世の遺構と思われる。

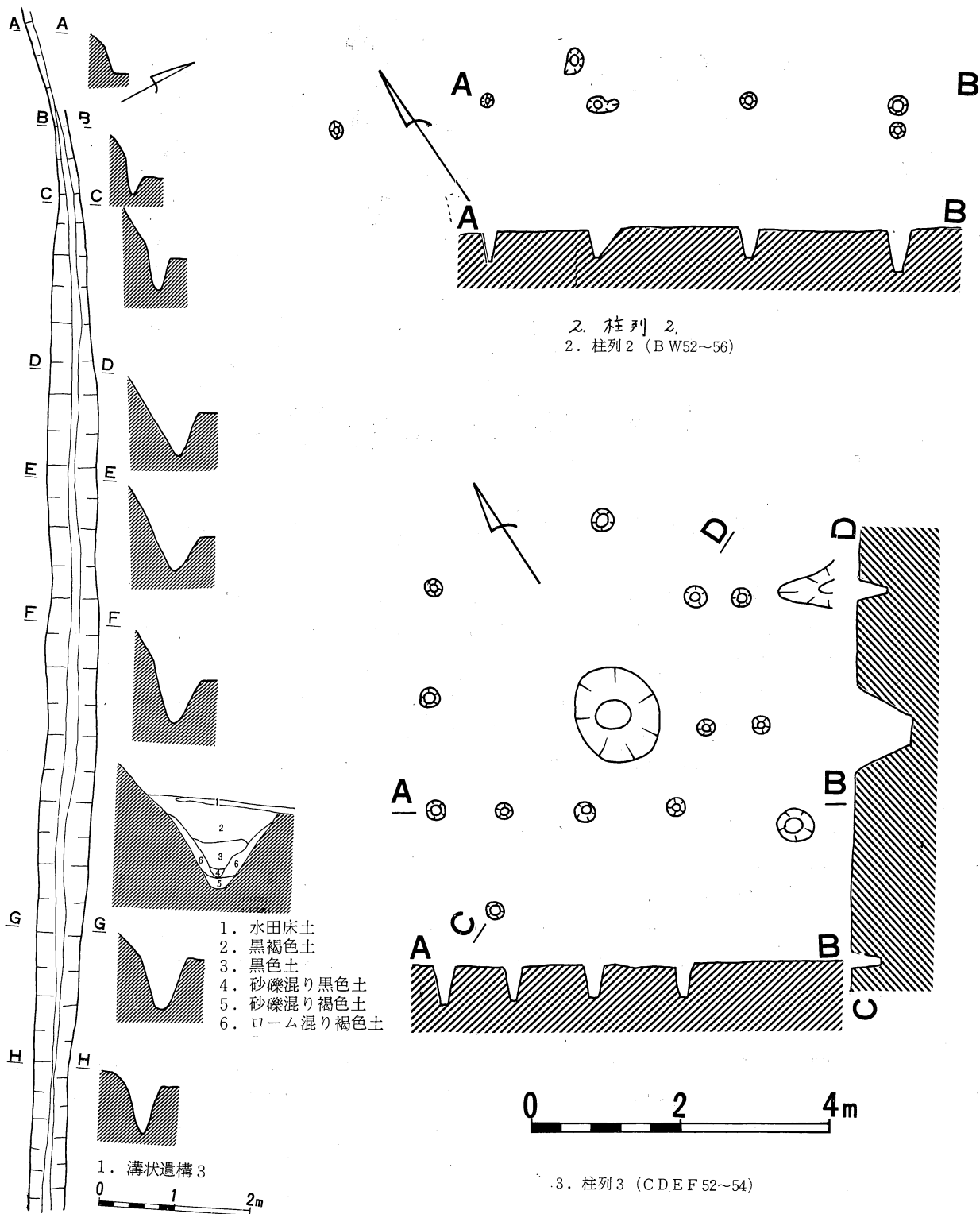
b) 溝状遺構3の北に検出された柱列2 (図225の2)

丘陵上面より一段低い北側帯曲輪で、溝状遺構3に並列して検出された。水田床土下からローム層に掘り込んだもので径10~15cm深さ20cm程のピットが7個所にあり、溝状遺構に関連する柵的な遺構と思われる。

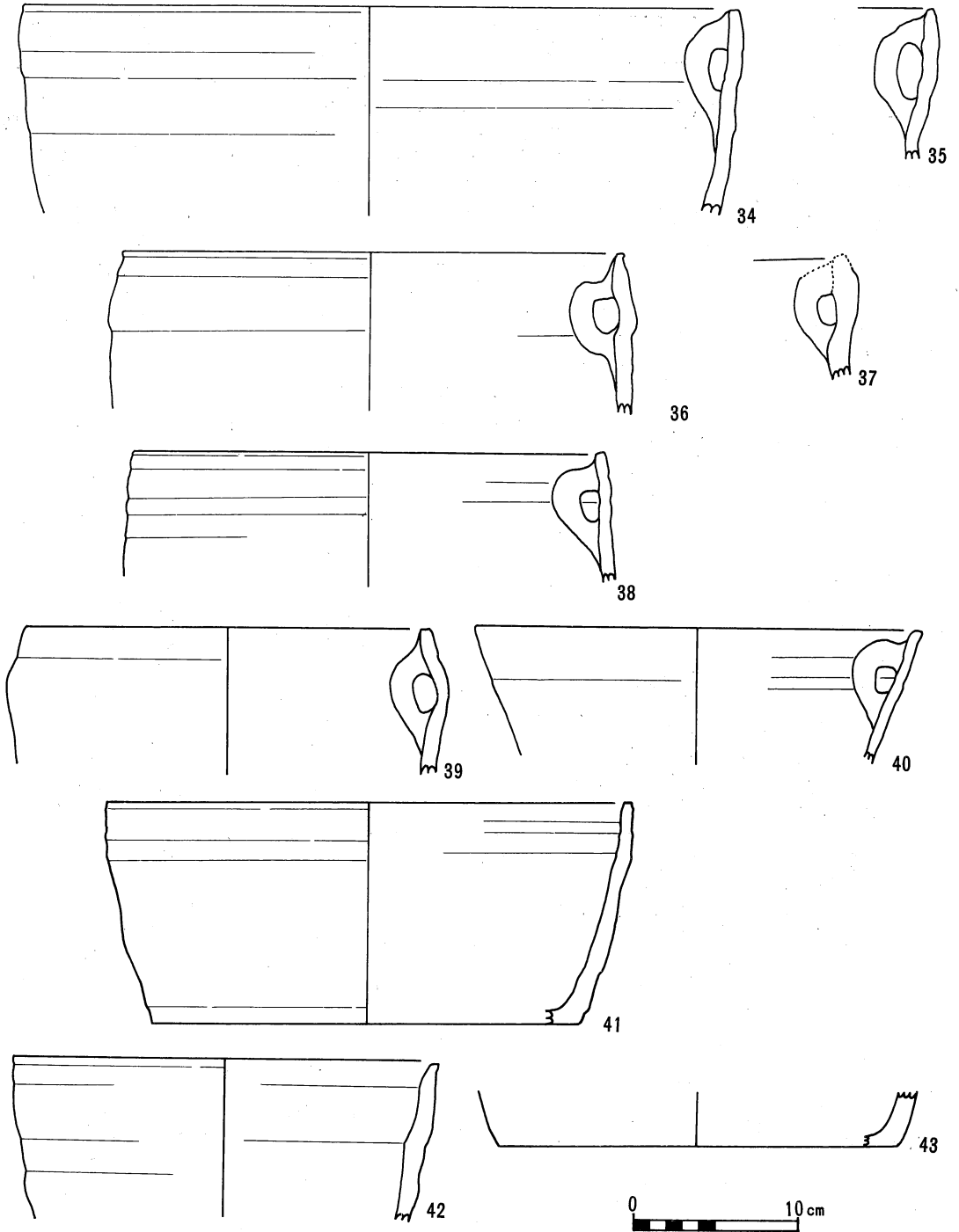
c) 柱列3 (図225の3)

丘陵上面より二段低い北側帯曲輪で、柱列2とは16mの隔たりがある。検出されたピット群は、南北3m、東西3.4mの建物が想定され得る配列である。中央東南よりに大きな掘り込みがある。出土遺物はなかった。

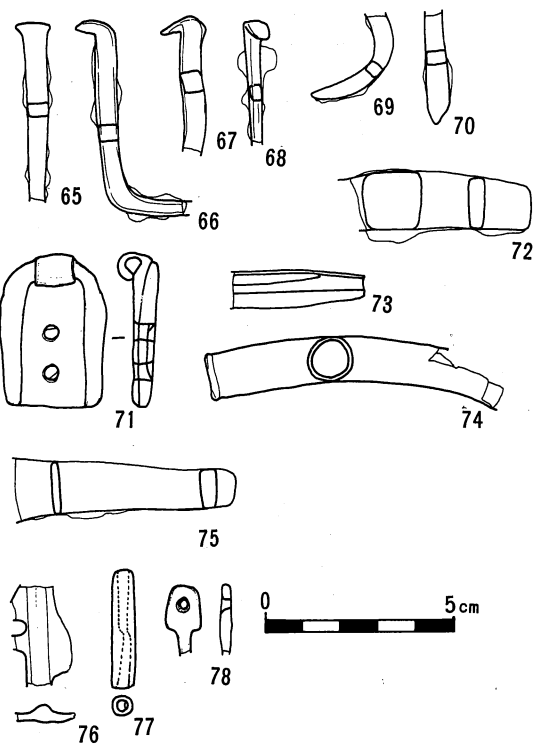
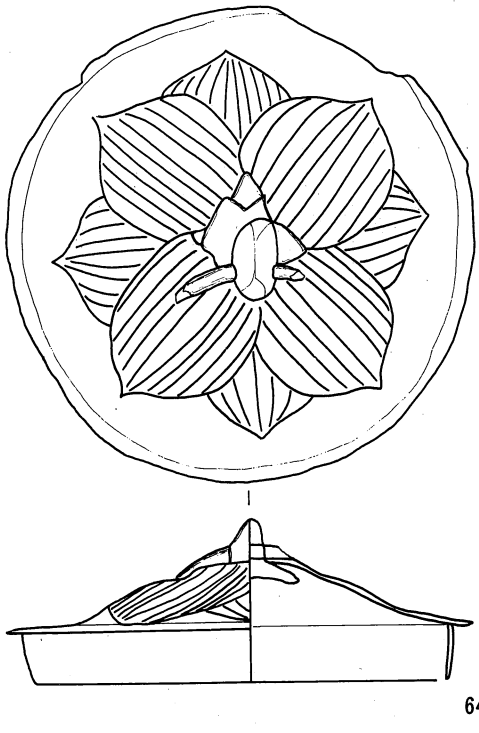
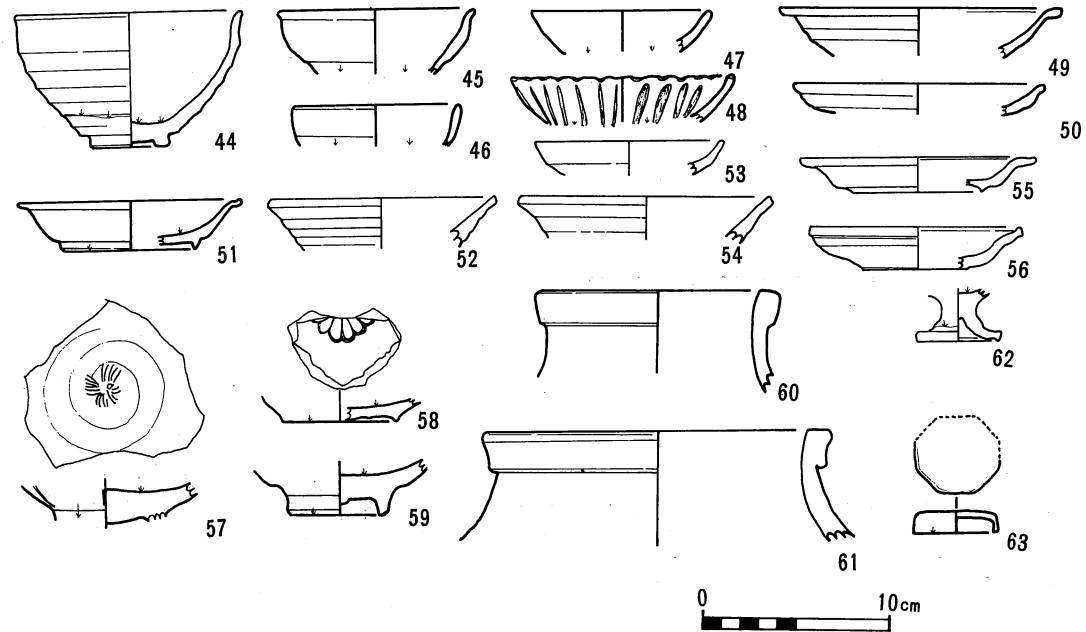
(山岡)



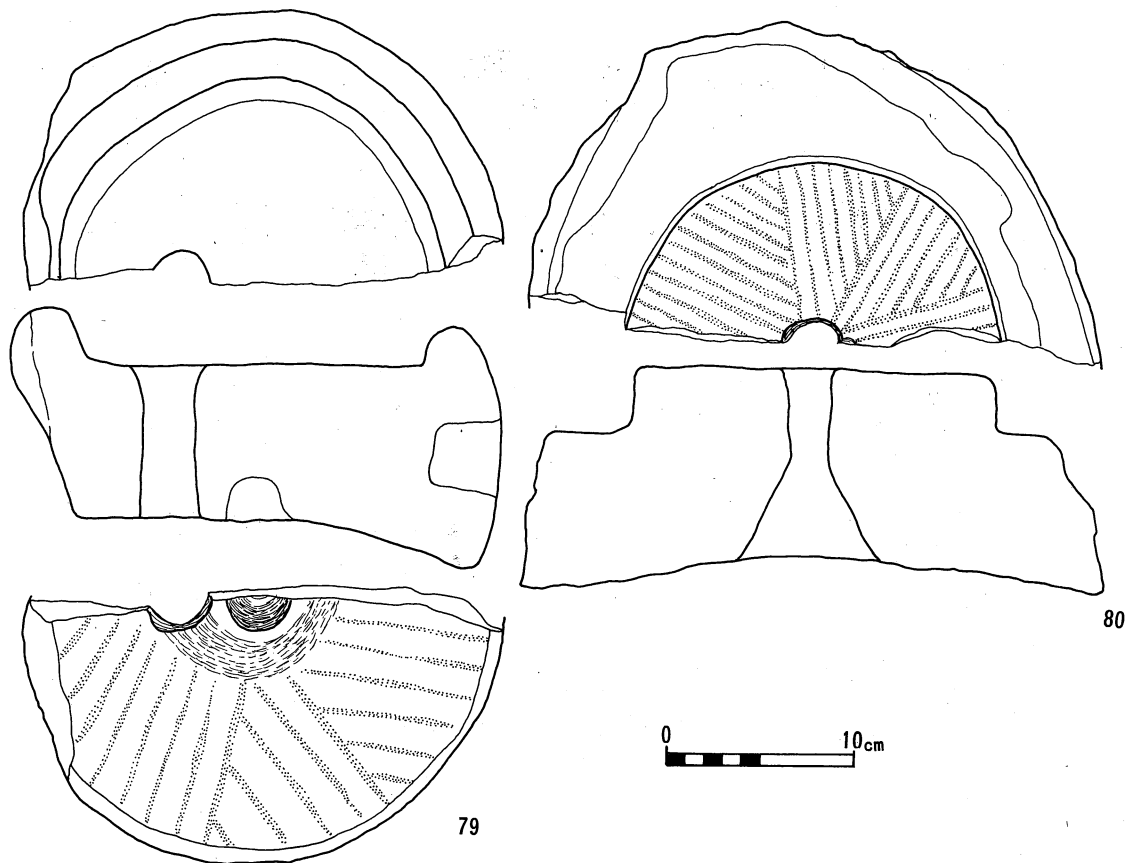
第 225 図 樋口内城館址遺跡，溝状遺 構 3 および柱列 2・3 実測図 (1 : 80)



第 226図 樋口内城館址遺跡その他出土遺物（その1）（1：4）



第 227 図 樋口内城館址遺跡その他出土遺物 (その 2)
 (44~63 1:4, 64~78 1:2)



第 228図 樋口内城館址遺跡その他出土遺物（その 3）（1 : 4）

エ) その他の出土遺物

中世から近世にまでわたると思われる遺物は種々バライティーに富んで数多く出土している。

土器および陶器は、内耳鍋(図226)、天目茶碗(図227の44)、中世陶器の小皿・杯(47~51・53~56)、常滑焼甕口縁部片(60~61)、仏花瓶(62)、薬壺の蓋と思われるもの(63)、青磁片(57)、瓦器(52)、その他陶器片(58~59)がある。また木質部の腐植し被膜のみ残った漆器・天目茶碗台の2個の出土もあった。

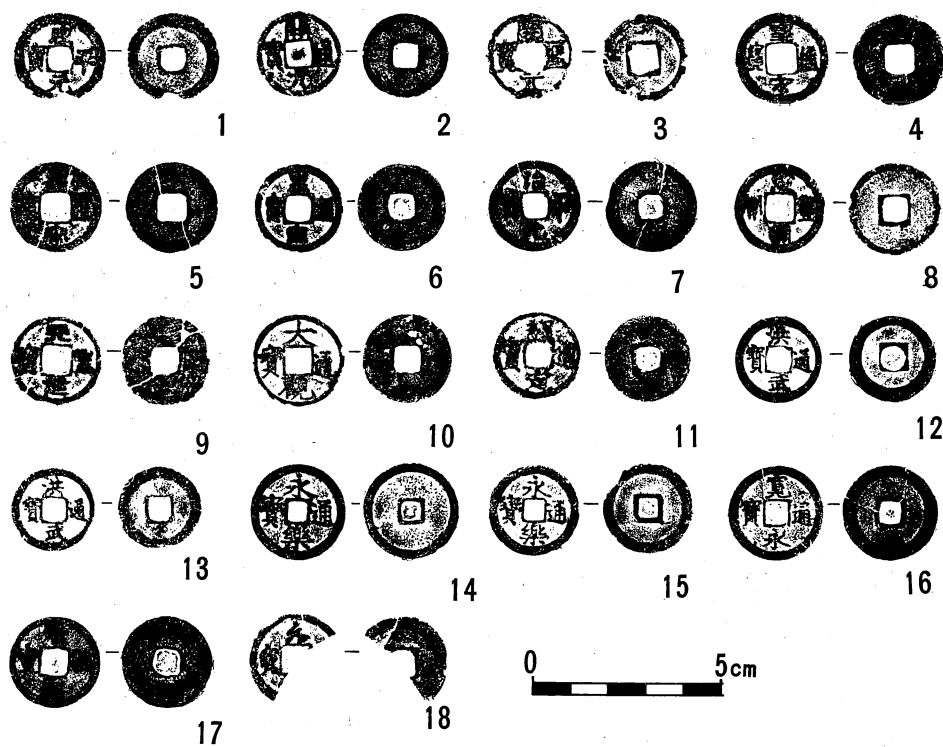
鉄製石としては、角釘(65~70)、鍵ではないかと思われるもの(71)と使途不明の72~75がある。

青銅製品には、経筒の蓋(64)がある。径12cmで8葉の複弁蓮華文が線刻され、つまみには木質の棒がはすかいに差し込まれている。身の部分は検出されていない。

この他、キセルと思われるもの(73)、管玉(77)、石臼(79)、茶臼(80)の出土をみた。

また古銭は次のものが出土した。開元通宝(713~741年)、皇宗通宝(1039年)、治平元宝(1064~1067年)元豊通宝(1078~1085年)、大観通宝(1107~1110年)、紹定通宝(1228~1233年)、洪武通宝(1368~1398年)永楽通宝(1403~1424年)、寛永通宝(1624~1644年)等である。

(山 岡)



第 229 図 樋口内城館址遺跡出土古銭 (1 : 2) (1 小竪穴 6, 2~18 その他)

3) まとめ

中央道用地内と町教委による発掘調査の結果、丘陵の上面は、ほぼ全面に近く調査が行なわれ、縄文中期・弥生中～後期・土師期・中世城郭と各期にわたる数多くの遺構・遺物の検出をみた。

縄文期のものは、土器片に早期末から前期に及ぶものが、ごく少量検出されて、古くから生活の痕跡は認められたが、明確にその生活を知り得たのは、中期である。丘陵を取りまくかのように円形に営まれた縄文中期勝坂期～加曾利E期の住居址は、当時の集落立地・集落構造を追求する上で、好資料を提供したといえる。検出住居址57軒のうち勝坂期12戸、加曾利E期45戸という数になり、縄文中期後半に急増している。しかし、この45戸も同時に存在したのではなく、更に細分が可能なわけで、今後の検討に待つところが多い。埋甕の問題でも、勝坂期にその例をみるものもあるが、当遺跡では、勝坂期には1例もなくすべて加曾利E期に始まっていることなど、集落構造と同時に、生活様式・習俗や生産活動に示唆されるものが多い。個々の住居址でも、例えば、石棒・土偶・マジカルな文様をもつ台付土器の出土をみた102号住居址、顔面把手付深鉢・土偶を含む吹上パターン状の土器蜻集をもつ127号住居址等々問題点の多くをもっている。また検出された土壌は103に及び、その中には時期不詳のものもあるが、やはり縄文期のものが多くを占める。その性格を知る上で、大形深鉢土器がつぶれた状態で出土した土壌18、把手付小形深鉢土

器を2個も出土した土壌59など注目すべきものがある。かかる繁栄した当丘陵には、縄文後期・晩期の訪れは、かすかに認めるのみで、住居址の確認はなかった。

次にこの丘陵が生活の場とされたのは、弥生中期～後期前半にかけてである。検出された住居址は、中期8軒、後期58軒とこれまた数的に多い。その配置は、縄文期のものが、丘陵縁辺に沿って円形に営まれているのに対し、丘陵内部にその配列がみられるのも対比して興味深い集落構造の問題を提示している。支柱穴は4箇所、支柱穴間中央辺に埋甕炉を設けるのが一般的な住居であり、中には石囲埋甕炉とするものもある。また71号・91号住居址等にみられた一型式内の住居の拡張は、その理由が家族構成上なのか、災害等による結果なのか等々推論も働いてくる。更に遺物面から、石包丁・打製石鏃・磨製石鏃等、生産活動に直結するもの及び、5号住居址出土の炭化ムギの存在から生産形態も論じられ得る。水田地帯は南斜面下に広がる湿地帯であると思われるが、ほぼ同時期に営まれた、樋口五反田遺跡との関連がクローズアップされてくる。土器では伊那谷南部にみられる様相と北信箱清水式土器のそれをもつもののように見受けられ、南北要素の交流接点の感を受ける。

次に土師期の住居址は10指に満たなく意外の感じを持った。これとて時間差があり、小規模の集落であったと考えられる。鉄器の普及が当然考えられる時期であるから上屋を支える柱は、あえて柱穴にたよらなくてもよかったためか、支柱穴の確認は、どの住居址でも判然としなかった。

最後に、当遺跡は位置の頃でも記したが、遺跡の呼称に示すように、樋口次郎兼光の居館の地という伝承があるが、樋口次郎兼光なる人物はさておいて、当丘陵が山城として構築された、いくつかの事実をつかむことができた。地形的にみるならば、伊那山地から突出した丘陵は東側を除く三方が崖を呈し、眺望の上からも、防備のためにも適地といえる。丘陵の東側には二箇所空掘の存在があつて東への配備も考慮されている。この二つの空掘間の地は、かつて瘦尾根を呈していたらしいことが地層から判断される。居館のあつた丘陵先端部には、南と北に帯曲輪を設けている。丘陵の先端を削り取つての大土木工事であつたことが、北側土層断面図や縄文期・弥生期の住居址が削られて急崖にかかる事実から判断される。北側丘陵直下の帯曲輪つけ根には溝状遺構3が柵状柱列を伴つて検出され、地形的には極めて堅固な構えをとっているものと思われる。上面の発掘調査では、住居址3・小竪穴37・特殊円形竪穴7を検出し、城郭の一環となるものと思われる。他に礎石と思われる石の検出があつたが、農耕による移動や除去で規則性はみられない。検出された3住居址は、住居址としての決め手を欠くもので、小竪穴の範疇に入るものかもしれない。この小竪穴は如何なる性格のものであろうか。出土遺物は、内耳鍋・常滑焼甕片・硯・古銭炭化米・粟・ソバ等で、或るものは倉庫的な感を受ける。また特殊な円形竪穴は、その頃でも記してあるが、倉庫的なもの、逃げ道としての横穴構造、更には落し穴的なものと想像はできるが決め手を欠く。これらの遺構は西縁と南半に多くみられる事実から、本城郭が南方への防備を強くもつものと解してはよくないだろうか。辰野町地籍には、王城・城山・豊崎城・羽場城・狐城・小式部城山・竜ヶ崎城・天白古城等の存在があり、これら城址との関連から本城郭の性格も明らかにされると思われるが、王城に対する南方前進基地的なものと推察される。また指呼の間にある荒神山は、本城郭と強い関連があつたと思える。

以上、縄文期・弥生期・土師期・中世城郭について問題点を列記したのみの、まとめになつたが、多くの問題提起と、数少ない中世城郭研究上に新知見をもたらしたことは、本遺跡調査の大きな成果といえる。資料提供くださった町教委にお礼を申し上げる次第である。

(山 田)

5. 大久保尻遺跡 (OUC)

1) 位置と赤羽焼の歴史

大久保尻遺跡は、辰野町字赤羽小字西林 322 番地にある。荒神山より東に伸び出した 10 m 程の尾根の先端、南斜面にあって、赤羽焼の窯址は、その自然斜面を利用して構築されている。

赤羽焼は、慶応元年 (1865 年)、盛右衛門、五右衛門により創始され、窯場を赤羽村 (現辰野町赤羽) 字南久保に設け、主に摺り鉢、片口、急須、土瓶、甕等の日用雑器を製造した。慶応 3 年 (1868) には、松助の出資のもとに、荒神山の大久保尻に新しい窯を 2 基設けている。本遺跡の窯は、この一つであるが、1 年余りの使用で、後は専ら他の窯 (現林陶社裏の窯跡) に製産を委ねた。明治 2 年 (1869)、盛右衛門没し、明治 5 年 (1872)、松助、五右衛門も手を引き、また高遠町の岡野潤平が一年余りで行きづまり、有賀祐衛務に売り渡す。後、有賀文蔵が加わって共同経営するに至るが、いずれも日用雑器の製造によってようやくその命脈を保っていた。しかし、明治 10 年 (1877) 製糸用陶器鍋の出現により思わぬ好機の到来をみた。高遠の製糸組合明十社の援助で、独自のパイプ付陶製改良鍋、明十社鍋の新式鍋により、好評を博して、諏訪・岡谷は勿論、全国各地の製糸工場より注文が殺到し、赤羽焼は糸鍋専門の窯と化した。明治 19 年 (1886) には、五右衛門の弟子である瀬戸吉太郎は、村内板橋に窯を新設する。荒神山の西の窯に対し東の釜と呼んだ。明治 40 年 (1907) 頃、赤羽焼は活況を呈して最盛期を迎えるが、大正 8 年 (1919) には、製糸様式の近代化により陶製鍋を絶えず進展させ、赤羽焼も規模の大転期を迫られ、赤羽窯業株式会社が設立された。大正 13 年 (1924) 高遠の林豊次郎が林工業株式会社を設立し、ついで長男の林芳人は林陶社とし幾多の新製品陶鍋を開発して販路は朝鮮にまで広がった。かかる歴史を有した赤羽焼も、時代の流れと共に、製糸業の近代化で、陶鍋は需要が激減し、日華事変と共に、ほとんど販売は停止状態となった。戦後になり再び日用雑器の製造に返ったが社会情勢の推移に抗しがたく、遂に閉鎖廃窯のやむなきに至る。

2) 赤羽焼の窯址と遺物 (図 230・231・232, 図版 59)

遺構、窯址は尾根先端部南斜面の自然傾斜を利用して構築されている。本来赤羽焼の窯は、登窯と平窯の併用したものであり、一基の窯はブロックで、11 余りの部屋 (平窯) に分かれ、それぞれ煙道によって連なっている。全体の傾斜は 30~40 度であり、全長 25m、巾は焚口部で 5 m、中央部で 7 m、上端部で 7.7 m 余り、高さは 3~4 m とするものである。煙道の数は 10~15 と焚口部より一個ずつ増え、焚口よりの火焰を窯の境を掘り下げて床面にいくつもの溝をつくって導くようになっている。更に窯内の温度を均一にするため、平窯ごとに煙道の位置を交互に変え、二つを一本の煙道に導き、最後は一本の煙突に結合させる構造をとる。

今回調査した窯は、平窯 3 つだけであるが、煙道の数や最下部の煙道に炭が混入していたことなどから

焚口部に近い部分と思われる。窯の土台は、ロームを階段状に整地した上に粘土を5～8cm敷きつめて、更に細かな砂が数cmある。いずれも熱により堅く焼きしまつて赤変している。煙道部は床を掘り下げ、上部口は次の平窯の前方部に開いている。また境となる壁は煙道間に一辺25cm余りの粘土製のレンガを土台とし、更に厚さ10cmのレンガを積み上げ、床面と同じ高さにしてある。レンガは粘土で薄く巻かれてありこれもよく焼きしまつて、セメント塗りのようである。両側の壁もやはり粘土を盛り上げて土台を形づくっている。破壊されているものの一部には焼きしまつた部分が確認された。

遺物、煙道部、床面、窯の周辺から焼けた粘土片と共に出土したもので、大別して三種類——窯構築材料（1～10・16～18）、窯道具（11～15・19～23）、製品（24～51）——になる。

1はレンガであり、両隅にはレンガ接合のための粘土紐（16～18）が焼き付いている。2～6は団子型レンガで、側壁、天井部に使用したものであり、赤羽焼窯特有のものである。7～9は柱状のレンガ接合のための粘土で、10も同様の働きをする一種であろう。

11～14は、つくで 脚は3～6個とさまざまな種類があり、15も同様である。19～20は粘土紐を円形にしたもので、製品をのせた痕跡が残っている。

21～23は靱鉢で、篋整形の跡がある。24～26は鉢、甕の口縁部片、27は摺り鉢、29～30は徳利である。31～36は鉢の底部片で、特に31には重ね焼きのためのつくの跡が内側にあり、高台には、15の如きつくが焼きついている。また削り高台もみうけられる。37は口縁部が直立した皿であり、38～39は灯明皿である。40・41・45は土瓶、46は薬壺の蓋で裏には糸切痕がある。42～44・47～51は急須の破片である。特に44・47は灰色を呈した須恵器に似たものである。48～51にも糸切痕が残っている。

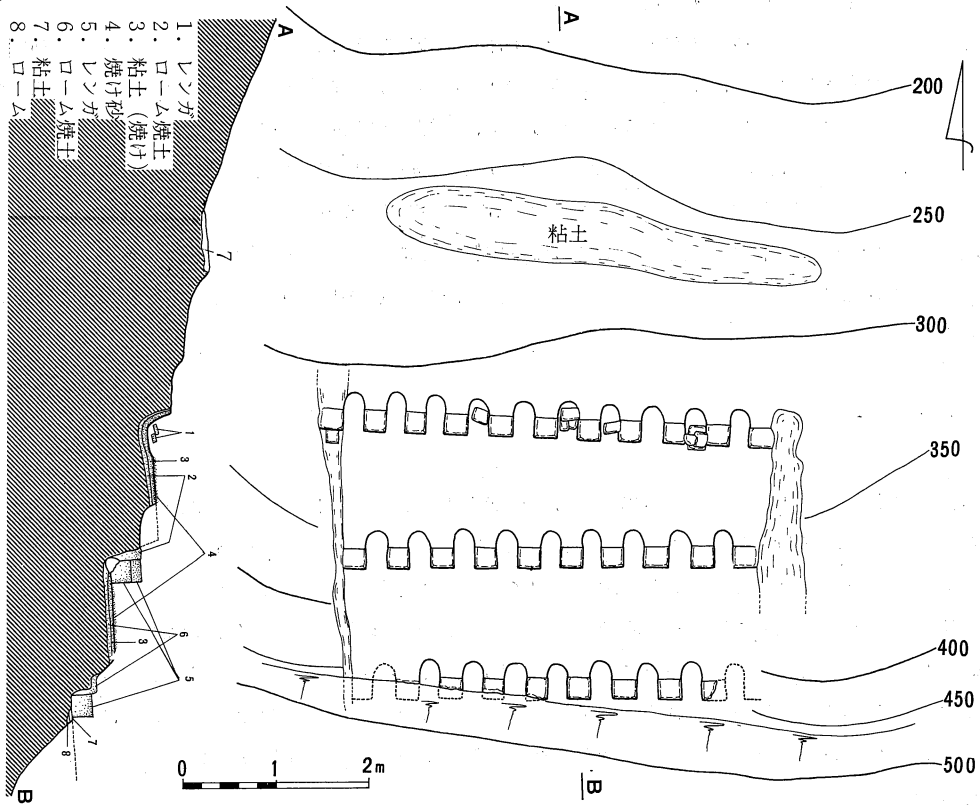
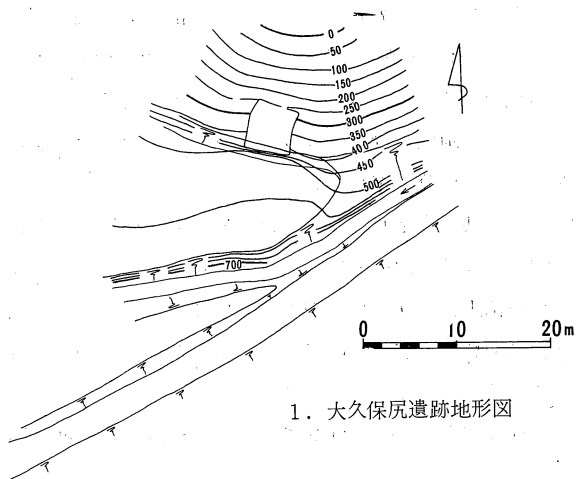
以上の出土遺物から本窯で製造されたものは日用雑器である。また窯の構築材料であるレンガ類の出土数が、他の出土遺物に比べて少なかったのは、廃窯の際に、他の新しい窯に使用するため抜き去ったことも考えられよう。

3) ま と め

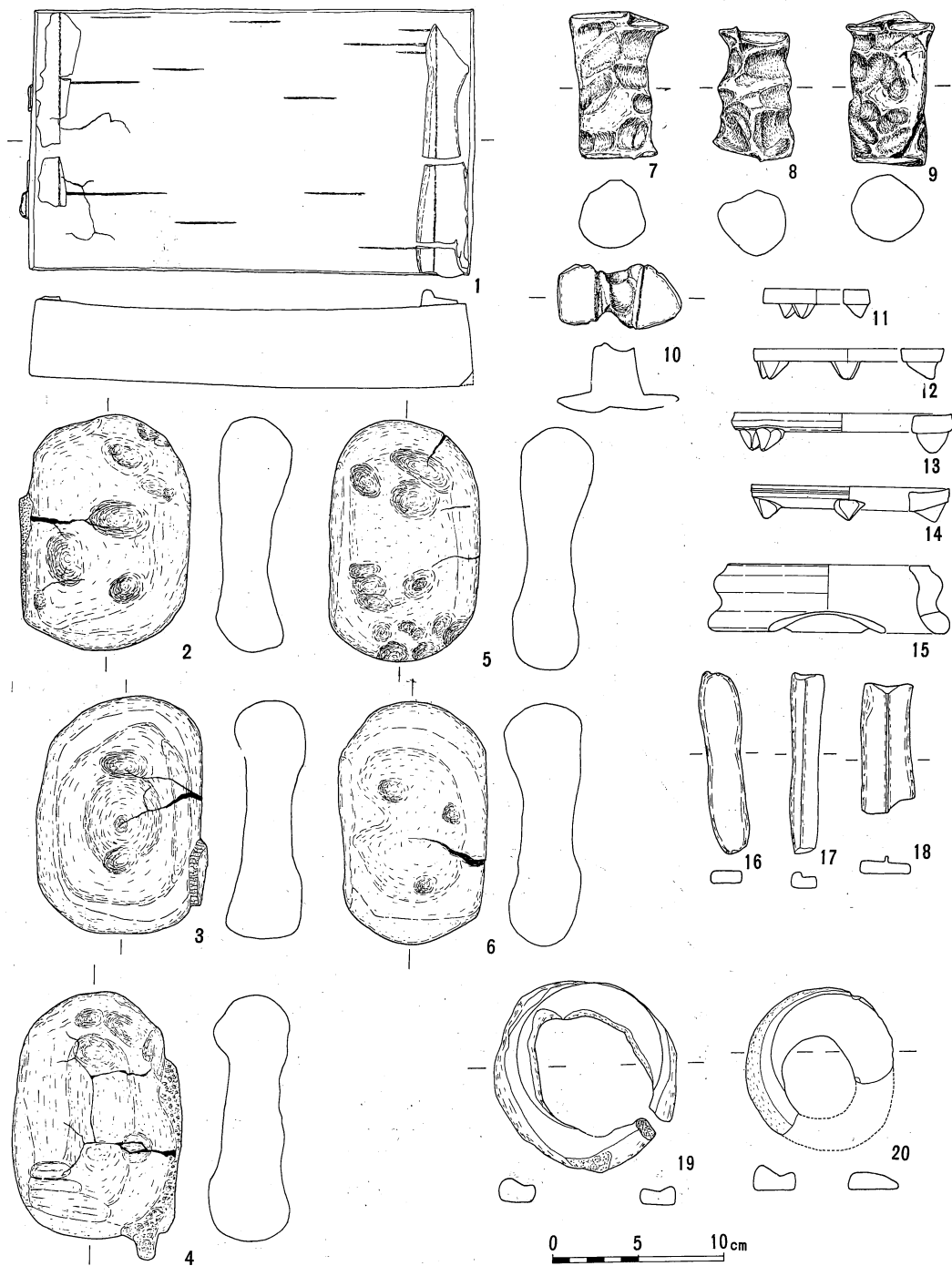
本窯は慶応3年（1868）に松助の出資のもとに盛右衛門、五右衛門によって構築されたものであろう。したがって赤羽焼初期のものであるため、赤羽焼の歴史、特に窯の変遷を知るうえで大変意味のあるものと思える。また、瀬戸や美濃地方との関連、製糸業との関連も考える必要がある。

赤羽焼が、世にその名を知らせる原動力となったのは製糸用鍋であり、絶えまぬ開発であつたらう。赤羽焼の胎土が製糸用鍋に適していたこともその一因と考えられる。つまり、赤羽に産する粘土は、鉄分を多く含み、製品は軽く、強くそれ故に製糸用鍋専門の窯場と成り得たものであり、ここに赤羽焼の運命すべてが託されていたのであろう。また特有のダンゴ型レンガ（クレ）を生み出したことにも歴史を支えた創造性が感じられる。

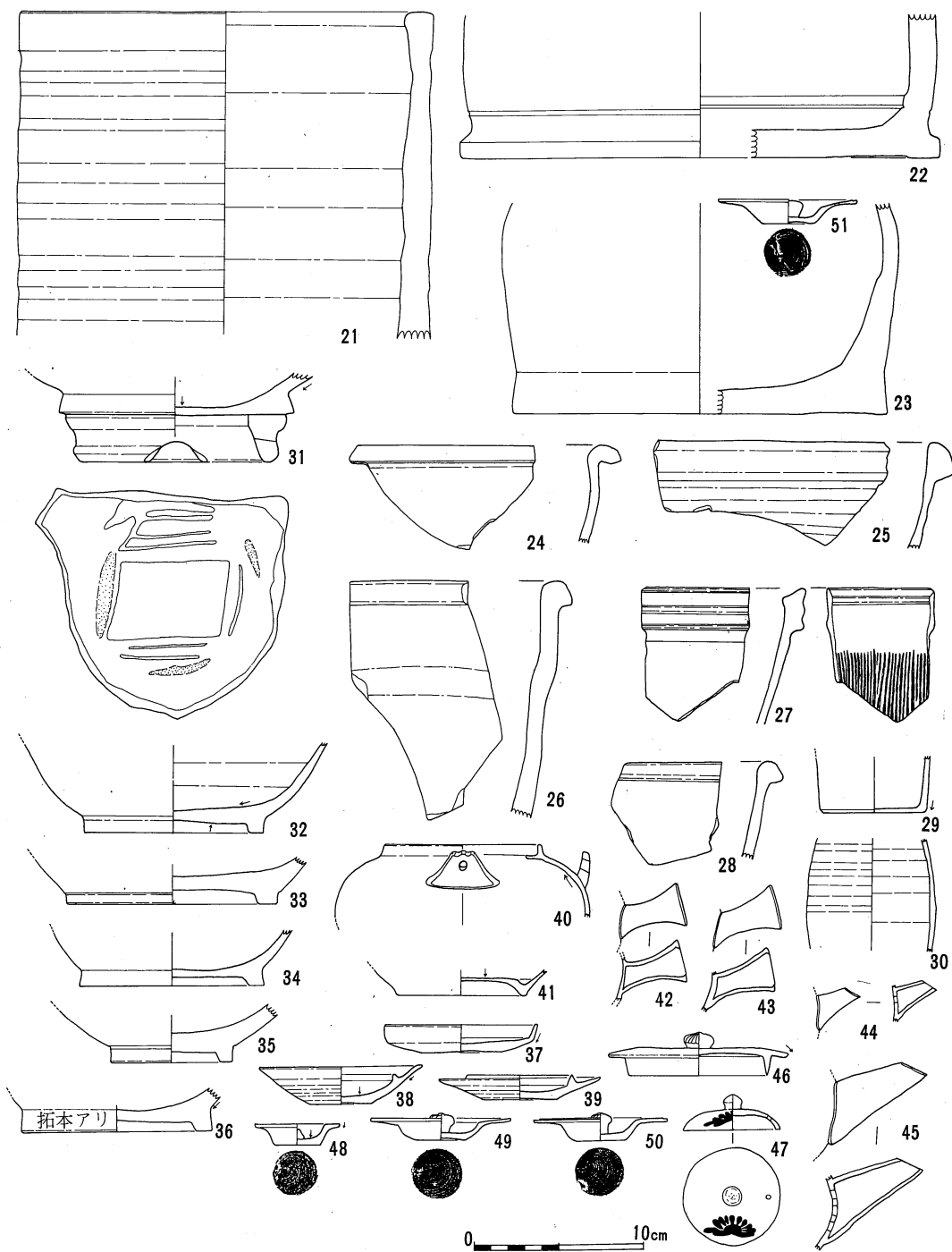
（一条）



第 230 図 大久保尻遺跡地形図 (1 : 800) および赤羽焼カマド址実測図 (1 : 80)



第 231図 大久保尻遺跡，赤羽焼カマド跡出土遺物（その1）（1：4）



第 232 図 大久保尻遺跡，赤羽焼カマド跡出土遺物（その 2）（1：4）

6. 神送遺跡 (KYC)

1) 位置

本遺跡は、辰野町赤羽 2016 番地一帯に所在する。荒神山丘陵を南に望む、天竜川の東岸段丘上に立地し、南には、伊那山地から天竜川に流れ込む、沢底川が流れている。沢底川、天竜の河岸段丘と伊那山地に三方を囲まれた三角形のテラス状地形で、東から西へ傾斜している。水田地帯で、山裾を流れる東天竜用水を使っている。台地状テラスの南半は、沢底川の氾濫によると思われる砂礫の堆積がみられる。中央道はこのテラスの中央部を切って通過するため、今次調査の対称となった。この地は昭和47年に圃場整備事業が行なわれた際弥生式土器、土師器、須恵器片を出土して集落遺跡であろうと推察されたところである。県道辰野～伊那停線と中央道用地内の間の地籍である。周辺遺跡としては、県道をはさんだ山麓に今回調査の対称となった公家塚遺跡、牧垣外遺跡が北方に続いて存在する。

今回の調査は 685+40 を A A に 687+90 までを、トレンチとグリットを設定して行なった。

(小松原)

2) 平安時代の遺構と遺物

調査の結果、平安時代の竪穴住居址三軒を確認した。その配置は遺跡南端に 1 軒、北端に 2 軒であり、その距離は 230m に及ぶ。

ア 1号住居址 (図 233の 2・234の 1～9、図版 60の319・61の323・324、)

遺構、遺跡の北端、県道寄りに位置し、2号住居址の 5m 南に検出された。方形プランを呈する住居址でその規模は南北 3.28m を計る。西半は耕作による破壊で、床面もはっきりつかめなかった。床面は、砂礫混り粘土質の黄褐色土で湿気を多く含んでいるため軟弱である。主軸方向は N-22°-E である。

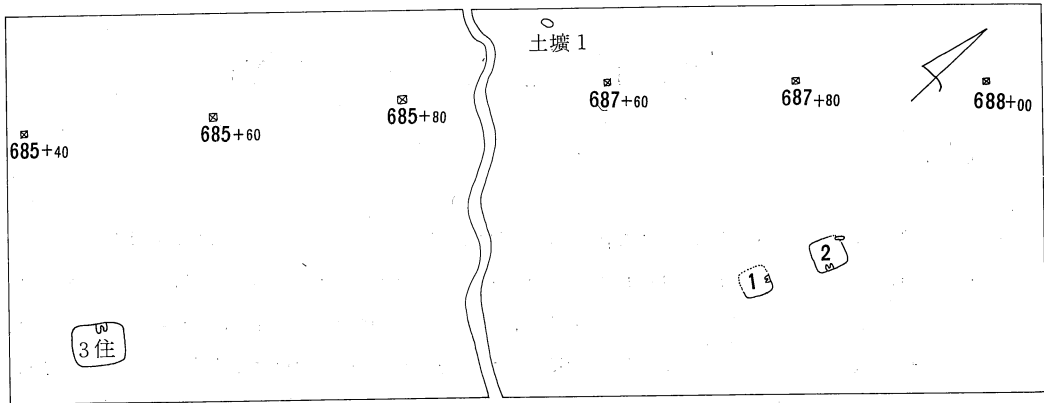
カマドは北壁中央と思われる位置にある石組粘土カマドである。形状は崩れていて明確でないが 70×80 cm くらいであろう。組まれた石は、焼けて赤変しているのもあり、焼土も確認された。東壁に沿って三個の穴が認められたが支柱穴とは思えない。真中の穴には、焼土が混入されてあった。

遺物、出土はカマド内とその周辺である。1は土師器内黒の坏で内面に篋による放射状の暗文がある。5～6は甕形土器で胴長の器形をとる。5には外面縦方向に刷毛目痕が顕著にみられる。8は須恵器坏で底部は糸切底、9は須恵器長頸壺の頸部片である。

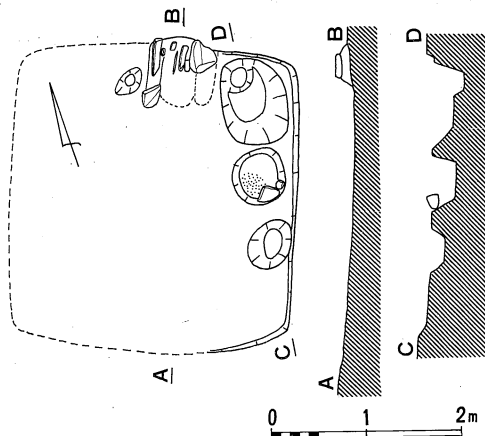
(山岡)

イ 2号住居址 (図 233の 3・234の10～19、図版 60の320・61の325)

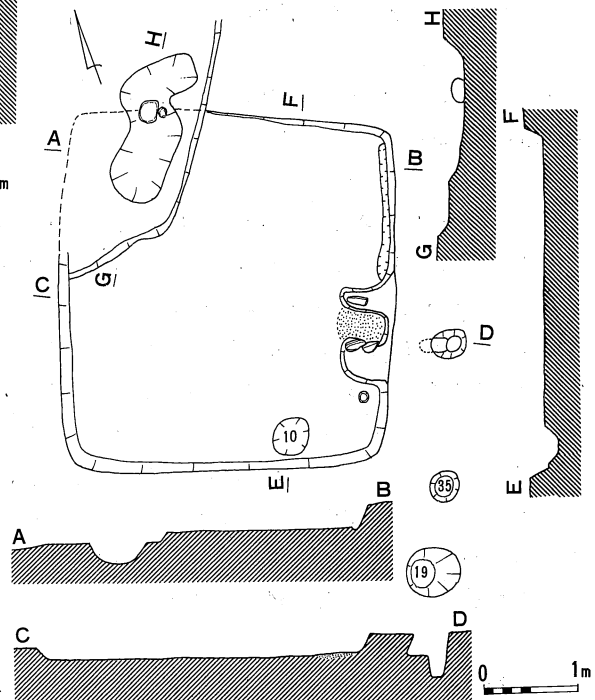
遺構、1号住居址の北に 5m 離れて検出された本址は、東壁に対し西壁がやや長い方形を呈するプランで、その規模は、3.57×3.75m を計る。主軸方向は N-112°-E を示す。北西隅には後世の土壇 2 が



1. 神送遺跡遺構全体図 (1 : 800)

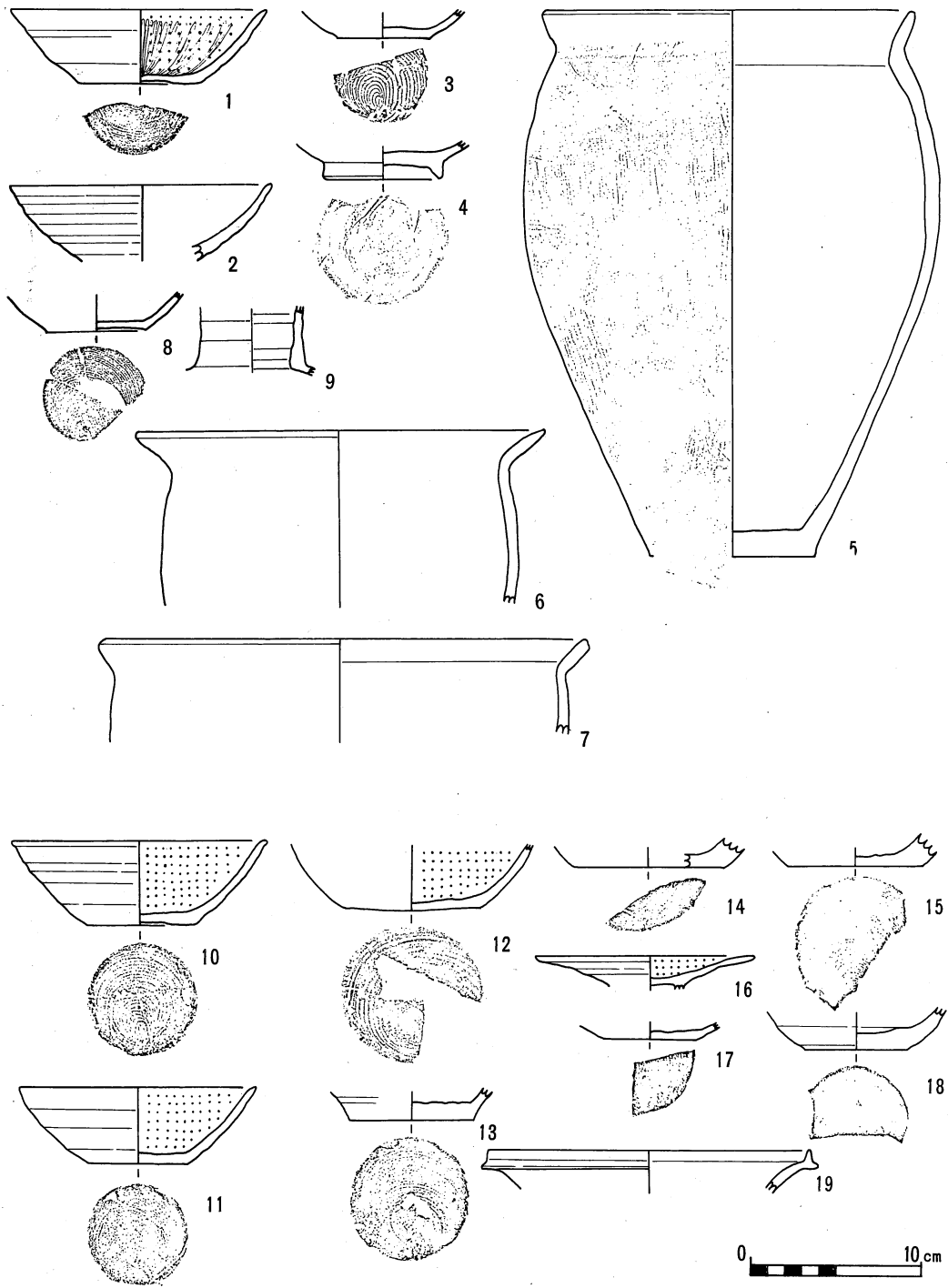


2. 神送遺跡 1号住居址実測図 (1 : 80)

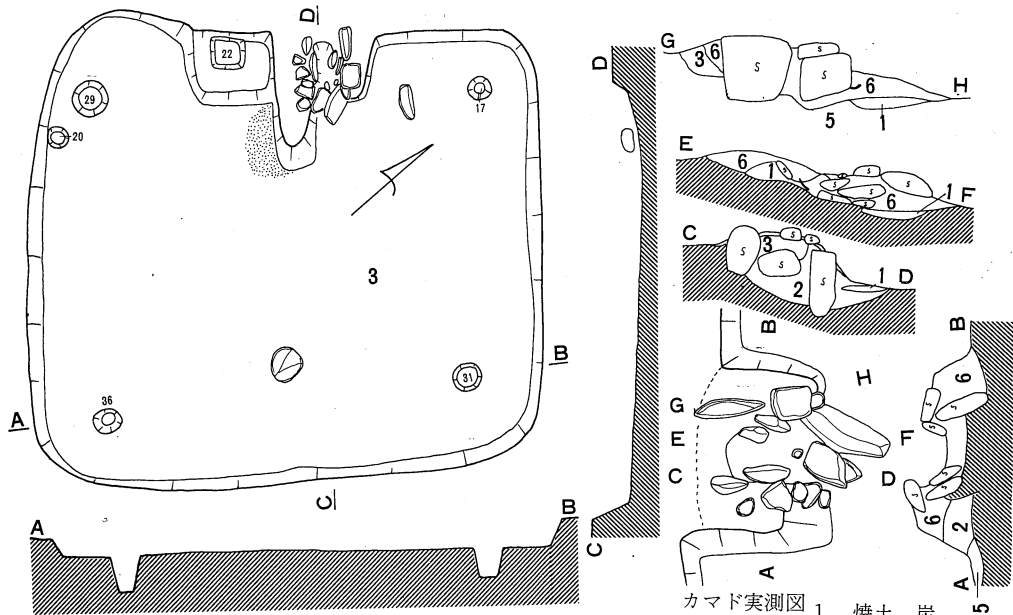


3. 神送遺跡 2号住居址実測図 (1 : 80)

第 233図 神送遺跡遺構全体図 (1 : 800) および 1・2号住居址実測図(1 : 80)



第 234 图 神送遺跡 1・2 号住居址出土土器 (1 : 4)
 (1~9 1 住, 10~19 2 住)



第 235図 神送遺跡 3号住居址 (1 : 80) および 3号住居址カマド (1 : 40) 実測図

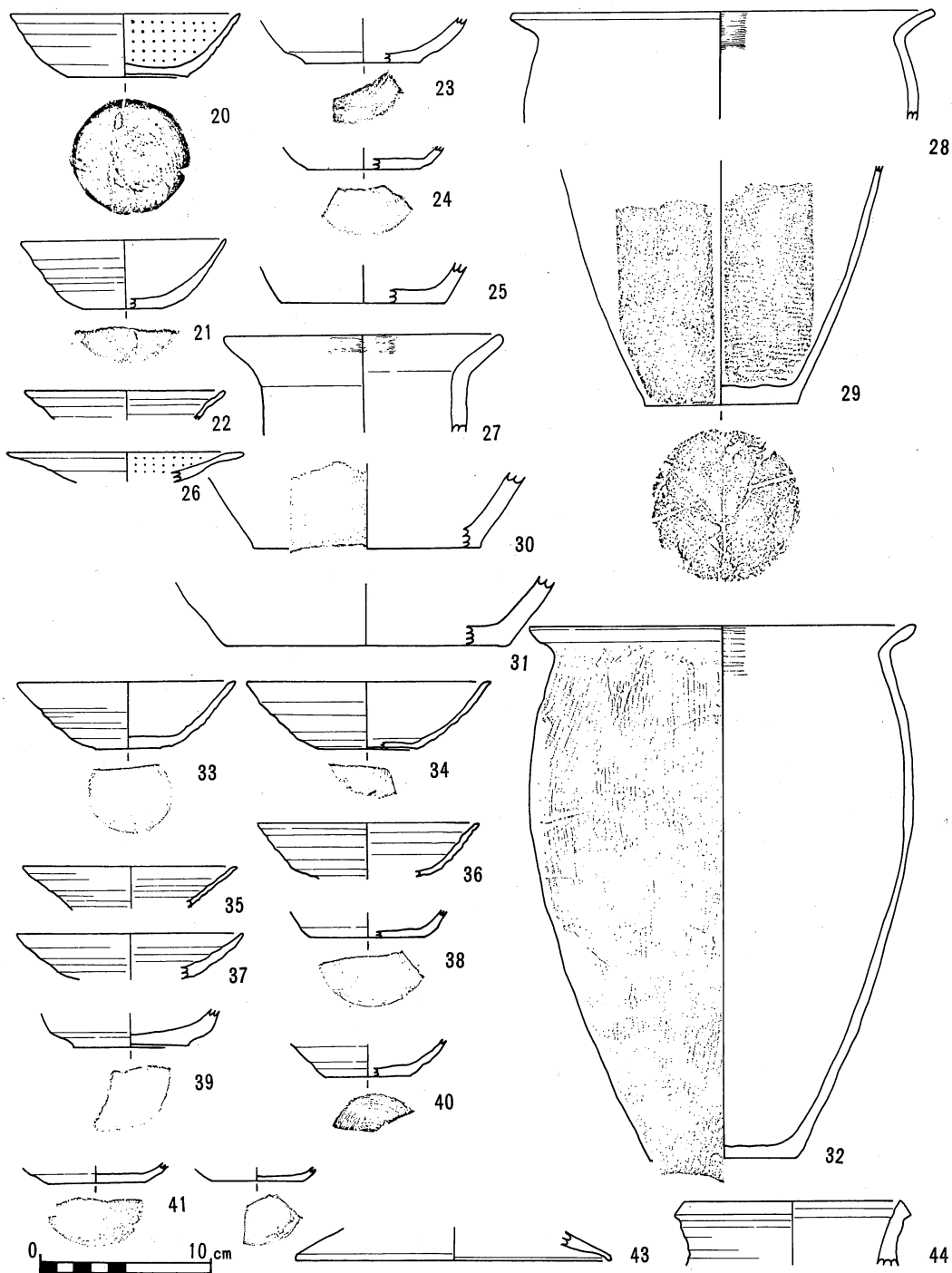
掘り込まれてある。周壁は浅く 20cm 前後であり、床面は黄褐色粘質土で、周壁沿いは軟弱であるが、中央部は堅い面をもつ。カマドは東壁中央やや南寄りに位置する石組粘土カマドで上部は破壊を受けている。焼土は内部一面に 5~7cm の厚さで確認された。カマドの壁外には、ピットがあり、カマド方向を向いてやや弯入するが、煙道であるかの確認はない。主柱穴は住居址内にはみとめられない。南東隔壁外に 2 個のピットがみられるが、本址に伴うかどうか不明である。屋内施設として南壁に深さ 10cm の摺り鉢状のピットが検出されただけである。

遺物、カマド周辺と東壁沿いの床面から遺物の出土をみた。10~12 は土師器の坏で内面を黒色に仕上げている。底はいずれも糸切痕を残す。16 は土師器の皿形土器で高台をもつ。17~18 は須恵器の坏、19 は須恵器の広口壺口縁部片である。

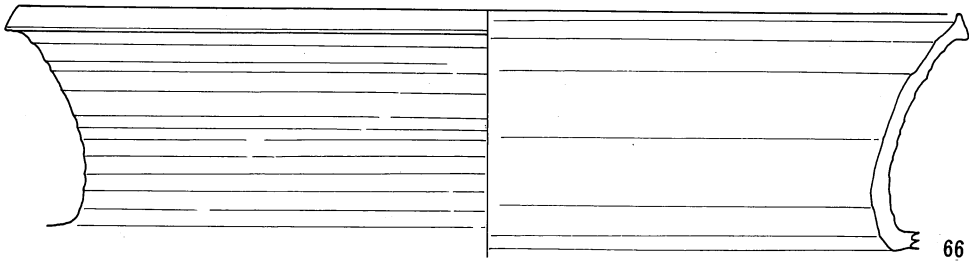
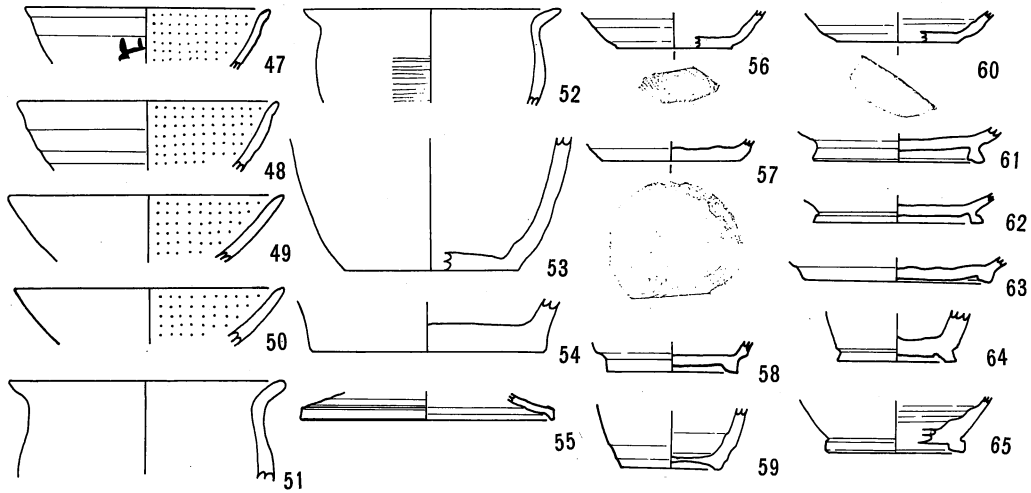
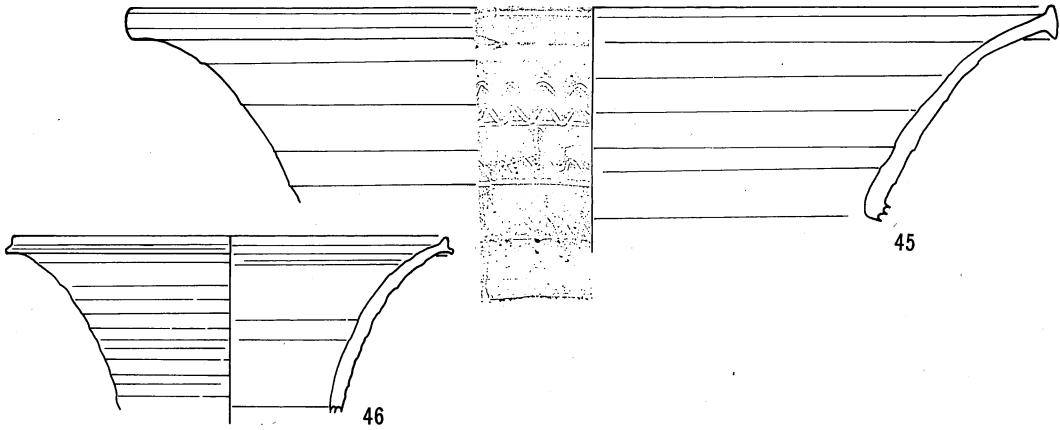
(八木)

ウ 3号住居址 (図 235・236・237 の 45・46、図版 61 の 321、)

遺構、遺跡地南端に検出された本址は、方形プランで 4.73×5.5m の規模をもち、主軸方向を N-52°-W に示す住居址である。黒色土層から掘り込まれ、しかも黒色土層に床面が構築されているため、プラン検出に困難をきわめた。壁高は 20~40cm であるが軟弱である。床面はカマド周辺が堅緻であるが他は概して軟弱であった。主柱穴は 4 隅に 4 箇所検出されている。カマドは北西壁中央に構築された石組粘土カマ



第 236 图 神送遺跡 3 号住居址出土土器 (1 : 4)



第 237 図 神送遺跡 3 号住居址およびその他出土土器 (1 : 4)
 (45~46 3 住, 47~66 その他)

で、保存状態は1、2号住居址のそれと較べれば大変良い。芯に組まれた石は大きなもので、堅固である。カマドの左部分は50cmの方形に盛り上がり注目される構造である。用具をのせる棚的なものであろう。

遺物、出土はカマドおよびその周辺の床面からが大半を占める。33～44は覆土出土である。土師器、須恵器の環が個体数では多い。20は土師器の内黒環で糸切底をもつ。27～32は甕形土器であり、32でみるように長胴形の器形をとる。外面には縦方向に内面口縁部は横方向に刷毛目痕がみられる。また29には底部に木葉痕が施されている。45、46は須恵器の広口壺で、45は口径49cmを計る大きなものであり、波状文が3段に施されている。(市沢)

エ その他の出土遺物 (図 237の47～66)

遺構以外での出土遺物には、土師器、須恵器、灰釉陶器の破片がある。47～50は、土師器の内黒環で、47には判読できないが墨書がある。51～54は土師器の甕形土器の口縁部、底部片である。55～63は須恵器で、環、高台付碗の破片のみである。66は須恵器の大きな広口壺であろう。口縁部径50cmを有る。64、65は灰釉陶器片である。高台付で、壺、碗器形をとるものと思われる。(八木)

オ 土 壙

本遺跡で2基の土壙が検出された。土壙1は、1、2号住居址より西方へ35m程隔たった地点にあり、長径150短径75cmの楕円形を呈するもので深さは50cmの摺鉢状をなすものである。出土遺物もなく時期不詳である。

土壙2は、2号住居址北西隅に掘り込まれたもので不整形であり、断面は2段に落ち込む。時期不明である。(八木)

3) ま と め

昭和47年の圃場整備事業に際して、弥生式土器、土師器、須恵器の出土をみて集落遺跡であると予想された本遺跡は、期待とはいささかはずれて、3軒の平安時代に位置づけられる竪穴住居址と時期不詳の土壙2基が検出されたにとどまった。集落の中心はやはり、県道伊那辰野停線と中央道用地の中間地帯である圃場整備された水田地帯であることが予想される。今回発掘の3軒は、距離的にも相当隔たりがあり、1、2号住居址は集落の北限、3号住居址はその西限を指すものと考えられる。かかる意味で、その範囲をある程度知り得たことは、今次調査の大きな成果といわなければならない。

発掘された3戸の竪穴住居址は、1・2号とも小規模なもので、柱穴の確認もない。鉄器の普及が或る程度進んだ時期であるから上屋を支える柱は無縁建てられるわけで、柱穴の必要はないと考えることも可能であろう。三住居址とも、土師器、須恵器を主体にし、少量の灰釉陶器を伴出している。

生産を示す用具の検出はなかったが、天竜川が大きく蛇行する段丘下の沖積平地は、水田耕作にふさわしいものであったにちがいない。(八木)

7. 公家塚遺跡 (KLB)

1) 位置

本遺跡は、辰野町平出小字大榎2235番地一帯に所在する。辰野東小学校の南東に位置する山麓の傾斜面で標高740mである。東から西に傾斜した南北に細長い地籍であり、標高730mラインに沿って、東天竜用水が南流している。この用水の東側は主として桑畑、西は水田となっている。

山林中には、公家塚と刻んだ石があり、本遺跡の呼称となっている。以前は塚があり、その塚はこわされて山林中へ石だけが運ばれたものと聞く。この塚は九州へ防人に行く人などが病気のために死亡した霊を村人が葬ったものといわれている。

周辺遺跡としては、県道伊那辰野停線をはさんで南に神送遺跡が、尾根をこした北に牧垣外遺跡が存在する。両遺跡とも今回調査の行なわれた遺跡である。

今回の調査は、689+40をAとし東天竜用水路東側690+00にグリットを設定し、また用水路西側にY区を設け689+00までにグリットを設定して行なった。表土は浅く、わずか20~30cmで礫混りのロームに達した。

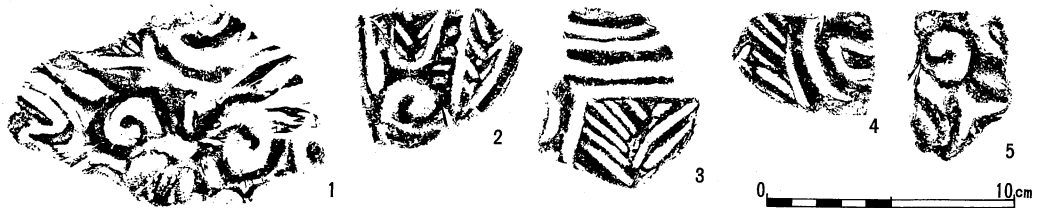
2) 縄文式時代の遺物 (図238)

発掘調査の結果、遺構の検出はなかった。わずかに縄文中期後半の土器片をみたのみである。1~5は渦巻文、綾杉文を施す、加曾利E式土器に比定されるものである。

3) ま と め

過去の分布調査でも縄文中期土器片を採集しており、今回出土のものと同様に内容と同じにする。地形からして、住居を営むには余り適地とは思われない。狩りよう採集の場所であったと思われる。

(福沢)



第 238 図 公家塚遺跡出土縄文式土器 (1 : 3)

8. 牧垣外遺跡 (MCA)

1) 位置

本遺跡は、辰野町平出小字牧垣外 2217 番地一帯に所在する。辰野東小学校の東に位置する山麓で、標高 730 m ラインを山麓に沿って東天竜用水路が南流している。水路の東は緩斜面の畑で、小尾根間の谷間へ続く。西は、階段状の水田が県道伊那辰野停線まで続く。中央道は用水路東の山麓地帯を大きく山を削り取って通過するため、今回の調査はこの緩斜面の畑地帯を行なった。

周辺遺跡としては、小尾根を越した南に公家塚遺跡、小尾根を越した北に大窪遺跡があり、いずれも今回調査の対象になったものである。

調査は 691+00 を A A とし、691+90 までグリットを設定して行なった。

2) 遺構と遺物

ア 縄文式時代の遺構と遺物 (図 239)

A 地区 E 49・48 に径 40cm の焼土面が確認され、附近から散発的に土器の出土をみた。谷筋になっていてグリット掘りの所見から土砂の再度に及ぶ堆積があり、各時期の土器が混在していた。

出土土器は 3 群に大別できる。1 群は、縄文を有す灰黒色の 1、半截竹管工具による平行沈線文の 6・7・10・20、などで縄文前期末に比定されるものである。2 群は 8・12・13・15 など縄文中期中葉のもの、3 群は 26、27 に代表される磨消縄文を有する縄文後期前半に位置づけられるものである。土器の出土量は少なく全部で 40 片のみである。

石器、1～4 の打製石斧のほか、5 の尖頭状石器、6 の両側に剝離調整をもつ両刃のスクレーパー状石器がある。また 7 の石鏃の出土もあった。

イ 平安時代の遺構と遺物

ア) 1 号住居址 (図 240、図版 63)

遺構、調査区のほぼ中央尾根筋に検出された本址は、方形プランを呈する南北 4 m を計る規模の住居址で主軸方向を N-128°-E にもつ。東から西へ傾斜する地形に作られたため、北壁・東壁は高いが、西へ行くほど低くなり、西壁は確認することができなかった。床面は平坦であるが、やや軟弱である。カマドは、東壁中央に位置する石組粘土カマドであり、上部は破壊されているが規模はほぼ判明する。内部はよく焼け 5～8 cm の焼土の堆積がみられた。カマドの南には貯蔵穴と思われる深さ 30 cm の穴が掘られてあり、床面上には他に 6 個所のピットが存在するがいずれが支柱穴が判断し兼ねる。

遺物、出土遺物に土師器、須恵器、鉄製品がある。30は土師器内黒坏口縁部片であり、31・34は甕の底部である。31には縦方向、34には横方向の刷毛目状痕があり、糸切痕が残る。32は須恵器甕底部である。鉄製品35は不明。この他、灰釉陶器小破片の出土もみた。

3) ま と め

天竜川左岸の伊那山地山麓に位置する本遺跡から、縄文前期末、中期、後期の土器片と焼土面、平安時代の竪穴住居址1軒を検出することができた。縄文期のものは量的に少なく、わずかに生活の痕跡を認めたに過ぎない。しかし一時期のみの訪れでなく再三にわたるもので、本遺跡周辺は、住居を構えるには不都合な場所であっても、採集経済における生活の糧を得るには良好な地であったと思える。それに天竜川に沿ったこの地は、通路としての道筋に当たっていたことも予想される。その結果が単一時期のみに終わらないものと思える。

検出された平安期の住居址は、小規模住居で柱穴も明確なものではない。土師器、須恵器の他に少量の灰釉陶器を伴っているものである。散在的な在り方で、遺跡の中心は西方水田地帯と思われることから、本址は、東限をさすと同時に、最高位に営なまれたものといって差しつかえない。(山田)

9. 大 窪 遺 跡 (OAA)

1) 位 置

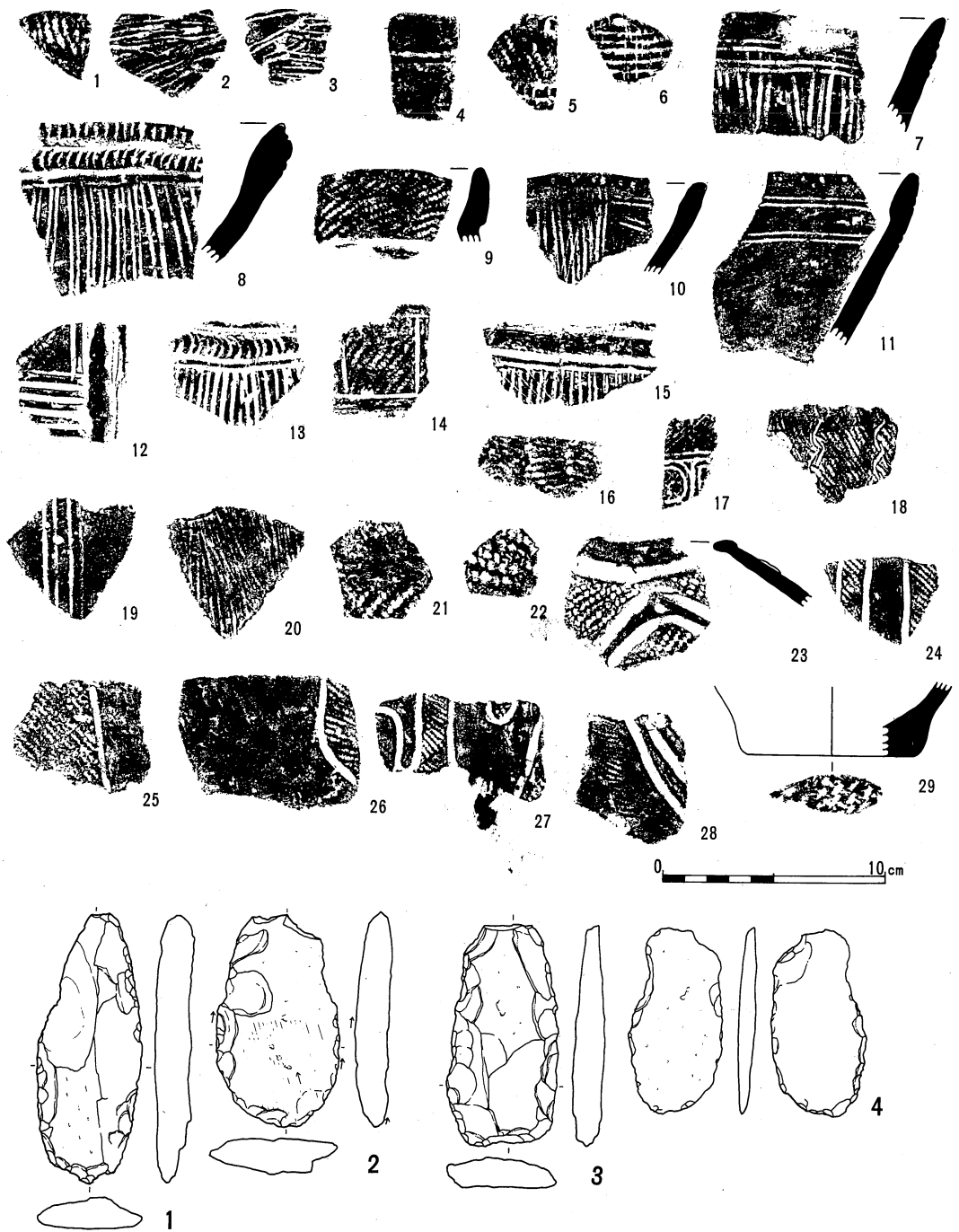
本遺跡は、辰野町字平出小字大窪2413の2番地一帯に所在する。天竜川左岸、平出下町の東山麓に、石棒を御神体として奉ずる法性神社が存在する。この法性神社の裏山、すなわち伊那山地の山腹に近い位置に本遺跡はあり、標高750~760m地点である。中央道は本遺跡の頂部を横切って南北に通過するため今回の調査となったが、遺跡の中心は下方である。

遺跡の北方には、昨年度調査の越道遺跡、山の神遺跡があり、やや北西へ下った地点には、辰野町唯一の古墳である「御陵塚」「御射宮司古墳」がある。古代東山道の道筋でもあり、延喜式、吾妻鏡に見えている信濃御牧の一つである「平井手牧」の所在地とも推定されている一帯で、古くから続く歴史の痕跡が濃厚にみられるところである。

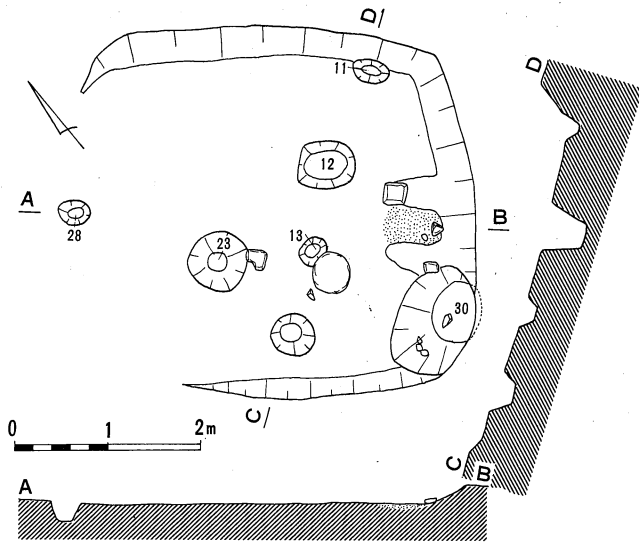
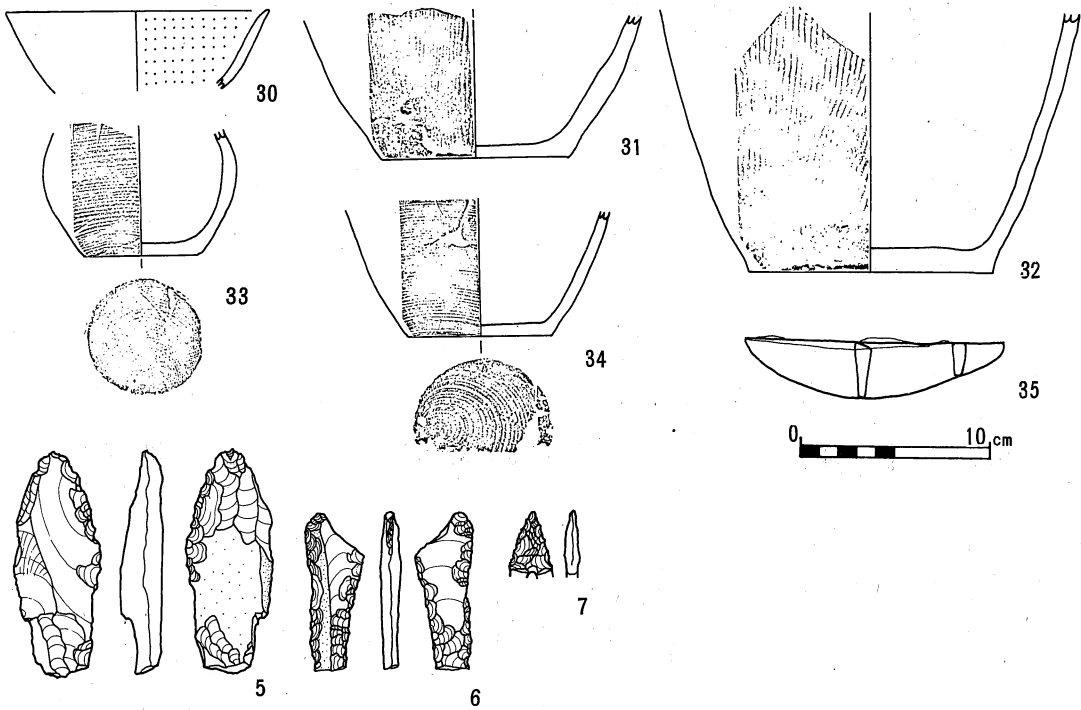
今回の発掘調査は、山腹の二つの尾根間の凹地で行なわれた。山からの押し出しによる黒褐色土層が厚い。693+60をAAとし、BEまで、巾40~53にグリットを設定して行なった。

2) 縄文式時代の遺物 (図241)

遺構の検出はなく、土器片が少量出土したにすぎない。出土した土器は、いずれも縄文中期初頭に比定



第 239 图 牧垣外遺跡出土土器・石器 (1 : 3)



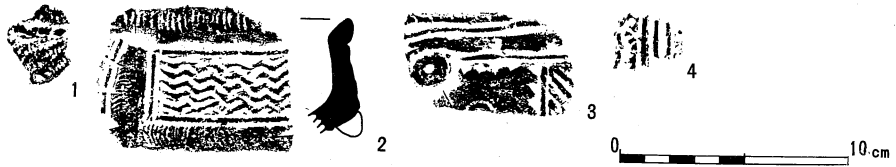
第 240 図 牧垣外遺跡 1 号住居址実測図 (1 : 80) , 同出土
土器 , 鉄製品 (1 : 4) およびその他出土の石器 (1 : 2)

されるもので、半截竹管工具による平行沈線文・爪形文が施されている。

3) ま と め

今回の調査は、遺跡地最東端の山腹部の調査ということで遺構の検出は始めから期待できなかった。しかし、土器片を得て、生活の痕跡は確認できたことになる。出土土器は縄文式時代中期初頭のもので、編年的にも、型式的にも多く問題をもっている一群である。今回その資料を加え、東山麓に沿って刻時期の遺跡が点在することから、この時期における遺跡立地が今後問題とされよう。

遺跡の中心は、法性神社前方に広がる平坦地であろう。また法性神社の御神体が「石棒」であるということもおもしろい。古い型態の信仰と思われ、石神につながるものではないだろうか。出土地不明であり、拝観不能ということで形態も不明であるが、祭礼の際、あやまって落したのを見た婦人達が顔を赤らめたという話から有頭のものであろうと思われる。(市沢)



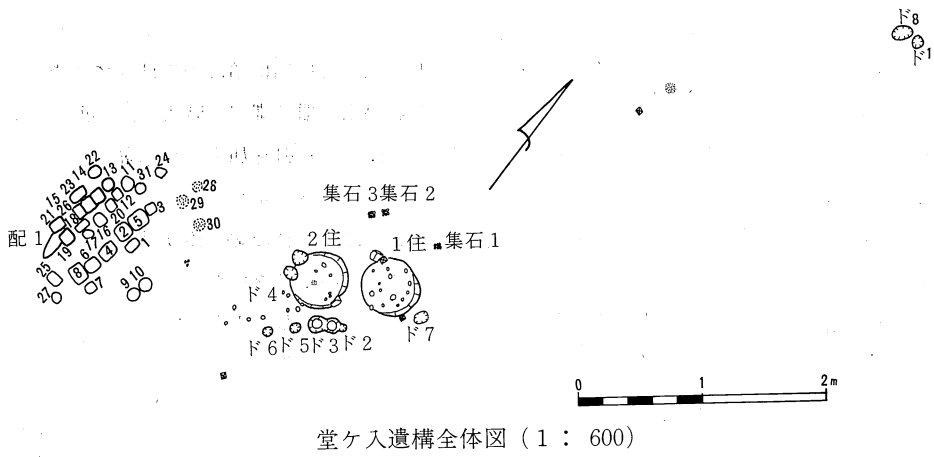
第 241 図 大窪遺跡出土縄文式土器 (1 : 3)

10. 堂ヶ入遺跡 (DGA)

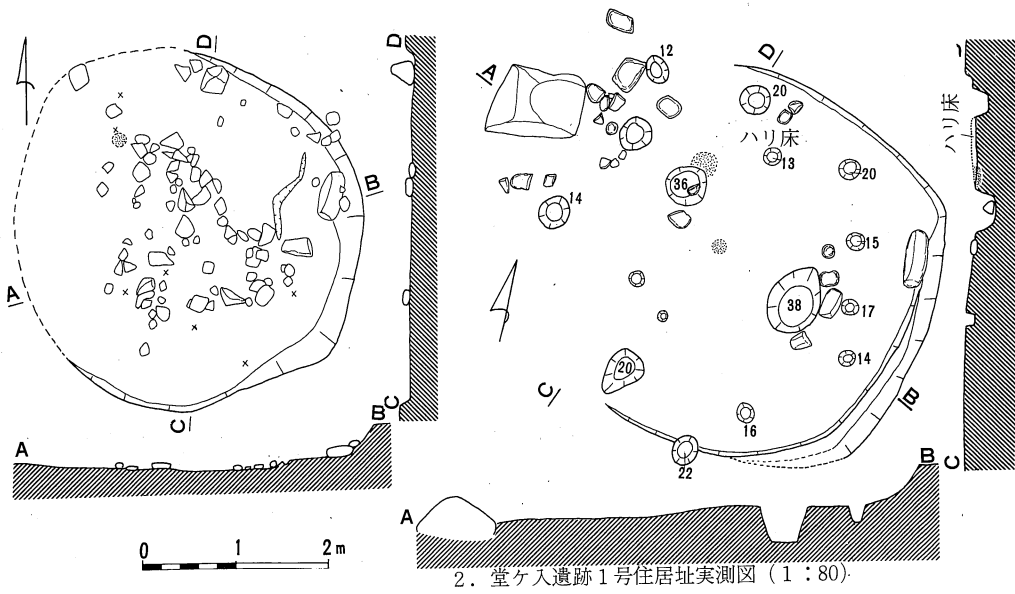
1) 位置 (図 6、図版 64、)

本遺跡は、辰野町平出堂ヶ入 2921・2931 と 2882 番地一帯に所在する。伊那山系の山腹に位置し、天竜川に向って傾斜する尾根と尾根の間の凹地に立地する。井出の清水遺跡の南にあり、平出上町、高德寺まで続く傾斜した丘陵となっている。中央道はこの山腹を南北に切って、遺跡の東端をかすめて通るため今回の調査となった。現在は畑地となっていて、山裾の東天竜用水まで、それが続く。標高 740~760 m の地点である。

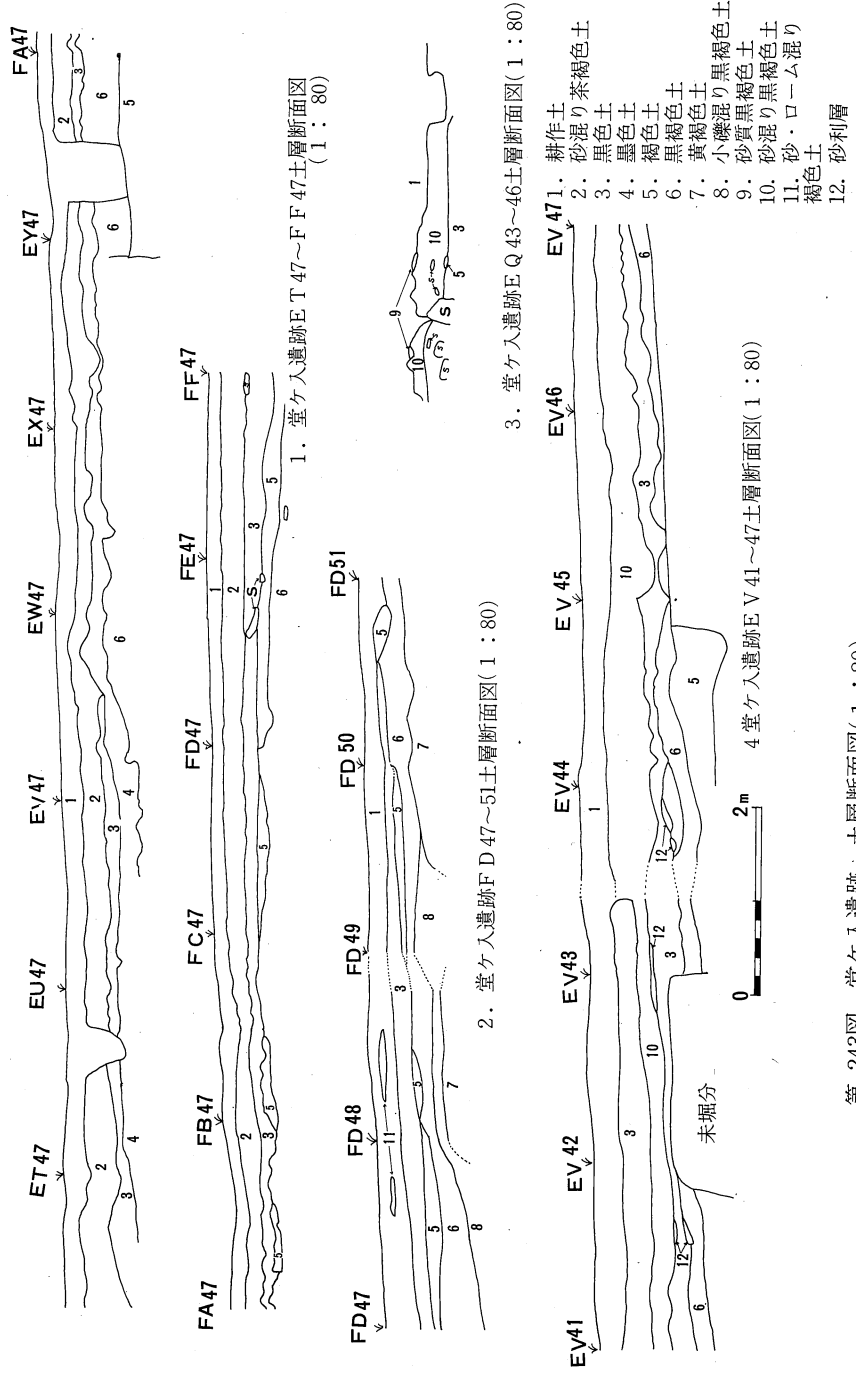
調査は小尾根をはさんだ南側の丘陵と北側の凹地に、706+40 を A A として行なった。南側は 706+40 から、707+70 まで、巾 48m にグリッドを設定して行ない、北側は 708+80 から 710+00 まで、ほぼ全面発掘を行なった。この地は、かつて大雨毎に土砂の押出しがあつて、層序は地点毎に複雑な様相を示している。20cm でロームに達するところもあれば、140cm でようやくローム層移行の褐色土層という地点もある。伝承では、かつてこの地に高德寺が存したが、山津波のため、平出地籍に移ったということもあつて層序との間に共通点が感ぜられる。(山岡)



1. 堂ヶ入遺跡遺構全体図 (1 : 600)



第 242図 堂ヶ入遺跡遺構全体図 (1 : 600) および1号住居址実測図 (1 : 80)



第 243図 堂ヶ入遺跡，土層断面図(1:80)

2) 遺構と遺物

ア 縄文式時代の遺構と遺物

ア) 1号住居址 (図 242・244・245・246の1～16、図版 65・66、)

遺構、2号住居址の東隣りに接して検出された本址は、大略東から西へ傾斜した土地に構築されたため、西壁は不明確であるが、南北4.02mを計る規模の円形プラン住居址である。発掘中、覆土中に多量の自然石が、住居址中央辺に密集して検出された。土砂くずれによる堆積とは言い切れない状態であるが、如何なる所産かは判断に苦しむ。隣接の2号住居址には認められず、本址に何らかの目的をもった故意の石の投げ入れがあったものと思われる。

本址壁の状態は、西側は消滅し、東壁は垂直に近い角度で掘り込まれているが軟弱であり、その高さは35cmを計る。西へ行くにつれてその高さを減ずる。床面はローム土へ小礫の混在があって良好とはいえず、また軟弱でもある。北壁沿いに貼床が検出された。住居址の中央辺やや北寄りの2個所に焼土が認められたが炉址とは断定できない。柱穴とおもえるピットが周壁に沿っていくつか検出されているが、支柱穴がどれかは判断に苦しむ。貼り床の存在と、南東周壁にみられる有段から、建て直しが行なわれたのではないかと推察される。

遺物、覆土の下層から床面に多くの土器片と石鏃および黒曜石片の出土をみた。

土器は、諸磯C式、十三菩提式に比定される縄文前期末のものである。1～4は結節状浮線文土器であり、2には、ボタン状突起が付けられている。9～13・31は、平行条線文が綾杉状に施され、二個一對のボタン状貼付がある。この種土器は、平縁のほかには波状口縁をもつものがある。14～29は、平行沈線文が直線状または曲線で器片に描かれる一群で、中にはレンズ状(20)に施されるものがあり、特長となっている。この種土器の底部は、28・29に見るように、底部が突き出た状態で、底部からの立ち上がりは内傾する特色を有する。33は口縁部および突起に円形竹管文を配列し、格子状の平行沈線文を区画内にもつもので、本址からの出土量は少ない。34～40・42～43は、口縁部に三角形印刻文をもち、その下に結節状浮線文を口縁に平行に施してある。更にそれが胴部へ円弧を描いて付されるものと、羽状縄文をもつものがある。赤褐色を呈し焼成のよい土器である。50～55は、沈線文間に太形沈線をもつ一群である。46～49・56～59は刻目浮線文を有するもの、63～66は縄文を地文とするもの等で、本址出土土器は、文様構成からしては多様性をもっている。これら土器からして本址は、縄文前期末に位置づけられよう。

石器は、石鏃(1～8)石錐(9～11)剝片石器(12～15)磨石(16)が出土している。(山岡)

イ) 2号住居址 (図 247・248・249の107～135・246の17～31、図版 67・69)

遺構、1号住居址の南隣りに検出された本址は、5.5×5mの規模をもつ円形プランの住居址である。傾斜面に構築されているため、北から東の壁は50cmと高いが、南と西壁は認められない。支柱穴は、おそらく5本であったと思われる、床面上には、補助的な支柱になるか10個所ほどのピットが存する。床面は南半分がやや軟弱であるが、北半分は堅く良好である。中央に浅い凹みをもった焼土があり、地床炉と考えた

い。本址南には、土壌 2～6 が検出されている。

遺物、出土遺物に石器と土器がある。土器は内容的に 1 号住居址と同類に考えられるもののみである。70～74 は、結節状浮線文土器、75～89 は平行沈線を施す一群である。綾杉状またはレンズ状に描かれており、ボタン状貼付文をもつ。底部の立ち上がりも、この種土器の特長を示す、内傾したものである。90・91 に代表される、口縁に沿って三角形印刻文が施され、その下に結節状浮線文をもつ一群は、その下に縄文を有するものと思える。92・93・99 の円形竹管文を口縁部にもつものは、1 号住居址でも出土しており胴部に格子状の平行沈線文を区画帯として持つものと思われ、98・105、が同種であろう。101 もその種と同じだが口縁部にヘラ状工具による刻目をもつ点がやや異なる。107～121 は口縁に三角形印刻文をもち太形沈線文を有する一群である。122～135 は地文に縄文を施すものである。かように、1 号住居址と同様、文様構成に多様性をもつ土器で、前期末に比定される土器であることから、本址の時期も、そこに位置したい。

石器は、打製石斧、磨石、石皿、石錐、石鏃、剥片調整石器、局部磨製石器等の出土をみた。(市沢)

ウ) 土 壌 (図 247・249・250・251 の 178～181・246 の 32～34、図版 68・69 の 348)

土壌群は、土壌 1，8 が住居址より北東へ約 50m 離れた地点に検出されたが、土壌 2～7 は、住居址に隣接し、ほぼ直線的な配置を示して確認された。

a) 土壌 1

土壌 8 の東側に並んで検出されたもので、径 1 m の円形を呈し、深さ 28cm である。出土遺物はないが、時期は土壌 8 と同じものと思われる。

b) 土壌 2

2 号住居址の東側に位置し、土壌 3 と重複するが前後関係はつかめなかった。楕円形を呈し長径 1.1 m 深さ 60cm である。下部より人頭大以下の礫および炭化物が検出された。

出土遺物は土器片だけであるが、量は少ない。136 は刻目浮線文を有する口縁部片で、縄文前期末に比定される。

c) 土壌 3

土壌 2 と重複して検出された。楕円形を呈し、長径 90cm を計る。袋状のピットで深さは 90cm ある。土壌 2 との前後関係は明確に把握できなかったが、境と思われるところに平らな石をたてている。上部から下部に至るまで、礫があり、中ほどに土器片が集中していた。更に下部にも土器片があつて、多量の炭、焼土が検出された。

遺物は土器片だけである。137～144 で、137・138 には刻目浮線文、139～140 には平行沈線文が施されている。144 には渦巻状沈線が施され、穿孔が口縁部にある。縄文前期末の土器である。

d) 土壌 4

土壌 3 と接して検出されたもので、径 1 m の円形を呈し、深さ 70cm の摺り鉢状をなす。上部から中ほどに至るまで、人頭大から拳大の礫が不規則に包蔵されていた。その礫と一緒に炭化物、土器片、石器の出土をみた。

遺物は土器と石器がある。145・146 は器形の判明するもので口縁部と胴部である。口縁部はやや内弯

し口縁に平行な指圧痕をもつ隆線で、文様帯が二分されている。上は斜方向、隆線間は縦方向の平行沈線文が細かに引かれ、更にその上から斜方向に沈線が施されたものである。胴部は縦方向の沈線で区画を作り、平行沈線文が鋸歯状、山形状に付されており、胎土、焼成とも良好である。同一個体と思われる。

147～148 は、条線文の上に粘土紐を貼布し、結節状浮線文を作っているもの、149～152 は平行条線文を施したものの、153 は、三角形印刻文と太形沈線文をもつもの等で、これら土器は縄文前期末に比定される。

石器は、石鏃と剝片調整石器の出土をみた。

e) 土壙 5

土壙 4 の南西に検出されたもので、径 1 m の円形を呈し、深さは 30cm と浅い。遺物の出土はない。

f) 土壙 6

径 90cm の円形で深さ 60cm を計る柱状のものである。炭化物、土器片、石鏃の出土があった。土器片は 154～169 で、刻目浮線文、平行沈線文をもつ前期末のものである。

g) 土壙 7

不正円形で長径 120cm 深さ 23cm の摺り鉢状の穴で、内部に炭化物をもつ。土器片は上部から出土した。170～177 の土器片で、170 は波状口縁部片で、条線と半截竹管工具の押しきがみられ、ボタン状貼付文が 2 個 1 対で付されている。174～176 は、三又状文と三角形沈線文が特長的なもの、177 は斜格子状文が施され、頸部に橋状の把手をもつ。前期末に比定される一群である。

h) 土壙 8

土壙 1 と並んで検出されたもので、径 1.1m の円形を呈する深さ 50cm の摺り鉢状の穴である。土器 1 個体分の破片を出土した。178～182 で、口縁部に連続爪形文をもち、平行沈線文が規則的に施される土器である。胴部には縄文をもつ。前期末～中期初頭に比定される土器である。

i) 土壙 9 (図 260 の 5・262 の 73、図版 68 の 342)

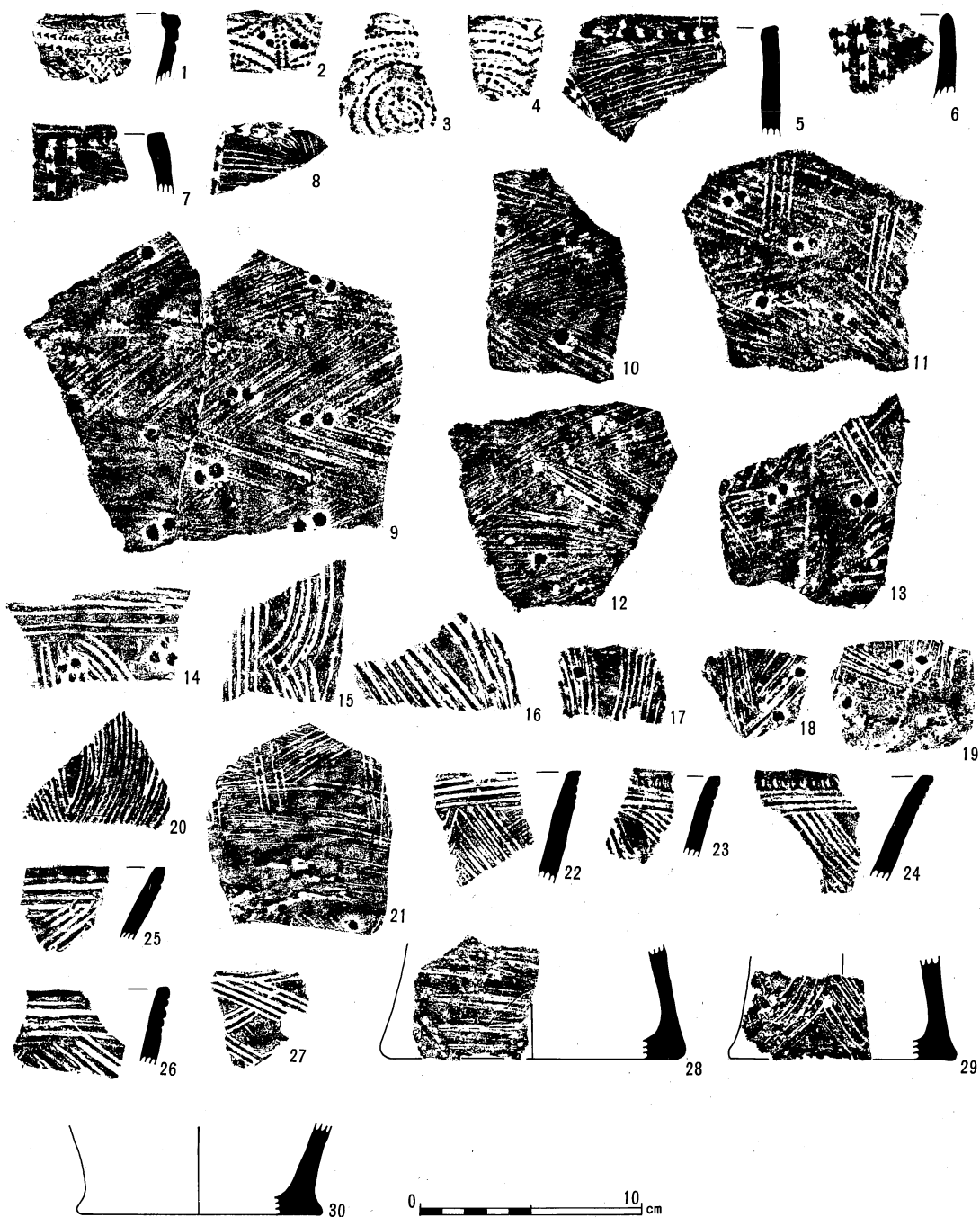
1～8 の土壙は、E・F 区に検出されたものであるが、土壙 9 は、尾根の南側 A 区に検出されたもので 1～8 と時期的にも異なる。

土壙 9 は、東から西へ傾斜した丘陵に、南北 5.7m 東西 3.1m の掘り込み内に、更に掘り込まれたもので、南北 2.45m、東西 1m の長方形を呈する。深さは掘り込み内から 20cm であり、多量な炭化物に混って熙寧通宝と思われる古銭片の出土があった。中世に位置づけられるものであろう。

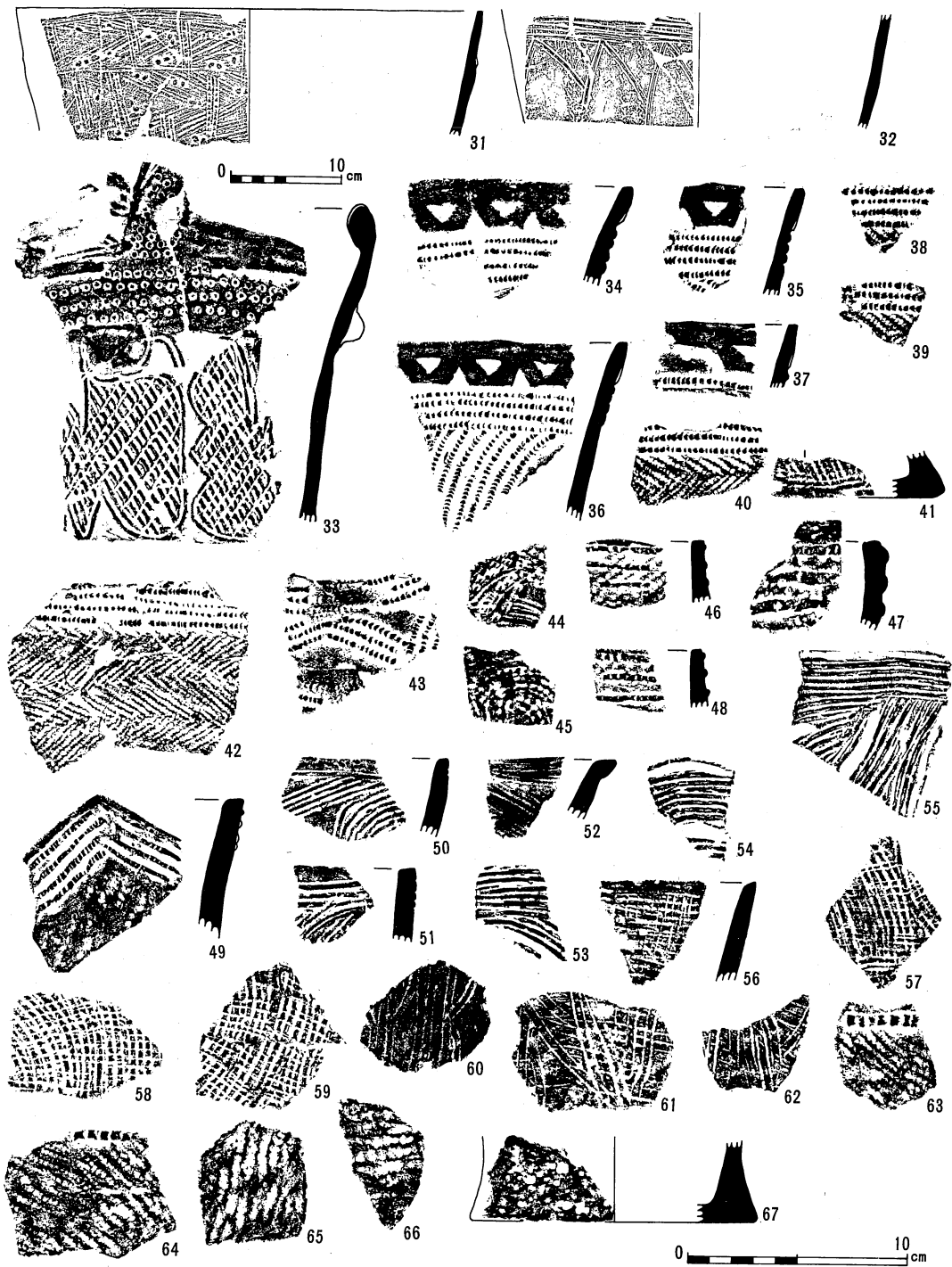
エ) 集石 1～3 (図 260 の 2～4)

1 号住居址の北西側に 3 個所の集石が検出された。形状は一定しないが、60～100cm の範囲に拳大～人頭大の石が一括されている。黒褐色土層の上に集石されるが、その間層に砂利層が認められ、遺物の出土はなく、時期不詳である。

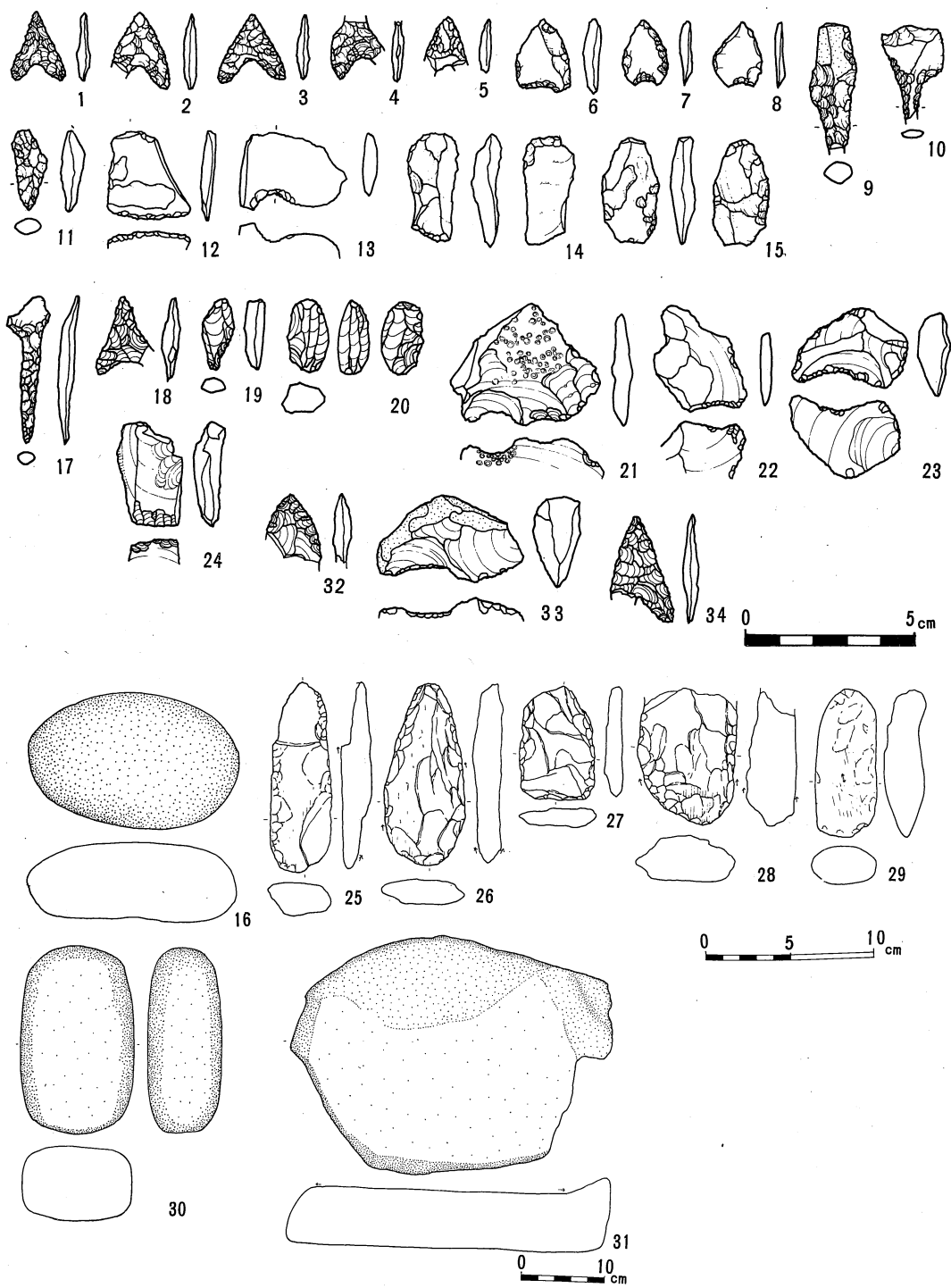
(八 木)



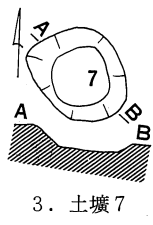
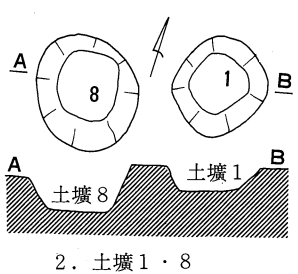
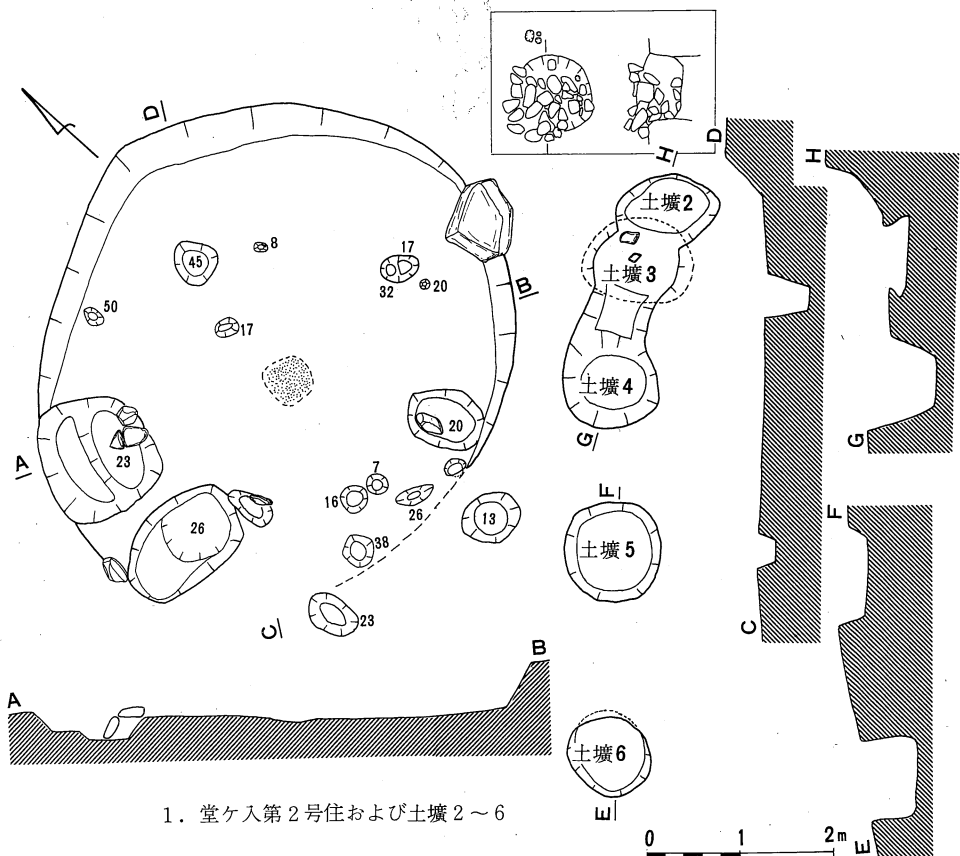
第 244 図 堂ヶ入遺跡 1 号住居址出土土器 (その 1) (1 : 3)



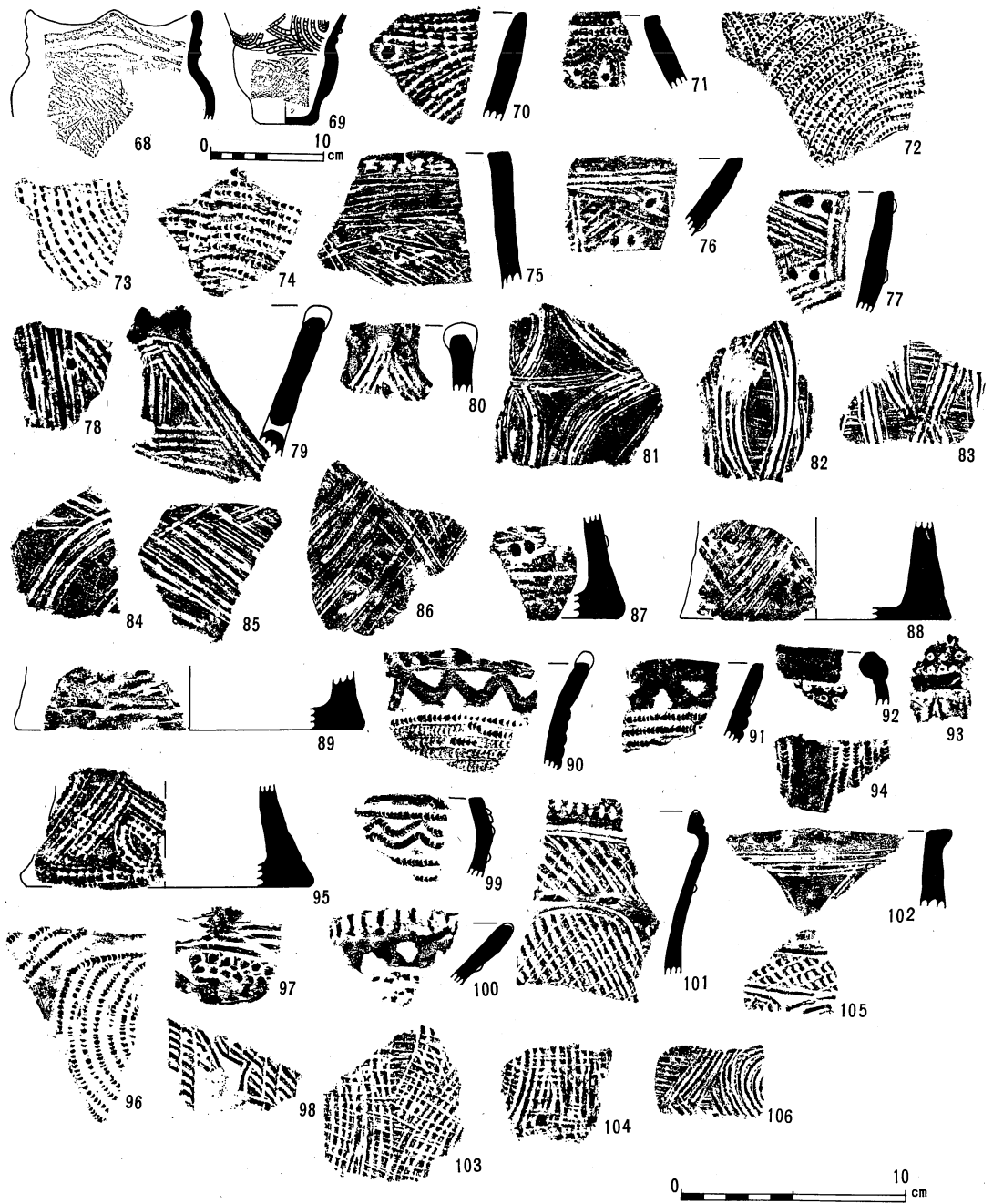
第 245 図 堂ヶ入遺跡 1 号住居址出土土器 (その 2) (31~32 1 : 6 , 33~67 1 : 3)



第 246 図 堂ヶ入遺跡 1・2 号住居址，土壙 4・6 出土石器 (31 1:8，
 16・25~30 1:4，他は 1:2)(1・16 1号住床，2~15 1号住覆土
 ，17 2号住pit，18~24 2号住覆土，25~27 2号住床 28~31 2号住床
 ，32~33 土壙 4，34土壙 6)



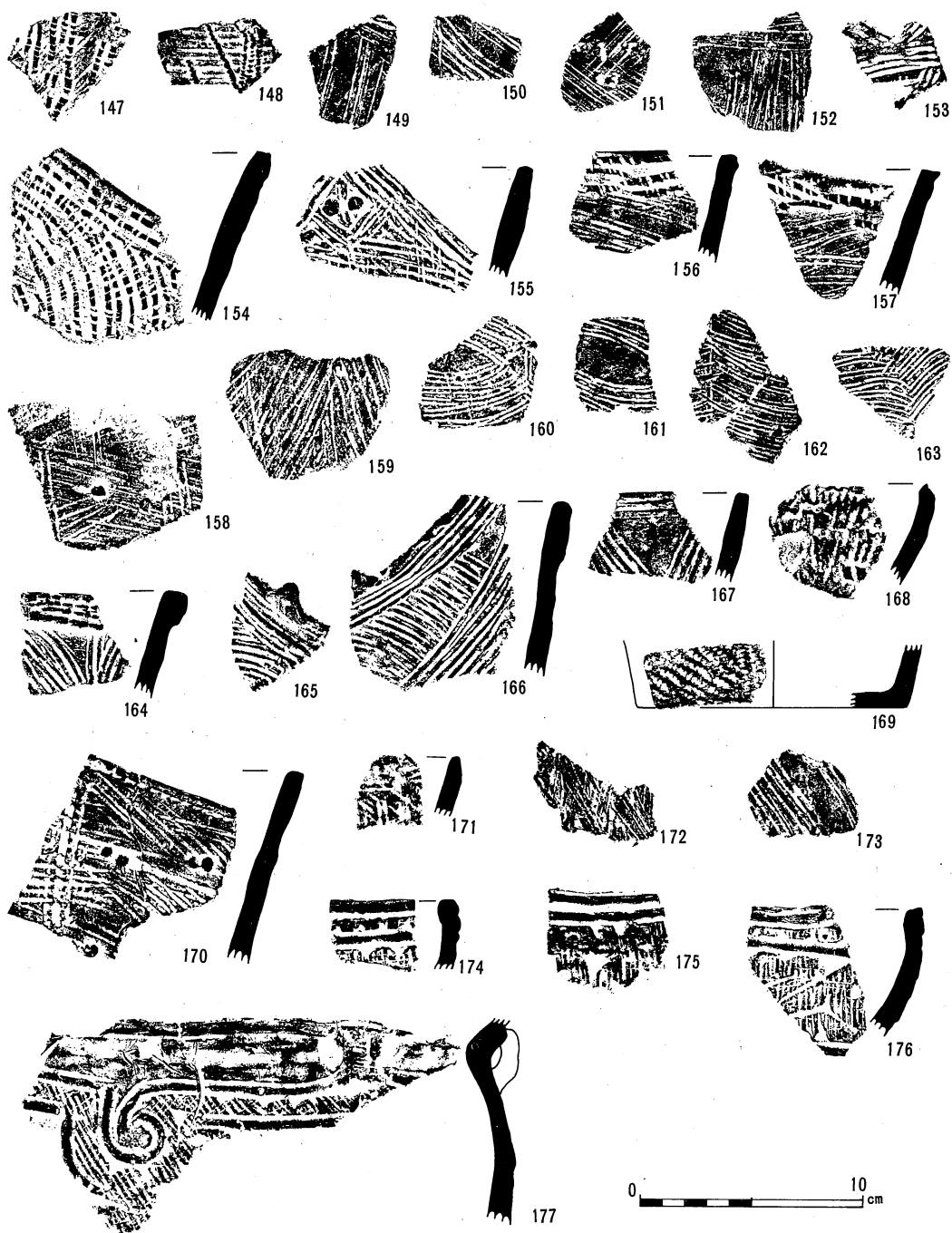
第 247 図 堂ヶ入遺跡 2 号住居址および土壙 1～8 実測図 (1:80)



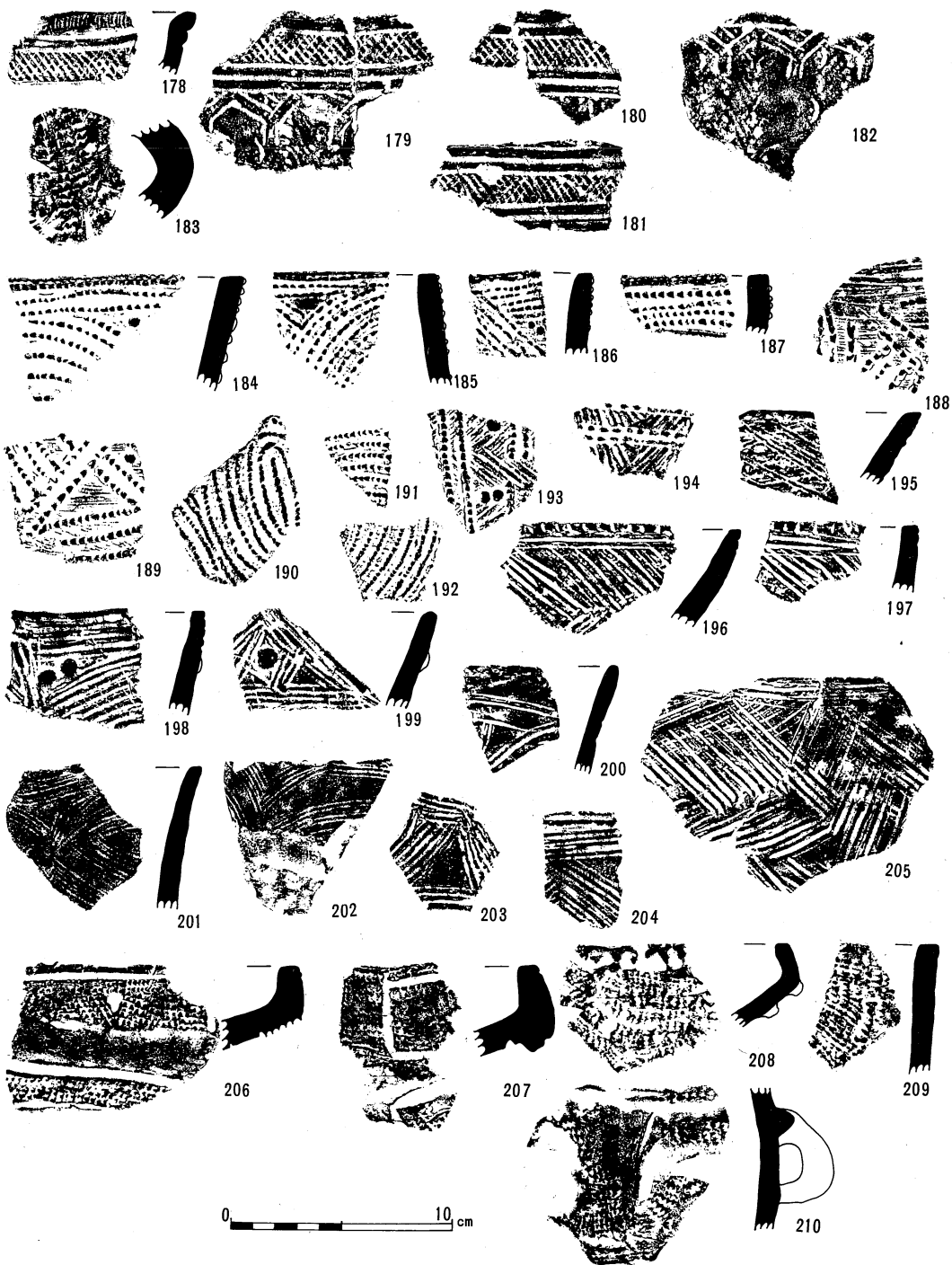
第 248 図 堂ヶ入遺跡 2 号住居址出土土器(68・69 1 : 6 , 他 1 : 3)



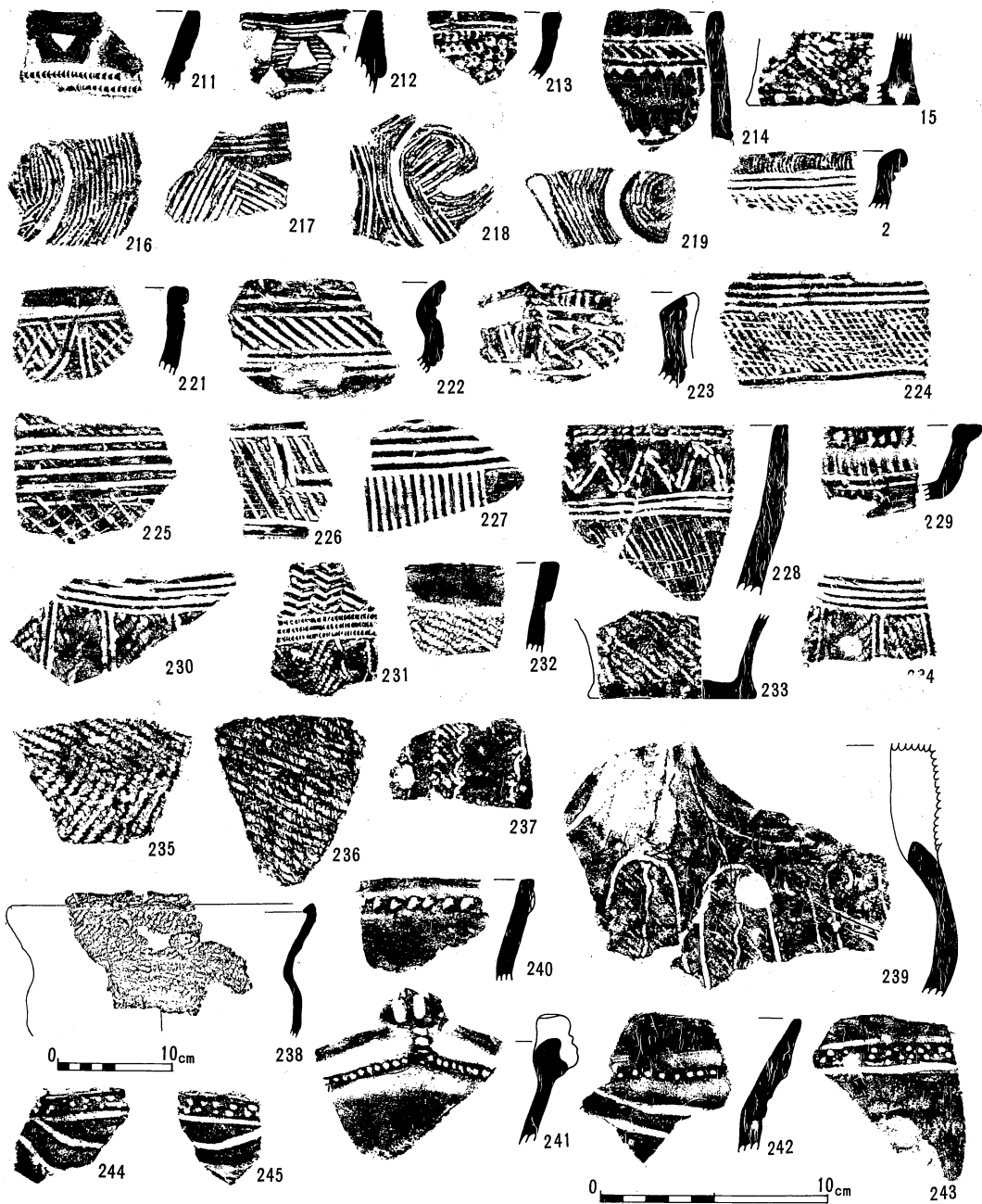
第 249 図 堂ヶ入遺跡 2 号住居址土壙 2・3・4 出土土器 (143・145・146 1 : 6, 他 1 : 3) (107~135 2 住, 136 土壙 2, 137~144 土壙 3, 145~146 土壙 4)



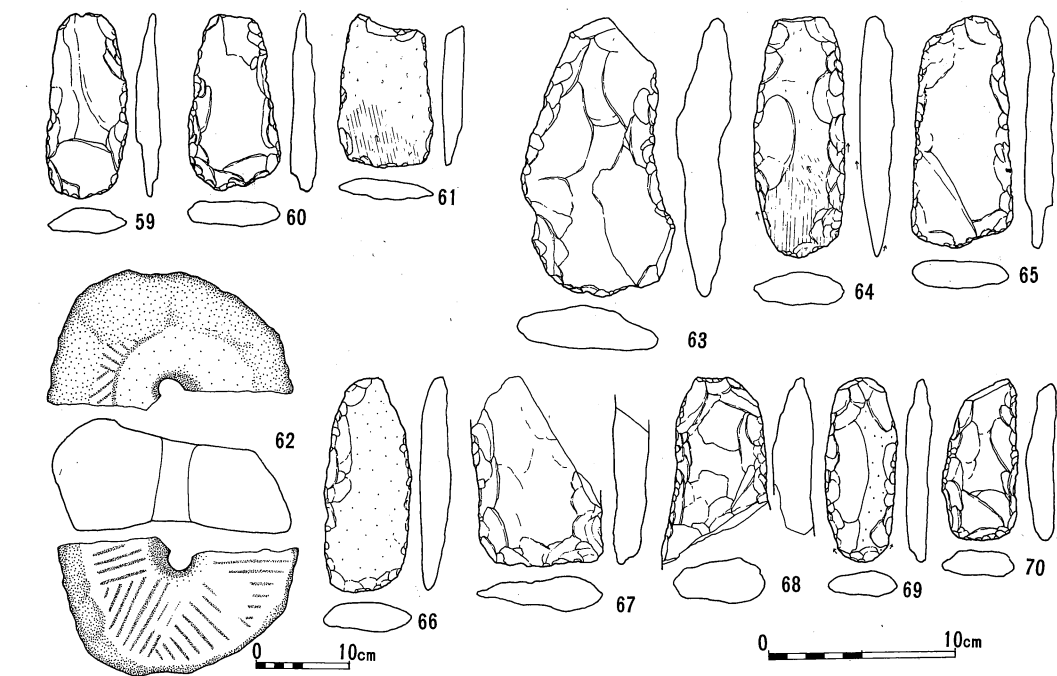
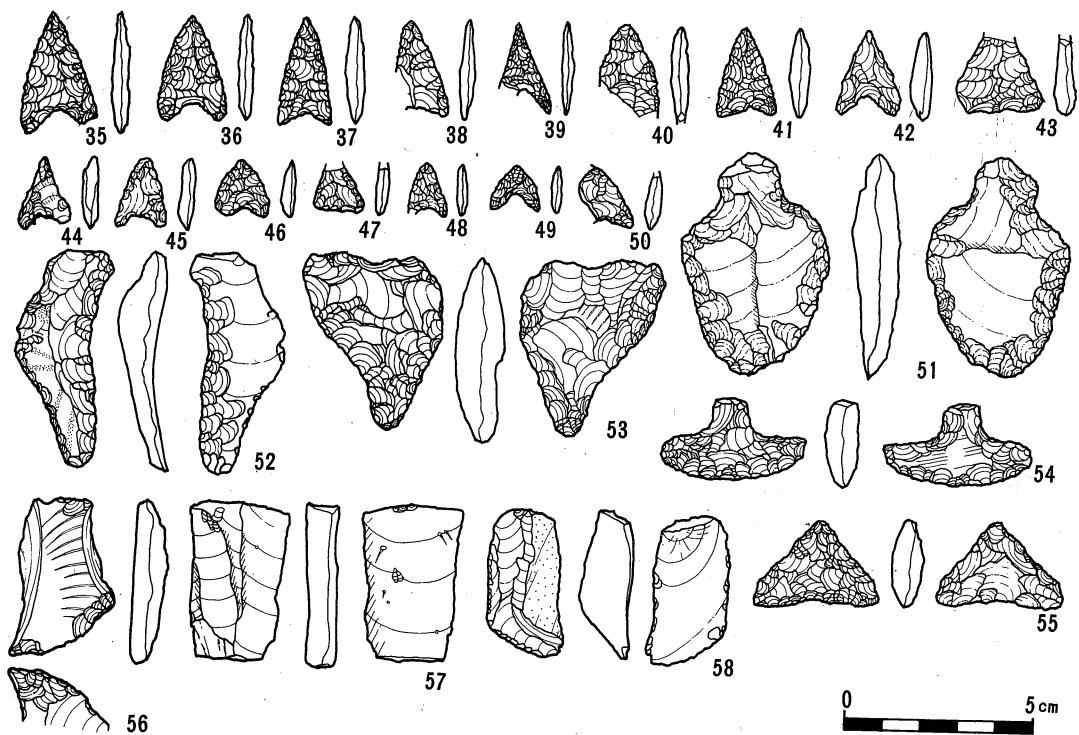
第 250 図 堂ヶ入遺跡土壙 4・6・7 出土土器 (1 : 3) (147~153 土壙 4,
154~169 土壙 6, 170~177 土壙 7)



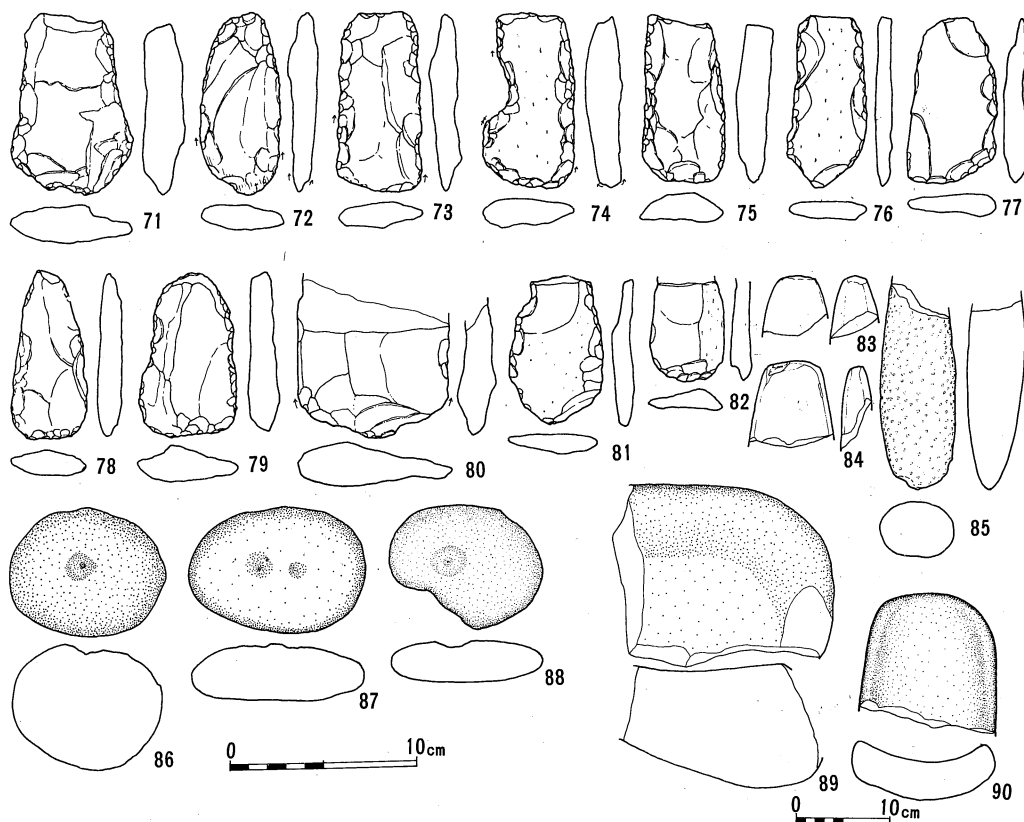
第 251 図 堂ヶ入遺跡土壙 8 及びその他の出土 土器 (1 : 3)
 (178 ~ 182 土壙 8 , 他 その他)



第 252 図 堂ヶ入遺跡その他出土縄文式土器 (238 1 : 6 , 他 1 : 3)



第 253 図 堂ヶ入遺跡その他出土石器(その 1)(35~58 1 : 2 , 62 1 : 8 , 59~61・63~70 1 : 4)(59~62 B 区出土 , その他は E 区出土)



第 254 図 堂ヶ入遺跡その他 (E 区) 出土石器 (その 2) (89・90 1 : 8
 , 他 1 : 4)

オ) その他の出土遺物 (図 251 の 183~210・252・253、図版 70)

遺構外の遺物は 2 号住居址と墓址群との間に多く出土した。土器は 1・2 号住居址および土壌出土のものと同時期 (縄文前期末から中期初頭) のものの外に、縄文後期前半のものが少量出土している。

184~194 は結節状浮線文のみられるもの、195~205 は平行沈線をもつもの、206~215 は、三角形印刻文と連続爪形文を特長とするもの、216~219 は太形沈線文に特長のあるもの、220~229 は平行沈線が規則性をもって施されたり、格子状に施されたりするもの、230~238 は縄文を有するもの等である。238 の図上複元した土器は、胎土はもろく、器外面は暗褐色、器内面は灰黄褐色を呈し、異質な土器であり、関西系のもと思われる。口唇の折り返し部と器外面全体に縄文が施されている。

239 は波状口縁の上に突起をつけたもので、縄文中期最末から後期初頭に比定されるもの、240~245 は隆帯上に刺突文をもつもので堀の内Ⅱ式に比定される。

石器は、E 区より、打製石斧 (63~82)、磨製石斧 (83~84)、敲打斧 (85)、凹石 (86~88)、石皿 (89~90)、石鏃 (35~50)、石匙 (51・54)、剝片調整石器 (52)、両面調整石器 (53・55)、剝片石器 (56~58) が出土している。B 区からも打製石斧 (59~61) が出土している。また、262 図の 98・99 の塊状耳飾が 2 号住居址の南から出土している。

(山 岡)

イ 中世の墓址と遺物

ア) 墓址と遺物 (図 255~259・261~263、図版 71~75)

墓址は、1・2号住居址の南西に集中して発見された、31基の火葬墓群である。南北方向に通りをなして配置され、西側には賽の河原を思わせる一面に敷かれた小礫が広がり、南西には墓域の境界と思われる配石1(図260の1)がある。遺構は表土下90~100cm、第4層目の黒褐色土層に造られ、上面から角釘、骨片が多数出土した。また同じ面に小さな河原石が散在してあり、これは、山からの土砂崩壊のためのものと思われ、遺構全体もそのために攪乱されて上面の川原石や角釘、骨片等も流れているもようである。従って完全な姿で遺存している墓址は数少ない。

墓址群を大別すると、1は、川原石のあるもの、あるいはあったと思われるもの(1~21・23~27・31) 2は、川原石および礫をもって構築しないものに分けられる。1は大小の河原石を方形あるいは長方形に配したもので、中には墓標的に大きな平石や尖った石をもつものもある。2は、いわゆる墓塚のみで、石を配した形跡のないものである。以下一覧表にまとめる。

堂ヶ入遺跡 墓址一覧表

墓址番号	挿図番号	形状	規模 東西×南北 cm	出土遺物 (挿図番号)	形態
1	256	長方形	110×150	上面から角釘	小礫は認められず、角礫が多少くずれて残存、抱石と思われるものあり、
2	256	長方形	160×190	骨片、炭化材、上面から角釘	角礫を周囲に組み中に河原石をつめる。河原石の下に平石がおかれる。骨片と多量の炭化材(径3~5cmの丸大)、焼土が混入し、また角礫をくだいたと思われる石くずが混在。深さ35cmの墓塚をもつ。
3	256	方形	120×110	骨粉、角釘(263の8)	方形に角礫を組み中に河原石をつめる。深さ15cmの墓塚をもつ。
4	256	方形	120×130	骨片、角釘(263の9~11)	方形に角礫を組み中に河原石をつめる。川原石の下は深さ35cmの墓塚となり、中に骨片、炭、焼土混りがある。底面に抱石と思われる石あり。
5	256	方形	160×160	骨片、角釘(263の12)	方形に角礫を組んだと思われるが川原石は認められない。骨片焼土まじりの層がある。有段の墓塚をもち、底面との中間に抱石と思われる石あり。
6	257	方形	140×140	骨片多数、角釘(263の13~17) 五輪塔(261)	角礫を方形に組み、川原石をつめる。中央に平石を2枚重ね、その上に五輪塔の空、風、火各輪が置かれる。軽石製で、空、風輪が一石で、火輪とは棒状のものでつなわれたと思われる。平石の下に骨片が多量にあり、炭がまじる。墓塚をもつ。
7	256	方形	80×90	骨粉、上面より角釘	角礫を組み、真中に、墓標的な丸石をもつ、石の下は炭混りの黒色土で浅い凹み
8	257	不明	(180)×(150)	骨粉、角釘(263の18~20)	形状は崩れて不明確だが、川原石が敷かれてあり、墓塚をもつ
9	257	不明	(110)×(?)	骨粉、	形状不明、墓標的な石をもつ、墓塚をもち、炭、骨粉まじりの黒色土層がある。

墓址番号	挿図番号	形状	規模東西×南北	出土遺物 (挿図番号)	形態
10	257	不明	(100) × (?)	骨片、	一部の角礫が残るのみ。墓域内に骨片、炭混りの黒色土層あり。
11	257	不明	(100) × (120)	角釘 (263の21~23)	大きな角礫のみ残る。内に石1個あり、
12	257	方形	110×90		大きな角礫を配置する。20と接する。
13	258	方形	100×100		上面に方形に礫を組み、東寄りに墓標的な石をもつ。その下20cmに55×80cmの長方形に礫を組んである。間は、炭混りの黒色土である。
14	258	方形	110×110		平石を方形に組み川原石を敷く。川原石の下に平石が更に配されている。墓域をもち、底部に抱石と思われる石あり。
15	258	長方形	60×100		平石と角礫を長方形に配してある。26と重複。西側に墓標的な丸石あり。
16	258	長方形	90×140	角釘 (263の24~25)	大きな角礫を組む。
17	258	長方形	75×115		平石を中央に置きその上に角礫を組む。
18	258	長方形	70×110		大きな角礫を4個方形に組み、すき間に入頭大の角礫をつめる。
19	258	方形?	140×130		拵大から人頭大の礫が敷かれている。
20	257	長方形	40×80		12と接し、約30cmの角礫を南北に4個組む。
21	259	長方形?	120×150		人頭大の礫を敷いてある。
22	259	円形	120×100	角釘 (263の26)	円形の掘り込みが明瞭で、上面に河原石をもつ。角礫を組まない。深さ36cmで、灰および炭層がみられる。
23	259	長方形	120×210	土師器小皿4 (262の1~4) 坏2 (5~6) 刀子 (7) ガラス玉 (106) 瓊瑤 (107~108)	最も整然と組まれた墓址。底面、側壁に平石を組んで石室を造ってある。上面は角礫で方形に組み、中に河原石を敷きつめてある。土師器はすべて右回転の糸切底を持ち、1と2、3と4は口縁を合わせて組んで出土。
24	259	方形?	85×110		角礫を方形に組んだものと思われる。中央に灰の層がある。
25	259	長方形?	150×80		崩れているが、礫を長方形に配したものと思われる。
26	258	長方形?	150×70		大きな礫を長方形に配したものと思われる。
27	259	方形?	75×110		崩れているが、人頭大の礫を使用している。
28	259	円形	75×80	骨片	中央に骨片と骨粉が集中している。石を組まないものである。炭を含む。
29	255	不明		骨粉	骨粉が集中してあり、炭が混じる。石を組まないものである。
30	255	不明		骨粉	骨粉が集中してあり、炭が混じる。石を組まないものである。
31	259	長方形	75×95		角礫が組まれてあり、炭混りの深さ35cmの墓域をもつ。

(山 岡)

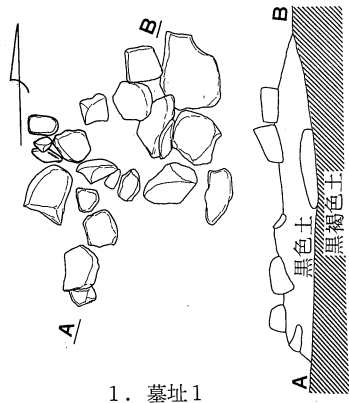
イ) 溝状遺構 (図 260 の 6)

墓址の北側上部に認められた、巾 25~40、深さ約 20cm のもので、11 本帯状に配列している。砂利が凹み内に充満しており、墓址に関係あるものとは考えられない。農耕のうねとも考えられず、性格、時期など出土遺物もなく不明である。

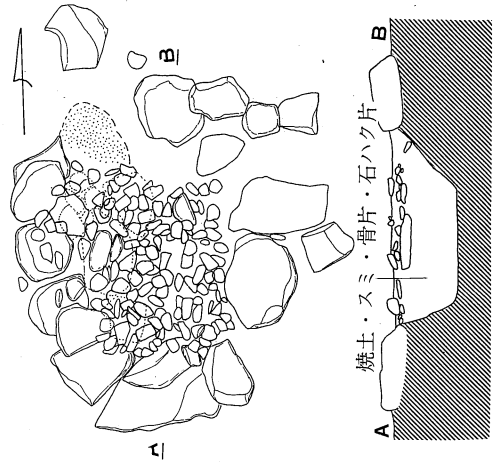
(山 岡)



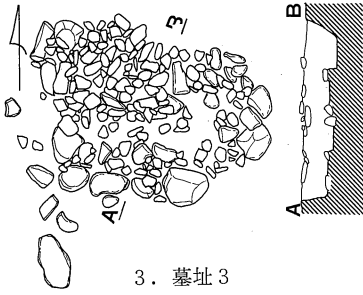
第 255 図 堂ヶ入遺跡墓址全体図 (1 : 60)



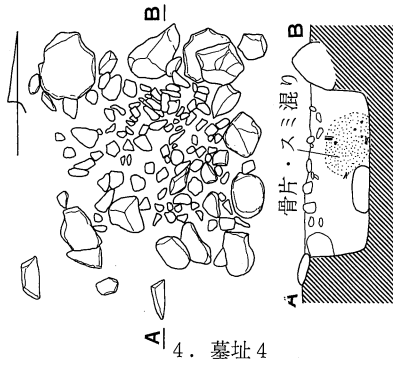
1. 墓址1



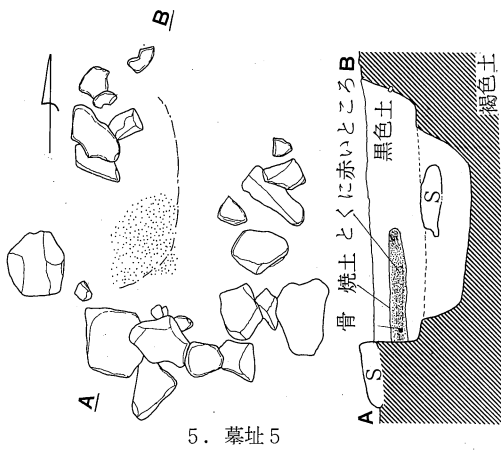
2. 墓址2



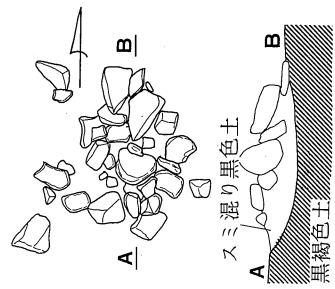
3. 墓址3



4. 墓址4



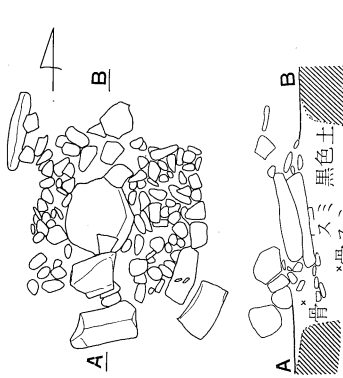
5. 墓址5



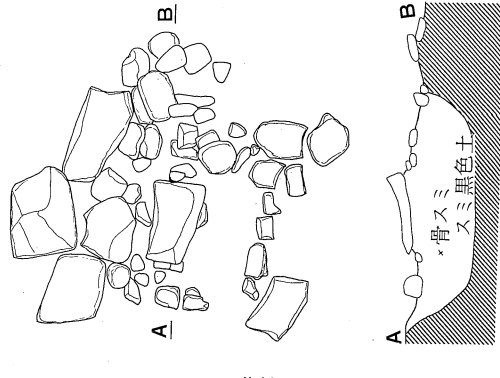
6. 墓址7



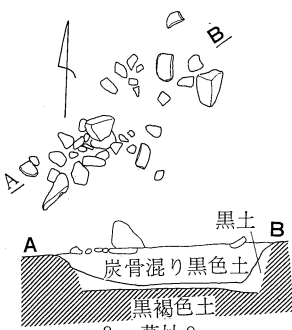
第 256図 堂ヶ入遺跡墓址1・2・3・4・5・7実測図(1:40)



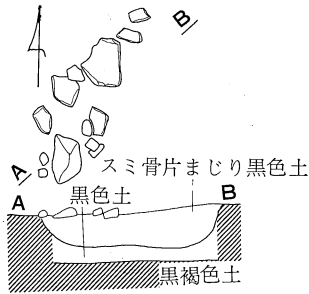
1. 墓址6上



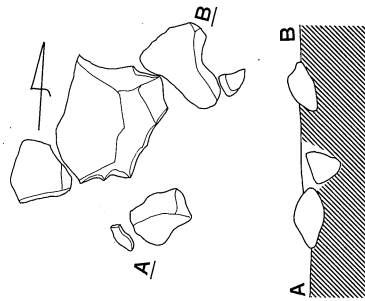
2. 墓址6下



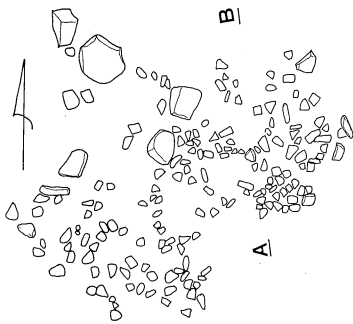
3. 墓址9



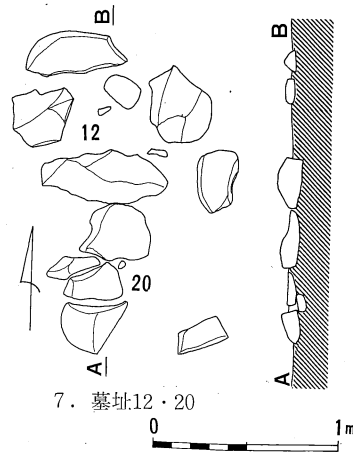
4. 墓址10



5. 墓址11

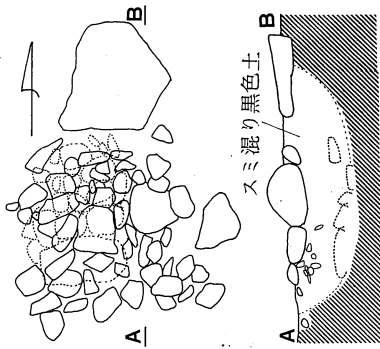


6. 墓址8

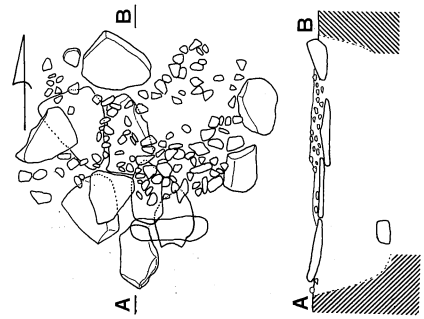


7. 墓址12・20

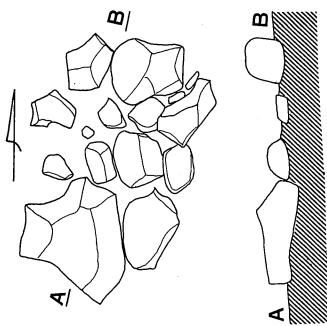
第 257 図 掌ヶ入遺跡墓址 6・8・9・10・11・12・20 実測図 (1:40)



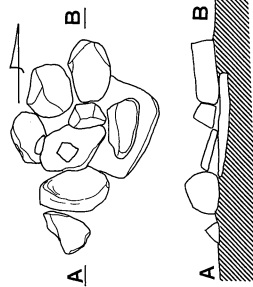
1. 墓址13



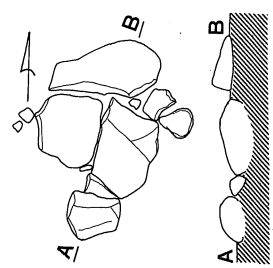
2. 墓址14



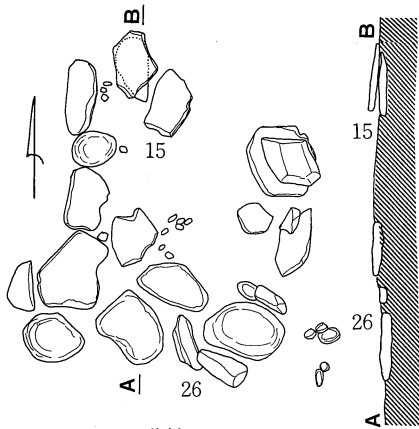
3. 墓址16



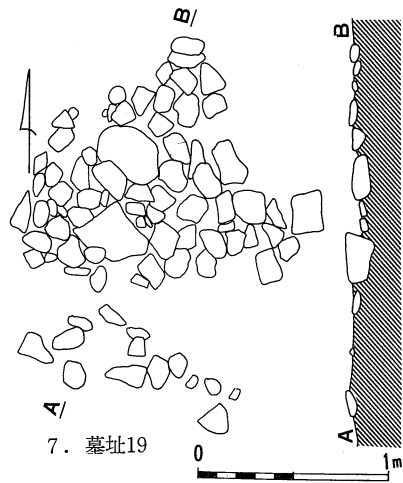
4. 墓址17



5. 墓址18

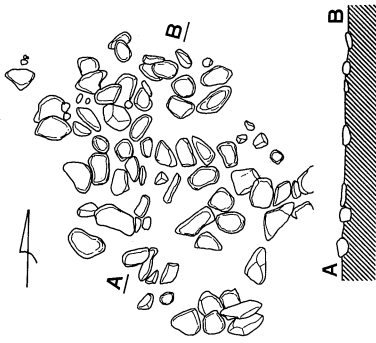


6. 墓址15・26

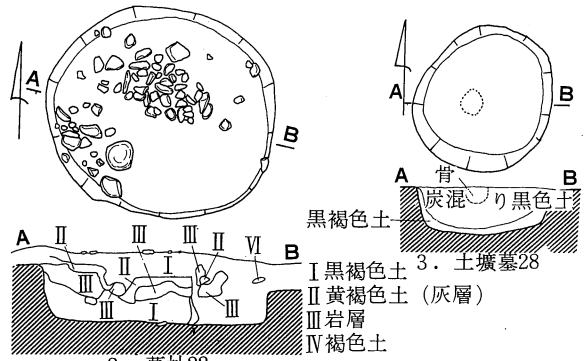


7. 墓址19

第 258図 墓址13・14・15・16・17・18・19・26実測図 (1:40)



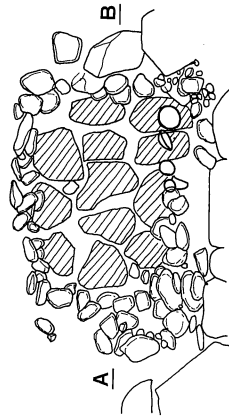
1. 墓址21



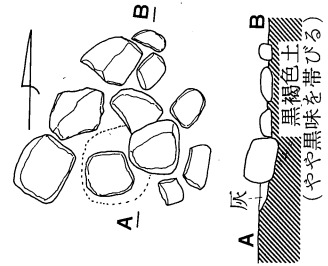
2. 墓址22



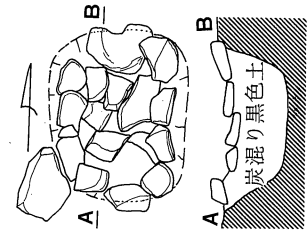
4. 墓址23上部



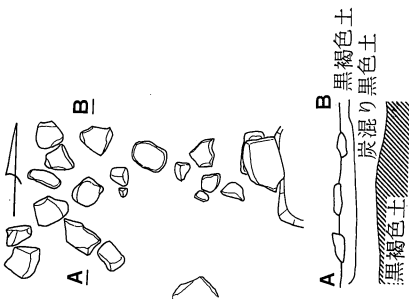
墓址23下部



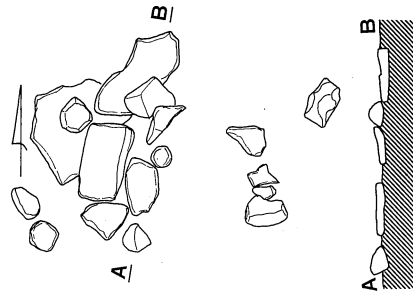
5. 墓址24



6. 墓址31



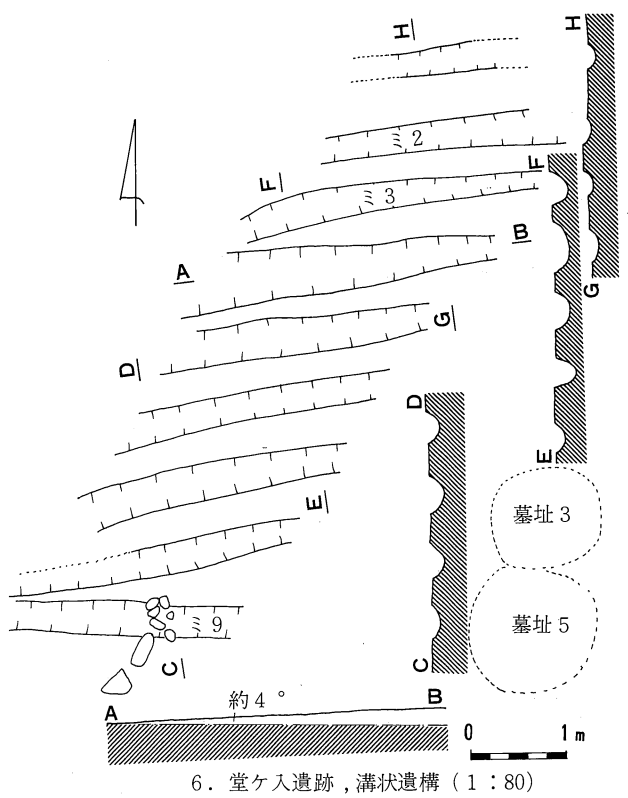
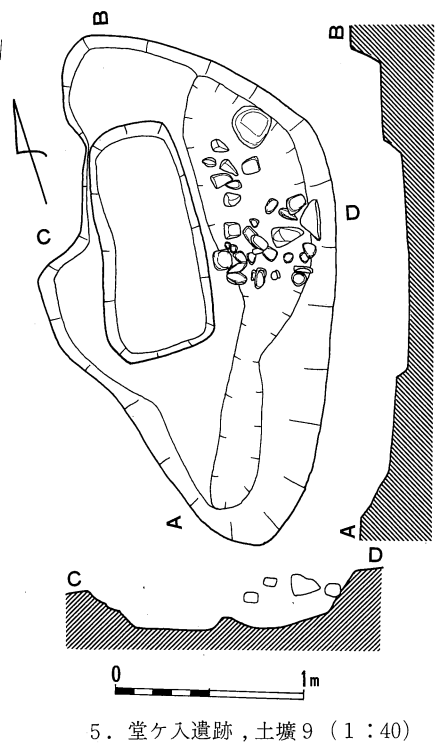
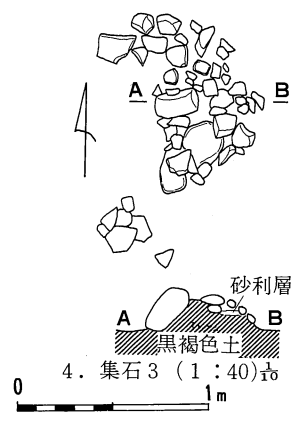
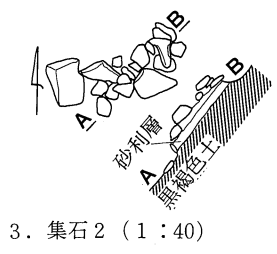
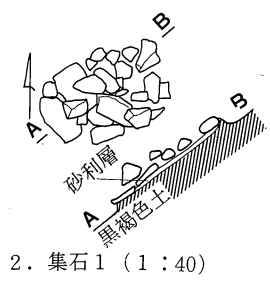
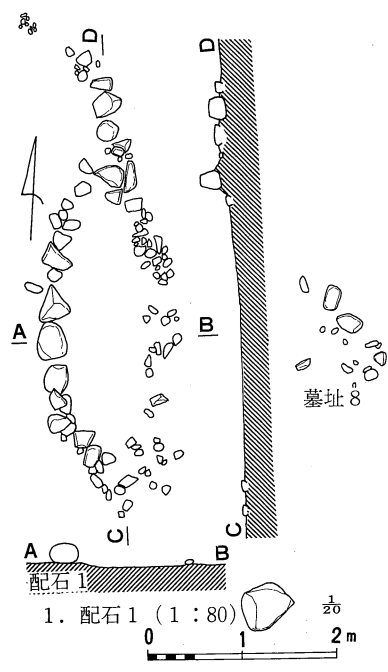
7. 墓址25



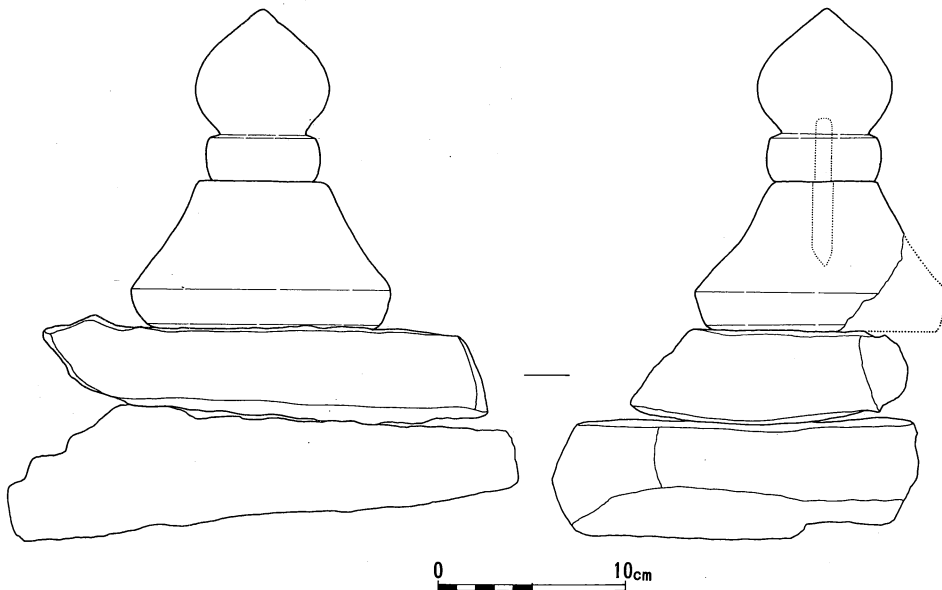
8. 墓址27

第 259 図 墓址21・22・23・24・25・27・28・31実測図 (1 : 40)





第 260 図 配石 1 (1:80) 集石 1・2・3 (1:40) 土壇 9 (1:40) 溝状遺構 (1:80) 実測図



第 261 図 堂ヶ入遺跡墓址 6 出土 6 五輪塔実測図 (1 : 8)

ウ) その他の出土遺物 (図 246 の 62・262 の 74~105・263 の 27~72)

C 区の溝を呈した地点から石臼 (246 図 62) が出土した。安山岩質のものである。

鉄製品・角釘でそのすべてが E 区からの出土である。折曲頭形のものが圧倒的である。8~9 cm が多いが、14 cm に及ぶ長いもの、4~5 cm のものもある。この他に刀子 (95)、不明鉄片 (96) がある。

土器・須恵器蓋 (101) 灰釉陶器片 (102) 内耳鍋片 (103~104)、摺り鉢 (105) が出土している。

土製品・紡錘車 (100) がある。

青銅製品・94 のキセルが 1 点出土している。

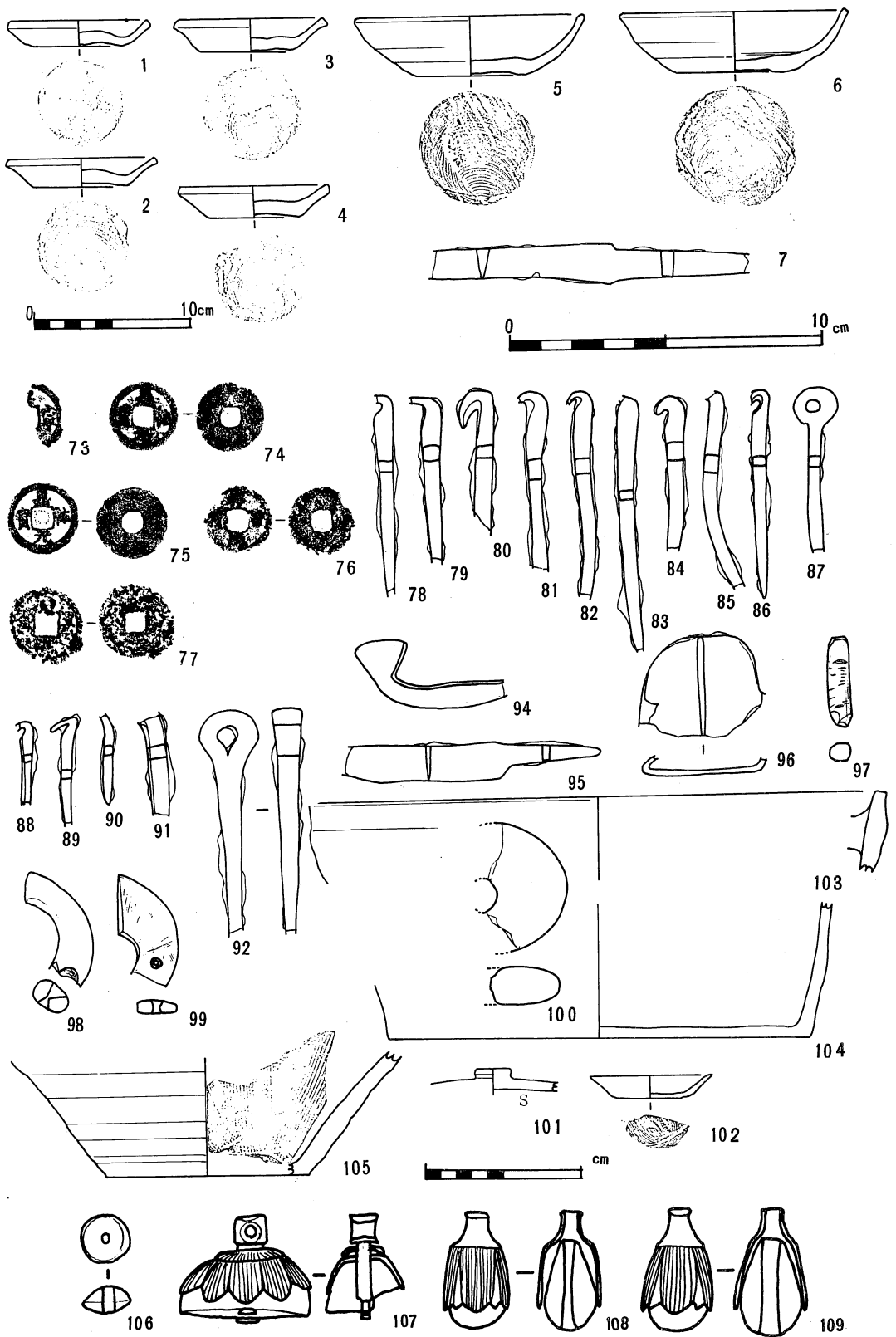
古銭・嘉祐元宝 (1056~1063 年) (74~75) 不明 (76~77) がある。

(山 岡)

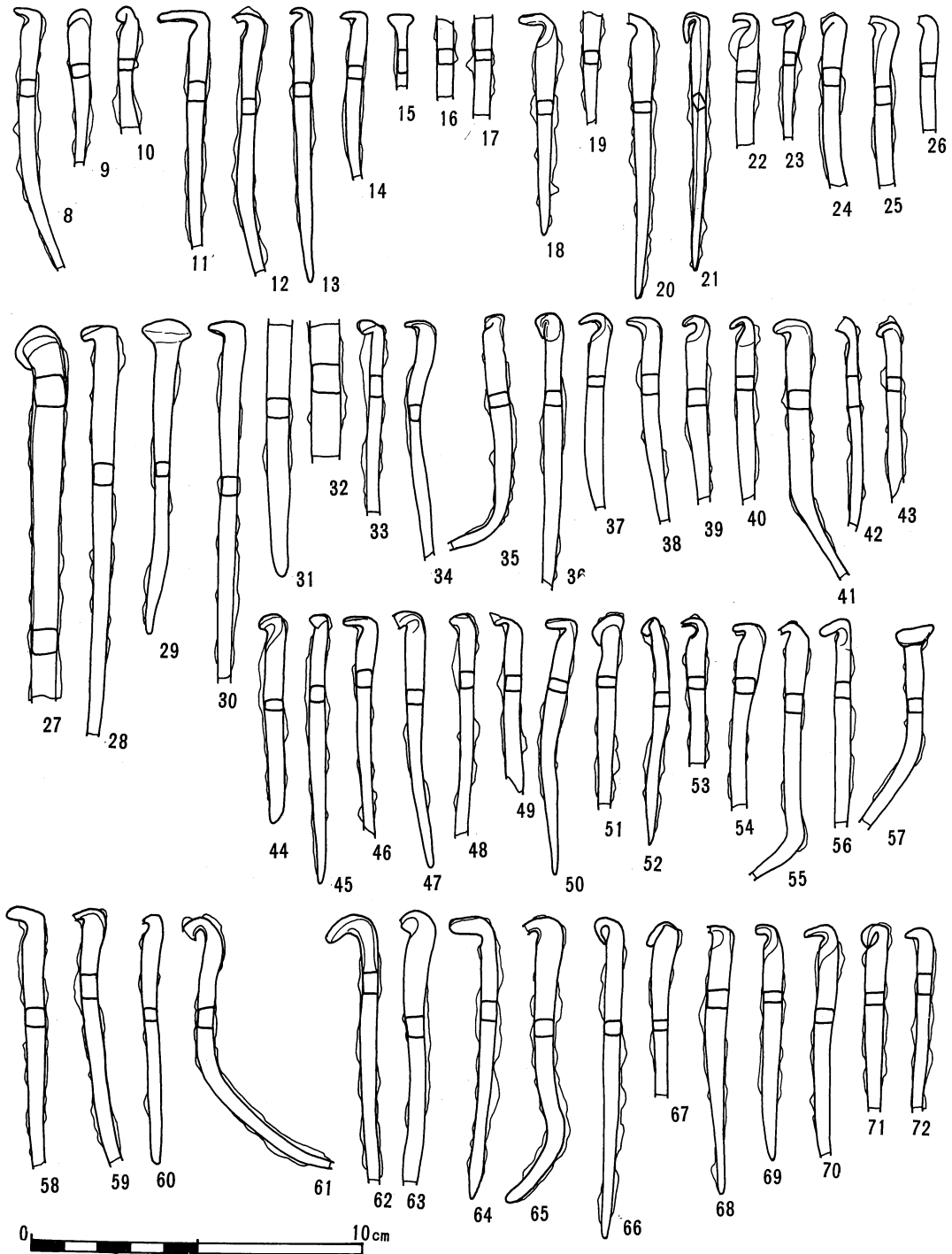
3) ま と め

天竜川の東側、伊那山地の西に張り出した小尾根の間の凹地から、縄文時代前期末の竪穴住居址 2 軒と土壇 8 基、中世の墓址群と配石址を検出し得た。更に尾根の南側の傾斜面では、中世と思われる土壇 1 基の検出もみた。

縄文前期のそれは、山ふところの限定された微地形に営まれた 1 つの集落形態を示すものとして興味深い。土器は、結節状浮線文、平行条線文及び平行沈線文、太形沈線文、三角形印刻文等の文様構成をもつ、諸磯 C 式、十三菩提式の土器片が大部分をしめ、少量五領ヶ台式土器も混在しており、前期末から中



第 262 図 堂ヶ入遺跡出土土器・鉄製品・石製品・土製品・ガラス玉・瓔珞)
 (1~6 1:4, 101~105 1:4, 106~109 1:1 他 1:2)
 (1~7, 106~109 墓址23, 73 土壇9, 74~90 E区, 91~105 その他)



第 263 図 堂ヶ入遺跡出土鉄釘 (1 : 2) (8 墓址 3, 9~11 墓址 4, 12 墓址 5, 13~17 墓址 6, 18~20 墓址 8, 21~23 墓址 11, 24~25 墓址 16, 26~墓址 22 27~72 E 区)

期初頭にかけての一括した好資料を得たことになる。また塊状耳飾の出土もあって、北安曇郡姫川流域を中心に広がる滑石文化圏の一遺跡としても位置づけるものであろう。

墓址群に関しては、朝日村史によると、この堂ヶ入地籍に創建年代は不明であるが、雲竜山清水寺惣持院と称する七堂伽藍の道場があり、後寛正元年（1460年）に平出上町へ移転し、妙雲山高徳寺と改称、建物は天正10年（1582年）に焼失と記されている。すくなくとも当墓址群は、この高徳寺の前身に関係あるものと思われ、移転する以前、すなわち1460年までに造られていたものと考えられる。古老及び住職の話では、鐘つき堂跡とか、土砂崩壊（山津波）で鐘が転落して行って天竜川の淵にとどまったとかいう伝承が生きて巷間に会話されているという。

墓址群は、庶民階級の墓であり、当時は整然と南北に5ないし6列に並んでいたようである。墓址の中央辺には、墓標となる石が置かれていたと思われ、いくつかにはそれが残存していた。緋鬼草紙にみられる墓であったと思われる。また墓址6に置かれた五輪塔はどこか別のところから持って来たものと考えられる。空、風、火輪のみで水、地輪はなく、平石がそれを代行している。何も刻まれてはいない。また墓址23は、墓址群中、最も整った形態をもつもので、出土遺物も土師器、刀子、ガラス玉、瑠璃の垂飾り仏具と豊富できわだったものである。川原石は1つ1つ水洗いし、確認したが何も書かれていなかった。

土器型式の上で問題点をもつ縄文前期末から中期初頭にかけての住居址と一括した土器・石器を得たこと、更に中世の墓址を検出できたことによりその墓制研究の上で、それぞれ問題提起に資するものを多く得たことは大きな成果といえよう。 (山岡)

11. 藤の森遺跡 (HUA)

1) 位置 (図7、図版76の376)

本遺跡は、辰野町平出小字込山729、沢頭704番地一帯に所在する。上平出部落から前沢川に沿って伊那山地へ入った。谷間の傾斜地で、沢頭、沢入口遺跡とは地続きで、同一遺跡とみてよい。前沢川の右岸には当遺跡の呼称となった藤の森が存在し、豊富な湧水に恵まれ、上平出部落に水を供給している。遺跡地は前沢川の両岸がその範囲となり、中央道は、川に沿って南北に通過するため、今回の調査になった。現在川に沿った地点は小水田が、傾斜地は畑があり、かつての分布調査の際は、縄文中期土器片、石鏃、黒燧石片等を得ている。

今回の調査は、川の東は、713+20をAAに、713+90まで、川の西は714+40までにグリットを設定して行なった。地層は川の氾濫を受けていて、畑地と水田では異なるが、一般的には、耕作土、黒色土、黒褐色土と移行し、ロームへと続く。

2) 遺構と遺物

ア 縄文式時代の遺物 (図 264・266の32～38、図版76の378～379)

川の東、山のつけ根に当たる畑から、集中的に量は多くないが、縄文中期土器片と石鏃の出土をみた。7は器形の判明するもので、浅鉢形土器であり、縄文を地文とし懸垂文が施されている。1～2は繊維土器である。

イ 弥生式時代の遺物 (図 264の11)

一片のみであるが、波状文をもつ弥生後期土器の口縁部片の出土をみた。

ウ 平安時代の遺構と遺物

ア) 1号住居址 (図 265・266の12～25、図版76の377)

遺構、前沢川の西岸に検出された本址は、4.03×4.18mの規模をもつ方形プランで、主軸方向をN-100°-Eに示す。壁は、北から南に傾斜した土地のため北側が高く、南側は低くわずかに認める程度である。床面は、ローム土をかためているが東半は堅いが、西半はやや軟弱である。床面上には、ピットが3箇所確認されたが、支柱穴とは判定し難い。カマドは東壁中央やや北寄りに構築された石組み粘土カマドである。カマドの西側床面上には、やや浮いて、人頭大の石が散在している。

遺物、住居址覆土とカマドからの出土で、土師器と灰釉陶器がある。12～20は土師器で、12～18は坏形土器片である。12は内黒であり、底部は糸切底が多い。19・20は甕形土器であり、器内外面に刷毛目状の調整痕がみられる。21～24は灰釉陶器片であり、25は不明鉄片である。

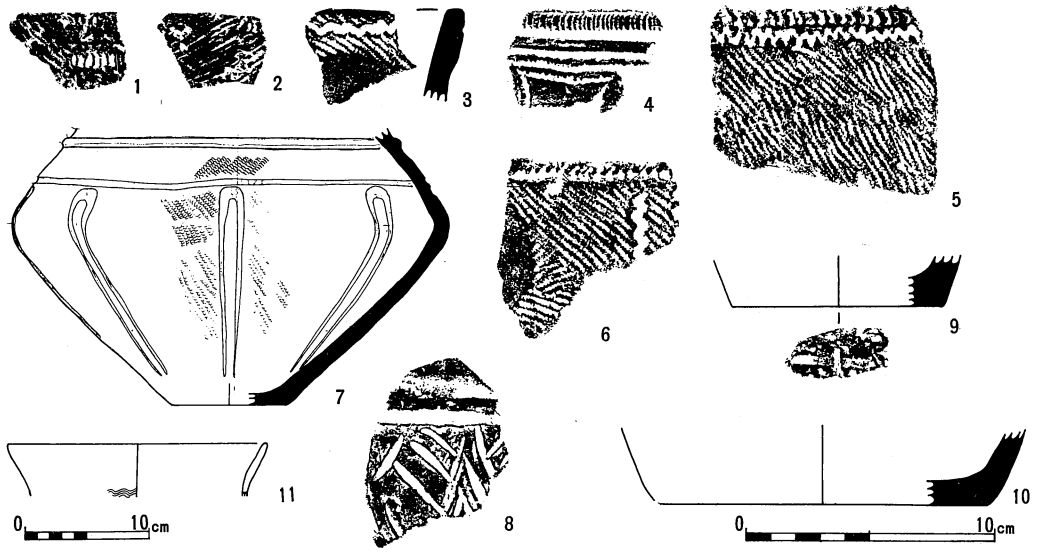
イ) その他の出土遺物 (図 266の26～31・39)

遺構に伴わないで出土したものに、26～30の土師器と31の中世陶器片、39の古銭がある。

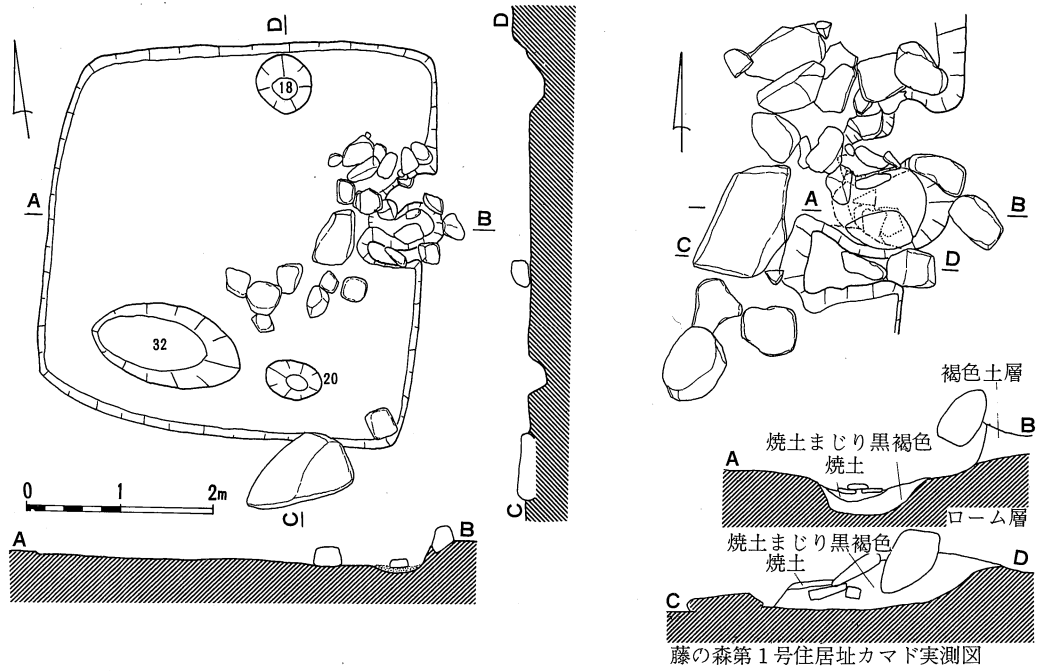
3) ま と め

沢入口、沢頭、藤の森の三遺跡は、地形的に地続きであり、同一遺跡とみてよい。沢入口遺跡の5軒、沢頭の1軒と本遺跡検出の1軒、計7軒の平安時代の住居址は、灰釉陶器を伴った同時期のものとみなされ、狭い谷地に営なまれた山村集落の一型態として把握できよう。また、縄文前期・中期・弥生後期・平安期と断続的にこの谷地が生活の場とされていたことも判明した。地層に見られた前沢川の氾濫を除けば、山菜、川魚、鳥獣と恵まれた自然を有し、また、湧水にも恵まれて生活し易い場所であったと思われる。

(小松原)

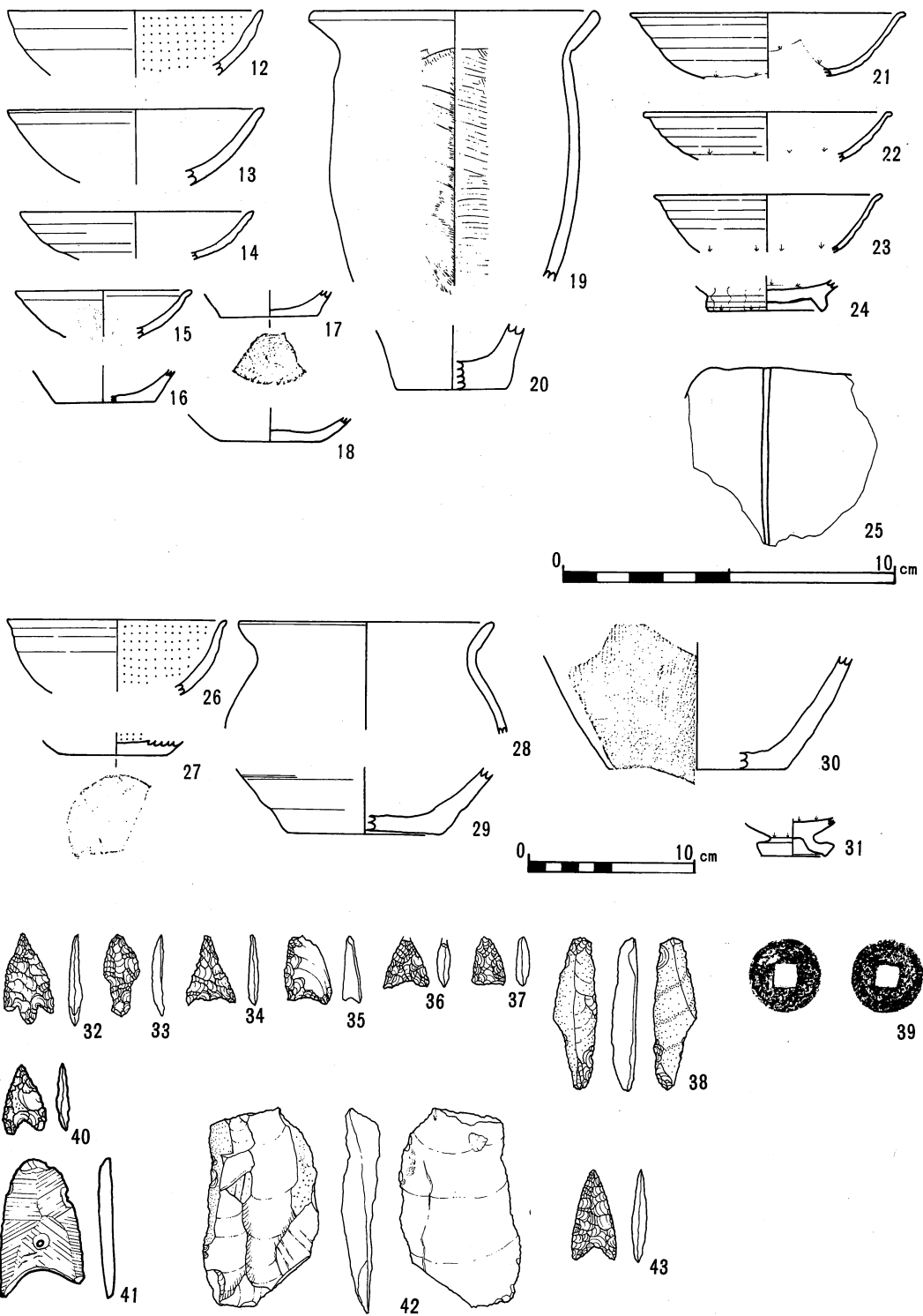


第 264 図 藤の森遺跡その他出土土器 (1~6・8~10 1:3, 7・11 1:6)



藤の森第 1 号住居址カマド実測図

第 265 図 藤の森遺跡 1 号住居址 (1:80) およびカマド (1:40) 実測図



第 266 図 藤の森遺跡・1号住居址およびその他の出土土器石器(25・32~43 1:2, 他 1:4)
 (12~25 1住, 26~39 その他出土, 40・41 沢頭その他, 42~43 沢入口その他)

12. 沢頭遺跡 (SWB)

1) 位置 (図7、図版77)

本遺跡は、辰野町平出小字沢頭 654～658 番地一帯に所在する。上平出部落から前沢川に沿って伊那山地へ入った谷間の傾斜地に立地し、沢入口遺跡と藤の森遺跡にはさまれた中間に位置している。三遺跡は地続きであり同一遺跡とみてよい。上平出部落から入った道路は、前沢川に沿って上り、沢頭地籍で二分し、北上すれば、駒沢開拓を経て岡谷市花岡へ、東進すれば上野部落へ通じる。便宜的に、上野へ通ずる道の北を沢入口遺跡、道下、すなわち南を本遺跡とした。北から南へ傾斜した地形を示し、川沿いには小水田、傾斜地には畑が営まれている。

今回の調査は前沢川の東西両岸で行ない、714+40 を A A とし 715+20 の道路際までにグリットを設定した。前沢川の氾濫で、耕土下には礫が含まれ、礫混り黒色土が深い。

2) 遺構と遺物 (図 267、図版 78)

ア 縄文式時代の遺物

縄文期の遺物として土器と石器の出土をみた。土器は、縄文早期に比定される山形文土器片 (10～11) と縄文中期土器片 (1～9) である。石器は 266 図 40 の石鏃と、278 図の 11～13 の打製石斧、敲打器である。

イ 平安時代の遺構と遺物

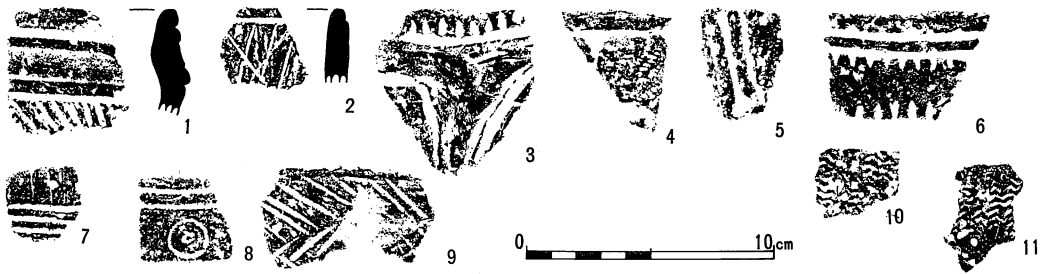
ア) 1号住居址 (図 267、図版 78 の 383・385)

遺構、前沢川の東岸に検出された本址は、3.40×3.70m の規模をもつ、隅丸方形プランの住居址で、主軸方向を、N-7°-E に示す。ローム土を掘り込んだ壁高は 15～20cm と低く、床面はやや軟弱で良好とは言えない。主柱穴は 4 個所に確認され、その並び方は不規則であるが、ほぼ四隅にある。カマドは北壁東隅に寄って構築された石組粘土カマドで、規模は 90×60cm で火床はよく焼け焼土の堆積がみられた。カマドの西には、浅い掘り込みがある。

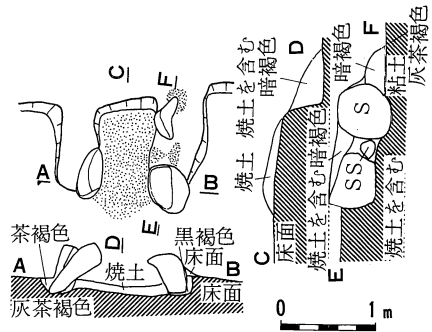
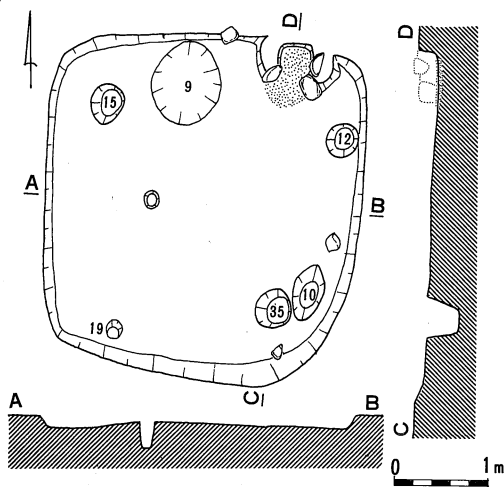
遺物、出土遺物量は少なく、土師器と灰釉陶器の出土をみたにすぎない。12～18・21 は土師器坏であり、12 は高台付の内黒坏である。19 は口径 18cm の灰釉陶器の椀、20 は灰釉陶器坏底部片である。

イ) その他の出土遺物

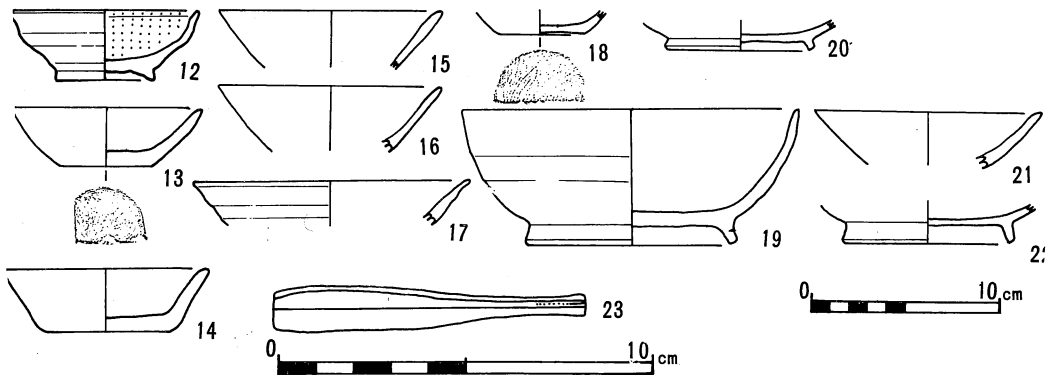
遺構外出土遺物に、21 の土師器坏口縁部片、22 の灰釉陶器底部片、266 図 41 の磨製石鏃がある。21 のキ



1. 沢頭遺跡出土縄文式土器 (1 : 3)



2. 沢頭遺跡1号住居址 (1 : 80)同カマド (1 : 40) 実測図



第 267 図 沢頭遺跡1号住居址実測図 (1 : 80) 同出土土器 (1 : 4)
 (12~22 1 : 4, 23 1 : 2) (12~20 1 住, 21~23 その他)
 およびその他出土縄文式土器 (1 : 3)

セルはやや時期の下ものと思われる。

3) ま と め

前沢川に沿った狭谷に位置する本遺跡の調査結果、縄文早期、中期の土器片と石鏃の出土をみた。以前の分布調査の際にも、縄文中期土器片、石鏃の採集があり、古くから、この地が生活の場とされていたことが判明した。また、前沢川の東岸、前沢川の氾濫をさけるかの如く、小高い位置に平安期の住居址1軒が検出された。出土遺物も土師器杯と灰釉陶器碗が少量出土したのみであり、規模も小さ目の住居である。上野部落に通ずる道際であり、更に東の凹地の畑からも土師器片の表面採集ができることから、中央道用地外の沢筋にも住居址の存在が考えられる。

藤の森、沢入口遺跡の住居址と同時期であり、灰釉陶器を伴う遺跡の一つ加えたことになる。(福 沢)

13. 沢 入 口 遺 跡 (SCB)

1) 位 置 (図7、図版79)

辰野町上平出部落から前沢川に沿って、伊那山地へ入った谷間に位置する本遺跡は、藤の森、沢頭の二遺跡と地形的に同一と見てよく、本遺跡が最北に位置する。平出小字山の神 683~685 番地一帯にあり、現在、前沢川に沿った低位には小水田、離れた傾斜地は畑となっている。西側の山沿いに駒沢開拓を経て岡谷市花岡へ通ずる道路があり、本遺跡地で二分して、上野部落へ抜けられる。遺跡地は地続きの沢頭遺跡と区分して、上野へ通ずる道路の北側とした。標高 760~767m を有する前沢川の右岸の細長い狭谷の地で、川魚、鳥獣、山菜に恵まれている。

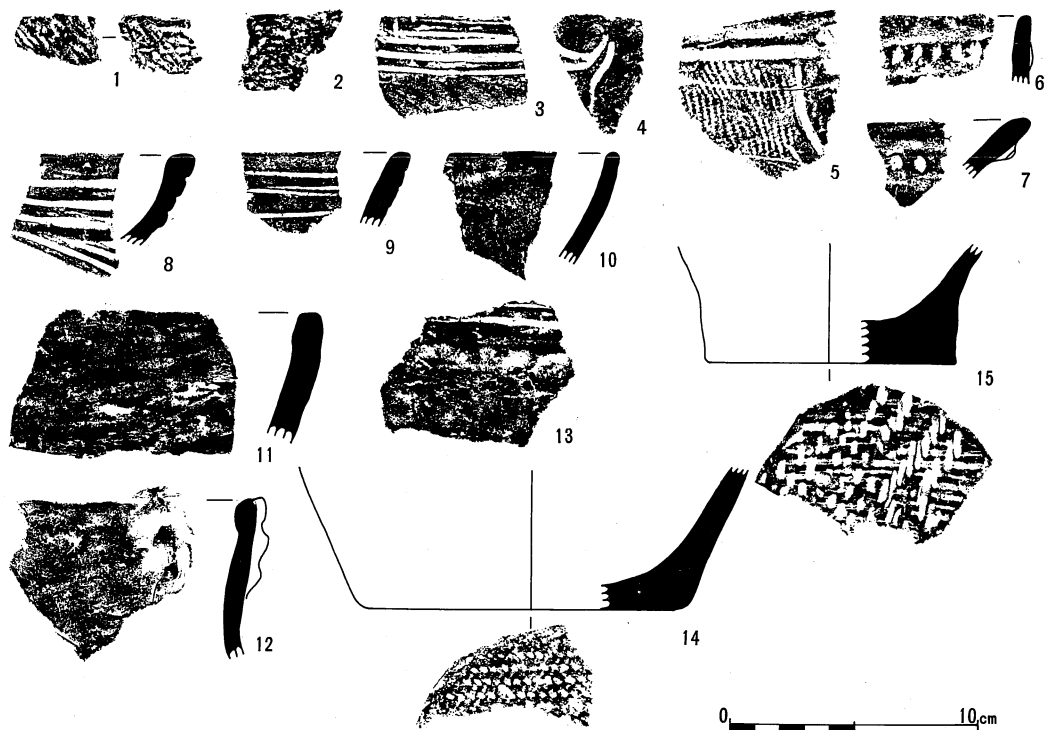
以前の分布調査では、土師器片を少量表面採集している。本遺跡の南には、前沢川に沿って、沢頭、藤の森、丸節、小城の各遺跡が接近して存在する。中央道は、本遺跡の殆んどをその中に入れて通過し、トンネルで上の原遺跡に抜ける。

今回の調査は、715+20 を A A とし、717+20 までグリットを設定して行なった。(山 田)

2) 遺構と遺物

ア 縄文式時代の遺物 (図 268・278 の 1~10)

縄文式時代の遺物には、土器片と石器がある。土器は 20 片の出土で器形の判明するものはない。1~2 は繊維を含有する縄文前期に比定されるもの、5 は磨消し縄文をもつ後期前半のもの、3・6~13 は、沈線文をわずかに口縁部にそって施す後期中葉から後半にかけての一群である。石器は 1~10 の打製石斧と 266 図 42 の剥片石器、43 の石鏃の出土をみた。(山 田)



第 268 図 沢入口遺跡出土縄文式土器 (1 : 3)

イ 平安時代の遺構と遺物

ア) 1号住居址 (図 269・270・271の39~52、図版79の387・83の396~399)

遺構、駒沢開拓へ通ずる道路沿いに検出された5住居址中、最北に位置し、5.32×5.18mの規模をもつ方形プランの住居址である。主軸方向はN-76°-Wに示す。黒色土を掘り込んで構築されているため、検出は極めて困難であった。壁は軟弱で、西壁は高いが、東へいくにつれ減じ、東壁は一部認められない。床面も一部貼り床があるが、軟弱であり、北西部には小礫の混入がみられた。北壁、南壁には一部周溝がめぐっている。主柱穴と思われるピットが2箇所検出されたほかに、北壁外に2箇所、西壁外に1箇所のピットが確認された。カマドは西壁中央に構築された石組粘土カマドである。石組は堅固であり、よく使用されたと思われる焼土が厚く焚口部に堆積している。また西南隅と東壁中央辺床面に焼土の検出があった。

遺物、遺物は覆土とカマド周辺からの出土が多い。16~38は土師器で、16の坏は内黒の器外面に「守」と墨書され、内面には窯印と思われるものが描かれている。16~28は坏形土器で、19のように灰釉陶器の模倣と考えられる高台付のものもある。29~38は甕形土器で、横方向、縦方向の刷毛目痕が、器内外にみられる。36は須恵器で底部に木葉痕がみられる。39~51は灰釉陶器片であり高台付が主体を占める。51は

土錘である。

(市 沢)

イ) 2号住居址 (図 272・271の53～73・273の74～79、図版 80・83の400・84の402・403)

遺構、本址は、3号住居址の北6m、1号住居址の南32mに検出された。方形プランをとるものと思われるが、黒褐色土層に構築されており、しかも遺構の周囲に山からの礫の流れ込みがあつて、その全貌をつかむことは困難であつたが、幸いカマドおよびその周辺が比較的遺存状態が良かったため住居址であることが確認できた。方形プランを呈するものと推定される。主軸方向はN-88°-Wにとり、カマドは西壁の中央南寄りに構築された1×1mの石組粘土カマドである。遺存状態は良く、底面に平石が敷かれてあり、その下に焼土が2～3cm堆積していた。

遺物、土器の完形品は、カマドの周囲に多く、覆土・床面から多くの破片が出土した。土師器は坏形土器 53～63、鏝釜 72～73の出土があつた。53は内面黒色土器、55～59は焼成が非常に良く、ロクロ目が顕著なものである。60～61は高台の付くものである。灰釉陶器は皿 64と椀形土器 65～71が出土した。

鉄製品は、床面から刃渡り17cmの刀子(75)、鎌(76)、雁股鎌(78)の3個が、さびついて74の状態で見出された。他に鎌の先(77)と不明鉄片(79)の出土があつた。

(山 岡)

ウ) 3号住居址 (図 272・273の106～107・274、図版 81の391)

遺構、2号住居址の南6mの位置に検出された本址は、南北4.28mの規模をもつ方形プランの住居址で主軸方向をN-69°-Wに示す。黒褐色土層に構築されているため、また氾濫による礫の押し出しがあつて遺構検出に苦労した。壁は東壁の確認を欠くが、西壁が高く東へ移るにつれてその高さを減ずる。床面は黒褐色で軟弱である。主柱穴等ピットの確認はない。カマドは西壁中央に構築された石組粘土カマドで1×1.5mの規模を有する。石組は堅固であり、焚口部には焼土の堆積が5cmほどみられた。

遺物、出土遺物には、土師器、須恵器、灰釉陶器がある。80～91は土師器の坏形土器で、内黒の糸切底が多い。92～100は甕形土器であり、101～103は灰釉陶器の杯形土器である。104～107は須恵器の広口壺及び四耳壺である。

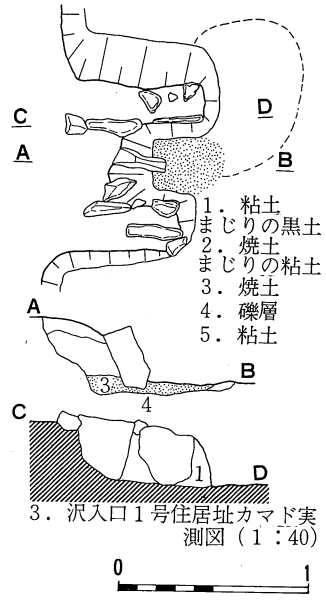
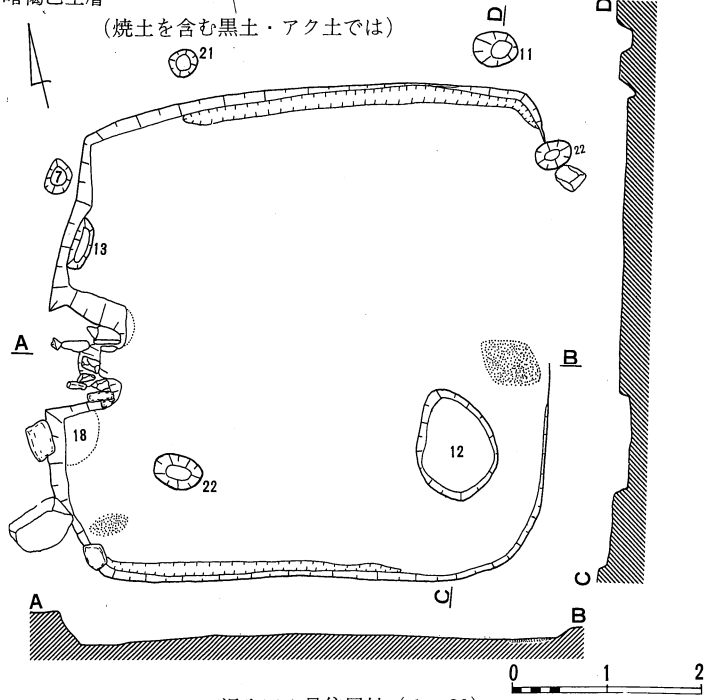
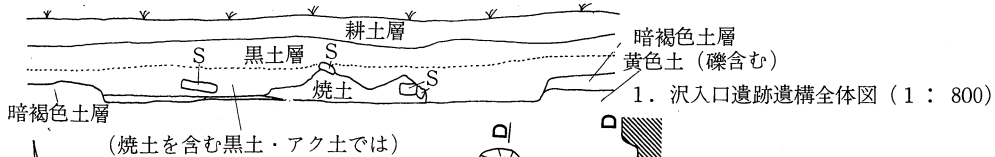
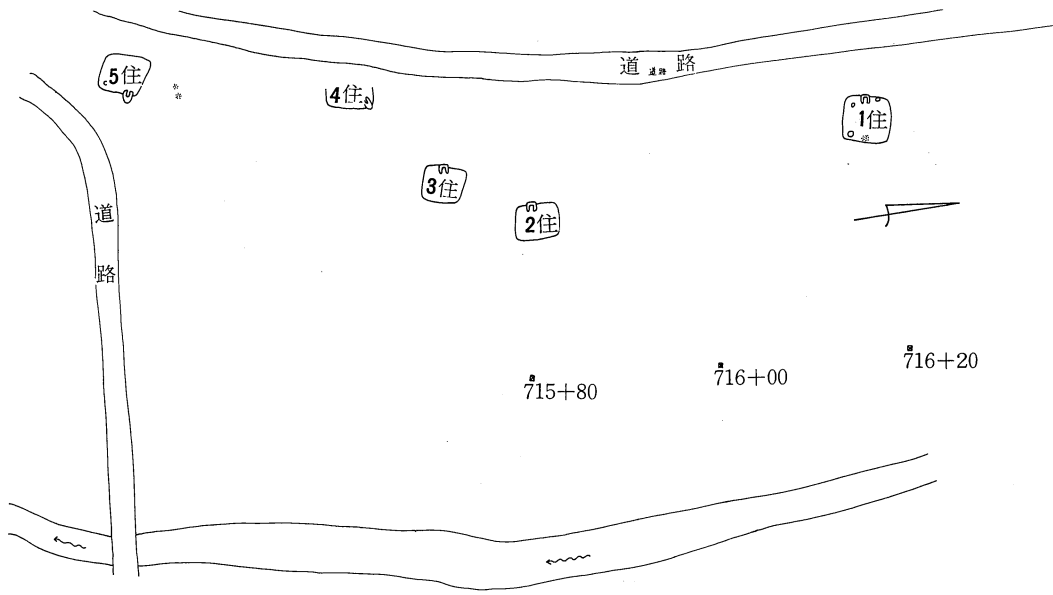
(小松原)

エ) 4号住居址 (図 275・276の108～112、図版 81の392)

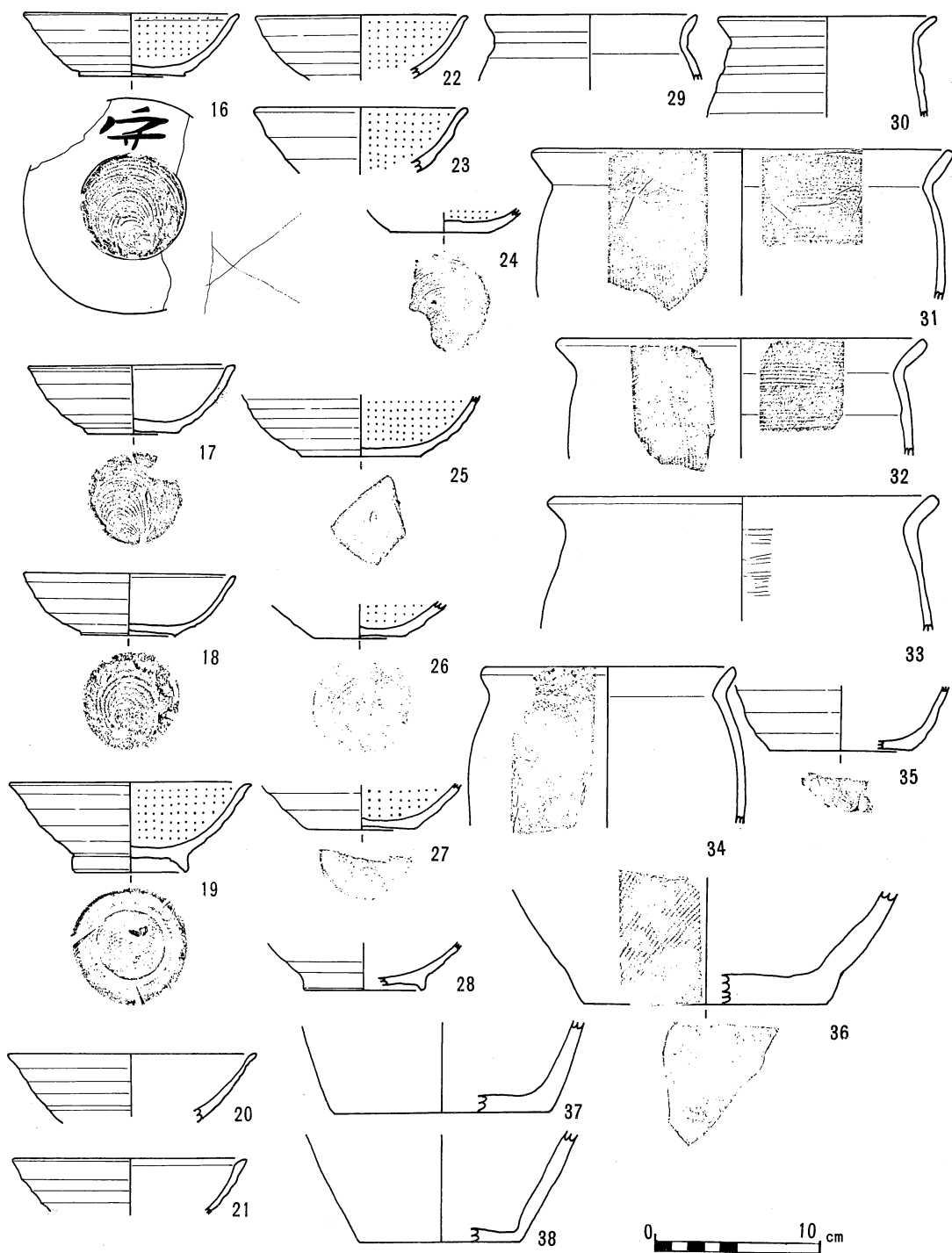
遺構、調査区西端、巾杭ぎりぎりに検出された本址は、道路下までの拡がりをもつものと思われるが、東部の検出のみで終わった住居址である。南18mには5号住居址が、北東8.5mには3号住居址が存在する。本址は、暗褐色土層を掘り込んで構築されているが、北壁の一部とカマドの確認で、プラン規模等不明である。床面も暗褐色土であるため判別しにくく、カマドの焚口の面と同レベルに焼土が小範囲にあるのと、木炭片が散在している面を捕えて床面とした。軟弱であり、主柱穴等の確認はない。カマドは北東隅に設けられた石組粘土カマドで、平石を組んだ堅固なものである。天井石と思われる平石が火床に転落しており、火床、焚口はよく焼けて焼土の堆積がみられた。

遺物、土師器と灰釉陶器片が出土したが少量である。108・109は土師器の甕の破片であり、110～112は灰釉陶器の口縁部と底部片である。

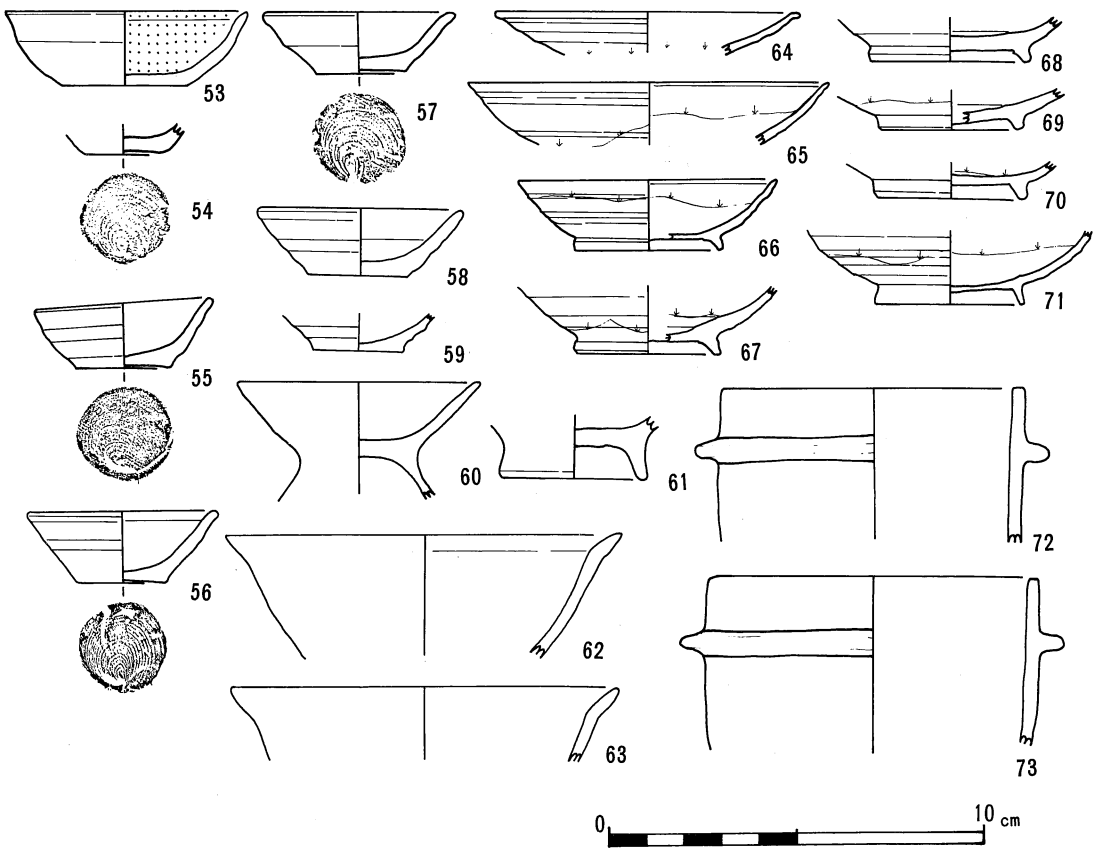
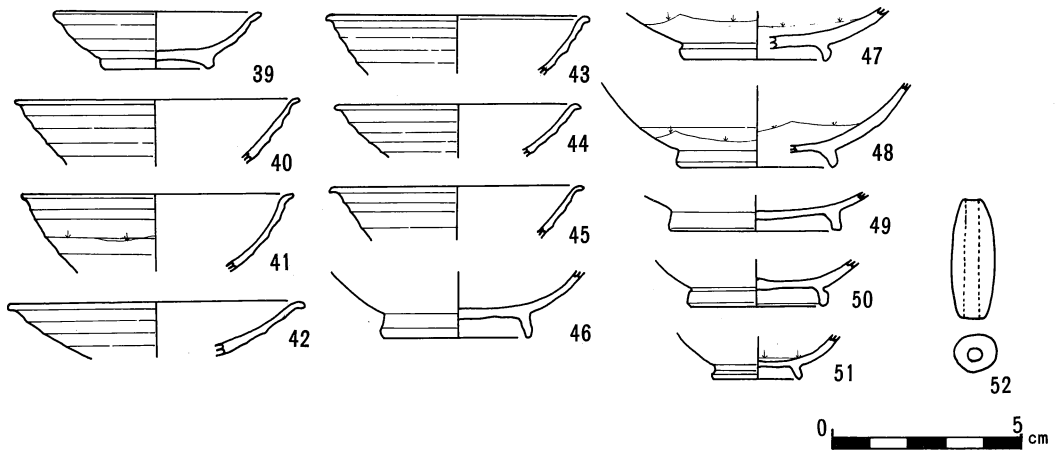
(福 沢)



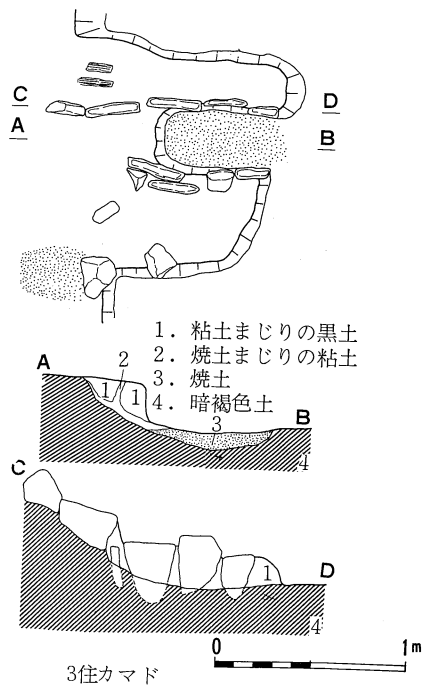
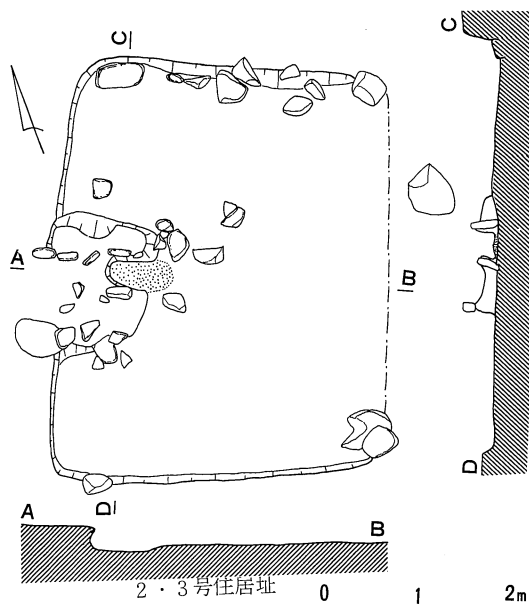
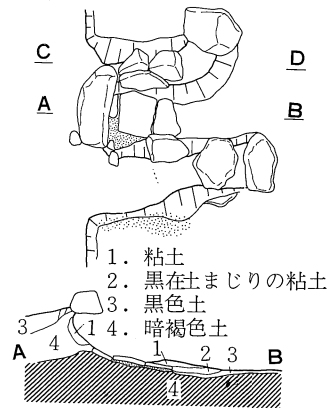
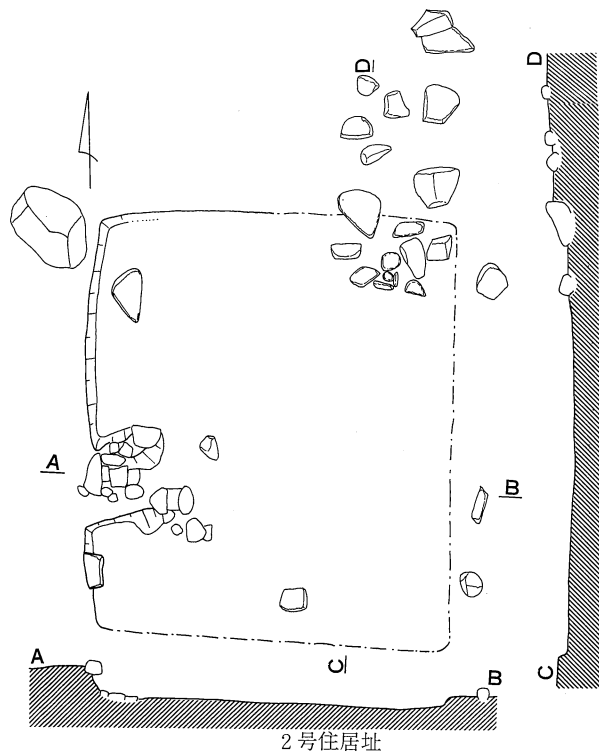
第 269 図 沢入口遺跡遺構全体図 (1 : 800) および 1 号住居址 (1 : 80) カマド実測図 (1 : 40)



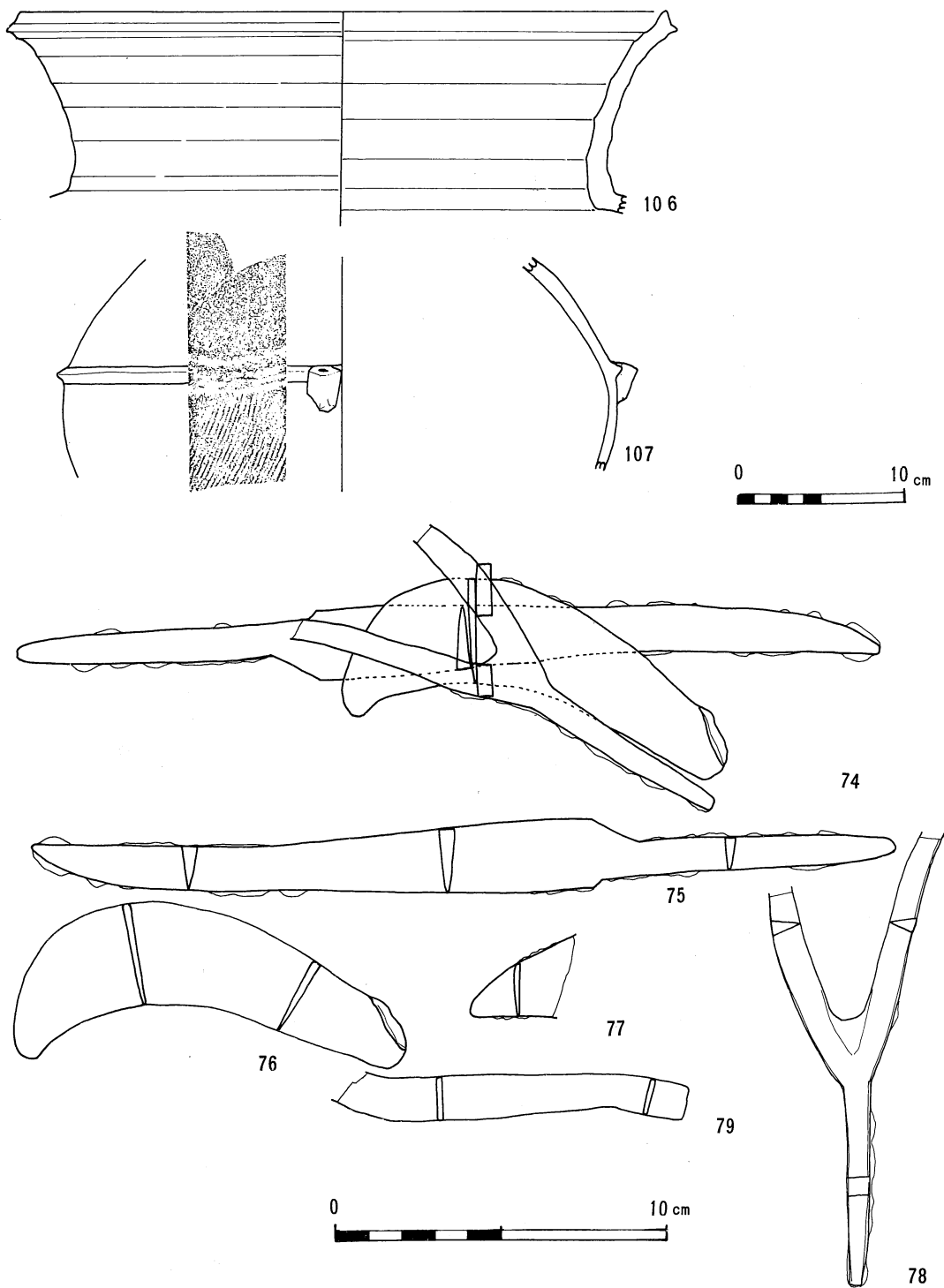
第 270 图 沢入口遺跡 1 号住居址出土土器 (1 : 4)



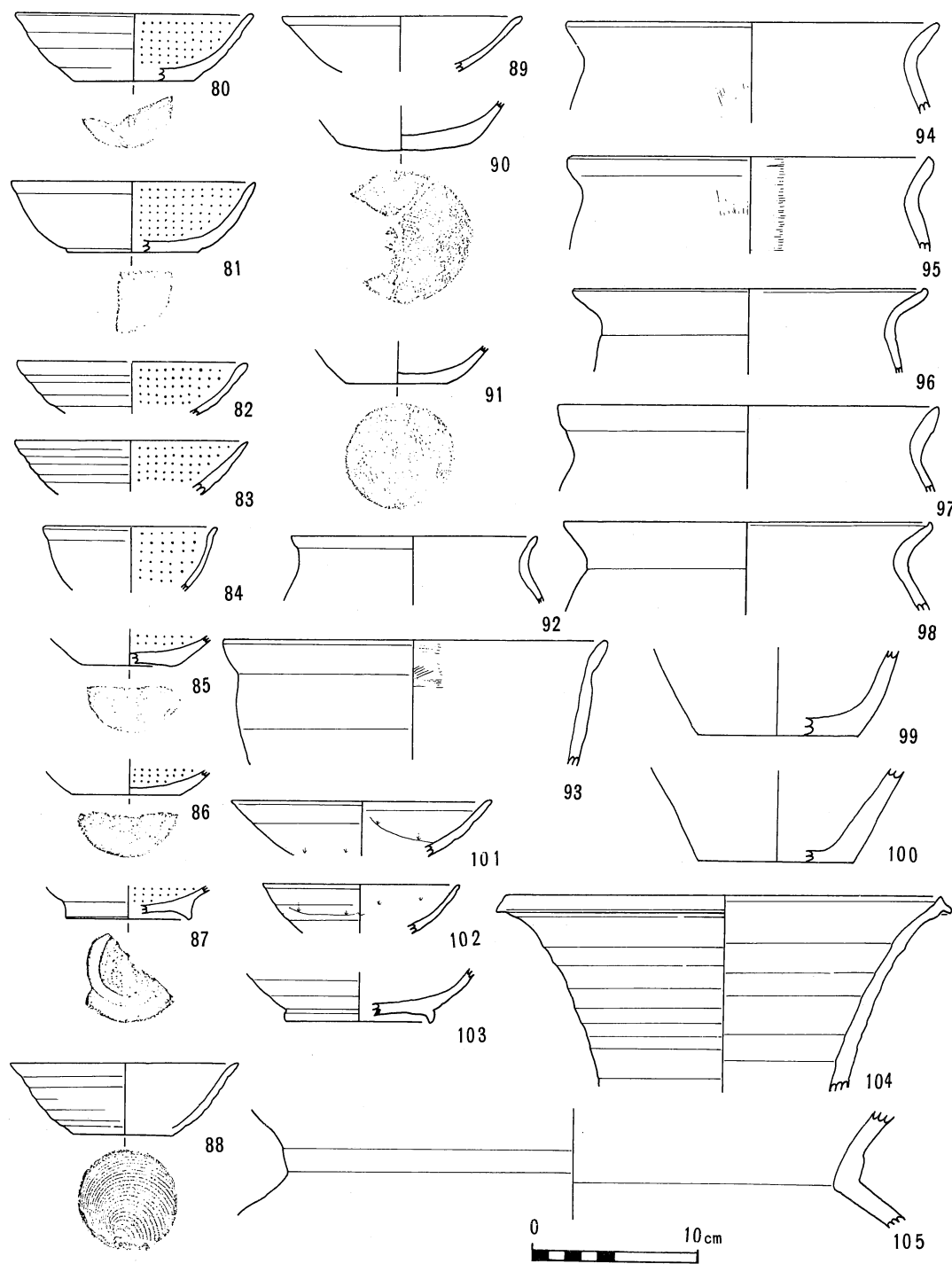
第 271 図 沢入口遺跡 1・2 号住居址出土土器，土錘（52 1：2，他 1：4）
 （39～52 1 住，53～73 2 住）



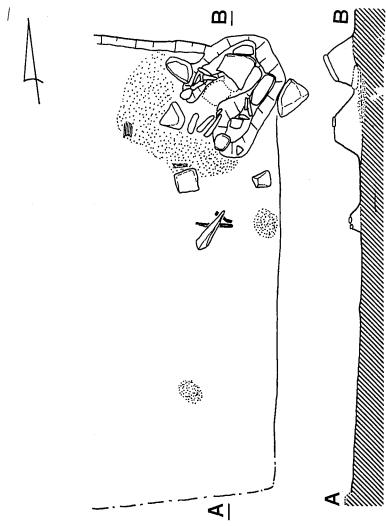
第 272図 沢入口遺跡 2・3号住居址, カマド実測図 (住居址 1:80, カマド 1:40)



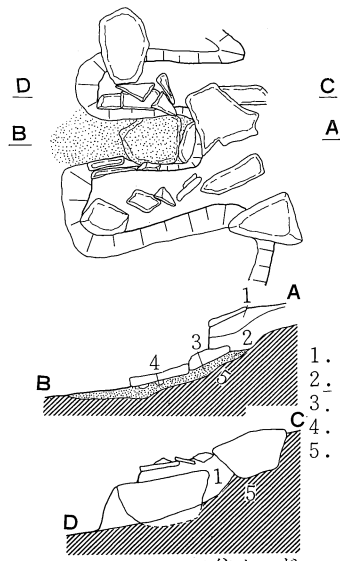
第 273 図 沢入口遺跡 2・3 号住居址出土土器，鉄器（106・107 1 : 4，74~79 1 : 2）
 （106・107 3 号住，74~79 2 号住）



第 274 図 沢入口遺跡・3 号住居址出土土器 (1 : 4)

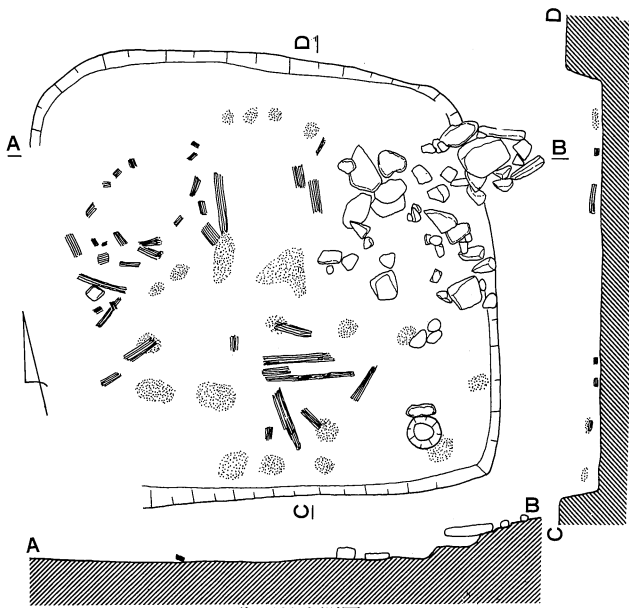


1. 沢入口第4号住居址実測図

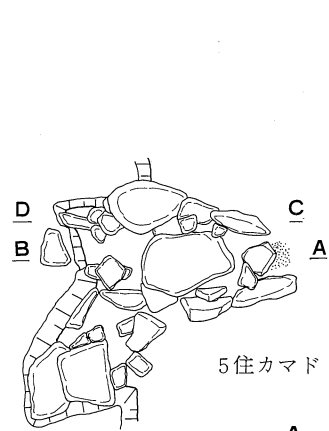
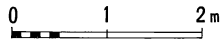


4住カマド

- 1. 粘土混りの黒土
- 2. 焼土混りの粘土
- 3. 焼土
- 4. 粘土
- 5. 暗褐色土

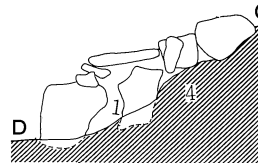


2. 沢入口第5号住居址実測図

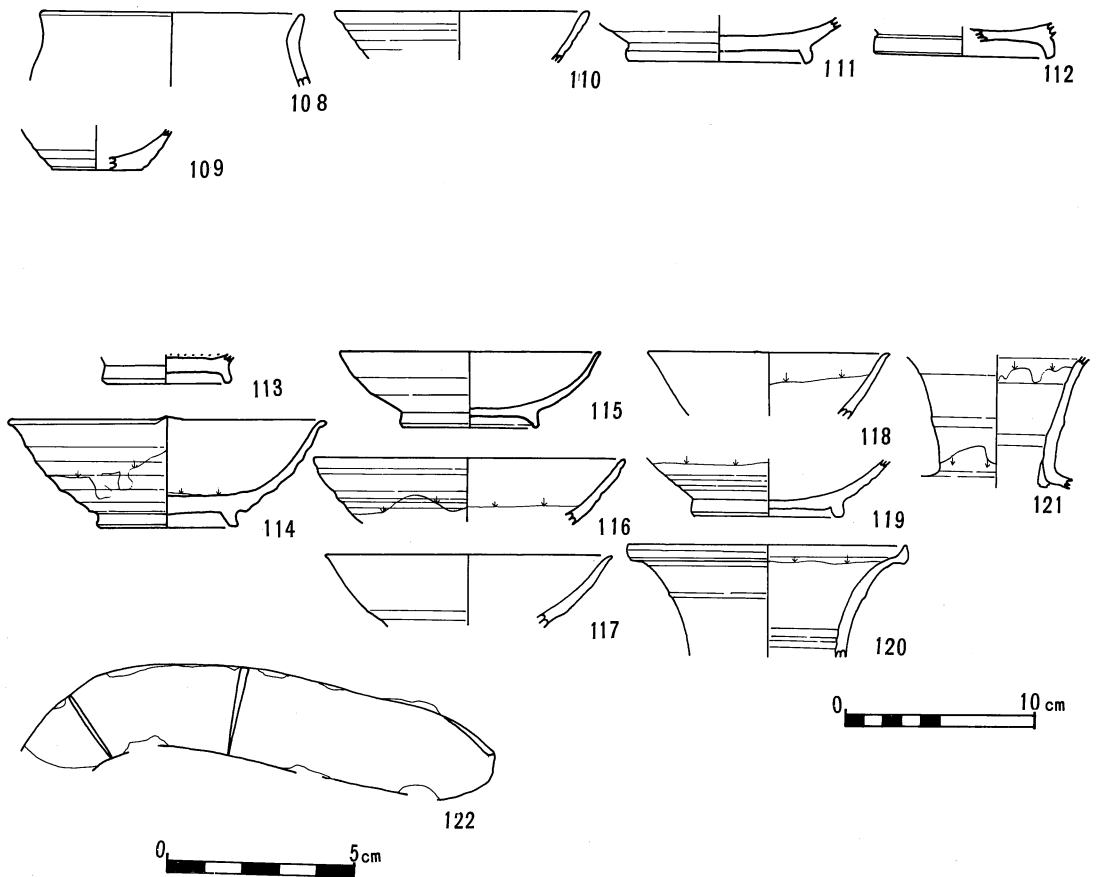


5住カマド

- 1. 粘土混りの黒土
- 2. 粘土
- 3. 焼土
- 4. 暗褐色



第 275図 沢入口遺跡4・5号住居址(1:80)・同カマド(1:40)実測図



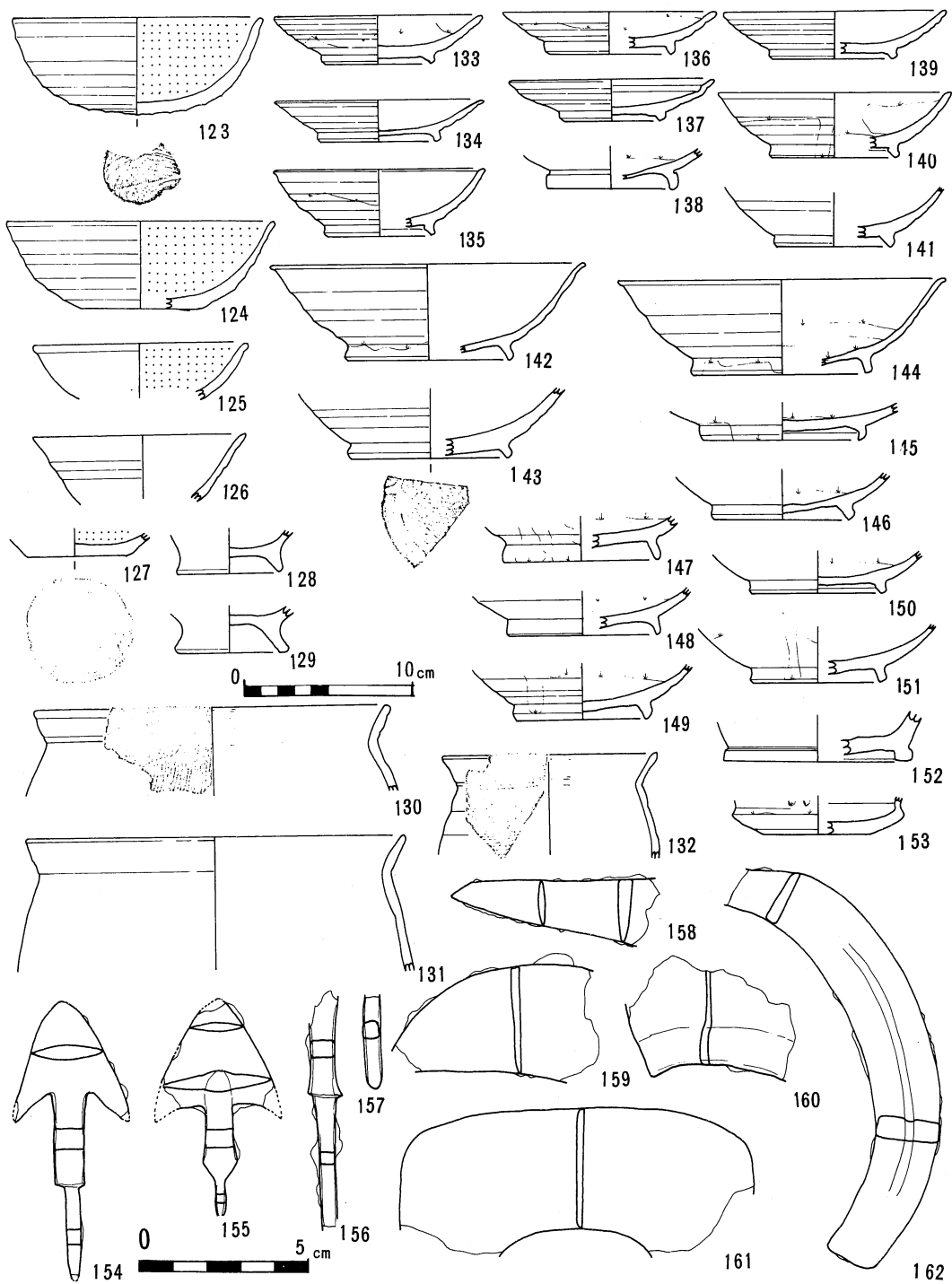
第 276 図 沢入口遺跡 4・5 号住居址出土土器・鎌 (108~ 121 1 : 4 122 1 : 2)
 (108~ 112 4 住 , 113~ 122 5 住)

オ) 5 号住居址 (図 275・276 の 113~122、図版 82)

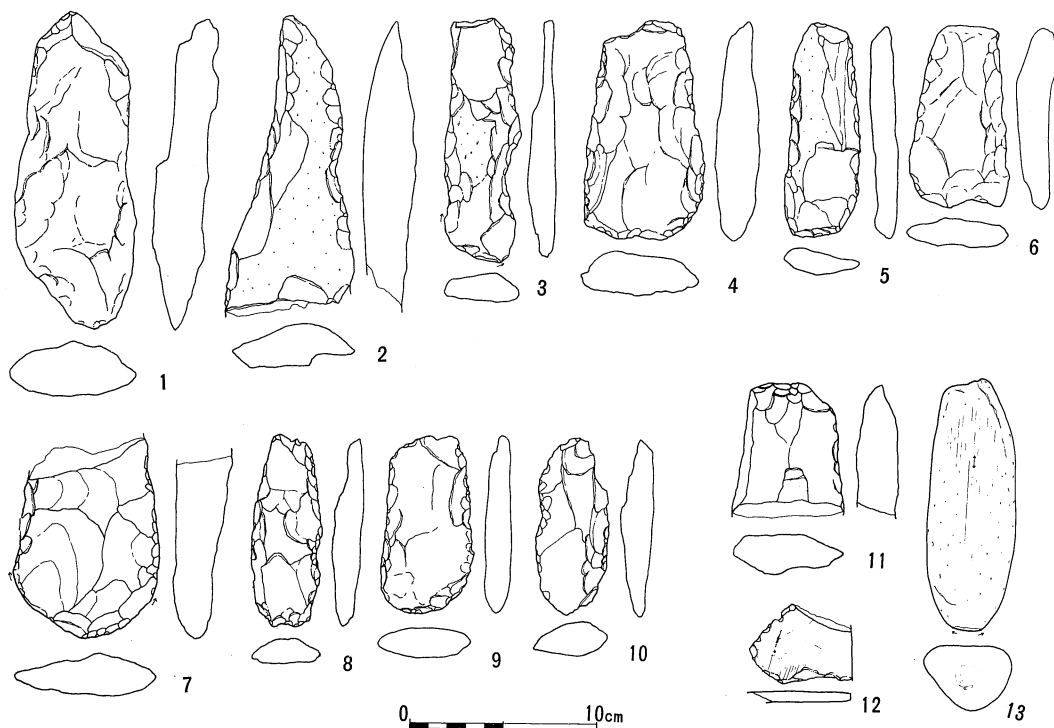
遺構、4 号住居址の南 18m の二道路にはさまれた位置に検出された本址は、火災に遭遇した住居址で、炭化材の出土がおびただしかった。方形プランを呈する 4.70×4.63m の規模を有し、主軸方向を N-103°-E にとる。炭化材は住居址中央に向ってのものが多く、床面上 5~10cm 浮いた状態で多量の茅材を伴っていた。また炭化材と同じレベルで、焼土が 20 個所ほど確認された。床面は黒褐色土を固めてあり、やや軟弱であった。支柱穴は 2 個所確認されている。カマドは北東隅に設けられた石組粘土カマドで、平石を立てて組んである。焚口部、火床ともよく焼けて焼土の堆積がみられた。カマド前の床面には、自然石の散在がある。

遺物、土師器と灰釉陶器、鉄製品の出土をみたが、覆土中からの出土が多い。113 は土師器内黒坯の底片であり、内黒となっている。114~121 は灰釉陶器で、114~119 は坯ないし椀形土器であり、120 121 は長頸瓶である。114 はカマド内から出土している。122 は北西隅の壁から出土した鉄鎌である。本址は土師器より灰釉陶器が量的に多い。

(山 田)



第 277 図 沢入口遺跡・その他出土土器・鉄製品 (123~ 153 1 : 4 , 154~ 162 1 : 2)



第 278 図 沢入口遺跡，沢頭遺跡出土 石器（1：4）（1～10 沢入口遺跡，
11～13 沢頭遺跡）

カ) その他の遺構と遺物（図 277、図版 82 の 396・84 の 405）

a) 遺構、3号住居址の南に焼土面の検出があった。焼土は東西 140×南北 60cm の範囲に認められ、黒色土の上に 8cm の厚さで認められた。焼土内に自然石も混入し、焼土から 30cm 南に径 60×60cm の平らな面を上にした石がある。出土遺物はなく性格は不明である。また、5号住居址の北にも、2個所の小範囲の焼土面が認められた。

b) 遺物、遺構外からの出土遺物に、土師器、灰釉陶器、鉄製品がある。

土師器は、123～129 の環形土器と 130～132 の甕形土器である。123 は丸底の内黒で器面に稜を形成する。128・129 は台付環の底部片である。甕形土器は刷毛目痕が縦方向・横方向にみられる。灰釉陶器は、133～153 で、規格化されてそろっている。133 に代表される皿形、135 の椀形のやや小形品、142 の椀形等に大別されよう。すべて高台付である。

鉄製品には、154～157 の鉄鏃、158 の刀子片、159 の鉄鎌片がある。160・161 は不明鉄片であり、162 の馬蹄は時期の下降するものと思われる。（山 田）

3) ま と め

前沢川に沿った狭い谷地に位置した本遺跡から、平安時代の竪穴住居址5軒が検出された。黒色土層から黒褐色土層へ掘り込んだ、小規模の方形プランのものであるが、カマドはいずれも石組粘土で堅固に構築されている。黒褐色土の床面で、プラン検出に困難さを極め慎重を機して行なったが、支柱穴等の確認はなかった。出土遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄製品で、特に顕著なのは、須恵器の出土量よりも灰釉陶器の出土の方が多いことである。灰釉陶器も規格化された製品で、美濃地方との交易が盛んであったことを思わせる。また、鉄製品も量的に多く、灰釉陶器と共にその普及が顕著である。とりわけ、鉄鎌、鉄鍬は生産活動に関連し、土錘の出土もあって、その多様性を物語るものであろう。

地続きの沢頭、藤の森の両遺跡からも、同時期に比定される竪穴住居址が各1軒、検出されて、計7軒の住居址が、用地内から露呈した。これは、狭い谷地に位置した当時の山村集落の様相としてとらえることができ、その点で好資料を得たといえよう。山菜、鳥獣、川魚等に恵まれた地ではあつたろうが、前沢川の氾濫という危険性を常に有していたことが、発掘時の所見で判明し、住居址の配置も山沿いを選んでいることが、うなづかれる。

また、この三遺跡からは縄文期の遺物の検出もあり、古くから生活の場とされたことが判明した。すなわち、沢頭遺跡の縄文早期・中期土器片、藤の森遺跡の縄文前期・中期土器片、当沢入口遺跡の縄文前期・後期土器片がそれを物語る。 (山 田)

14. 上 の 原 遺 跡 (UEB)

1) 位 置 (図7)

本遺跡は、辰野町大字平出228の1～2番地一帯に所在する。諏訪湖から流出した天竜川は狭谷の地帯を流下して上平出部落から広がる伊那盆地へ続くが、本遺跡は、この狭谷地帯の左岸、すなわち、伊那山地の山腹に位置している。天竜川に沿って中央本線と下諏訪辰野線が平行して走るのを眼下に見おろす地で、岡谷市との境界近くである。中央道もこれらに沿って平行線をたどるため今回の調査となった。

調査は、724+00をAAとし、724+84までグリットを設定して行なった。

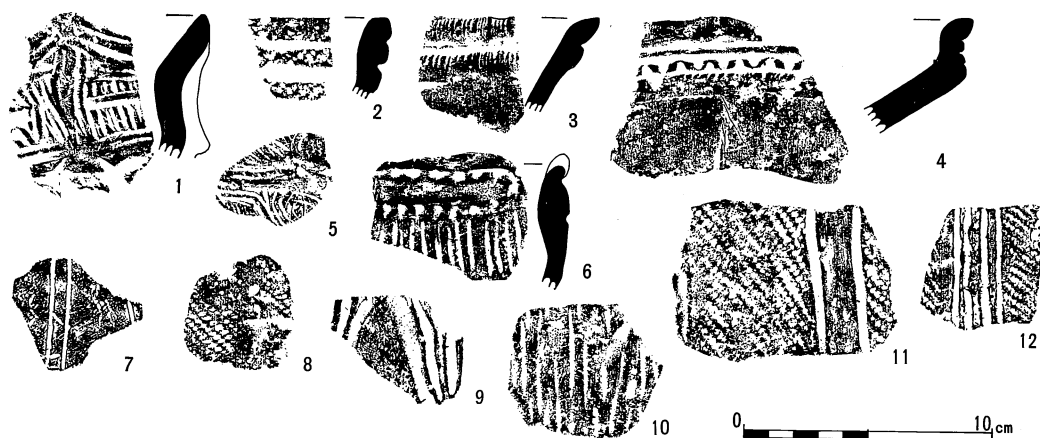
また周辺遺跡としては、尾根を起した北に、岡谷市の地籍に入るが、六地在家、追鶴沢の縄文期の遺跡が存在し、天竜川へ面した小尾根の平坦部や凹地に営なまれる一群の遺跡としてとらえられる。

2) 縄文式時代の遺物 (図279)

調査地は山腹の傾斜した畑であり、岩石の露頭があつたり、地下水の流出があつたりで居住地としては適さない。遺構の検出はなく、少量の縄文中期土器片を得たにとどまった。

3) ま と め

天竜川に面した伊那山地の山腹に位置した本遺跡からは、わずかの縄文中期土器片を得て、生活の痕跡を認めたとすぎない。用地外に仮りに居住地があったとしても、小規模のもので、集落を形成する地形ではない。かかる遺跡が、岡谷市橋原区から、辰野町平出地区にかけて、点在することから、通過地帯としてのまた、狩りよう採集の場としての性格を強く感じさせる。 (山 岡)



第 279図 上の原遺跡出土縄文式土器 (1 : 3)

あ と が き

辰野町内その2の発掘調査は、総ての自然が活動を開始する時期と同じにして、4月19日、若宮遺跡から始まり、10月23日、紅葉を眺めながらの神送遺跡を最後に、14遺跡の調査がすべて完了した。この6か月に及ぶ長期間、樋口内城館址遺跡では、ことのほか遺構・遺物の検出があつて2か月余の日時を費したが、ほぼ当初の計画予定通りに終了することができ、これはひとえに関係諸機関、関係者御一同から惜しまぬ支援と配意を賜つたことと、発掘作業員の皆様の絶大なご協力があつたことによるものである。また、遺構・遺物の多かつたのにもかかわらず、短期間での整理事業、原稿執筆を経て、ここに報告書の刊行をみるに至つたのは、調査員諸君の努力の結果であり、関係各位に対し、団長として厚くお礼を申し上げる次第である。

調査結果については、それぞれの項に記されているが、縄文期から中世に至る遺構・遺物の検出を得て、その資料としての価値は高いものである。

縄文期では、土器型式に問題点をもつ前期末から中期初頭にかけての住居址2軒、それに伴うと思われる土壙8基と土器・石器の一括資料を得た堂ヶ入遺跡は、崖錐上の微地形上に立地する単位集落として大きな意味をもつものと思われる。また辰野町教育委員会による発掘調査及び、その資料を借用できて一括報告のできた樋口内城館址遺跡では、丘陵縁辺部に沿つて円形に配置された57軒の縄文中期の住居址と数多い土壙群から、集落立地、集落構造、習俗等を考える上で密度の極めて高い資料が提出された。樋口内城館址遺跡下の段丘面に位置する荒神社矢沢遺跡からは、縄文中期の住居址4軒が検出され、昭和47年度調査の樋口五反田遺跡の北限を知り得たことと、更に距離の余りない樋口内城館址遺跡との関連性や、時間的・空間的な広がりが大きく問題提起されたことにならう。

弥生期では、やはり樋口内城館址遺跡であり、弥生中期から後期前半の住居址の検出が66軒と、その数も多く個々の住居址は勿論のこと、集落構造、生産活動等を検討する好資料を得た。

次に古墳時代から平安時代にかけては、若宮、樋口内城館址、神送、牧垣外、藤の森、沢頭、沢入口の各遺跡から住居址の確認を得て、それぞれ集落の限界の一部を知り得たことに大きな成果がある。特に藤の森、沢頭、沢入口の三遺跡は、山合いの谷間の遺跡で地続きでもあり、出土遺物からしても同一遺跡と考えられ、谷地に営なまれた山村集落の一型態として把握できよう。これらの各遺跡は、鉄製品の普及および灰釉陶器の搬入等注目すべき内容をもっている。古代東山道や平井手牧の存在に直接関係する資料ではないが、それらに関連あるものとして意義深い。

中世関係では、堂ヶ入遺跡の墓址群は、庶民階級の墓として、特に五輪塔をもつもの、石室を有するもの等の検出があつて、当時の墓制研究の上で大いに資するものがある。また樋口内城館址遺跡の城郭に関すると思われる住居址、小竪穴、特殊円形竪穴、溝状遺構、柵状柱穴列等は、地形的にみた空堀、帯曲輪と共に、城郭の姿としてとらえられ、古城址研究の一資料とならう。

かかる結果を得た辰野町その2の調査は、言うまでもなく辰野町の歴史を考えていく上で貴重な資料の数々を得たことになる。この報告書が活用され、今後の研究の上で少しでも役立つことがあれば、こんなに喜ばしいことはない。

(大沢和夫)

石器計測表

遺跡	遺構	図番号	石器名	長(mm)	巾(mm)	厚(mm)	重(g)	石質	完・破	使用痕等
TZB	その他	8-1	打製石斧	135	63	29	238	凝灰岩	完	
		2	〃	128	58	14	149	〃	〃	刃部使用磨滅
		3	〃	121	42	22	135	〃	〃	〃 擦痕あり
		4	〃	112	40	15	102	〃	〃	風化磨滅
		5	〃	(105)	—	14	(68)	粘板岩	刃・側部欠	斜めに折損
		6	〃	106	48	15	98	〃	完	風化磨滅
		7	〃	(80)	68	16	(130)	凝灰岩	刃部のみ	
		8	〃	(76)	—	13	(28)	〃	頭部のみ	斜めに折損
YWB	2号住	24-1	打製石斧	147	71	27	309	硬砂岩	刃一部欠	
		2	〃	115	52	16	126	凝灰岩	完	風化磨滅
		3	敲石斧	(106)	(40)	28	(161)	ハンレイ岩	刃部欠	
		4	横刃形石器	81	104	21		硬砂岩	完	有柄
		5	〃						〃	〃
	3号住	25-26	打製石鏃	44.4	14.7	6.7	3.3	松脂岩	頭欠	
		24-6	打製石斧	207	56	25	350	粘板岩	完	風化磨滅
		7	横刃形石器	48	87	9	40	〃	〃	
		8	磨製石斧	70	32	12	30	?	〃	刃部から頭部へ欠れるもそのまま使用、刃部使用磨痕
	4号住	25-27	打製石鏃	24.6	13.2	3.4	0.8	黒曜石	〃	
		24-10	打製石斧	128	34	17	90	ハンレイ岩	完	刃・側部使用磨滅
		11	〃	124	42	14	89	凝灰岩	〃	刃部使用磨滅擦痕あり
		12	〃	90	46	16	70	〃	〃	〃
		13	局部磨製石斧	72	38	14	59	緑泥岩	〃	〃 擦痕あり
		14	凹石	104	70	29	322	凝灰岩	〃	礫器兼用・片面2孔
		25-28	打製石鏃	34.3	12.1	4.2	1.2	黒曜石	一脚欠	
		29	〃	(19.3)	(13.1)	(3.8)	(0.7)	〃	頭・一脚欠	
		30	〃	15.6	12.5	3.2	0.5	チャート	完	
		31	石鏃	15.5	3.6	1.8	0.9	黒曜石	〃	
		その他	24-15	打製石斧	122	53	15	131	粘板岩	完
	16		局部磨製石斧	113	38	16	98	緑泥岩	〃	
	17		打製石斧	113	53	24	146	粘板岩	〃	有柄、刃部とえぐり部は使用磨滅
	18		〃	110	44	18	90	凝灰岩	〃	
	19		〃	(95)	46	13	(85)	〃	刃欠	
	20		打製石斧	93	53	18	97	砂岩	完	刃・側部使用磨滅
	21		敲打器	101	47	30	277	緑泥岩	〃	敲磨製、敲打部は両端
	22		石皿					安山岩	半欠	両面使用、片面やや凹む程度、片面は若干磨く程度
	23		凹石	77	94	40	375	砂岩	完	両面1孔づつ、側部敲打痕
	24		磨石	56	36	34	140	火山弾	〃	全面磨滅
	25		〃	41	48	38	98	硬砂岩	〃	〃
	25-32		打製石鏃	27.9	14.7	4.0	1.0	黒曜石	〃	
33	〃		22.7	15.2	4.3	1.0	〃	〃		
34	〃		24.7	9.5	5.2	1.0	〃	側・一脚欠		
35	〃		18.2	13.3	2.7	0.4	〃	完		
HZC	2号住フ	35-1	打製石斧	(95)	41	23	(138)	ハンレイ岩	刃欠	
		2	磨製石斧	(64)	(57)	36	(220)	緑泥岩	頭・刃欠	
		3	凹石	61	87	47	349	安山岩	完	表2孔・裏2孔、a類
		4	〃	149	61	25	293	凝灰岩	〃	表1孔・裏1孔、c類
		5	〃	(171)	66	36	(529)	〃	一部欠	表3孔・裏1孔
	3号住フ	44-53	打製石鏃	21.1	15.0	4.3	1.0	黒曜石	完	
		35-6	打斧	105	49	23	150	粘板岩	完	
		7	横刃形石器	79	102	34	245	硬砂岩	〃	
	4号住フ	8	凹石	68	54	43	210	安山岩	〃	表1孔
		35-9	打製石斧	(89)	43	17	(90)	硬砂岩	刃欠	
		11号住フ	35-10	打製石斧	108	49	17	110	ハンレイ岩	完
11	凹石		80	139	30	547	緑泥岩	〃	表1孔、側縁部敲打痕	

遺跡	遺構	図番号	石器名	長(mm)	巾(mm)	厚(mm)	重(g)	石質	完・破	使用痕等	
HZC	11号住フ	35-12	凹石	161	44	31	295	安山岩	完欠	表2孔、長端一端に敲打痕	
		44-55	打製石鏃	18.2	13.4	3.7	0.9	黒曜石	頭欠		
		56	〃	16.5	10.4	3.9	0.8	〃	一脚欠		
			57	剥片石器	16.3	24.0	3.6	1.5	〃	完?	
		17号住フ	44-58	打製石鏃	15.5	12.6	3.0	0.6	黒曜石	頭欠	
	59		〃	13.3	15.2	2.9	0.4	〃	完		
		10号住口	35-13	打製石斧	108	50	20	120	粘板岩	完	刃部使用磨減
	14		〃	(95)	45	18	(81)	〃	刃欠		
		ウ	15	〃	105	40	16	91	〃	完	刃部使用磨減
	16		〃	(61)	46	17	60	凝灰岩	刃欠		
			17	凹石	51	107	29	220	〃	完	表1孔・裏1孔、表裏に台石様痕跡
			18	〃	97	129	57	1024	安山岩	〃	表3孔、裏1孔
		44-61		打製石鏃	22.7	14.9	4.1	1.1	黒曜石	〃	
			62	打製石鏃	17.6	20.2	3.5	0.8	黒曜石	〃	
			63	剥片調整石器	40.0	77.4	11.2	29.7	〃	〃	
			64	〃	36.7	66.5	10.2	25.5	〃	〃	
			65	転石利用石器	54.2	13.3	6.0	6.6	黒曜岩	〃	
		9号住フ	35-19	打製石斧	120	46	22	160	凝灰岩	完	刃部使用磨減
	20		〃	117	80	24	232	〃	〃		
	21		〃	121	49	13	80	〃	〃		
	22		〃	101	43	14	82	硬砂岩	〃		
	44-66		打製石鏃	23.2	16.7	4.7	1.5	黒曜石	〃		
		12号住フ	43-23	打製石斧	111	52	18	150	硬砂岩	完	
		24	〃	94	56	22	133	粘板岩	〃		
		25	磨製石斧	(10.1)	60	39	(371)	ハンレイ岩	頭欠	整形擦痕	
	ユ	44-67	打製石鏃	13.6	10.9	2.2	0.3	黒曜石	完		
	フ	68	〃	(31.8)	(17.3)	(5.4)	(1.8)	〃	一脚欠		
		69	〃	17.6	11.2	3.3	0.4	〃	頭・一脚欠		
		70	石錐	(30.0)	5.2	3.5	2.7	〃	尖端欠		
	19号住口	43-26	礫器	148	63	17	270	緑泥岩	完	両長端、側部に敲打、剝離、使用磨減痕	
		フ	27	打製石斧	131	45	17	121	硬砂岩	〃	
		28	〃	121	40	15	106	粘板岩	〃	胴側縁部に使用磨減	
		29	〃	114	40	15	98	凝灰岩	〃		
		30	横刃形石器	54	121	17	104	硬砂岩	〃		
		31	敲石	60	44	17	63	砂岩	〃	4側面に敲打痕	
		32	磨製石斧	(64)	(41)	(35)	(120)	緑泥岩	頭のみ	敲磨製	
		33	〃	90	(22)	14	(30)	〃	側欠	擦切手法の切りこみ部を残す	
		34	〃	160	64	34	520	〃	完	敲磨製、台石様痕跡を胴部に残す	
		35	敲打器	197	48	32	503	緑泥岩	〃	長端一端を敲打・胴部擦痕	
	27号住フ	43-36	打製石斧	99	44	11	76	凝灰岩	完	刃・側部使用磨減	
		37	〃	(68)	49	16	(75)	砂岩	頭欠	〃	
		38	敲石斧	146	46	32	398	緑泥岩	完		
		39	磨石	101	115	49	701	花崗岩	〃	全面磨ただ平面部の凹凸は台石様痕跡か?	
		40	凹石	68	100	39	350	〃	〃	表2孔、a類、側縁敲打	
	44-72		打製石鏃	20.7	14.5	5.0	1.1	黒曜石	完		
		73	〃	(13.4)	15.5	3.4	(0.7)	〃	頭欠		
		74	撞器	43.6	25.6	11.4	19.7	チャート	完	Flutingを施す	
	28号住フ	43-41	打製石斧	123	45	16	139	凝灰岩	完	刃、側部使用磨減	
		42	〃	110	39	19	105	粘板岩	〃	刃部使用磨減	
		43	〃	79	38	9	33	〃	〃	有柄	
		44	凹石	82	94	39	388	安山岩	〃	表2孔、裏2孔 a類	
	ユ	44-75	打製石鏃	25.5	15.4	6.3	2.3	チャート	完		
		76	〃	24.3	23.5	8.6	3.8	黒曜石	〃		
		77	〃	23.7	15.6	4.4	1.2	〃	〃		
	フ	78	〃	29.1	(12.3)	4.4	1.1	〃	一脚欠		
		79	〃	26.2	17.0	4.8	1.8	〃	完		
		80	〃	22.7	17.0	6.4	2.2	〃	〃		
		81	〃	21.7	15.8	4.3	1.3	〃	〃		
		82	〃	20.8	14.5	3.3	0.7	〃	〃		

遺跡	遺構	図番号	石器名	長(mm)	巾(mm)	厚(mm)	重(g)	石質	完・破	使用痕等	
HZC	28号住フ	44-83	打製石鏃	18.6	14.0	3.6	0.6	黒曜石	完		
		84	〃	15.3	17.7	2.4	0.4	〃	頭欠		
		85	〃	15.2	15.2	3.3	0.6	〃	〃		
		86	〃	(11.7)	16.3	3.4	(0.4)	〃	〃		
		87	両面石器	22.8	19.6	6.8	2.4	〃	完		
		88	転石利用の石器	17.7	23.8	6.5	2.3	〃	〃		
		89	剝片石器	53.3	14.3	4.8	4.8	〃	〃		
		90	〃	33.6	13.4	3.4	2.0	〃	〃		
		91	弧状石器	29.6	8.1	3.6	1.2	〃	〃		
			25号住フ	43-45	打製石斧	134	62	14	152	硬砂岩	完
46	〃			133	39	25	171	緑泥岩	〃		
47	〃			120	48	19	130	硬砂岩	〃	刃部使用磨滅	
48	〃			114	43	18	117	ハンレイ岩	〃	表全体	
49	〃			(83)	45	24	(104)	粘板岩	頭欠	刃一部	
50	〃			96	42	11	63	凝灰岩	完		
51	〃			(77)	45	15	(72)	〃	刃欠		
52	凹石			70	83	44	323	安山岩	完	表1孔、裏1孔、a類	
44-92	打製石鏃			32.7	13.3	4.7	1.3	黒曜石	完		
93	〃			24.5	19.8	6.4	2.3	〃	〃		
94	〃			23.5	13.4	3.7	2.2	チャート	頭欠		
95	〃			26.4	17.3	6.5	2.2	黒曜石	完		
96	〃			24.3	12.0	3.6	0.7	〃	一脚欠		
97	〃			22.6	15.3	4.5	1.2	チャート	完		
98	〃	22.4	12.9	4.0	1.1	黒曜石	〃				
99	〃	22.3	17.8	4.2	1.3	〃	〃				
100	〃	19.6	14.3	5.0	1.2	〃	〃				
101	〃	17.7	14.2	4.6	1.1	〃	〃				
102	〃	13.4	13.0	4.8	0.7	〃	一脚欠				
103	〃	(15.6)	(19.3)	(4.0)	(0.9)	〃	上半欠				
104	〃	(16.1)	17.3	3.6	(0.9)	〃	頭欠				
105	〃	14.4	13.6	2.6	0.4	〃	一脚欠				
106	〃	(12.0)	11.4	2.8	(0.2)	〃	頭欠				
107	小形磨石斧	35.1	11.2	6.5	5.8	?	完				
	30号住フ	54-109	打製石斧	103	77	16	191	硬砂岩	完	刃部使用磨滅	
		110	〃	95	52	18	106	凝灰岩	〃		
		111	〃	(91)	45	15	(81)	粘板岩	刃欠		
		112	凹石	73	87	55	(321)	?	一部欠	表2孔、裏1孔以上、側部6孔以上、a類	
	38号住フ	54-113	打製石斧	128	42	17	(113)	凝灰岩	刃欠		
		55-140	石ヒ	(25.6)	(26.1)	(6.8)	(4.7)	チャート	つまみ部のみ		
	47号住ユ	54-114	打製石斧	118	59	17	150	粘板岩	完		
		115	〃	152	41	30	215	〃	〃	刃・側部使用磨滅、擦痕あり	
		116	〃	124	32	13	60	〃	〃		
		フ	117	〃	116	42	15	29	凝灰岩	〃	
		55-141	打製石鏃	21.4	13.2	4.2	0.8	黒曜石	〃		
	48号住フ	54-118	敲打器	(95)	64	43	(410)	砂岩	半欠	長軸一端敲打、台石様痕あり、側部は磨石様磨痕	
		45号住フ	54-119	打製石斧	101	50	13	95	凝灰岩	完	刃部使用磨滅
	45号住フ	120	〃	90	57	21	119	〃	〃		
		121	〃	80	25	8	28	〃	〃	側部使用磨滅	
		122	〃	151	37	13	130	ハンレイ岩	〃	全体使用磨滅	
		123	敲石斧	(92)	43	37	(231)	〃	刃欠		
		124	磨製石斧	78	23	9	25	緑泥岩	完	整形擦痕あり	
		ユ	125	凹石	172	54	30	370	?	〃	表2孔、長端一端を敲打、c類
		フ	55-142	剝片調整石器	47.7	24.1	8.2	9.0	黒曜石	〃	
	62号住フ	54-126	石皿	(81)	83	53	(353)	砂岩	半欠		
		64号住フ	54-127	凹石	64	85	30	200	安山岩	完	表2孔、b類
	67号住フ	54-128	打製石斧	85	63	24	120	凝灰岩	頭欠	胴一部使用磨滅	
		129	〃	121	36	18	76	粘板岩	完		
		130	〃	93	41	15	70	凝灰岩	頭欠	刃・胴部使用磨滅	
		55-143	転石利用の石器	98.1	21.5	14.7	28.1	黒曜石	完		

遺跡	遺構	図番号	石器名	長(mm)	巾(mm)	厚(mm)	重(g)	石質	完・破	使用痕等
HZC	67号住フ	55-144	転石利用の石器	46.4	32.8	8.6	11.9	黒曜石	完	
		145	両面石器	33.3	24.7	9.8	11.3	〃	〃	
	86号住フ	54-131	横刃形石器	80	161	16	(180)	安山岩	刃一部欠	有柄
	92号住フ	54-132	打製石斧	124	63	23	150	粘板岩	完	
		133	磨製石斧	(73)	45	36	(162)	緑泥岩	頭・刃欠	敲磨製
		134	横刃形石器	56	68	11	38	粘板岩	完	有柄
		55-146	打製石鏃	19.3	14.6	4.3	0.8	黒曜石	〃	
	73号住フ	54-135	打製石斧	131	40	11	83	凝灰岩	完	
		136	〃	119	44	17	110	粘板岩	〃	風化磨滅
		137	〃	101	48	20	138	〃	刃欠	
		138	〃	70	44	20	80	〃	頭欠	
		139	〃	173	49	24	189	〃	完	
	70号住フ	74-155	打製石斧	100	52	13	79	粘板岩	完	
		156	〃	(84)	46	14	(61)	〃	刃欠	
		157	磨製石斧	135	53	30	398	緑泥岩	完	刃部に敲磨製痕
		158	〃	125	51	39	450	〃	頭欠	
		159	磨石	90	132	62	1190	安山岩	完	平面部は磨、側面は敲打痕か？
	82号住フ	55-147	打製石鏃	23.1	21.4	4.9	2.1	黒曜石	〃	
		148	転石利用の石器	48.2	26.1	7.8	11.1	〃	〃	
	81号住P ユ	74-160	敲打器	137	63	32	395	緑泥岩	完	長端一端を敲打一端を剥離、胴部に深い擦痕
		74-161	打製石斧	85	52	8	45	凝灰岩	〃	刃部使用磨滅
		162	〃	71	43	17	79	〃	〃	
	フ	55-149	打製石鏃	17.6	12.3	3.7	0.5	黒曜石	〃	
		150	〃	24.2	15.8	3.3	0.9	〃	〃	
	74号住フ	74-163	打製石斧	183	71	24	360	粘板岩	完	
		164	〃	(99)	41	23	113	〃	刃欠	胴一部使用磨滅
		165	磨製石斧	69	46	12	60	硬玉	完	刃部使用擦痕
		166	〃	118	52	20	228	頁岩？	刃一部欠	
		167	〃	98	45	29	208	ハンレイ岩	完	敲磨製、台石様痕跡あり
		168	敲石	89	81	68	741	硬砂岩	〃	全面磨、両端敲打痕
	55-151	打製石鏃	21.1	14.3	4.5	0.9	黒曜石	〃		
		152	〃	19.2	17.4	5.3	1.4	〃	〃	
		153	転石利用の石器	74.0	38.2	15.6	38.6	〃	〃	
	87号住フ	74-169	凹石	40	(70)	22	(101)	粘板岩	半欠	表1孔・裏1孔、側部に敲石の敲打痕、表裏に擦痕、c類
	88号住フ	74-170	敲打器	181	47	24	378	凝灰岩	完	両長端、側部の一部敲打
	89号住フ	74-171	打製石斧	84	21	9	20	粘板岩	完	
		172	〃	112	50	20	140	〃	刃欠	
		173	〃	162	60	20	225	〃	完	側部使用磨滅
		174	〃	178	63	17	290	ハンレイ岩	〃	
		105-188	剥片調整石器	55.3	24.3	9.3	9.8	黒曜石	〃	
		189	剥片石器	53.2	15.5	6.9	3.8	〃	〃	
	90号住フ	74-175	磨製石斧	76	29	11	45	蛇紋岩	刃一部欠	
		176	磨石	30	35	30	40	硬砂岩	完	全面磨
		105-190	小形磨石斧	52.8	21.7	6.5	14.7	〃	〃	
	94号住ユ フ	74-178	敲打器	123	52	36	460	緑泥岩	〃	敲磨製、一端敲打痕、一端は折った状態を示す
		74-177	打製石斧	84	40	15	64	粘板岩	〃	刃部使用磨滅
		179	凹石	86	107	55	725	〃	〃	表2孔、台石様痕跡、d類
	102号住フ	105-192	打製石鏃	26.5	16.8	4.3	1.7	黒曜石	一部欠	
	107号住フ	105-194	打製石鏃	35.1	28.8	11.5	9.6	黒曜石	完	石槍の分類に入れるべき？
		195	〃	16.4	11.3	2.7	0.3	〃	〃	
	117号住フ	92-181	磨製石斧	171	51	38	523	緑泥岩	完	敲磨製 刃部使用擦痕
		182	〃	142	44	34	370	〃	〃	
		183	〃	102	49	22	231	〃	〃	刃部使用擦痕 頭部敲打
		184	〃	98	58	24	218	〃	〃	
		105-196	打製石鏃	16.0	11.9	3.8	0.3	チャート	〃	
		197	小形磨石斧	43.4	27.6	8.5	19.4	？	〃	
	120号住フ	92-185	磨製石斧	107	49	24	215	蛇紋岩	完	刃部使用磨滅
		186	〃	127	44	25	242	緑泥岩	〃	敲磨製
	122号住フ	105-198	打製石鏃	25.4	18.7	7.0	2.4	黒曜石	頭欠	

遺跡	遺構	図番号	石器名	長(mm)	巾(mm)	厚(mm)	重(g)	石質	完・破	使用痕等
HZC	122号住フ	105-199	打製石鏃	7.8	12.6	3.4	0.4	黒曜石	完	
	127号住フ	92-187	横刃形石器	77	49	9	30	硬砂岩	完	有柄
	135号住フ	105-201	打製石鏃	24.7	17.9	3.2	1.1	黒曜石	完	
	136号住フ	105-202	打製石鏃	23.2	14.5	3.3	0.8	黒曜石	完	
	その他	136-203	打製石斧	196	58	22	330	粘板岩	完	
		204	〃	183	56	16	199	〃	〃	風化磨滅
		205	〃	163	80	27	495	凝灰岩	〃	〃
		206	〃	146	65	36	380	緑泥岩	〃	刃・側部使用磨滅
		207	〃	135	69	20	231	硬砂岩	〃	胴部表に台石様痕跡
		208	〃	133	44	12	94	凝灰岩	〃	刃・側部使用磨滅
		209	〃	133	45	17	116	粘板岩	〃	風化磨滅
		210	〃	126	37	17	96	凝灰岩	〃	
		211	〃	(124)	44	12	(85)	粘板岩	刃欠	
		212	〃	147	52	22	170	〃	完	
		213	〃	122	59	20	149	〃	〃	刃・側部使用磨滅
		214	〃	121	137	20	130	ハンレイ岩	〃	
		215	〃	110	48	18	118	緑泥岩	〃	刃・側部使用磨滅
		216	〃	108	38	17	94	凝灰岩	〃	
		217	〃	96	52	15	100	粘板岩	〃	風化磨滅
		218	〃	104	47	20	140	凝灰岩	刃一部欠	刃部使用磨滅、胴部表に台石様痕跡
		219	〃	103	48	19	100	〃	完	
		220	〃	100	43	15	95	粘板岩	〃	刃・側部使用磨滅
		221	〃	105	39	13	82	ハンレイ岩	〃	刃・胴部使用磨滅
		222	〃	113	57	15	130	粘板岩	〃	
		223	〃	113	38	21	115	砂岩	〃	側部使用磨滅
		224	〃	103	39	12	60	凝灰岩	〃	刃部使用磨滅
		225	〃	111	52	20	132	硬砂岩	〃	刃部使用磨滅
		226	〃	98	55	20	141	粘板岩	〃	風化磨滅
		227	〃	101	46	18	92	凝灰岩	〃	刃・側部使用磨滅
		228	〃	124	53	14	99	粘板岩	〃	
		137-229	〃	(73)	41	16	(60)	硬砂岩	刃欠	
		230	〃	(72)	39	21	(72)	頁岩	〃	側部使用磨滅
		231	〃	(76)	56	27	(105)	硬砂岩	頭欠	
		232	〃	85	48	18	96	粘板岩	完	側部使用磨滅
		233	〃	84	36	15	60	凝灰岩	〃	刃・側部使用磨滅、擦痕あり
		234	〃	72	36	14	41	〃	〃	風化磨滅
		235	〃	89	27	16	54	ハンレイ岩	〃	表はほとんど使用磨滅
		236	〃	91	48	18	93	チャート	〃	
		237	〃	99	46	18	130	緑泥岩	〃	
		238	〃	83	45	18	78	粘板岩	〃	刃部使用磨滅、擦痕あり
		239	〃	88	48	10	75	〃	〃	
		240	〃	93	61	16	120	ハンレイ岩	〃	
		241	〃	104	67	20	135	硬砂岩	〃	有柄
		242	〃	111	70	15	122	〃	〃	〃
		243	〃	102	58	15	96	〃	〃	有柄えぐり部、刃一部使用磨滅
		244	局部磨製石斧	125	46	16	121	粘板岩	〃	
		245	〃	113	44	18	141	凝灰岩	〃	
		246	〃	92	65	15	189	粘板岩	〃	刃・側部使用磨滅
		247	磨製石斧	(159)	47	37	(411)	緑泥岩	刃欠	敲磨製
		248	〃	(56)	40	22	(78)	〃	頭のみ	
		249	〃	(51)	26	12	(27)	〃	刃欠	
		250	〃	(54)	31	14	(40)	蛇紋岩	頭、刃一部欠	
		251	〃	(58)	52	(18)	(84)	硬玉	刃部のみ	刃部使用擦痕
		252	〃	74	37	23	98	硬砂岩	完	刃つぶし(磨)
		253	横刃形石器	64	81	8	78	凝灰岩	〃	
		254	〃	76	120	16	142	硬砂岩	〃	
		255	〃	71	99	9	89	粘板岩	〃	
		256	〃	77	83	19	110	硬砂岩	〃	
		257	〃	106	40	8	41	粘板岩	〃	

遺跡	遺構	図番号	石器名	長(mm)	巾(mm)	厚(mm)	重(g)	石質	完・破	使用痕等
HZC	その他	137-258	横刃形石器	77	39	7	22	硬砂岩	完	有柄
		259	〃	62	75	10	35	凝灰岩	〃	〃
		260	〃	50	85	9	32	松脂岩	〃	〃
		261	石 錘	46	70	12	56	粘板岩	〃	
		138-262	敲打器	108	59	42	490	緑泥岩	〃	両長端敲打、磨き整形
		263	〃	158	78	32	645	粘板岩	〃	両長端、側部に敲打痕、胴部に擦痕
		264	〃	155	69	33	581	緑泥岩	〃	長端一方に敲打痕、胴部に擦痕
		265	〃	173	58	26	431	〃	〃	両長端敲打痕、胴部に擦痕
		266	〃	133	44	23	215	凝灰岩	一	側縁を敲打、剝離、石斧の未製品か？
		267	〃	130	50	24	231	緑泥岩	完	長端一方を敲打痕、胴部に擦痕、側部に敲打痕あり
		268	〃	112	45	25	190	〃	〃	長端一方を敲打痕、胴部に擦痕
		269	〃	106	48	27	180	〃	〃	側部敲打、長端一方と側部に剝離と使用磨減
		270	凹 石	94	101	37	551	安山岩	〃	表2孔、裏2孔、a類、側面敲打
		271	〃	107	86	58	758	硬砂岩	〃	表1孔、裏1孔、a類、台石縁痕跡
		272	〃	64	92	28	221	砂 岩	〃	表2孔、裏2孔、a類、側面敲打
		273	〃	60	84	36	271	〃	〃	表1孔、裏1孔、a類、側面敲打
		274	〃	68	84	50	430	硬砂岩	〃	表1孔、裏2孔、a類、側面敲打
		275	〃	77	94	34	426	緑泥岩	〃	表1孔、b類、側面敲打
		276	〃	80	75	37	339	硬砂岩	〃	表4孔、b類
		277	〃	61	92	30	227	安山岩	〃	表1孔、b類、側面敲打
		278	〃	65	(81)	30	(220)	〃	半 欠	表3孔、b類、側面敲打
		279	〃	(89)	53	26	(205)	緑泥岩	〃	表1孔、裏1孔、c類、胴部擦痕
		280	〃	(121)	68	31	(355)	〃	〃 (節埋)	表1孔、c類、長端一方に敲打痕
		281	〃	173	62	44	625	〃	完	表2孔、裏4孔、c類、側部胴部、長端一方に敲打痕
		139-282	〃	165	51	22	280	〃	〃	表1孔、裏1孔、c類、両長端敲打剝離
		283	〃	(118)	50	24	(240)	粘板岩	両端欠	表3孔、裏2孔、c類
		284	〃	110	61	41	270	花崗岩	完	表2孔、d類
		285	敲 石	87	86	59	638	硬砂岩	〃	側面敲打、表裏磨
		286	〃	52	54	39	155	安山岩	〃	側面の一部敲打、他は磨
		287	〃	65	67	44	280	〃	〃	〃
		288	磨 石							
		289	特殊磨石	71	(71)	(104)	(690)	花崗岩	半 欠	A面2、B面2、C部1、A面構成角(117°・121°)(130°・132°)
		290	〃	79	(103)	59	(545)	安山岩	破	A面1、B面2、A面構成角(118°・120°)
		291	〃	70	(89)	47	(431)	〃	半 欠	A面1、B面4、A面構成角(127°・121°)
		292	〃	63	(44)	(45)	(160)	硬砂岩	破	A面1、B面3、A面構成角(110°・107°)
		293	石 皿					安山岩	破	
		140-294	打製石鏃	32.5	(19)	6.5	(2.5)	黒曜石	一部欠	基部底辺ほぼ水平
		295	〃	28.5	19	3.5	1.9	〃	頭 欠	〃
		296	〃	23.5	16.5	4.5	1.3	〃	一 脚欠	〃
		297	〃	25.5	20.5	7.0	1.9	チャート	完	〃
		298	〃	23.5	17	4.5	1.5	黒曜石	〃	〃
		299	〃	24.5	12.5	5.0	1.2	〃	〃	〃
		300	〃	22.0	14.5	4.5	1.1	〃	一 脚欠	〃
		301	〃	24.0	16.0	5.0	1.5	〃	〃	〃
		302	〃	21.0	17.0	5.5	1.4	〃	完	〃
		140-303	〃	19.5	17.5	3.0	1.1	〃	頭 欠	基部底辺ほぼ水平、裏は主要剝離面残す
		304	〃	19.5	17.5	6.5	1.9	〃	完	〃
		305	〃	19.5	12.0	3.5	0.7	〃	一 脚欠	〃
		306	〃	18.5	15.5	5.0	1.2	〃	完	〃
		307	〃	18.0	14.5	4.5	1.1	〃	〃	〃
		308	〃	16.5	12.5	4.5	0.8	〃	〃	〃
		309	〃	33.5	15.5	3.5	2.4	チャート	〃	わたくり部浅い
		310	〃	31.5	19.0	5.5	2.7	黒曜石	〃	〃
		311	〃	25.5	16.0	5.0	1.5	〃	一 脚欠	〃
		312	〃	23.0	16.0	4.0	1.2	チャート	完	〃
		313	〃	24.0	15.5	5.0	1.3	黒曜石	一 脚欠	〃
		314	〃					〃	〃	〃
		315	〃	19.5	16.0	4.0	0.8	〃	完	〃
		316	〃	18.0	14.0	4.5	0.8	〃	頭 欠	〃

遺跡	遺構	図番号	石器名	長(mm)	巾(mm)	厚(mm)	重(g)	石質	完・破	使用痕等
HZC	その他	140-317	打製石鏃	17.5	15.0	3.5	0.8	黒曜石	完	わたくり部浅い、裏に主要剥離面残す
		318	〃	(19.5)	(12.5)	3.5	(0.7)	〃	破、側欠	わたくり部浅い
		319	〃	17.5	12.0	10	0.7	〃	完	尖端鋭利に作出
		320	〃	17.0	15.5	4.5	0.7	〃	〃	〃
		321	〃	29.0	17.0	6.0	1.8	〃	一脚欠	わたくり部やや深い
		322	〃	28.0	17.0	4.0	1.5	松脂岩	〃	〃
		323	〃	25.5	16.5	4.5	1.4	黒曜石	完	〃
		324	〃	25.0	14.5	3.5	0.9	松脂岩	一脚欠	風化磨滅
		325	〃	(21.0)	(14.5)	4.5	(0.9)	黒曜石	頭・一脚欠	〃
		326	〃	18.0	13.0	3.0	0.5	〃	完	〃
		327	〃	(17.0)	12.5	3.0	(0.6)	〃	頭欠	〃
		104-328	〃	(16.0)	15.0	3.0	(0.6)	〃	〃	〃
		329	〃	(17.0)	14.5	4.0	(0.8)	チャート	上半欠	〃
		330	〃	(14.5)	19.0	2.0	(0.5)	黒曜石	〃	〃
		331	〃	(13.0)	(13.0)	2.5	(0.5)	〃	〃	〃
		332	〃	20	17.5	4.5	1.2	〃	頭欠	わたくり部やや深く、脚が内弯する
		333	〃	19.0	14.0	2.5	0.6	〃	完	〃
		334	〃	(16.0)	15.0	3.0	(0.6)	〃	頭欠	〃
		335	〃	16.0	14.5	2.5	0.5	〃	完	〃
		336	〃	(16.0)	16.0	3.0	(0.6)	〃	頭欠	〃
		337	〃	15.5	16.5	3.5	0.7	〃	完	〃
		338	〃	15.0	16.5	2.5	0.6	〃	〃	〃
		339	〃	15.5	11.5	2.5	0.4	〃	〃	〃
		340	〃	33.5	19.5	4.5	2.0	〃	頭欠	わたくり部深く、脚が内弯する
		341	〃	25.0	16.5	4.0	1.1	〃	完	〃
		342	〃	(22.0)	(17.5)	4.5	1.1	〃	頭・一脚欠	〃
		343	〃	20.5	14.0	3.5	0.9	〃	完	〃
		344	〃	27.0	16.0	5.5	2.2	〃	〃	裏に主要剥離面残し、わたくりの弯入浅
		345	〃	26.5	15.0	3.5	1.6	〃	〃	〃
		346	〃	34.0	15.5	4.0	1.3	チャート	一脚欠	細身わたくりの弯入やや深い
		347	〃	25.5	14.5	4.0	1.2	黒曜石	完	両面、部分磨製、尖端鋭利に作出
		348	〃	16.5	16.5	4.5	1.2	〃	〃	円形、剥片
		349	〃	17.0	12.0	3.0	0.5	〃	〃	〃
		350	〃	(27.0)	(15.0)	5.0	1.5	〃	脚欠	〃
		351	〃	(26.0)	(15.0)	4.5	1.4	〃	〃	〃
		352	〃	(25.0)	(12.5)	3.5	1.0	〃	〃	〃
		353	〃	(21.5)	(16.5)	4.5	(1.1)	〃	下半欠	〃
		354	〃	(21.5)	(14.0)	4.5	(1.6)	〃	脚欠	〃
		355	石鏃	(31.5)	12.0	6.5	(2.6)	〃	先端欠	鏃部、巾 4.0mm 厚 3.5mm
		356	剥片調整石器	91.5	29.0	12.0	28.6	〃	完	〃
		357	異形石器	62.0	15.0	7.5	8.7	〃	〃	弧状をなす
		105-358	石七	81.5	39.0	9.5	28.8	松脂岩	〃	1側面鋭利な刃部作出せず
		359	〃	62.0	25.5	9.5	18.0	黒曜石	〃	転石利用、調整剥離は裏面に施こされる
		360	〃	65.0	19.5	11.0	13.6	チャート	〃	1側面、調整せず
		361	〃	27.0	27.0	4.5	2.6	〃	〃	裏面調整は、つまみ部のみ
		362	両面石器	21.5	21.0	5.0	2.2	黒曜石	〃	〃
		363	〃	(22.5)	17.5	5.5	(2.2)	〃	一部欠	〃
		364	〃	27.5	28.5	11.0	8.4	〃	完	〃
		365	転石利用の石器	64.5	72.0	13.5	64.6	〃	〃	転石利用 retouch は両面、側部は強い加撃
		366	剥片石器	29.5	52.5	8.5	6.5	〃	〃	retouch は片面にあり、鈍角をなす
		367	転石利用の石器	28.0	44.5	10.5	11.1	〃	〃	転石利用 retouch 両面で鋭角をなす
		368	剥片石器	24.5	(32.0)	60	(6.1)	チャート	半欠	裏に主要剥離面 retouch 両面鋭角
		369	〃	23.0	34.5	8.5	5.9	〃	完	両面石器に近いが、刃部作出する鋭角
		370	〃	18.0	36.5	4.5	4.3	〃	〃	裏に主要剥離面 retouch は片面鈍角
		371	〃	16.0	29.5	3.5	2.2	〃	〃	〃
		372	〃	19.5	26.0	5.5	2.5	〃	〃	retouch 両面、鈍角
		373	石核	67.0	69.5	18.0	79.7	黒曜石	一	表 23 回、裏 3 回の剥離工程を示す
		142-374	小形磨石斧	75.0	18.5	5.0	12.5	緑泥岩	完	〃
		375	〃	35.0	13.5	6.5	5.8	硬玉	〃	〃

遺跡	遺構	図番号	石器名	長(mm)	巾(mm)	厚(mm)	重(g)	石質	完・破	使用痕等
HZC	その他	142-376	小形磨石斧	29.5	20.5	5.5	5.2	?	完	
		377	〃	(29.5)	(20.5)	7.0	(6.6)	硬玉	頭部のみ	
	1号住P	158-125	打製石斧	180	58	26	370	粘板岩	完	
	フ	126	〃	(134)	65	23	(292)	〃	頭欠	
		127	〃	125	51	17	(129)	凝灰岩	完	
		129	敲打器	(113)	33	25	(151)	ハンレイ岩	刃欠	
		128	敲斧	164	45	30	348	硬砂岩	完	両長端に敲打
		130	石錘	53	85	16	90	粘板岩	完	糸掛部2対
	ユ	155-1	打製石鏃	30.3	19.0	5.7	2.6	黒曜石	〃	
		2	〃	(20.7)	(14.4)	(6.9)	(1.2)	〃	両脚部欠	
		3	〃	21.3	11.2	3.2	0.5	〃	一脚欠	
	フ	4	磨石鏃	32.3	18.0	3.5	2.1	硬砂岩	孔部欠	
		5	〃	29.4	18.4	2.6	1.8	〃	下部欠	
		6	石鏃	29.4	16.0	3.9	1.5	黒曜石	一脚欠	
		7	剥片石器	57.0	21.8	11.1	16.6	〃	完	
		8	剥片調整石器	41.8	14.8	8.8	5.4	〃	〃	
		9	石ヒ	33.8	23.5	5.8	4.6	チャート	半欠	
	5号住フ	155-10	磨石鏃	30.5	19.4	2.8	1.9	硬砂岩	完	有孔
		11	石斧模造品	34.7	15.3	3.0	1.9	〃	完	
		12	打製石鏃	23.7	13.5	3.6	0.8	黒曜石	〃	
		13	〃	(20.2)	(14.2)	(3.7)	(0.7)	〃	脚部欠	
		14	〃	17.3	18.7	2.8	0.7	〃	頭欠	
		15	〃	17.4	11.8	3.1	0.4	〃	完	
		16	〃	(14.6)	(13.3)	(3.9)	(0.8)	〃	下部欠	
		17	〃	24.5	19.3	7.0	2.3	〃	完	
		18	石ヒ?	31.3	20.7	5.5	3.1	チャート	上部欠	
		19	剥片調整石器	63.4	24.1	1.0	9.5	黒曜石	完	
		155-20	石錘	26.8	7.1	4.3	1.7	〃	刃部欠	
		21	〃	22.2	4.1	2.3	0.8	〃	完	
	6号住フ	155-23	砲丁	(40.2)	(80.7)	(6.1)	(27.2)	硬砂岩	一部欠	単孔
		24	打製石鏃	18.8	15.7	2.3	0.2	黒曜石	完	
		25	〃	(12.6)	(13.5)	(2.5)	(0.3)	〃	頭欠	
		26	〃	23.6	17.4	4.0	1.0	〃	完	
		27	〃	(18.0)	16.9	(4.4)	(1.5)	〃	頭欠	
		28	〃	23.0	16.8	5.2	1.7	〃	完	
	7号住ユ	155-29	磨石鏃	27.6	23.4	3.1	2.6	粘板岩	完	
	フ	30	〃	26.9	16.6	2.8	1.4	緑泥岩	頭欠	
		31	打製石鏃	22.2	16.8	2.8	0.8	黒曜石	一脚欠	
	フ	158-131	磨石斧						下半分欠	
		132	横刃形石器	86	65	12	53	松脂岩	完	有柄、縦形
	8号住ユ	155-32	石錘	38.3	25.6	6.3	5.6	チャート	〃	
		33	剥片調整石器	22.1	20.1	7.0	3.9	〃	〃	
		34	剥片石器	23.1	17.8	3.5	1.6	黒曜石	〃	
	フ	35	打製石鏃	(15.7)	16.8	4.2	(1.0)	〃	上部欠	
		36	〃	17.4	13.5	3.3	0.7	〃	完	
	13号住ユ	155-37	〃	15.0	12.3	2.5	0.3	〃	〃	
		38	〃	30.0	15.6	7.5	2.7	〃	〃	
		39	〃	26.6	15.4	5.3	2.0	〃	〃	
	フ	40	〃	(24.8)	(14.3)	(3.2)	(1.1)	〃	頭・脚欠	
		41	〃	20.8	13.3	2.2	0.5	〃	完	
		42	〃	20.6	15.5	3.7	0.8	〃	〃	有柄
		43	〃	20.3	15.7	5.6	1.5	〃	〃	
		158-133	局部磨製石斧	97	48	18	113	緑泥岩	〃	整形の擦痕有・磨製部は刃部に主眼
	21号住フ	155-44	剥片石器	48.2	13.3	9.2	3.3	黒曜石	完	
	22号住フ	155-45	磨製石鏃	35.5	18.9	2.6	2.2	粘板岩	脚欠	孔を両面よりあけておる
		46	打製石鏃	21.3	13.8	3.2	0.8	黒曜石	完	
		47	〃	19.3	12.2	3.0	0.3	〃	〃	
		48	〃	16.0	16.4	5.4	1.1	〃	頭欠	
		49	〃	29.2	18.5	3.5	1.8	〃	完	

遺跡	遺構	図番号	石器名	長(mm)	巾(mm)	厚(mm)	重(g)	石質	完・破	使用痕等		
HZC	22号住フ	155-50	打製石鏃	32.9	22.0	6.9	4.2	黒曜石	脚欠			
		51	〃	30.8	27.3	9.5	6.8	〃	完			
	23号住フ	155-52	磨製石鏃	52.3	23.7	2.8	4.0	粘板岩	脚欠			
		53	打製石鏃	(22.2)	(15.8)	(4.4)	(2.3)	黒曜石	〃			
		54	〃	21.8	13.4	4.2	0.8	〃	完			
		55	〃	19.0	12.7	3.8	0.7	〃	〃			
		56	〃	19.2	13.3	4.2	0.6	〃	〃			
		57	〃	17.6	12.8	3.8	0.6	〃	〃			
		58	〃	16.5	13.7	2.8	0.4	〃	〃			
		59	石錐	24.5	14.5	6.4	1.4	〃	〃			
	158-134	打製石斧	117	49	24	178	砂岩	完	砥石様凹部を呈す			
	135	〃	(101)	50	16	(80)	粘板岩	刃欠				
	136	横刃形石器	88	58	13	65	硬砂岩	完	有柄、縦形			
	137	礫器	86	100	30	380	緑泥岩	完	周囲を敲技、剥離			
	24号住フ	158-138	打製石斧	112	46	10	79	粘板岩	完	刃部使用磨滅		
	26号住フ	156-60	磨製石鏃	(69.2)	(34.7)	(9.8)	(25.8)	〃	〃	未製品		
		61	〃	55.4	24.0	3.9	8.4	〃	脚部欠	無孔		
		62	〃	(51.5)	(24.8)	(4.4)	(5.3)	緑泥岩	頭・脚欠	孔あけかけあり		
		63	磨製品	34.3	9.7	3.2	1.0	粘板岩	完	基部再調整する		
		64	磨製石鏃	(50.4)	(28.5)	(6.2)	22.5	緑泥岩	〃	未製品		
		65	打製石鏃	30.8	16.7	5.5	1.9	黒曜石	一脚欠			
		66	〃	24.5	16.7	5.6	1.8	〃	完			
		67	〃	22.3	15.8	4.7	1.3	〃	〃			
		68	〃	20.8	14.3	3.9	0.9	チャート	〃			
		31号住ユ	69	〃	19.6	12.4	5.5	0.8	黒曜石	〃		
			フ	70	磨製石鏃	53.8	21.7	4.2	5.7	緑泥岩	〃	
				71	〃	(29.0)	(26.2)	(6.6)	(5.8)	〃	上半分欠	
			72	打製石鏃	21.1	10.3	4.3	0.6	黒曜石	一脚欠		
	33号住フ	156-76	〃	26.0	20.8	5.6	2.4	〃	完			
		77	〃	26.8	17.5	5.6	2.1	〃	一脚欠			
		78	〃	16.4	12.0	3.7	0.6	松脂岩	完			
	35号住フ	74	磨製石鏃	86.2	34.0	4.6	20.0	粘板岩	〃	未製品?		
		75	〃	(57.5)	(34.5)	(4.7)	(11.8)	緑泥岩	基部欠	〃		
	39号住フ	156-80	〃	67.5	26.3	5.0	11.7	粘板岩	完	〃		
	42号住ユ	156-81	〃	60.3	30.2	4.7	11.9	粘板岩	〃	〃		
		82	〃	58.8	23.7	6.3	11.6	緑泥岩	〃	〃		
	46号住ユ	156-79	〃	(27.1)	(29.5)	(5.5)	(5.7)	〃	上半部欠	〃		
	49号住ユ	156-83	磨製石斧	(79.4)	(50.3)	(24.6)	(18.0)	ハンレイ岩	〃			
	50号住フ	156-84	磨製石鏃	43.6	22.7	2.6	3.4	粘板岩	完			
		85	〃	23.3	14.3	1.3	0.7	緑泥岩	〃	未製品、孔あけかけ		
		86	〃	(19.8)	(26.7)	(2.4)	(1.4)	粘板岩	上半分欠			
		87	打製石鏃	19.9	11.8	4.5	0.7	黒曜石	脚欠			
		88	〃	15.6	14.1	3.6	0.6	〃	頭欠			
		ユ	91	磨製石鏃	(19.6)	20.4	3.0	(1.6)	粘板岩	上半分欠	有孔	
			92	〃	56.5	35.2	3.7	9.4	〃	完		
		フ	93	打製石鏃	26.7	17.4	4.5	1.3	黒曜石	〃		
			94	〃	21.5	10.6	2.9	0.6	〃	柄欠	有柄	
		55号住フ	156-95	〃	17.5	13.8	4.0	0.9	〃	完		
	59号住ユ	156-96	石錐	23.6	4.8	3.1	0.6	〃	〃			
		156-97	砲丁	39.5	119.3	10.7	59.0	粘板岩	〃			
	61号住フ	158-139	凹石	99	157	43	758	硬砂岩	完	表1孔、表面磨き整形		
		156-98	磨製石鏃	47.4	20.8	3.3	4.3	緑泥岩	脚欠	有孔		
		99	〃	44.6	21.1	3.3	4.2	〃	完			
		100	〃	38.5	12.2	3.6	2.5	〃	〃			
		101	〃	22.8	23.0	3.6	2.2	〃	頭欠	有孔		
		102	磨製石斧	(20.7)	(15.8)	(2.7)	(1.7)	粘板岩	上半分欠			
		103	打製石鏃	22.2	13.3	3.4	0.6	黒曜石	完	有柄		
		104	〃	14.7	13.7	4.6	0.7	チャート	頭欠			
		71号住フ	156-89	磨製石包丁	30.5	60.6	6.9	21.4	?	完	単孔	

遺跡	遺構	図番号	石器名	長(mm)	巾(mm)	厚(mm)	重(g)	石質	完・破	使用痕等
HZC	71号住フ	90	打製石鏃	(11.2)	17.3	(4.2)	(0.7)	黒曜石	上半分欠	
	101号住フ	157-107	磨製石斧	(56.9)	50.3	13.4	(79.1)	ハンレイ岩	上半分欠	
	106号住フ	157-109	打製石鏃	14.8	13.9	2.6	0.4	黒曜石	頭・一脚欠	
	108号住フ	157-111	磨製石鏃	21.5	13.2	2.4	1.1	緑泥岩	完	
	109号住フ	157-112	剥片石器	73.1	42.3	12.4	36.7	黒曜石	〃	
	111号住フ	157-113	磨製石鏃	26.6	14.4	2.6	1.4	緑泥岩	〃	
	112号住フ	157-114	打製石鏃	28.3	15.8	4.3	1.4	黒曜石	〃	
	113号住フ	157-115	・入片刃石斧	114.3	33.0	40.3	280	緑泥岩	頭・刃部欠	頭部・刃部に再使用あり
	124号住ユ	157-116	磨製石斧	52.3	18.2	4.6	6.9	〃	〃	
	124号住ユ	157-117	横刃形石器	86.3	136.2	17.2	189	硬砂岩	完	有柄
	その他	157-118	磨製石鏃	27.3	22.4	1.6	1.0	緑泥岩	完	単孔
		119	〃	32.8	25.5	2.6	2.9	粘板岩	〃	〃
		120	〃	(26.2)	(22.7)	(2.6)	(2.3)	緑泥岩	頭・脚欠	〃
		121	〃	41.5	11.1	2.6	1.7	粘板岩	脚欠	〃
		122	〃	43.2	28.8	3.0	4.8	〃	完	未製品
		123	扁平片刃磨製石斧	(51.9)	(87.0)	(12.7)	(112)	ハンレイ岩	上半分欠	
MCA	その他		打製石斧	121	48	14	90	粘板岩	完	
			〃	93	56	16	105	〃	〃	刃部使用磨減、擦痕あり
			〃	1〃	50	14	93	凝灰岩	〃	
			横刃形石器	83	42	7	28	〃	〃	両側刃
		5	砥石利用の石器	58.7	23.2	10.6	11.2	黒曜石	完	
		6	剥片調整石器	41.3	15.0	5.1	2.8	〃	〃	
		7	打製石鏃	(16.8)	(11.1)	(3.0)	(0.4)	〃	脚欠	
DGA	1号住ユ	246-1	打製石鏃	19.9	16.0	3.6	0.7	黒曜石	完	
	フ	2	〃	22.5	16.2	3.6	0.8	〃	一脚欠	
		3	〃	19.5	19.8	3.1	0.6	〃	完	
		4	〃	(16.6)	(15.8)	(3.0)	(0.5)	〃	頭・一脚欠	
		5	〃	(15.6)	(11.7)	(12.5)	(0.4)	〃	二脚欠	
		6	〃	20.8	15.7	4.4	1.3	〃	完	剥片鏃
		7	〃	18.9	13.2	2.7	0.6	〃	〃	〃
		8	〃	18.8	14.5	1.8	0.5	〃	〃	〃
		9	石鏃	36.5	8.4	7.0	3.7	〃	尖端欠	
		10	〃	27.4	5.8	2.4	2.6	〃	〃	
		11	〃	23.7	5.5	4.0	1.2	〃	完	
		12	剥片石器	26.4	24.4	3.3	2.4	〃	〃	
		13	〃	22.7	31.0	5.1	3.4	〃	〃	
		14	〃	32.4	15.8	6.9	2.6	〃	〃	
		15	〃	30.7	16.3	6.4	3.0	〃	〃	
		16	磨石	126	81	47	602	安山岩	一	風化磨減のため、磨石と断じがたい
	2号住P	17	石鏃	43.0	5.2	4.8	0.9	黒曜石	完	
	フ	18	打製石鏃	22.8	14.6	4.9	0.8	〃	一脚欠	
		19	石鏃	21.0	9.8	4.7	0.9	〃	完	
		20	曽根形石核	21.5	12.2	9.7	2.0	〃	一	
		21	剥片石器	35.8	44.2	8.2	9.3	〃	完	
		22	〃	32.3	24.5	9.0	5.3	〃	〃	
		23	〃	19.8	35.1	9.0	5.2	〃	〃	
		24	剥片調整石器	30.9	19.3	7.7	4.1	〃	〃	
	ユ	25	打製石斧	112	38	18	79	硬砂岩	〃	刃・胴部使用磨減
		26	〃	108	49	18	105	凝灰岩	完	刃部使用磨減
		27	〃	68	45	11	42	〃	〃	
	フ	28	〃	(74)	58	26	148	粘板岩	刃部のみ	刃部使用磨減
		29	局部磨製石斧	88	39	23	120	緑泥岩	完	打・敲調整の後、特に刃部に磨製調整を加える
		30	磨石	111	67	44	552	花崗岩	〃	石ケン形、側縁部敲打
		31	石皿							扁平な割石の一面にわずかに磨減を残す
	土壌4	32	打製石鏃	(18.5)	(14.8)	(3.8)	(1.0)	黒曜石	脚欠	

遺跡	遺構	図番号	石器名	長(mm)	巾(mm)	厚(mm)	重(g)	石質	完・破	使用痕等
DGA	土壌 4	33	剥片石器	23.2	42.5	11.8	9.5	黒曜石	完	
	土壌 6	34	打製石鏃	31.7	16.8	3.9	1.2	〃	一脚欠	
	その他E区	35	打製石鏃	31.3	20.0	3.8	1.8	〃	完	
		36	〃	28.0	17.7	3.4	1.3	〃	〃	
		37	〃	28.0	14.2	4.2	1.2	〃	〃	
		38	〃	(25.3)	(9.8)	(3.5)	(0.7)	〃	側・脚欠	
		39	〃	24.8	9.7	2.6	0.3	〃	一脚欠	
		40	〃	(24.0)	(15.3)	(3.7)	(1.0)	〃	脚欠	
		41	〃	22.6	15.7	5.3	1.3	〃	完	
		42	〃	22.1	16.2	4.9	1.2	〃	〃	
		43	〃	19.5	22.4	5.2	2.0	〃	頭欠	
		44	〃	17.8	12.6	3.6	0.5	〃	完	
		45	〃	18.2	13.2	3.3	0.6	チャート	〃	
		46	〃	14.5	14.1	3.5	0.5	黒曜石	〃	
		47	〃	11.7	13.3	3.0	0.4	〃	頭欠	
		48	〃	13.3	10.3	2.3	0.2	〃	一脚欠	
		49	〃	11.7	13.4	2.4	0.2	〃	完	
		50	〃	(16.0)	(9.3)	(3.2)	(0.5)	〃	側欠	
		51	石 七	58.3	37.3	11.5	20.6	チャート	完	
		52	剥片調整石器	57.4	20.0	11.6	9.5	黒曜石	〃	
		53	両面石器	44.3	34.8	12.6	15.5	〃	〃	
		54	石 七	22.2	38.9	7.5	4.6	〃	〃	
		55	両面石器	20.6	33.2	7.5	4.2	〃	〃	
		56	剥片石器	41.3	24.2	8.9	8.4	〃	〃	
		57	〃	41.5	26.0	8.0	7.9	〃	〃	褐色をおび、産地が他のものと異なるのでは？
		58	〃	40.2	20.3	12.5	9.1	〃	〃	
	B区	59	打製石斧	98	43	13	60	凝灰岩	完	
		60	〃	94	58	15	78	〃	〃	
		61	〃	81	50	12	62	〃	頭欠-未整形	刃部使用磨滅、擦痕あり
	C区	62	石 白					安山岩	半欠	上白、上面に刻線あり(再使用されたもの)
	E区	63	打製石斧	148	77	24	300	粘板岩	完	
		64	〃	127	48	19	155	〃	〃	刃部使用磨滅、擦痕あり
		65	〃	124	54	14	142	ハンレイ岩	〃	全体に磨滅
		66	〃	113	46	14	100	硬砂岩	〃	
		67	〃	(100)	67	19	(150)	粘板岩	頭欠	斜めに折損
		68	〃	(100)	(60)	23	(125)	〃	刃欠	〃
		69	〃	98	37	14	62	〃	完	
		70	〃	85	40	15	62	〃	〃	
		71	〃	96	64	18	140	凝灰岩	〃	
		72	〃	97	44	16	80	〃	〃	刃部使用磨滅、擦痕あり
		73	〃	96	46	14	80	硬砂岩	〃	刃・側部
		74	〃	91	49	20	100	凝灰岩	〃	側部磨滅、片側縁に凹部作出
		75	〃	89	44	17	90	〃	〃	裏面に主要剝離面大きく残す
		76	〃	90	41	8	48	粘板岩	完	
		77	〃	88	47	14	80	〃	〃	風化磨滅
		78	〃	89	40	13	62	凝灰岩	〃	
		79	〃	87	53	19	87	安山岩	〃	裏面、風化顕著
		80	〃	(82)	82	24	(170)	粘板岩	刃部のみ	風化磨滅
		81	〃	79	49	12	50	砂岩	完	有柄
		82	〃	(53)	41	11	(31)	凝灰岩	刃部のみ	
		83	磨製石斧	(33)	(33)	(25)	(30)	角岩	頭部のみ	
		84	〃	(47)	(43)	(18)	(50)	蛇紋岩	〃	
		85	敲製石斧	(108)	40	28	(190)	ハンレイ岩	頭欠	
		86	凹 石	67	84	64	400	安山岩	完	円礫、表1孔
		87	〃	67	92	32	260	花崗岩	〃	扁平円礫、表2孔
		88	〃	65	81	22	150	粘板岩	〃	扁平円礫、表1孔
		89	石 皿					安山岩	四半欠	なだらかな凹部、両面
		90	〃					〃	半欠	片面、断面弧状

遺跡	遺構	図番号	石器名	長(mm)	巾(mm)	厚(mm)	重(g)	石質	完・破	使用痕等
HUA	その他	1	打製石鏃	26.8	14.8	3.3	0.9	黒曜石	完	有柄
		2	〃	24.0	11.1	2.6	0.5	〃	〃	〃
		3	〃	20.0	14.4	2.7	0.6	〃	柄欠	〃
		4	〃	19.4	13.4	2.9	0.8	〃	〃	剥片鏃
		5	〃	13.8	13.8	3.8	0.6	〃	頭欠	〃
		6	〃	14.3	10.2	3.5	0.5	〃	完	〃
		7	転石利用の石器	45.3	12.7	7.6	3.3	〃	〃	〃
SCB	その他	278-1	打製石斧	168	65	29	345	凝灰岩	完	風化磨滅
		2	〃	(161)	66	29	(270)	〃	刃部欠	〃
		3	〃	129	40	14	79	〃	完	刃部使用磨滅
		4	〃	118	65	25	230	粘板岩	〃	風化磨滅
		5	〃	114	40	14	80	〃	〃	〃
		7	〃	(107)	75	29	260	硬砂岩	頭欠	刃部使用磨滅
		8	〃	102	36	13	60	凝灰岩	完	〃
		6	〃	96	52	20	121	粘板岩	〃	風化磨滅
		9	〃	94	48	14	90	〃	〃	〃
		278-10	打製石斧	94	39	16	61	粘板岩	〃	〃
		266-42	剥片石器	57.6	33.3	9.3	18.0	チャート	〃	〃
		43	打製石鏃	26.6	13.4	3.6	1.0	黒曜石	〃	〃
SWB	その他	278-11	打製石斧	(71)	60	22	(115)	凝灰岩	頭部のみ	風化磨滅
		12	板状石製品					粘板岩	破片	砥石 or 石板、擦線あり
		13	敲打器					凝灰岩	完	長軸一端を敲打し、その状態は磨面と似る、胴部にも擦痕あり
		266-40	打製石鏃	19.8	13.4	4.0	0.7	黒曜石	〃	〃
		41	磨製石鏃	39.6	25.3	3.4	4.2	粘板岩	完	〃

石器計測表凡例

1. 数値を () でくくったものは破損されている状態の数値を示す。また、・印のものは破損せるも完形に近い数値を示すものである。
2. 石斧等は破損状況により、頭部欠、刃部欠、頭部のみ、刃部のみとし、着柄を想定し、また使用による破損を考え、残存状態を重視した。
3. 磨滅あるものは、人為的である場合明記した。
4. 特殊磨石の「A面構成角」は次のように測定した。

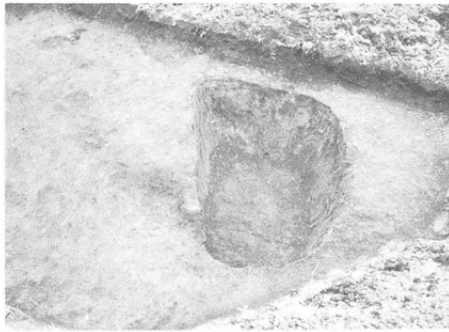
第1図 手長神社旧跡遺跡



1. 全 景

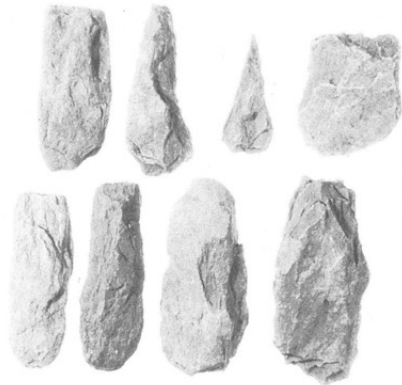


2
ローム
マウンド



3
土
壁

4. 出土石器

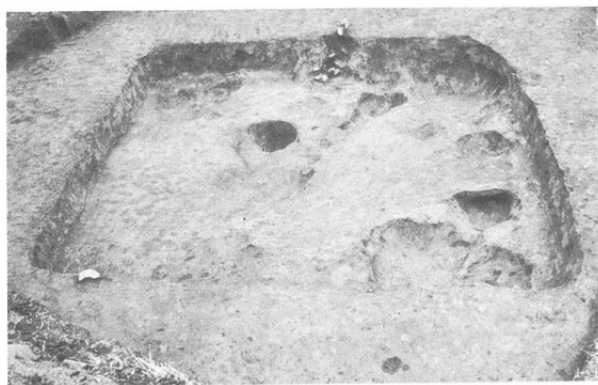




5. 全 景



6. 1号住居址



7. 2号住居址



8. 3号住居址と土坑



9
2号住カマド出土



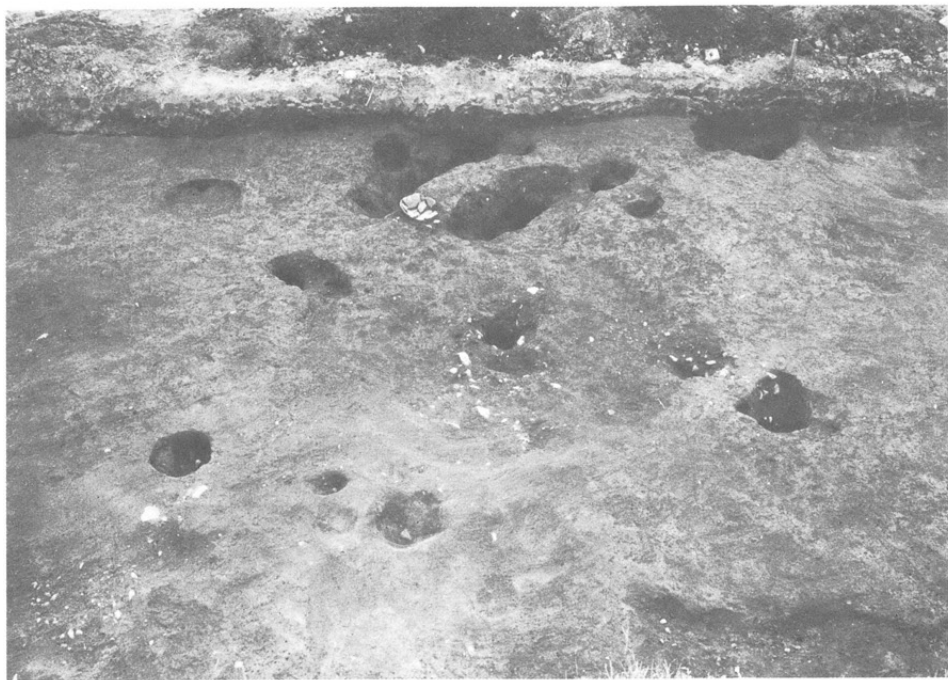
10. 2号住出土須恵器



11. 鉄器



12. 全景（北より）



13. 1号住居址

第5図 荒神社矢沢遺跡(2号住居址)



14 2号住居址(手前) 3号住居址



15 2号住居址出土深鉢



16 2号住居址出土深鉢



17 2号住居址出土石鏃



18 2号住居址出土石器



19. 3号住居址



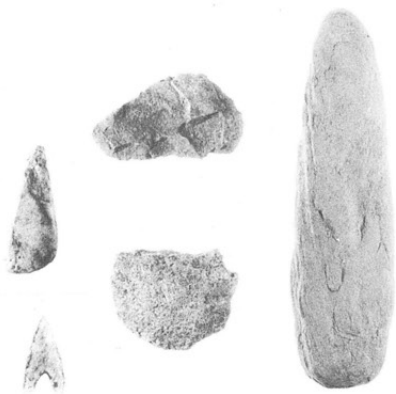
21. 3号住居址出土深鉢



20. 炉址と土器出土状態



22. 3号住居址出土小形土器

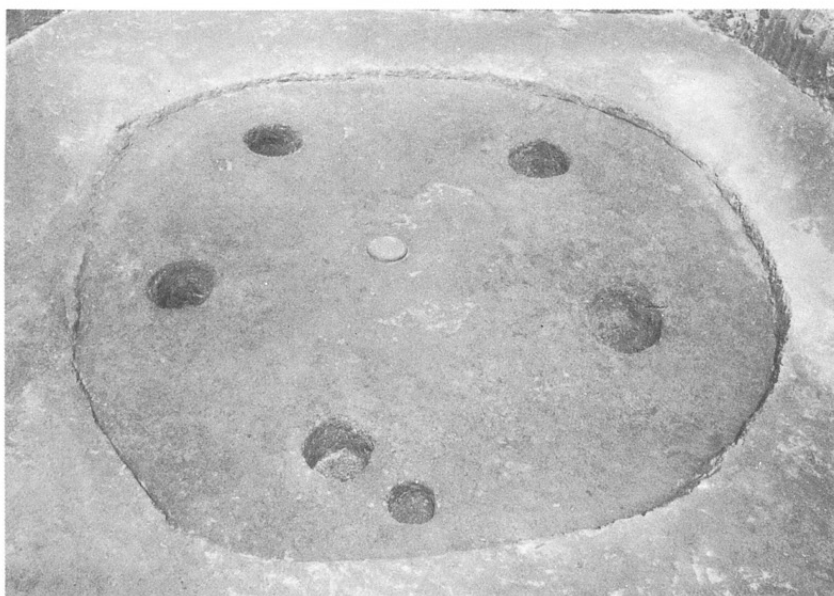


24. 3号住居址出土石器



23. 3号住居址出土深鉢

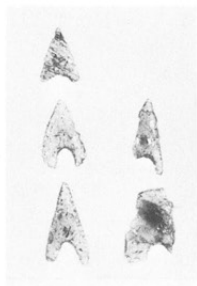
第7図 荒神社矢沢遺跡（4号住居址）



25. 4号住居址



26. 4号住居址甕炉



28

その他出土石鏃



27. 4号住居址出土石器



29. その他出土石器

第8図 樋口内城館址遺跡全景



30. 航空写真



31. 西（荒神山）より望む



32. 南（荒神社矢沢遺跡）より望む



33. 北（大久保尻遺跡）より望む



34. 遺構全景（上が北 下が南）



35. 2・10号住居址



38. 5号住居址



37. 4号埋ガメ



36. 3・4・11号住居址



39. 6・9号住居址, 小竅穴3・16

第10図 樋口内城跡遺址遺跡2・3・4・5・6・10・11号住居址・小竅穴3・16



42. 13号住居址，小竪穴2



43. 15号住居址

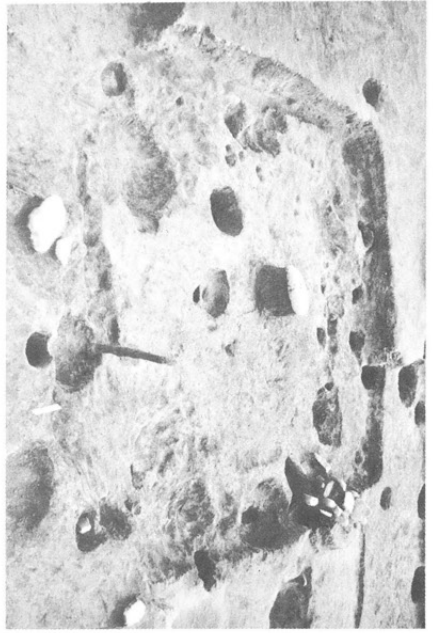


40. 8号住居址



41. 12号住居址

第11図 樋口内城館址遺跡 8・12・13・15号住居址



44. 14・20号住居址



45. 14号住居址カマド



48. 22号出土高杯



46. 25号住居址, 小竪穴7・8・9・10

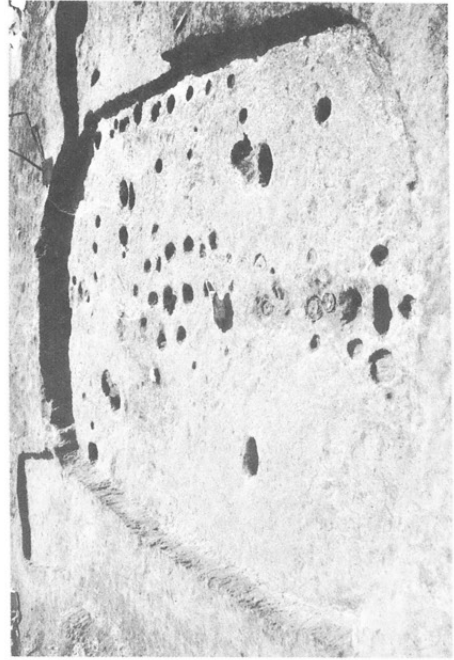


47. 22号住居址

第12図 樋口内城館址遺跡14・20・22・25号住居址



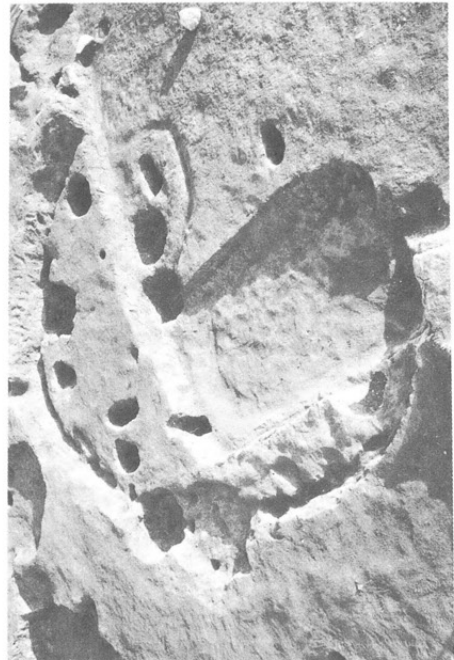
51. 31号住居址



52. 32号住居址



49. 23・24・38号住居址



50. 30号住居址，小竪穴11

第13図 樋口内城館址遺跡第23・24・30・31・32・38号住居址、小竪穴11



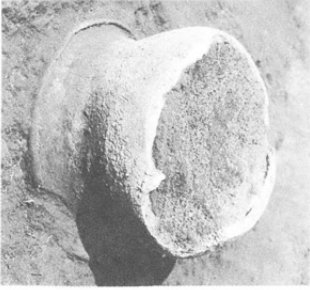
53. 34・45・60・61・68号住居址の切り合い



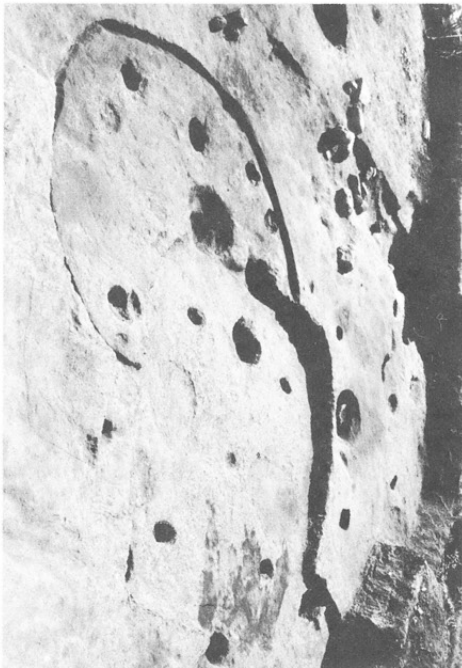
54. 36・74・77号住居址、竪穴2



56. 33号住居址 埋葬所



57. 29号住居址



55. 39・42・47号住居址、溝1

第14図 樋口内城館址遺跡第29・33・34・36・39・42・45・47・60・61・68・74・77号住居址、溝1



58. 40号住居址 小竖穴14



61. 51号住居址土器出土状態



59. 50・57・71号住居址



62. 51号住居址 埋甕炉



63. 52号住居址 埋甕炉

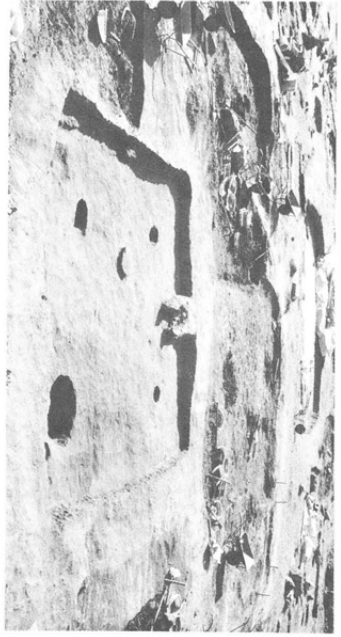


60. 51号住居址



64. 52・53号住居址

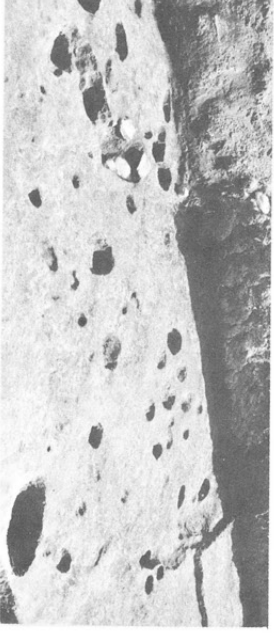
第15図 樋口内城館遺跡 40・50・51・52・53・57・71号住居址、小竖穴14



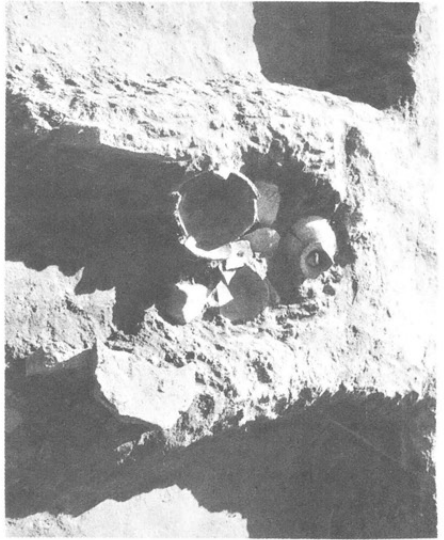
65. 54号住居址



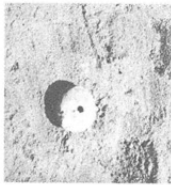
68. 59号住居址



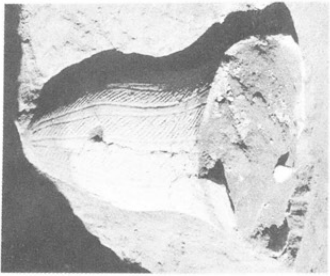
69. 65・66・79・80号住居址



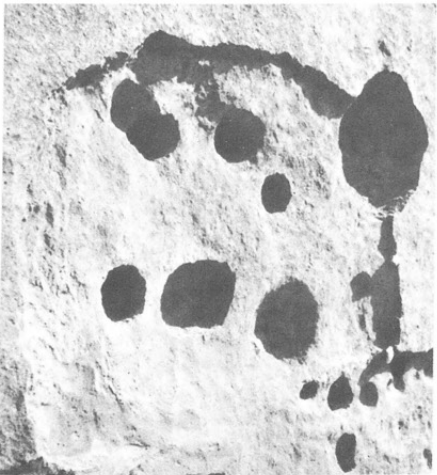
66. 54号住居址カマド



67. 54号住出土紡錘車



70. 66号住居址埋甕



71. 62号住居址

第16図 樋口内城館址遺跡54・59・65・66・79・80・62号住居址

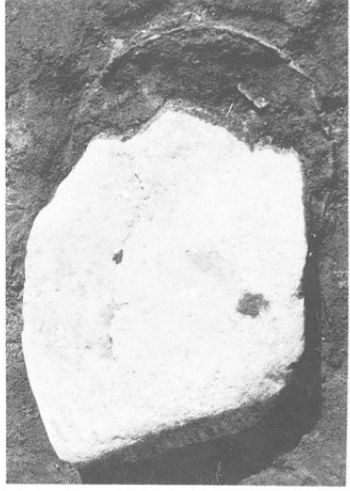
第17図 樋口内城館址遺跡 63・67・70・72・73・75・78・85・86・91号住居址



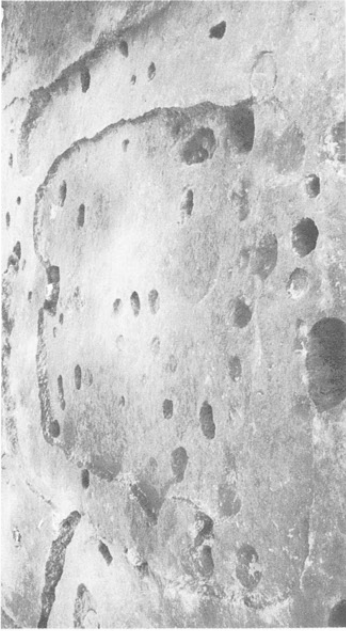
75. 78号住居址



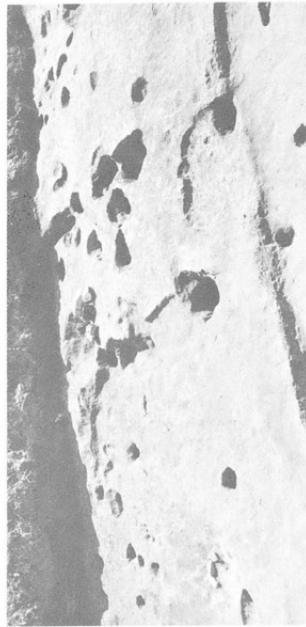
76. 85号住居址埋甕炉



77. 73号住居址埋甕



72. 63・91号住居址



73. 67・86号住居址



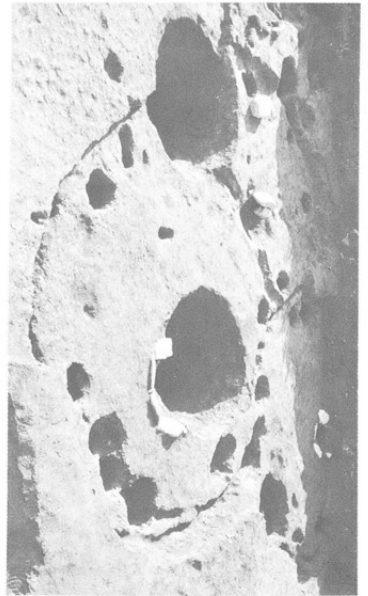
74. 70・72・73・75号住居址



78. 81号住居址



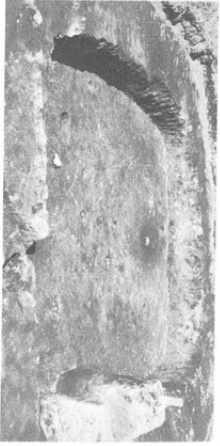
79. 81号住土器出土状态



81. 84・90・94号住居址 竪穴4・5



82. 87号住居址



80. 83号住居址



83. 89号住居址

第18図 樋口内城館址遺跡 81・83・84・89・90・94号住居址、特殊凹形竪穴4・5



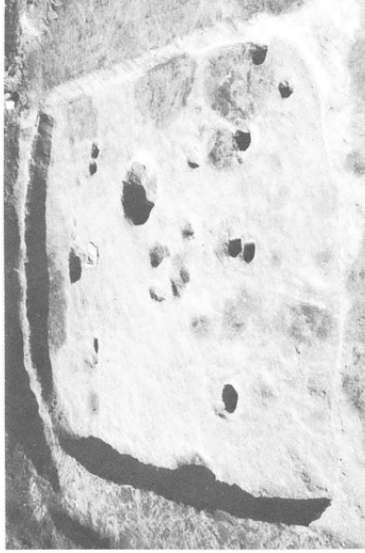
84. 88号住居址 特殊円形竖穴 3



86. 92号住居址



88. 92号住居址埋葬



87. 101号住居址



85. 93号住居址 小竖穴23



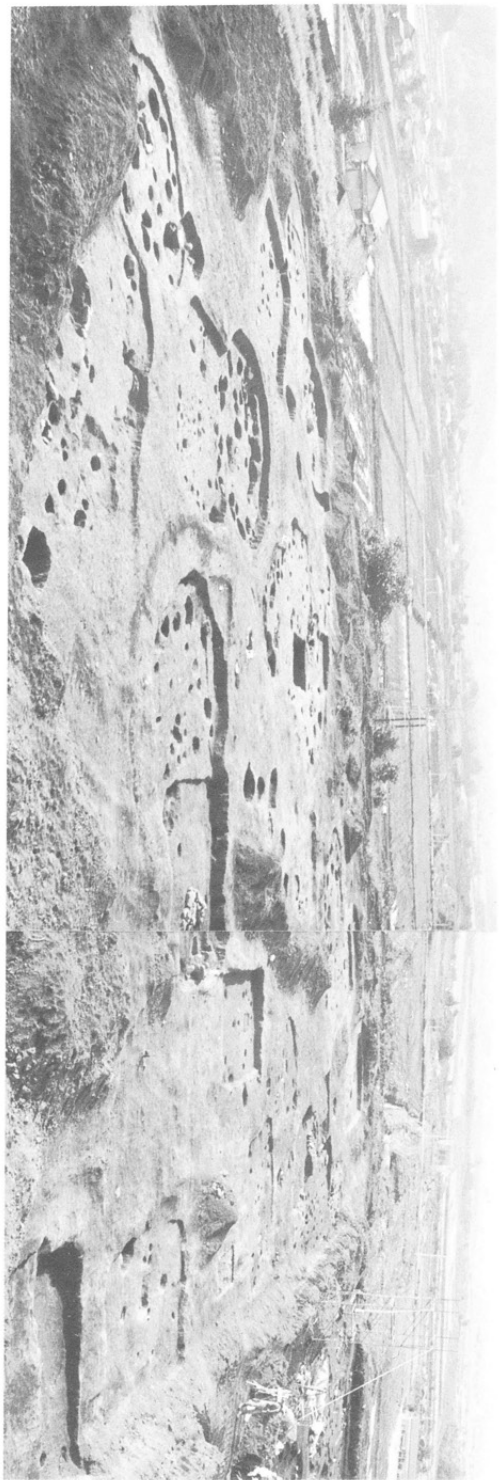
89. 101号住居址埋葬炉

第19図 樋口内城館址遺跡 88・92・93・101号住居址

91. 103・110住居址

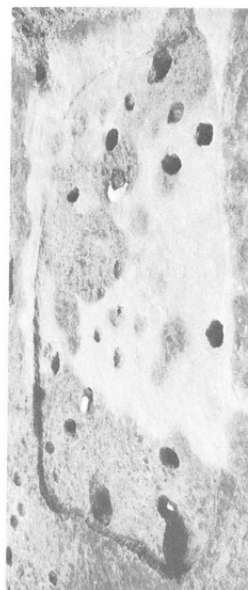


90. 中央道用地外南半分全景

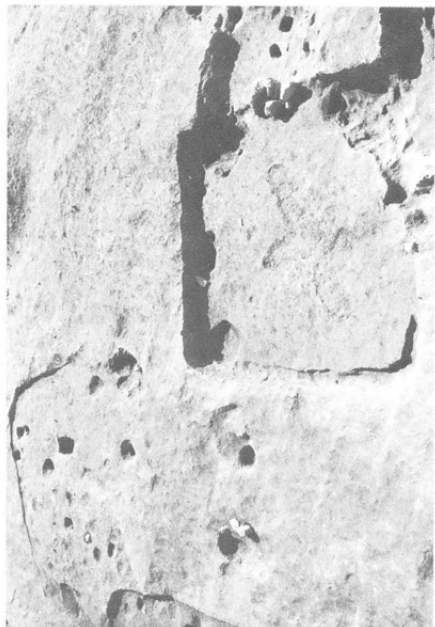




94. 110号住居址 埋燗炉



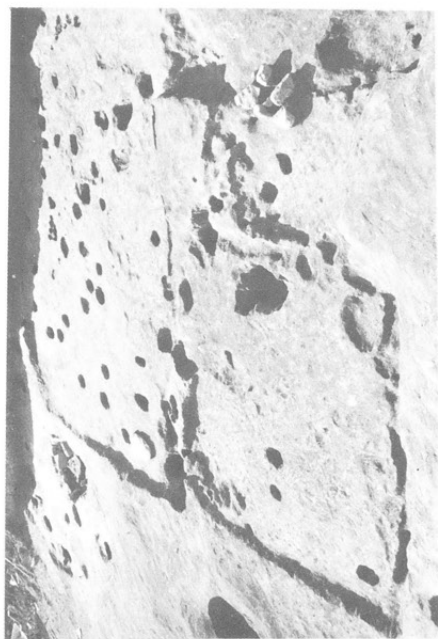
95. 109号住居址



96. 104・111号住居址



92. 102・110号住居址



93. 105・106・107号住居址



99. 121号住居址



102. 126号住居址



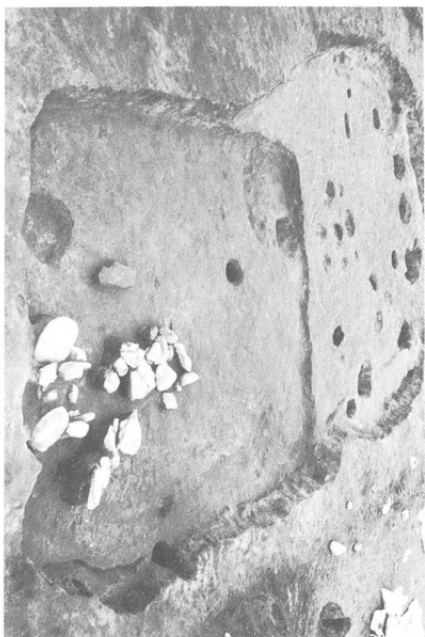
98. 118号住居址



101. 115・119号住居址, 小竪穴38, 土壇77



97. 108号住居址 土壇78・102



100. 114・116・117号住居址



103. 122・123・124号住居址，小豎穴33



104. 122号住居址土器出土状態



105. 123号住居址出土土器



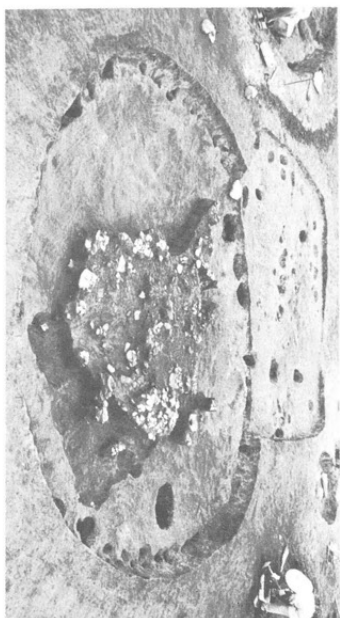
107. 129号住居址



106. 128号住居址 小豎穴35



108. 141号住居址埋藏



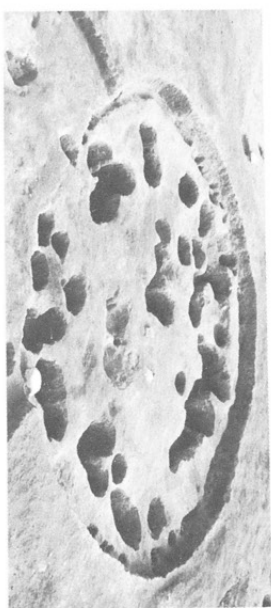
109. 126・127号住居址



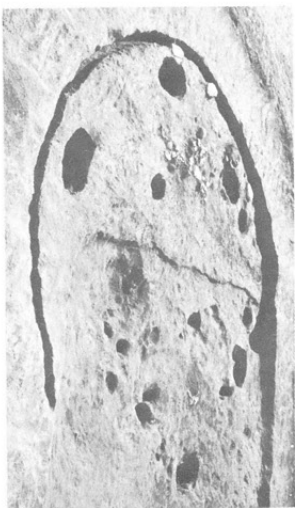
110. 127号住居址土器出土状態



111. 127号住居址土器出土状態



112. 127号住居址



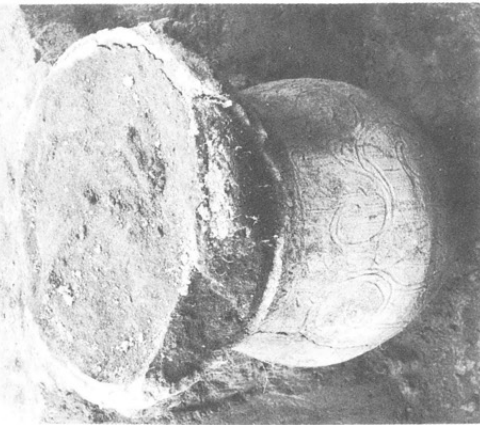
113. 132・133号住居址



114. 132号住居址埋甕炉



115. 133号住居址pit内出土土器



116. 133号住居址埋藏



118. 134・135号住居址



117. 134号住居址埋藏



119. 138・139号住居址

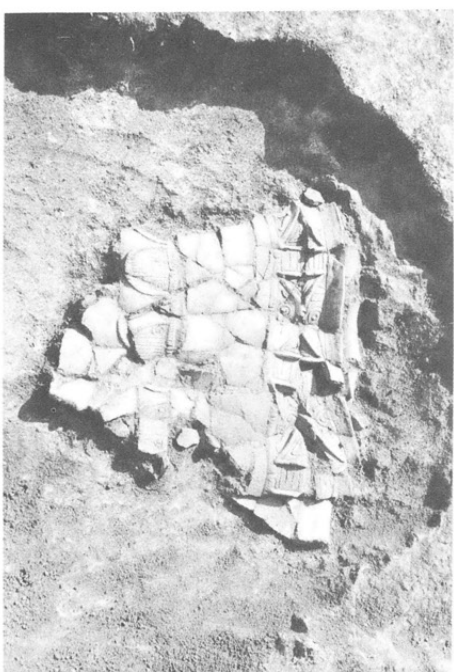


120. 136号住居址土壙90~97

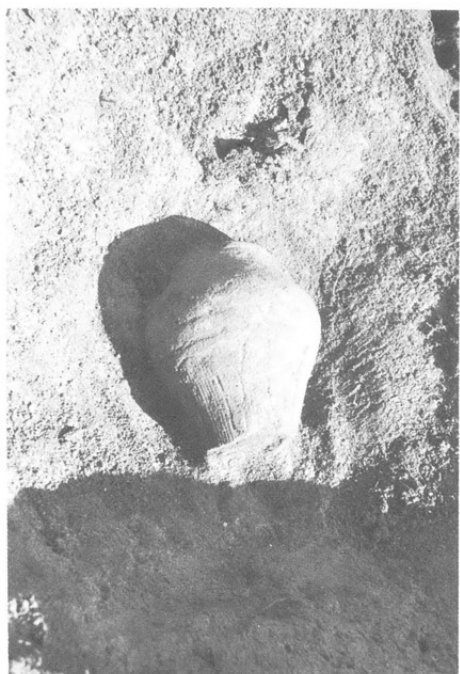
第25図 樋口内城館址遺跡 134・135・136・138・139号住居址 土壙90~97



121. 土壙 6



122. 土壙 18



123. 土壙 30



124. 土壙 59



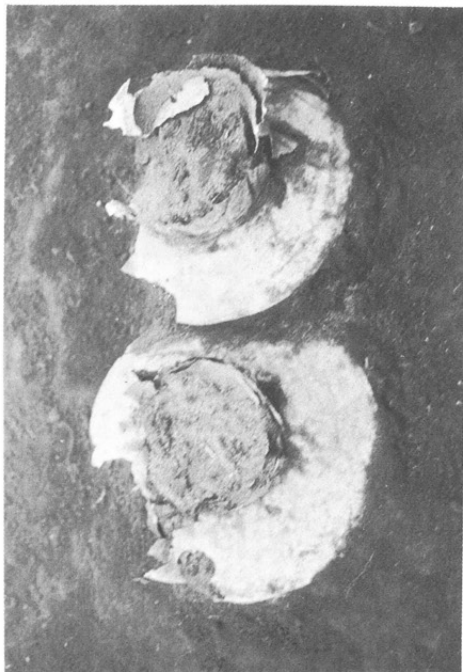
125. 火葬墓1



127. 茶臼出土状態

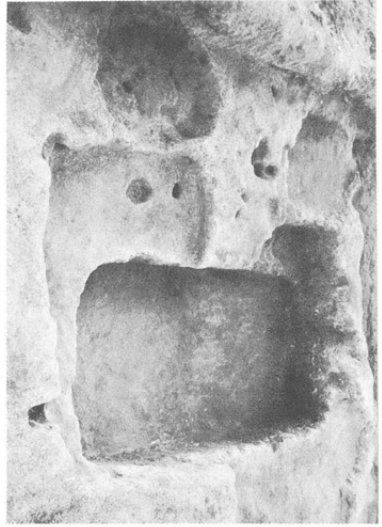


126. 火葬墓1石を取り除いたところ



128. 漆器出土状態

第27図 樋口内城館址遺跡火葬墓・茶臼・漆器出土状態



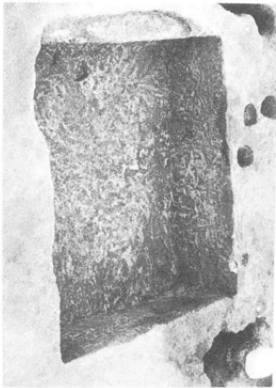
129. 小竪穴 1・4・5・6 土壇 2・3



130. 小竪穴 11



131. 小竪穴 22

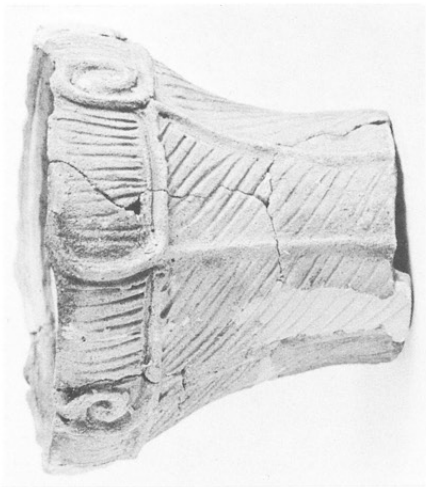


132. 小竪穴 33



133. 溝 3

第28図 樋口内城館址遺跡小竪穴 1・4・5・6・11・22・33 溝状遺構 3



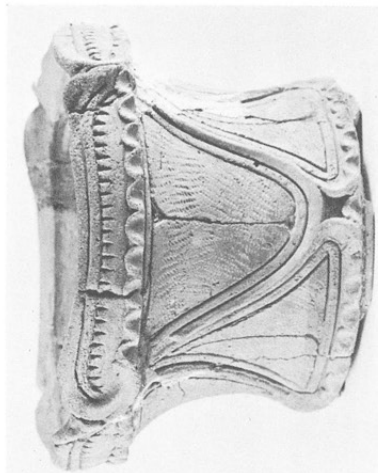
138. 10号住居址出土



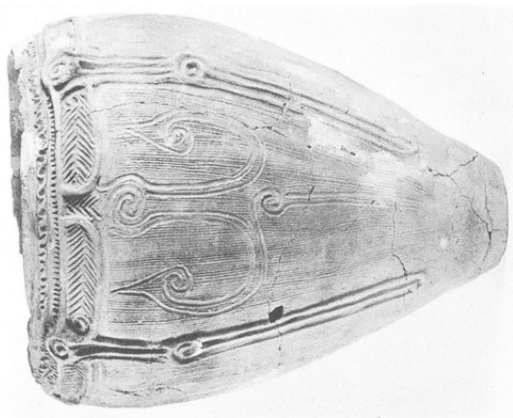
139. 11号住居址出土



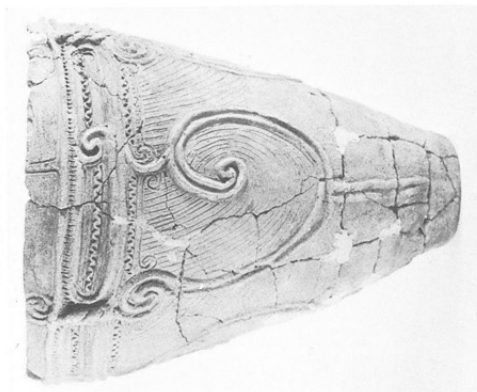
136. 10号住居址出土埋葬



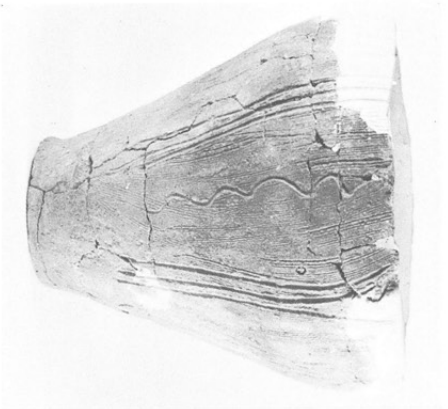
137. 9号住居址出土 炉甕



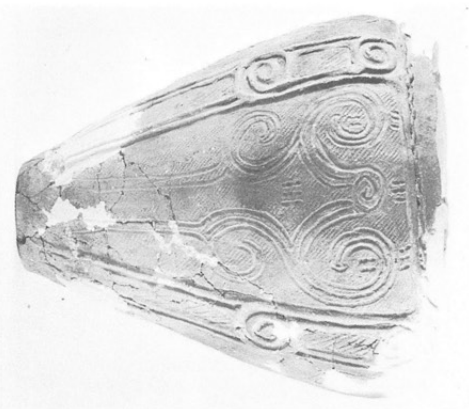
134. 2号住居址出土埋葬



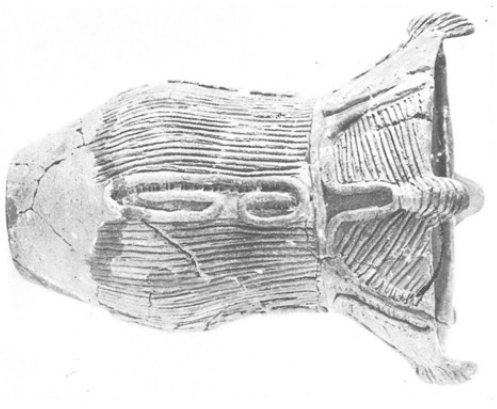
135. 4号住居址出土埋葬



140. 12号住居址出土埋甕



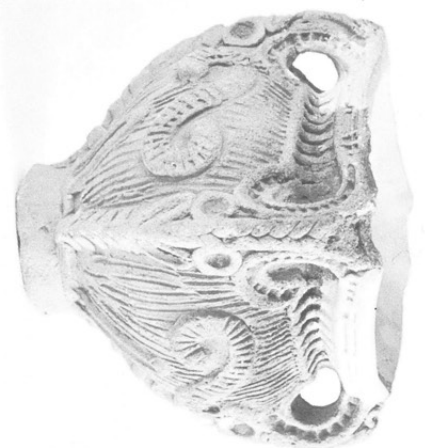
141. 12号住居址出土埋甕



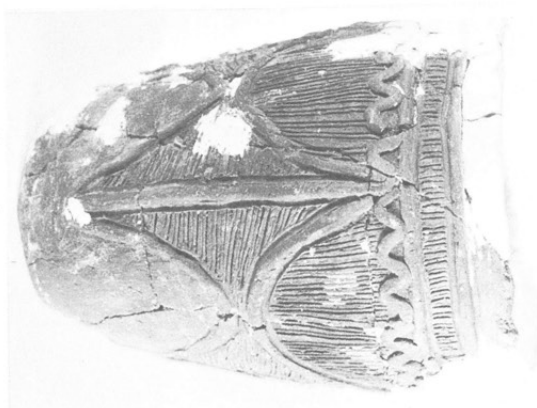
142. 27号住居址出土



143. 27号住居址出土



144. 27号住居址ピット内出土



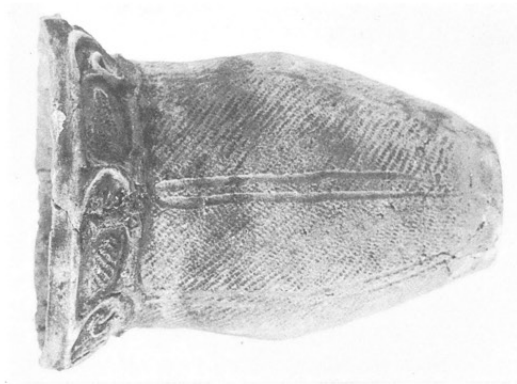
145. 19号住居址出土



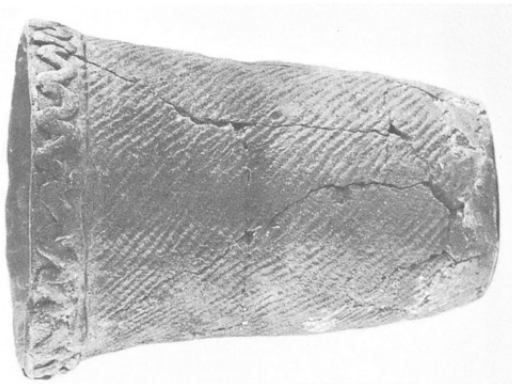
146. 28号住居址出土埋甕



147. 28号住居址出土埋甕出土状態



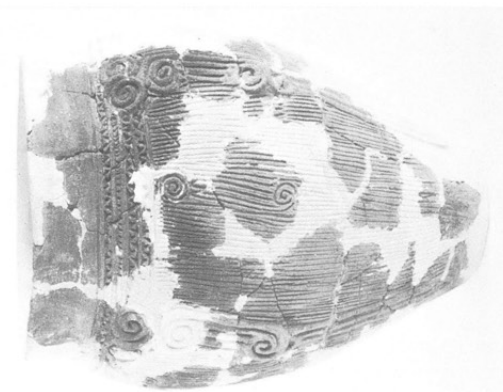
148. 30号住居址出土埋甕



150. 48号住居址出土

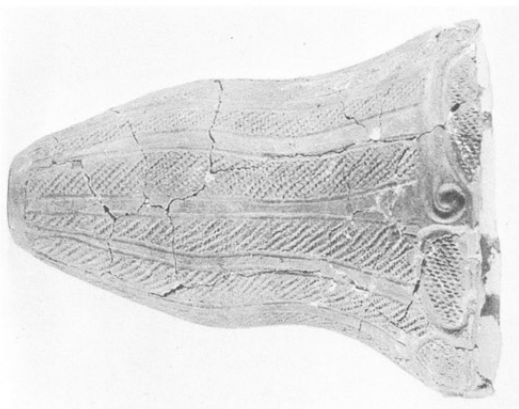


151. 48号住居址出土



149. 48号住居址出土

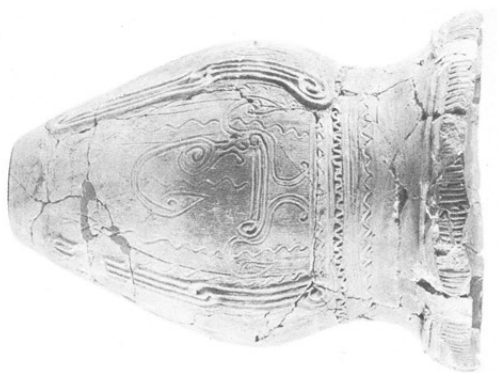
第31図 樋口内城館址遺跡出土縄文式土器(その3)



152. 66号住居址出土埋藏



153. 67号住居址出土埋藏



154. 73号住居址出土埋藏



155. 70号住居址出土埋藏



156. 70号住居址出土



157. 74号住居址出土埋藏



158 81号住居址出土



159. 89号住居址出土



160. 74号住居址出土



161. 92号住居址出土埋藏



162. 102号住居址出土



163. 94号住居址出土

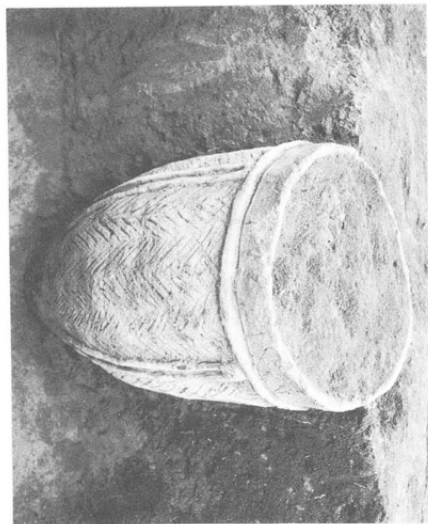
第33図 樋口内城館址遺跡出土縄文式土器(その5)



164. 102号住居址ピット内出土



165. 107号住居址出土埋葬



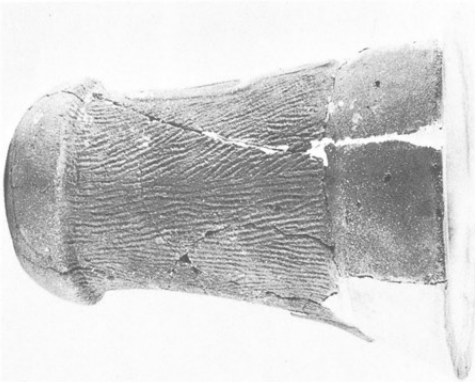
166. 107号住居址出土埋葬出土状態



167. 107号住居址出土埋葬



168. 122号住居址出土

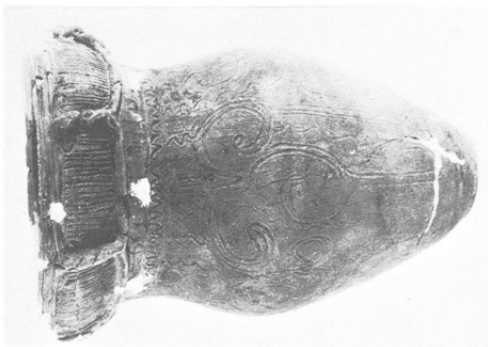


169. 122号住居址出土

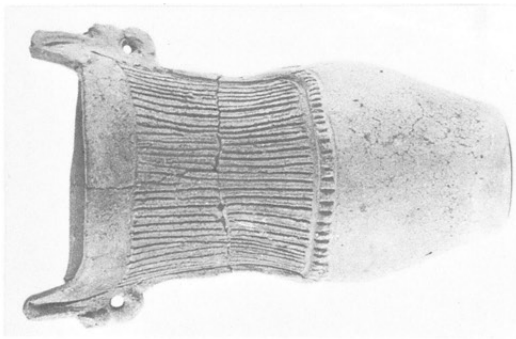


170. 122号住居址出土

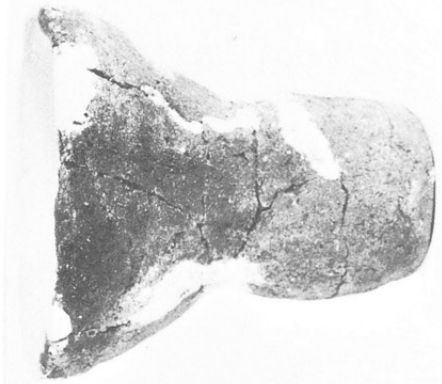
第34図 樋口内城館址遺跡出土縄文式土器(その6)



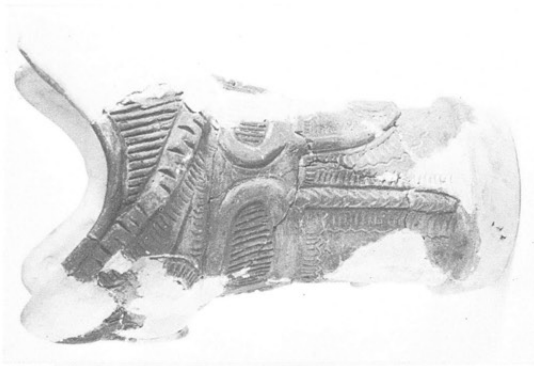
171. 132号住居址出土埋藏



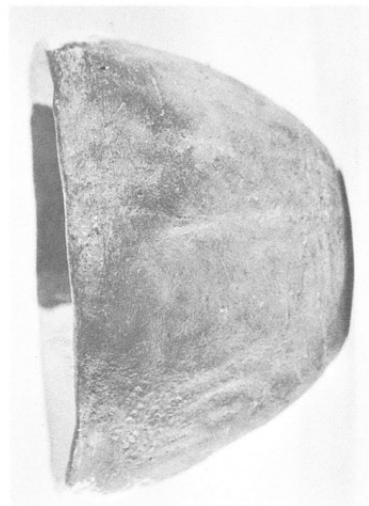
172. 123号住居址出土



173. 127号住居址出土



174. 127号住居址出土



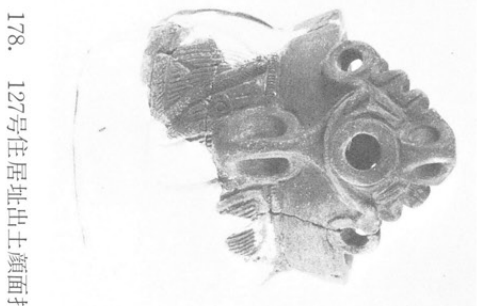
175. 127号住居址出土小形土器



176. 127号住居址出土有孔鏢付土器

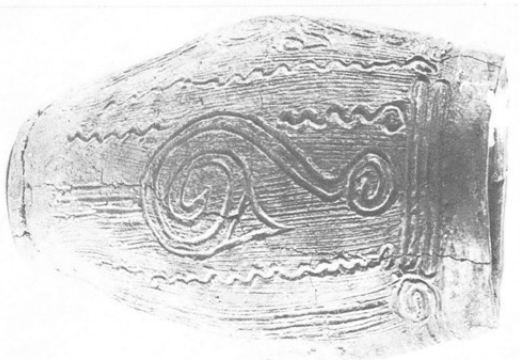
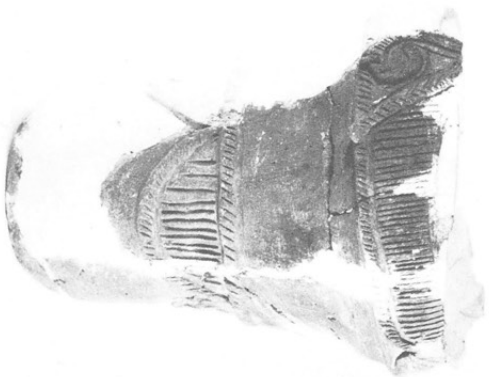


177. 127号住居址出土



178. 127号住居址出土顔面把手付土器

179. 127号住居址出土顔面把手

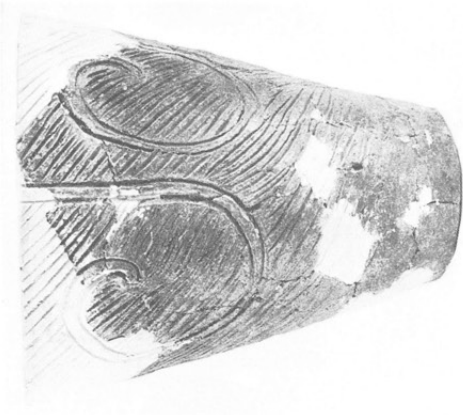


180. 127号住居址出土

181. 131号住居址出土埋甕

182. 131号住居址出土

183. 133号住居址ピット内出土



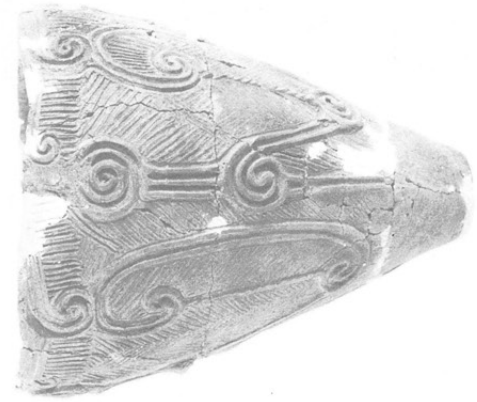
184. 134号住居址出土埋甕No.2



185. 134号住居址出土埋甕No.1



186. 141号住居址出土埋甕



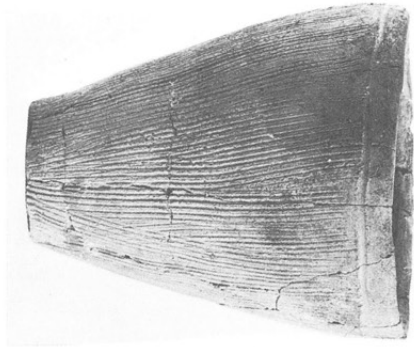
187. 138号住居址出土埋甕



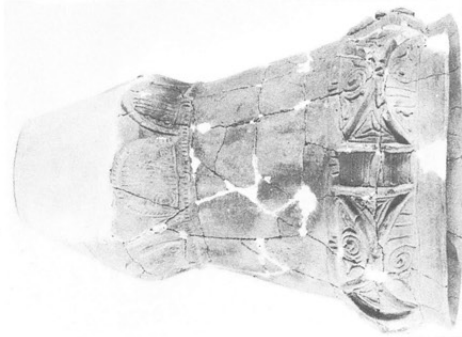
188. 138号住居址出土



189. 138号住居址出土



190. 土壙6出土



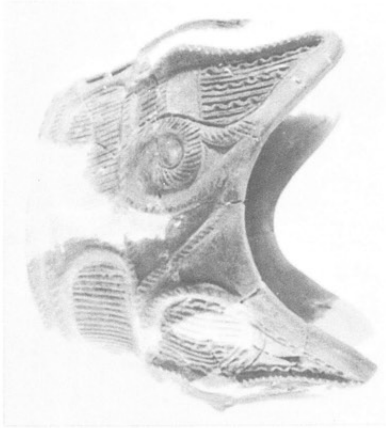
191. 土壙18出土



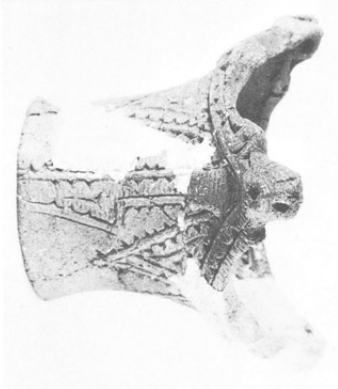
192. 土壙59出土



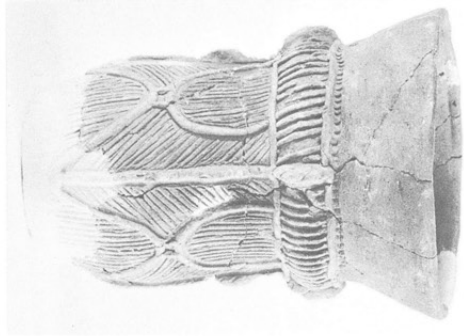
193. 土壙59出土



194. 土壙60出土



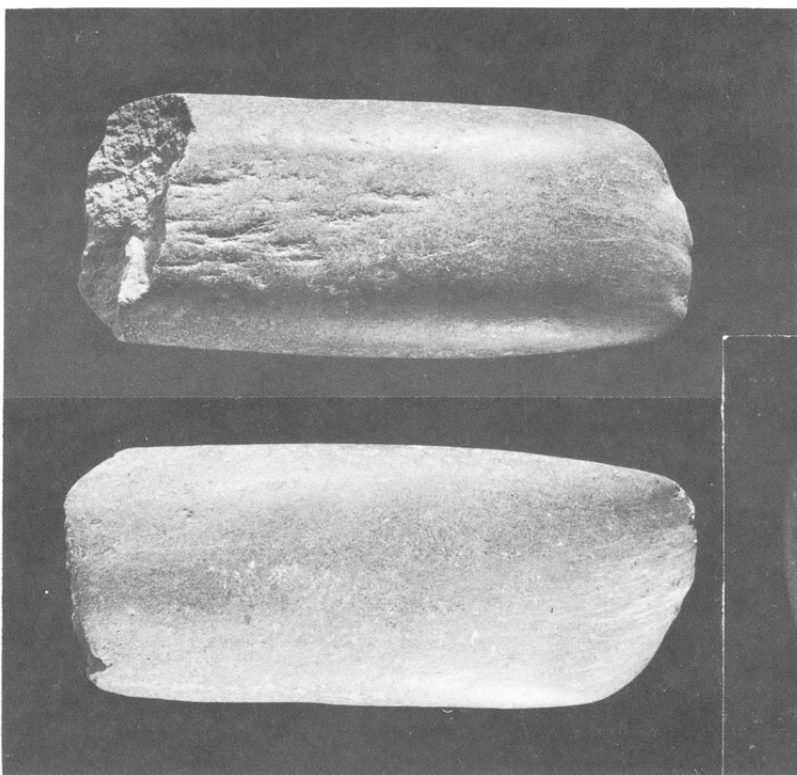
195. 土壙79出土



196. 遺構外出土



198. (右) 全体の調整擦痕(120号住居址)



197. (左) 刃部の使用擦痕(70号住居址)



第40図 樋口内城館址遺跡出土石器(敲打器の擦痕)



その他



その他



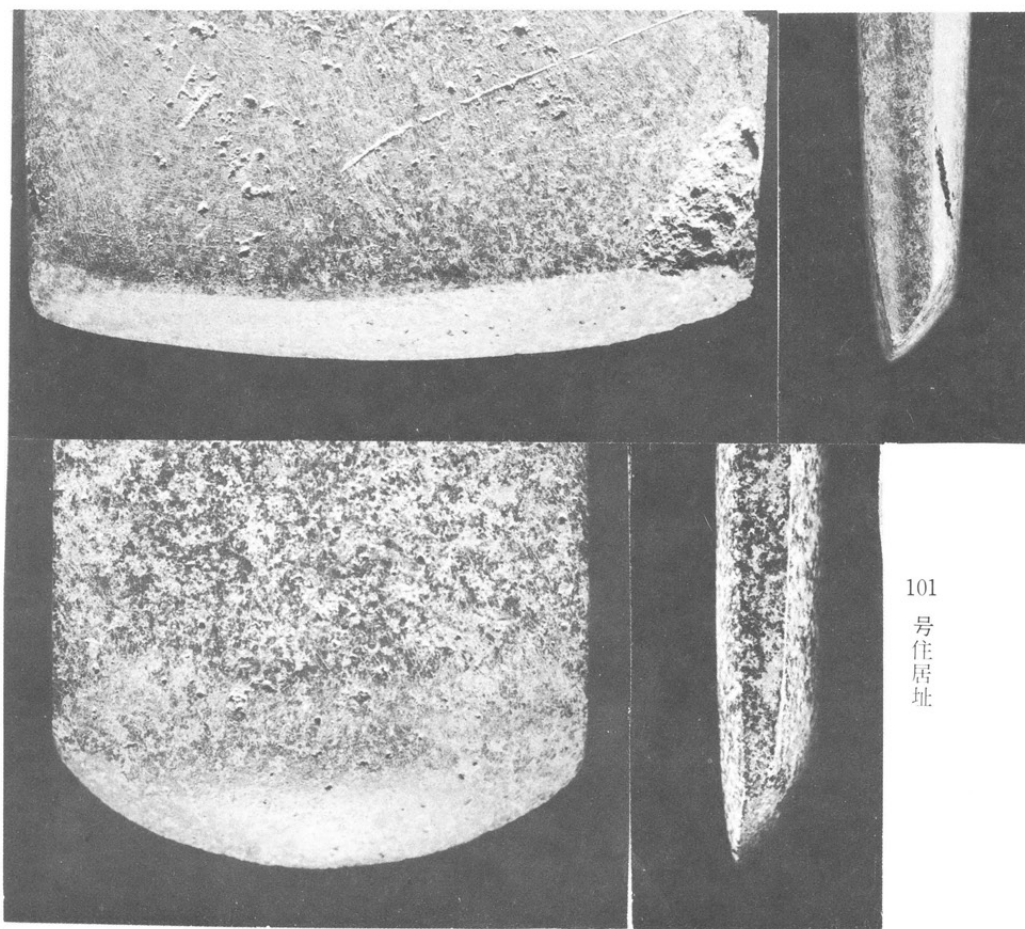
その他



その他

199. 敲打器の擦痕

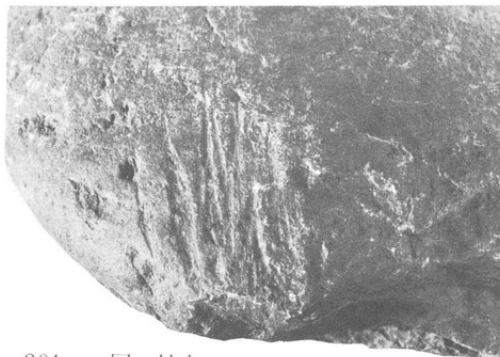
第41図 樋口内城館址遺跡出土石器（磨製石斧の擦痕）



200. 201. 磨石斧擦痕 202. 块入片刃石斧



203. その他



204. 同 拡大



205. 88号住居址



208. その他



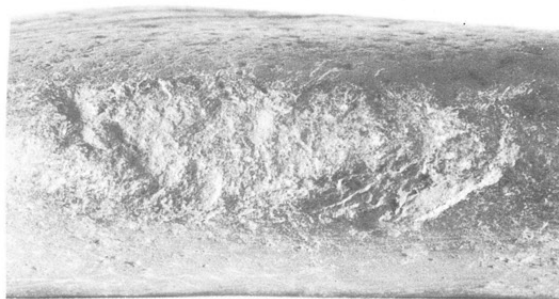
206. その他



209. その他



207. その他



210. その他